ラヴィング・プア　Loving poor

戸理　葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラヴィング・プア　Ｌｏｖｉｎｇ　ｐｏｏｒ

【Ｎコード】
Ｎ０２９１Ｖ

【作者名】
戸理　葵

【あらすじ】
キスぐらいは誰とでも出来る。多分、それ以上も……。
湊は貞操観念の薄い女。婚約者に振られたのをきっかけに、一晩１０万円の癒しを売るバイトを始める。それを紹介した拓也は湊の事が気になるものの、彼女の姉と不倫をしながら同僚とも付き合いだす始末。そしてある日、二人は一つ屋根の下に暮らす事になってしまい……？　恋愛につかれたアラサーが織り成す、ピュアな恋愛小説です。

1

彼女は目を覚ました。
夢の続きで、頭の中が混乱している。追いかけなきゃ、追いかけなきゃ。
違う、逃げなきゃ。
……何から？
だって私、ベッドの上。そうか、ここ、ベッドだ。だからもう、走らなくていいし焦らなくていいんだ。
……って、あれ？　ここ、どこのベッド？
うつ伏せで寝ていた彼女は、両肘をついて上半身を起こした。肩が裸だ。さすがにギョッとする。
「……」
「あ、起きた？」
シャワー室から、一人の男が出てきた。上半身が裸で、腰にバスタオルを巻いている。
母性本能をくすぐるようなつぶらな瞳に、年齢不詳の童顔。さほど上背が無く華奢だけど、バランスの取れた筋肉。それが頭をガシガシと拭きながら出てきて、文字通り、水も滴るいい男。
…って、うっそでしょぉ……。

「……」
「なんでもっかい寝るの？」

彼に背を向けてごそごそと布団の中に入る彼女に向かって、彼がキョトンと声をかけた。
彼女はすっきりした顎を傾けて、自分の胸を見た。あ、下着はついている、ギリセーフ、よかった。
しかも割と上物のシルクのバイオレッドの下着。ふう、これもギリセーフじゃん。いや結構、二塁打くらいかもよ。

そこで更に下に目を向け、白いショーツを履いているのを発見して、大きな目を見開いてしまった。
やだぁ、ブラとショーツがセットじゃ無いじゃんっ。しまった、アウトだっ、しかもツーアウトくらいだっ！

奴の顔なんか見れないっ。
いい歳した女が、下着に手を抜いている所をバレたっ！

彼女…藤堂湊（みなと）は、振り向きもせずに、しかしショックのあまり固まったまま、答えた。

「夢なら冷める。もっかい寝れば」
「なんでー？　夢なら冷めたくない、もったいないわ、とか思わないの？」

そういうと彼は煙草に火をつけた。気だるそうに、ゆっくりとふ

かす。
そしてそのままベッドの上、彼女の脇に腰かけた。
彼女はそんな彼を目で追うと、パフっと顔を枕に押し付けた。

「……信じらんない。なんてお約束な間違いを犯したんだ……」

湊（みなと）、後悔の呻き。それを彼が、白い眼で見下ろす。
ここはどう見ても、ちょっと高級なビジネスホテル。
そして相手は、事もあろうに毎日顔を合わせる、会社の同僚、年下の同期。

吉川拓也。ハンサムでかったるい、我が社のエースだ。
酒の勢いとは言え、よりにもよって何でこの子と。こんな、喰えない男とぉぉっ。

「お約束？　何か覚えてんの？」
「……」

それを聞いた湊（みなと）は、呻き声を出す事すら、止まってしまった。
そして数秒後、ガバッと跳ね起きると、薄い掛け布団を肩から被ったまま、部屋中をかがんで歩きまわった。

拓也が僅かに口を開けてポカン、とそれを見ていると、やがて彼女はお目当ての物を捜しあてて、今度はその中身を引っかきまわし始めた。

拓也が嫌そうな顔をする。

「……露骨にゴミ箱、漁んないでよ」

「一応、記憶の確認をしたくて……よしっ」

使用済みの物が無い事も、ティッシュが大量に突っ込まれていない事も確認すると、彼女は晴れがましく体を起こした。

ほら、さ。自分の体に何にもされてない事ぐらいは分かるけどさ。ね、やり方なんて、色々あるじゃない？　ああしたり、こうしたり。もしそうだとしてもそんなに細かくは思い出したくないけど、いやもちろん身に覚えはないけれど、幸い、モノは一つも無かった。

よーかったぁ、大人の遊び、というか慰めごっこ、していなくて。ふぅ。

彼女は拓也に向かって、ニコッと笑った。内心は、恥ずかしくって堪らない。何もかも、覚えている。

いくらカワイコぶっても可愛げのない事に、自分はどんなに飲んでも記憶が飛ばないのだ。ただ、行動と性格、それに吐き気がちょっとばかし……暴走して……。

「大変、お世話になりました」

向き合ってペコっと頭を下げると、彼も立ち上がって、物々しく

腰に手を当てて言った。

「分かればよろしい」

「私の服はどこ？」

「あそこ。洗って干しといたけど、会社行ける程じゃないよ？　一旦家帰って、着替えないと」

「いやぁ……私、どんだけ汚した？」

とにかく吐きまくった覚えがある。正直、今でも頭がふらついて吐き気がある。しかしそれを気取られるなんてとんでもない。プライドが許さないわ。

このプライドのおかげで、人前では吐かずに、目の前の、他人に対する垣根が高いんだか低いんだか分からない、スカした男の前でだけ吐くに留まったのだ。

それがいいのか悪いのかは、別として。

拓也が、湊（みなと）の眼を見つめながら、自分の眼の下を指でこすって見せた。ここ、ここ、と口パクで言う。

ハッとした湊（みなと）が壁の鏡を覗き込むと、マスカラが見事に、失敗した一昔前の汚ギャルの様に目の周りを汚していた。ぎゃーっ。パンダ目、なんて可愛いもんじゃない。そんなの、２８の女が言ったら、この男に叩かれそう。

スリーアウトだ。チェンジだ。もう早く、試合終了したい、退場したいよぉ。

鏡の前で慌てふためきながらパニクる彼女を眺めて、拓也は溜息をついた。なんか慌てるポイント、ズレてねぇ？

「とりあえず、俺の体力気力を奪う程には吐きまくってたよ、あなたがね。だから俺言ったじゃん、湊、ペース速すぎだって。酒で人って死ねるんだよ？　人生最後の場があんな安居酒屋でどーすんだよ？　俺、あんな酔えなかった事って初めて」

「……いや…もう、マジで……返す言葉もありません……」

この歳になって、恥ずかしくって顔を上げられない、ってどういう事？　ああ、もういやっ。

「よっぽど湊の彼氏を呼ぼうかと思ったよ。なのに絶対口割らねーのな、お前」

呆れた様に言う拓也の台詞に、湊は自分がそれを頑なに拒否した事を思い出した。

『お前、彼氏に迎えに来て貰えよ。俺じゃあんたの家分かんねーし、連れ帰って後から修羅場なんてごめんだからなっ』

『いーやっ。会社とプライベートは、べーつーなーのっ』

『この酔っ払い、携帯よこせよ。……つか、うわなんだよ。なんで着歴も発歴も綺麗に全部消しちゃってる訳？　どんだけやましい事

があんだよ、女のくせにっ』

『んふふー。私生活と仕事を分けるには、これくらい必要なのです
う』

『何もんだ、お前はっ。潜入捜査でもしてんのかっ』

…で、その直後、この子の服に、ゲェ～、と……。

湊（みなと）は図らずとも、上目遣いで拓也を見た。

「だってヨシに彼の面が割れたら、何言われるかわからない。絶対いじられる」

「結婚式に俺を招待した時点で、もう手遅れじゃん」

「その結婚式までの後二カ月、平穏無事に過ごしたいの。あんたみたいな小悪魔わんこの、オモチャにされてなるもんですか」

「そんなあなたが、自らまいた種がこれですよ？　俺じゃなくて自分が墓穴掘っちゃってんのよ？　そんでそこに種、まいちゃってんのよ？」

顔を傾け、畳みかけるように突っ込みをねじ込む拓也に、湊（みなと）は両耳を塞ぎキャーと顔を背けた。

「二度も言わなくったって、分かってるもん」

「もん、って可愛い言い方。酒豪女が何言ってんの」
「にゃんにゃんにゃーん」

この男には、こういうベタな絡みが意外に効果がある事を、彼女は知っている。
しかしふと影を感じ、視線を彼に戻すと、拓也は異常に至近距離に顔を近づけていた。

……閉まった。効果、ありすぎた？

「……何？」
「みな、酒飲むとすっげーエロくなるのな。いいの？　あんなんで」

みな、とは拓也にお酒がまわって絡みモードになった時に使う、彼女の名前。と言っても過去に一回しか呼ばれた事が無い。

「……ヨシ、まだ酒残ってんの？」

悪戯っぽいのに妙に色っぽい彼の瞳を見つめ返しながら言うと、拓也は腹黒そうにニヤッと笑った。

「これでも俺、健全な２６歳男子なんで。友情を重んじてあなたには、指一本触れていないよ？」
「いろんな所で色んな子に触れまくってるからね」

「それとこれとは話が別」
「よかったよ、助けてくれたのがヨシで」
「じゃあ、なんかお礼してよ。ご褒美は？」

唇が触れかかる距離で、彼の吐息が彼女の唇を撫でる。
色気を振りまいた甘えったれ。これがこの男の十八番。

「……」

彼女が無言で彼の瞳を覗き込むと、彼は勝ち誇ったようにニヤニヤと笑っている。
湊はそのまま腕を伸ばし、彼の首を引き寄せると、口づけをした。
あ、煙草の匂い。リッキングアシュレイ、だ。

戸惑う彼の口の中に、舌まで入れて絡める。
苦みしか感じない筈なのに、何故か少し痺れた。

そして、彼の舌が遅れて反応する前に、スッと唇を離した。

拓也が目を見開いて、湊を見下ろしている。

今度は湊が、キョトンとした。

「何ビックリしてんの？」
「…え？　あ、いやまさか、本当にするとは」
「キスぐらいでそんなに固まるとは、ヨシの方が意外だよ。女の子といっぱい遊んで馴れてるんでしょ？」

「俺じゃなくて、湊（みなと）が。あんたって意外と、貞操観念薄いのな。もっと真面目でお固いのかと思っていた」

マジマジと彼女を見つめる拓也に、湊はクスッと笑って肩をすくめた。

そのまま背を向けて、壁に掛けてあった自分のスーツに手を伸ばす。

それは器用に汚れが落とされていた。まだ少し湿っぽい。

「……真面目だよ。人生楽しむ程度には」

言いながら袖を通し、スカートをはいた。

彼の視線を背中に感じ、なんとも言えない感覚に襲われる。やっぱり、緊張する事は否定できない。

「一度しかない人生、自由に、楽しく過ごさなきゃ」

ボタンを止め、鏡で軽く髪を治し、軽くパウダーを叩いて、リップを引いた。

まだ朝は早いし、しかも通勤電車と逆方向に乗って、一旦家に帰らないとね。乗客は少ない筈だから、こんなものでいいよね？

振り向くと、無表情でこちらを眺めている同僚に、笑顔を向けた。

「じゃねー、お世話様。会社でね。遅れちゃダメだよ」

ドアを開けてわざとらしく胸元で手を振る彼女を、短くなった煙草を持った手で、軽く答える。彼女は扉の向こうに消えて行った。

……藤堂湊（みなと）、２８歳。２か月後に結婚予定。

美人で明るく、物事にあまり捕らわれない。仕事が出来て責任感も強いが、割り切りも早い。

……そして貞操観念が、薄い。

これは、使えるかも。

彼は腰バスタオルのまま、ハンガーにかけているスーツの内ポケットから、携帯電話を取りだした。

手慣れた手つきで発信をする。程なく繋がった。

「あ、オレオレ」

『今時そんな時代遅れの電話をかける奴がいるかよ。もっと手の込んだやり方を仕込むだろ？』

電話越しの大きな声。そして明るい声の割には、横柄な口調。しかし乱暴な物言いの中にも、抑えきれない人懐っこさが溢れ出ている。

彼と拓也の共通点は、この人懐っこさだけだ。

そんな電話相手に怯む事無く、拓也は会話を続けた。

「泰兄相手に手の込んだ電話仕込んで、どうすんの？　つか、何の話？」

『お前こそ何の話だよ』

「ああ、丁度良さそうなコが見つかるかもしれないって話。泰兄、困ってたろ？」

『……歳は？』

「２８」

『若くねぇな』

「お偉いさんとか実業家とかに丁度いいじゃん。顔も結構イケるし、頭もいいよ。次が見つかるまでのつなぎが欲しかったんでしょ？」

『口は？』

「柔らかかった」

『そうじゃなくって！　バカかお前っ。口は固いかって聞いてんの。必須条件だろ、それは』

拓也は新しい煙草に手を伸ばしながら、話を続けた。

「固いんじゃない？　うちの守秘義務、同僚の飲み会で結構飲んでも絶対口に出さなかった」

『……仕事仲間かよ。まずいんじゃねぇのか、それ？』

「何で？」

『何でってお前、普通やりづれぇだろ、同僚を同じ世界に引き込むとさぁ』

火をつけ、深く吸い込む。味わって、ゆっくりと吐きだした。

依存症だよな、俺。

何故だか苦笑いを、したくなる。

「そう？　大丈夫なんじゃない？　気にしなさそうだよ、その人」
『しかもお前ら、付き合ってるかヤッたかしたんだろ？　余計ややこしかねぇか？』
「付き合ってないし、ヤッてもいないよ。仲いいけど、さっきたまたまキスしただけ」

言いながら知らず知らずに、唇を指でなぞっていた。
電話の向こうで相手は、少し呆れた様な声を上げる。

『たまたまって……相変わらずお楽しみだなぁ、お前。同僚には手を出さないのかと思ってた』
「大丈夫だって。そういうの気にする人なら、向こうだって後2カ月で結婚するのに、男とキスしたりホテル入ったりしないでしょ？」

若干の間が空いた後、素っ頓狂な声が聞こえた。

『……結婚？』

一呼吸置いて、凄まじい怒号が飛んできた。

『拓也っ！　このバカ野郎っ。もうすぐ新婚になる女に、妙なモノ斡旋するなっ。旦那が乗り込んできたらどうすんだよっ！』

拓也は思わず携帯を耳から離し、片目をつむって顔をしかめてしまった。

なんだろうね、この人は。突然、熱くなるんだよね。周りとしては振り回されちゃう訳よ。そこがまあ、魅力でもあるんだけど。

「……妙なもんって、自分が社長でしょうが」

『こういうのは出来るだけ、修羅場になる要素を排除するんだっ。鉄則だろうがこのバカっ』

「だって人妻も結構雇ってんじゃん」

『それはそれ、各々の家庭の事情っつーもんが有るんだよっ！　とにかくその新婚女には手を出すなっ。引っ張り込むな、俺に関わらせるなっ、分かったか、この女ったらし！』

昔ならガチャンっと音がしそうな勢いで、電話が切られた。実際、携帯をどっかに投げつける形で通話を切ったのかもしれない。

「……すげー、この人、自分の事は天より高い棚に上げちゃってるよ……」

拓也は自分の携帯をマジマジを見つめ、呟いた。電話の相手は長

身でガタイがよく、生気がありすぎるぐらいのギラついた目をしている。彼のこだわりの出で立ち、甘いマスクとは裏腹に肉食エグゼクティブの代表の様なエネルギッシュな姿を思い出した。全くもって、自分とは正反対の男だ。

食通の割には女の好みが無くってさ、ついでに倫理観も無くって、手広く頂いちゃってるのは自分だろ。

ああ、ビジネスと趣味は別、って事ね？

「おっとヤバい、遅刻する」

ベッドサイドテーブルの時計に目をやり、拓也は慌てて着替えに手を伸ばした。

1（後書き）

大人の恋愛、スタートです。
しばらくのお付き合い、宜しくお願い致します。皆様のお暇つぶしに、役立ちますように……。

吉川拓也くんとはもちろん、過去に失恋済みの、あの彼でございます。

2

家でシャワーを浴びて髪を乾かして、着替えて化粧をして家を再び出る迄に要した時間は、たったの１０分だった。我ながら恐ろしい。女じゃないかも。

ホントさ、よく思うんだよね。もう完璧なお化粧が施された仮面みたいなのがあってね、毎朝それをパカってはめればメイク完成なの。そしたらどんなに楽なのに。ほーんと、こういう時は男って羨ましい。

湊（みなと）は携帯を開いた。昨夜の着信は、一件。夜の１０時で、その時間はまだ、飲んでいた。

壮太からだ。

折り返しをしようとして、やめた。そんな悠長な時間なんて無い。満員電車にぎゅうぎゅうと詰め込まれ、彼女は会社へと向かった。

「おはようございます」

「おはよう。珍しいね。遅刻ギリギリ？」

そう言う訳ではない。朝礼にギリギリ間に合った。そのまま頭を低くして、ちっちゃくなりながら席に着いた。

隣の席の課長が、柔らかな笑みを浮かべた。３３歳と若いのにこのポジション。独立が多いこの業界では古株とは言えるかもしれない。それでも、彼は異例のスピード出世だ。

でも彼の頬笑みからは、そう言った鋭さや世知辛い焦りが、微塵も感じられない。人をほんわかとさせる癒しの雰囲気を持った、これこそ珍しい男性である。

湊（みなと）は眉を下げて、さらに小さく頭を下げた。

「すみません、昨夜（ゆうべ）飲みすぎちゃって」

この監査法人に来て3年。２８歳とは言え、まだまだ新人だ。だから今まで、少なくとも年次が上の同僚よりは早く出社していたのに。そして同じ課の同僚の机の上を拭いたり、周囲を片付けたりしていたのに。

世間が言う様な「女の仕事」をやる事に、湊（みなと）は抵抗を感じない。お茶汲み、コピー取り、単調なデータ整理、何だって出来る。だってそれをしてもらう側の気持ちが、分かるもの。

単純にね、すごく有り難いんだもん。

私……彼らは、本当にギリギリの所で踏ん張って、必死な思いで仕事をしている。そんな時のお茶やコーヒーは、時々涙が出る程嬉しかったりする。

それにね、そういう仕事をするときは笑顔が、ポイントなんだなぁ。

すっごく、癒されるの。

だったら最初から事務職についていればいいものを、と思う人もいるかもしれない。

そこは、「どうせなら精一杯、死力を尽くして働いてみたい。人生の経験として」なんて真面目に思っちゃったのだ。

そして文字通り、前の職場では死力を使い果たしてしまった。
だからここにやってきた。

したがって、やりがいは求めても昇進は求めていない。これ以上忙しくなって責任を負わされるのは、正直恐い気がする。
だから私は、結婚に逃げるのだろう。

「随分具合悪そうだったから、心配したよ。本当に大丈夫？」
「はい、ご心配無く。定訪、行ってきます」

湊（みなと）は笑顔で答えると、元気よく立ち上がった。本当は、あまりこの椅子に座っていたくない。
……二日酔いが、ばれそうだからだ。匂いで。
ああ、あたしってばいつ、乙女を卒業したのかしら。

彼女が思わず一人で遠い眼をしていると、暖かい課長が下から声をかけた。

「高松精機だよね？　二課の吉川くんも一緒に連れて行ってくれないかい？　社長からコンサルの依頼もあるらしいんだけど、上地くんが病欠で彼がピンチヒッターなんだ。社長に面通し、してやってよ」

はあ？　と思って背後の二課を振り返ると、今日もお洒落なスーツを着こなした吉川拓也が二課の課長の側に立ち、既にバリバリと

仕事をこなしている雰囲気だった。

…ちっ。これだから男は楽で羨ましいのよ。あいつ絶対、ロッカーに代えのスーツ、隠し持っている。そもそもあのスーツは、どこのだ？　なんで奴が着ると、かったるくかっこいいのよ。バーニーズとかにぶら下がってそう。そうだあいつ、バーニーズのドアボーイでもしてればいいんだ。

「…はい、わかりました」

ニッコリ笑顔で課長に向き直った。これ、基本。だってこの課長は、何も悪くない。ほんわかな微笑みで返してくれる。

見てよ、この邪気のない笑顔。こんな人が家族にいると、奥さんやお子さん、幸せだろうなあ。

「みなちゃん、お疲れー。昨日は豪快だったね。お酒強いよねー」

給湯室の前を通ると、仲の良い同期、山田舞彩（まあや）が顔を出した。短卒で入社3年目の23歳。長い睫毛と丸いおでこがチャームポイントの、誰からも好かれる元気で可愛い女の子だ。

湊（みなと）はこの彼女が、可愛くって可愛くって堪らない。あたしの母性本能は今現在、全てこの子に向かっていると言っても過言ではない、と思う。

そして五つ年下の彼女の前では、ついつい、必要以上にお姉さん

ぶってしまう。

「そう？　あれぐらい、いつもだよ」

そもそも昨晩あれだけ飲み過ぎたのも、若手同僚の会で血気盛んな男性どもが舞彩（まあや）に群がり、下戸な彼女にどんどんお酒を勧め出したのを止める為だった。彼女を目の前でみすみす、酔いつぶさせる訳にはいかない。

そして男たちの注意を舞彩（まあや）に戻さない為には、とにかく湊（みなと）が盛り上げるしかなかった。故の、あの結果。胃の中で、テキーラとワインとビールのちゃんぽん……。

うえっ。

「すごーい。今朝とかよく来れたよね？　あたしだったら起き上がれないよ」

素直な舞彩は素直に、湊の努力と気遣いには気付かない。そこがまた、初々しくって可愛い。

「大丈夫だよ。ほら、御覧の通り、ね？」

ふらついてるでしょ？

「あんなに飲んでも、ちゃんとお家に帰れたの？　記憶とかも飛んでないの？」

「それは平気なんだけど、あたし酒臭くないかな？」

「んー？　どれ？」

彼女が鼻を近づけた時、左サイドから別の鼻も近づいた。

「匂うんじゃない？」
「吉川くん！」

舞彩が黄色い声を上げる。
拓也はニコッと人懐っこい笑みを彼女に向けると、湊に向き直って手を差し出した。

「はい、ブレスケア」

透明な粒の入った容器を持って、湊（みなと）の手の平を要求している。
…こーのやろーぅ。
彼女は黙って、手を出した。

「……ども」
「すごいよねぇ、藤堂さん。あれぐらい、いつもなんだ？　俺だったら絶対、吐いちゃうなぁ。そんで家まで自力じゃ辿りつかなくて、絶対どこかで寝ちゃいそう。それが女の子なら危ないよねぇ」
「……本当よねぇ。誰かに助けて貰わないと」

わざとらしく顔をひきつらせて、笑顔で丁寧に答えてやった。
なのに彼は、更なる笑顔でトドメを刺す。

「そんな醜態、曝したく無いよねぇ」
「男の子の前で吐いちゃう女の子って、やっぱちょっとイタイよね」
「だよね、舞彩ちゃん」
「……」

違う。トドメを刺したのは、邪気のない彼女だ。悪意が無い分、余計に傷が深いわ。
一人悶えていると、彼はまるっこい瞳を湊に向けて言った。

「じゃ、俺、下に車出して待ってるから。なるべく早くに来て下さいね」
「え？」
「……女の子って、時間かかるんでしょ？」

意味ありげな、拓也の目。眉間に弱冠、皺が寄っている。湊もつられて、眉根を寄せた。
仕事の外訪に、時間がかかるも何もないでしょ？　鞄持って行くだけよ。

そう言いそうになって、やっと真意を理解した。

あ、車乗る前に、吐いとけって言ってるのね？
なんつー気のきかせ方だ……。

了解です、と軽く頷くと、拓也は気だるく肩をすくめて去って行った。

こういう所が、得体がしれない。優しいのか冷たいのか。

大きな外訪鞄を片手に歩いて行く彼の後姿を見やっていると、隣で舞彩（まあや）が呟いた。

「……吉川くんって、彼女いるのかな？」

「……舞彩（まあや）、本気？　あれはタチが悪いよー？」

「え、別にあたしは、ただ、吉川くんは彼女がいるのかな、って。それに彼、すごく優しいよ。いつもとても丁寧な言葉をかけてくれるし」

「それ、みんなに、だから」

「仕事も出来るし、確実だし。あの、つぶらなうるうるって瞳も、結構ヤバいし。社内人気ナンバーワンだよね」

「……だろうね。見た目は申し分ないもんね、あの子」

「でも、プライベートは絶対見せないよねぇ」

「ああ、完璧な秘密主義だよね。それも昔から、だから」

「専門学校時代って、どんなだったの？」

「えー？　どんなだっただろう？」

ふらつく頭で、数年前の記憶を手繰り寄せてみた。

当時湊（みなと）は、就職浪人の勇気が持てず、専門学校に通いながらの社会人一年目だった。

「かったるくって、適当で。みんなと一緒にニコニコしてたけど、なんか目が、笑っていなかったって感じ」

「仲いいじゃん、みなちゃんと吉川くんって」
「仲いいって言うか、専門が一緒だったから、数回飲みを一緒したくらい。あの時からよくわかんない人だけど、女癖は悪そうだったよ」
「……そっかぁ…」
「純粋な舞彩ちゃんには、似合わないよ。危険危険。やめた方がいいって」
「……お姉さま」
「同期です」

ひらひらと手を振り、湊は拓也とは反対方向に向かった。そう、トイレに。

「ちゃんと吐いた？」

助手席に乗り込むなり、拓也に聞かれた。
ピクっときた彼女は、つんと澄まして答えた。

「吐きましたよ？　上からも下からも出しときました」
「ちょっと。女性のたしなみ持って下さいよ」

車を発進させながら、拓也が呆れた様に言う。
湊は前方を見たまま、唇を尖らせた。

「持ってますよ？　でもどんな美女でもお手洗いには行って、出すモノを出すんです」
「そうやって少しずつ、乙女の要素が消えていくんだ、女って。こぇえな」
「乙女なおばさんの方が気持ち悪いでしょ？　大体日本の男はロリコンが多すぎる。開き直らないと子供なんて産めないのよ」
「……湊（みなと）って、子供いんの？」

拓也に目を丸くされ、彼女は前にのめり込んだ。

「……いるよ、実は」
「……ああ、お姉さんの子供か。そういや出産ビデオ、一緒にまわしたって言ってたな」
「真顔で聞くから、運転席から蹴り落としてやろうかと思っちゃった」
「このスピードでやったら、それ心中だから。あなた、そんなに俺の事好きだったの？」
「はいはい、そのお喋りな口を閉じる」

そう言って彼女は、ゆるく隣の男を見上げた。
今朝のキスが、嘘みたい。気まずさも、甘い雰囲気も、これっぽっちも、ない。
彼女は助手席に沈み込み、目を閉じた。

男女の友情って、存在するのかも。

しばらくして、拓也が口を開いた。

「後藤課長って、実は庶務の岡田さんと出来ているらしいよ？」
「ふーん」
「部長って、前の支店で新人の女の子をホテルに連れ込んだって噂」
「へー」
「上地さんって今日、実は体調を崩した訳じゃなくって、奥さんがヒスったからしい。子供がひきこもっちゃってるんだって」
「ほー」
「……興味、無い？」

声のトーンが変わったので、彼女は閉じていた目を開けて、彼を見た。
彼は前方を見たまま、特段変わった様子は、ない。

「何が？」
「俺の話」
「自分だって興味無さそうに話しちゃって、何言ってるの。え？今の話、興味持って欲しかったの？」
「……」

すると彼は、丸っこい瞳でじーっと湊（みなと）を見つめだした。
途端に彼女の頭の中で舞彩（まあや）の台詞が再現された。あのつぶらな瞳でうるうるって……。

「……何よ？　てか、前向いてよ、恐いって」

焦って言うと、彼は前方に向き直った。

それでもやっぱり、真顔。

「湊（みなと）ってさ、もし彼氏がこうやってつまんない話をしたら、そやって生返事をしちゃうの？」

「はい？　もちろん、ニッコリ笑って、相手の話に耳を傾けますよ？　頭の中では、次行くコンサートの事でいっぱいだけど」

旋律がガンガン、リフレインされていてね。

「それで旦那さん、怒んないの？」

「まだ旦那じゃない。怒らないよ。バレないもん」

「もん、ってまた。本当にバレてないの？　そうゆう事重ねているとね、後で天罰が下るよ」

「下らない事に耳を傾けなかったから天罰が下るって、そんな事がありますか」

「あるんですよ、これが。相手にとっては、くだらなく無かったりするんです」

「さっきから、何？　私がヨシの話を聞かなかったからって、そこまで絡む？　拗ねてんの？」

湊が体を起こして尋ねると、拓也は思いがけずビックリした様子を見せた。

たまたま赤信号になったのでブレーキを踏み、彼女に顔を向ける。
その顔に少し、戸惑いがあった。

「え？　あ、まさか。……なんか、過去の自分を見てる様な気がしてきちゃって」
「……珍しい。ヨシがそこまで他人に興味持って突っ込むなんて。なんかあった？　……はっ、まさか……」

湊は助手席のドアまで、のけ反った。

「私に惚れた、とか」
「……すみません、そこ、俺、全力で否定しても大丈夫かな？」
「じゃ、なんなのよぉ」

迷惑な奴、とでも言う様に彼女が顔をしかめると、拓也は愉快そうに身をかがめて笑い、そして再び車を発進させた。

「ちょっとテスト」
「てすとぉ？」

「これ、藤堂さんに似合うと思って」

顧客の経理主任から渡されたモノは、ブランド物のリップだった。
湊（みなと）は絶句する。相手は４０歳手前の独身男性。痩身で、見た目はうだつがあがらなさそうだけど、その純朴な性格が彼女は嫌いではなかった。

気を取り直して、笑顔を見せる。

「……わあ。イブ・サンローランの口紅。いいんですか、こんな素敵なモノ」
「機内販売で一目見て、君が思い浮かんだんだ。そうしたらどうしても、あげたくなってしまって。迷惑だよね？　ごめん」
「そんなとんでもない。凄く嬉しいです」
「……それで、今度……どう？　夕食でも。いい店知っているんだ。君、和食が好きだっただろ？」

キタ。キタキタキタ。

「ごめんなさい。私、再来月、結婚するんです。だから、そういうのは……」

悲しそうに目を伏せると、目の前の男性は飛び上がった。

「そうだよね！　だよね、悪いよね。ごめん、忘れて」
「はい、悪いと思います。だから……」

湊は緩やかに微笑むと、背伸びをして、彼の頬に掠めるように、唇を一瞬近づけた。
彼が、全身で固まる。目を見開いて、微動だにしなくなった。
脳内ではきっと、湊の甘いキスをしっとりと頬に受けた事になっているのだろう。

「これはナイショ。このリップも、今度の彼とのデートで付けますね。ナイショ、ですよ？」

取りみだしながら訳の分からない事を言って、お礼を言う彼。
そんな男性を見ながら、湊は思った。

うーん、私、もうちょっと若かったら、六本木でどれくらい稼げたのかなぁ。素質、あるかも。

「……そーこまで、やるんだぁ」
「げ、ヨシ」

絶妙のタイミングで、男が去った後に拓也が現れた。
全て見てました、と顔に書いてある。あんたは社長室にいたんじゃなかったのっ？

拓也の表情は、からかいでも、軽蔑でも無かった。淡々としている。

「あーゆーのって、湊（みなと）のタイプ？」
「性格悪いよ。覗き見も、その台詞も」

嫌そうに横目で睨み上げたのに、彼は痛くもかゆくも無い様子だ。
腕を組んで、むしろ冷たく思える目を、彼女に向けた。

「そお？　男を手玉に取っちゃってます、って感じのあなたの方が、性格悪そうに俺は見えるけど？」
「……何度同じ台詞を言わせる。あ・ん・た・が・言・う・か」

力を込めて嫌味を込めて言ったのに、拓也は首を傾けただけで肩さえすくめなかった。

湊は少し、イラッと来た。そんなに呆れられる事ですか、今のって。

「彼、来週末には地方に転勤なのよ。それより前から、私に気があるのは知ってたし。ああいう男の人からしてみれば、一世一代の勇気を振り絞って声をかけてくれたんじゃないかな？」
「ふーん。やーさしいねーぇ」

グイっと顔を近づけた拓也の瞳に、初めて、色が見えた。
挑発の、色だ。

「一人で生きていける女は、自分の楽しみが優先されて、それに合わない登場人物は退場させられるって訳だ」
「……はあ？」
「それで貞操観念が薄くて、口が堅い、と。ね、お姉さん、バイトやんない？」
「……はあ？？」

彼の台詞が理解出来ず、話にも全くついて行けず、湊はどんどん口が開いていった。

「何、それ」

顎を引いて体をおこし、まるで監査報告書を読み上げるように喋り出した彼のその話に、

湊は正真正銘、唖然となった。

「契約奥様。丸一日から最長約一週間、別人になりきって誰かの奥様になる。暖かい食事と暖かい笑顔を提供。時には愚痴を聞いたり、マッサージをしてあげたりして、相手に癒しの空間を提供する。もちろん『仕事場』ってのがあって、そこかしこに盗聴・監視カメラがついていて見張っているので、セキュリティーは万全。外出の際にはＧＰＳもついているから安心。セックスはオプション。バイト料は一日最低六万円から、平均十万円」

「……何、ですって？？」

やっとの思いで絞り出した台詞は、なんとも平凡な物だった。
そんな彼女に構う事無く、拓也は『説明書』を読み上げた。

「目的はね、とにかく癒しを提供する事。相手は忙しくてスキャンダルも禁物なビップが多いから、そういう人達を人目から守り、ストレスを取り除いてやる事なんだ。家庭的な雰囲気を求めている人が多いけど、そればっかりとも限らない。そこらへんも、やりがいがあるだろ？」

やっと拓也の『説明書』を飲み込めて、湊は叫び出しそうになった。

それって何っ？　高級援交？　アダルトな援交お部屋付き、ってヤツじゃないっ？
吉原の花魁と、何が変わるのよっ変わんないじゃないっあたしが芸を出来ないってだけでっ！

しかし湊が叫ぶより早く、拓也が腹黒い笑顔で、彼女の台詞を封じ込めた。

「貞操観念が欠如していて、かつ相手を思いやり、芝居が上手くて慰めのキスを提供できる身としては、ね？　やりがいどころか、ハマるかもよ？　毎回、今までの自分とはまったくの別人になれんだぜ？」

目の前の、この男は誰？

湊は初めての物を見るように、見慣れた年下同期の顔を凝視し続けた。

3

「何、考え込んでるの？」

カフェで、目の前に座った婚約者に聞かれる。

「あー……いや別にー……」

湊（みなと）は苦笑して、視線を泳がせた。

『会社の同期にね、売りのバイトをしてみない？　って誘われたんだけど、ビックリしてさ。一晩十万円の高級娼婦らしいんだけど、どう思う？』

なんて言えるかっ。

こんな事、プライドの高いあたしとしては、女友達にだって言えないわよっ。家族にだって、もちろん彼氏にだって。

そんな事を考えていたら、

「ごめんっ湊（みなと）っ」

突然、目の前の男に頭を下げられた。

「……何？」
「俺、やっぱ結婚出来ねぇ」

本物のショックは、「ガーン」なんかではないらしい。
全てが無音になって、世界が真っ白になった。

恐る恐る、自分の婚約者……まるでギャグ漫画の様に机に額をピタッとくっつけて微動だにしない男、多田壮太２８歳（同い年）に視線を戻す。

いつもはひょうきん系でうるさいくらいの彼が、全くピクリとも動かない。

湊（みなと）はひたすら、凝視し続けた。
それでも彼は、動かない。
え？　コイツいつまで動かないんだろう、と思い始めた。
やっぱり、動かない。

試してやろうか、動き出すまで。
それとも黙って帰ってやろうか。
いやいや律儀な彼ならそれでもきっと……って、

……ああん、もうっ！　何、冷静に観察しちゃってんのよっあたしってばっ！

「何でっ！」

湊の根負け、5分が限界。
彼女が叫ぶと、彼はやっと顔を上げた。それまでに十分、周囲の注目を集めていた。

いつもの吊り目がすっかり下がり、美形も肩無し、それでも男前。深い眼差しに、男性にしては厚い唇。そのアンバランスが女心をくすぐる。片方の口角を上げて笑うのが、普段の癖だった。

申し訳なさそうに、上目遣いで湊（みなと）を見上げる。

「……実は、ずっと前から、好きな奴がいるんだ……」
「……はいぃぃぃ？」

寝耳に水、とはまさにこの事。ギャグ漫画みたいな土下座に、ギャグ漫画みたいな返しをしてしまう。
湊は目をひんむいて、壮太に喰ってかかった。

「ずっと前から?!　て、え?　それってどういう事っ?」
「いや、その、そいつとどうこうするつもりは、全然無いんだ。……ただ……」

縮こまった彼は、この世で最も命を狙われやすい小動物よろしく、ビクビクと視線を泳がし続けている。

「……やっぱり、自分の気持ちには、嘘をつきたくない、と思って……」

湊（みなと）は再び、無音の白い爆弾に曝（さら）された。

いやちょっと待ってよ、つきとおしてよ、嘘！

ずっと前？　ずっと前って言ったよね、今？　そしたら何で今、この結婚二か月前のタイミングでカミングアウトするのよっ？　それって、それって……

「あたしの気持ちは、どうなるのっ？」

気付いたら、周囲を憚らない大声で叫んでいた。あぁ、これって俗に言う、修羅場じゃんっ。

ところが怒鳴られた当の壮太は、今までのビクつきから一転、吊り目を見開きキョトン、として言った。

「でもお前、別に俺に惚れてねぇじゃん」

「えっ…？」

思わず振り上げた手を空中に浮かべたまま、湊は固まる。

そんな彼女に、壮太は更なる言葉を続けた。

「全然俺に、女としての執着、持って無いだろ？」

「……」

ヒュンっ！
喉が詰まる。

……心当たりが、ありすぎて。

「だろ？」

律儀に彼は、湊の同意を求めてくる。律儀だ。あまりにも律儀だ。
だから今更、昔の恋が忘れられないって結婚をひっくり返す気になったんだ。そうよコイツは純情すぎるのよ。

でもその律儀さで、あたしの世間体も少しは考えてよっ！

「……う……」
「何でも話せて、親友みたいで、束縛も無くて、セックスも合う。だから俺といたんだろ？」
「……」

なんでバレてんだなんでバレてんだ。
湊は冷や汗がだらだら、滝の様に流れていくのを感じた。

「湊（みなと）が誰かに執着する所、見た事無いし。本当に申し訳ないとは思

っているけどさ、今回は見逃してよ、お願い」

ごめん、借金していた一万円、今日持ってくるの忘れちゃった。次会う時は必ず持ってくるからさ、今回は見逃してよ。

みたいな？　そういう拝みしてんの、あんた？

「今回って、次回があるのかっ！？」

相変わらずの天然さにブチ切れて、身を乗り出して壮太の襟首を掴み上げると、壮太はTシャツごと引っ張られて、彼女に顔が近づいた。

体いっぱいで、焦っている。

「俺達の間に、って事じゃないよ。湊（みなと）にはあるだろ、次回。ね？」

「そもそもずっと片思いの人がいるなら、なんであたしと婚約したのよーっ！」

「だからさ、ごめんってば。忘れようとしたんだよ、だって絶対無理だし……」

「どこの誰よ、その思い人ってのはっ。それくらい教えてくれてもいいでしょ？」

もはやカフェの店内中の、注目を集めている。

見目のよろしい男女の、痴話喧嘩、いや修羅場。知るかそんなのっ！

あたしはクールでプライドが高いからねぇ、普段は人目が気になるんだけどねぇ、
今は人生最大のプライドがかかってんのよっ人目なんか関係無いっ！

そしてこのカフェには二度と来ないっ！！

「……高校の……同級生……」
「……高校～？　知らないよ、そんな話。ホントなの、それ？　友達付き合いが長かったのに、聞いた事ないじゃんっ」

疑りかかって更にギリギリと壮太を締め上げた。コイツ、テキトーな事をいってあたしから逃げようとしてるんだったら、許さねぇっ！

「……いつも一緒につるんでいたんだ……」
「？」
「……何をするにも、一緒でさ……。でも、卒業してからは、連絡を取ってなくて」

訥々（とつとつ）と語る彼の表情に、嘘は見当たらない。それは、長い付き合いで分かる。
一体それは誰だ、と湊は頭の中の壮太レコードを引っ張り出して探ってみた。さっぱり、引っかからない。

いや、僅かに何かが引っかかった。戻る戻る。

いや、確かに引っかかった。

卒業してから、連絡を取っていない？

「…え？　……ひょっとして……」

湊は壮太の襟首を掴んだまま、恐る恐る口を開いた。

え、まさか……

「あの、喧嘩別れしたっていう、バスケ部の親友？」

「……」

壮太、俯いて、無言。弱冠、赤面。

「て、男じゃんっっ！！」

ついに彼女の手から、壮太の襟首は自由となった。くしゃくしゃになって、掴まれたままの形状を留めている。

湊は三度目の、白い無音爆弾の投下を受けていた。しかも最大級。

なんていう、カミングアウト……。

ペタン、と椅子に座る。

はあ、と肩を下げた。でも、目は壮太に釘付け、凝視したままだ。

一生懸命、情報を整理した。

そっか、そっか、……そっかぁー……。

相手が男なら、しょうがないわな。太刀打ちできないもんね。

かえって納得、受け入れてしまう自分にビックリ。

女に負けた、っていうより、男に彼氏を取られた、って方が心理的ダメージが少ないのかも。え？　そういうもん？　何でだろ？

不思議だわ。

「忘れようと思って、俺、結構努力したんだ……」

「喧嘩の理由は、それか……」

思わず瞳が生ぬるくなってしまう。そりゃ親友が、自分に恋心を持っていた、と知ればなぁ。若い高校生だもん、今のあたし以上にショックだよね。まさか壮太、その時も律儀に攻めたりしていないよね？

「もう10年も連絡取ってねぇよ。だけどダメなんだ、無理なんだ」

しょぼくれて言う彼を見て、湊（みなと）は呆れて開いた口が塞がらなくな

った。あたし今、この口に蜘蛛の巣がはれる。鳥が巣を作れる。
そして頭を振って溜息をついた。これは確かに無理だわ。あたしの手には負えない。
というか、もはやあたしの世界じゃ、ない。

信じられない。
みなさーん、あたしの婚約者、ゲイだったんですよー？
いやこの場合、あたし達は何度もエッチしてるから、バイか、バイ。

ああもう、もう一回、怒鳴りたい。

そう言う事は、は・や・く・言・え！！

4（R）

一方の壮太は、そんな彼女をそっと、上目遣いで見た。

涼やかな目元、高い鼻、形の良い唇、すっきりとした顎、それらを包み込む様な、ふわっとした優しいミディアムヘア。

細い首、そして華奢な撫で肩。

見た目が女性らしく、中身は男っぽい、彼自慢の女友達……さっきまでは、婚約者、だった。

「俺、さ。お前がすっげー好きなんだわ。湊（みなと）の事だけは不幸にしたくない。お前は大事な女なんだ」

彼の優しい言葉が、夢の様に彼女の頭の中をぐるぐるぐるぐる回ってる。

つまり、全くどこにも、届いていない。

こういう大事な決め台詞は、こういう場面で使うモノでは、ない。

「……壮太も随分、苦労背負っちゃっていたんだね。あたしで良ければ、いつでも相談に乗るよ」

湊（みなと）は、遠い眼で答えた。

そして頭の中で壮太レコードを再びめくり、一人納得した。道理で女に淡白だと思った。あたし色気無いし、おかしいな、とは思ったんだ。

ふっと、ある事に気付いた。
そしてムクムクと興味が湧いた。

生のゲイ、じゃない、バイが友人なんだもん（本人も気付かず、既に婚約者の地位から降ろしている）、こんな事聞けるチャンスは、他の人じゃ滅多に無いよ？

身を乗り出して、声を潜めた。

「で？　他の男は経験あるの？」
「……んー、2，3人」

困ったように言う彼を見て、湊（みなと）はその姿を想像してしまった。
うひょーっ、リアルに想像出来ちゃうよ、あの体で、あたしにしたのと同じようにああいう事やこういう事を、いやするんじゃなくてされる側？

……って、あれ……？

「……それって、あたしと並行……？」

途端に現実の話として自分の身に降りかかってきた気がした。ゾッとする。
ご、ごめん、あたし人種差別も偏見も大っ嫌いだけど、やっぱりそーゆーの、生理的に無理だっ。

「それは違う。お前と付き合っていた時はお前だけだよ。俺、そんなにだらしなく見える？」

不服そうに口を尖らせた表情を見て、彼女はホッと胸を撫で下ろした。

「……見えない……」

見えないよ、真面目すぎる。律儀すぎる。だからあたし、振られたんだ。

……好きな男がいる、って。

おおっと、再び現実問題が。彼女は頭を抱えた。

「ああ、どうやって周りに説明しよう……」

「……ごめん……」

「結婚って、恋愛感情が無くちゃ出来ないのかな？　だっていつかは消えるんだよ、そんな気持ち」

「……だからってお互い、最初っから恋愛感情が無いのも、おかしくね？　おかしいだろ」

再び口を尖らす壮太を見て、彼女は椅子に沈み込んだ。背もたれに頭を預けて天を仰ぐ。ああもう、だから何でそんなに真面目で律儀なのよぅ。

湊（みなと）は天井を見上げたまま、先日会った姉の台詞を思い出した。

『たいして惚れてもいない男と、どうして急いで結婚するのよ。……ああ、そうか』

美人な姉は、ニヤッと笑った。

『惚れてないから、結婚するのか』

『壮太とは、一緒にいて充分楽しいもんっ』

『老後は一緒に暮らしましょうね、って独身女が友達を約束するのとはワケが違うんだからさー。も、やめなさいよぉ』

『やめなちゃいよぉ』

母親の膝の上で台詞を真似る、2歳の姪っこ。

二つ年上の姉は、綺麗に手入れされたきめ細かな肌の素顔を、湊（みなと）に近づけて睨んだ。

いい、匂いがする。

幸せな、そしてその幸せをなんの疑問も無く享受して、この上なく満喫している、女性の香り。

愛されている事に自信を滲ませている、女性の香り。

こういうの、勝ち組っていうんだろうなぁ。

『湊（みなと）は多田くんに縋りついているだけ。結婚はね、不幸にならない為にするんじゃないの』

『にゃいの』

姉の瞳が、湊を見つめて慈しむように細められた。
『幸せになるために、するのよ』
……やってんのに。
結婚二か月前に、婚約者に振られる。
俺が好きなのは、お前じゃないんだ。男なんだ。
……ぐぉぉぉぉっ！　叫びたいぞっ！　流石のあたしも限界だっ！
これなら、グレるに充分足る要素、てんこ盛りだよねっ？
あたし、今なら何やっても許されるよねっ！！
ああ、消化しきれないこの思い、一体誰にぶつければいいのっ？
湊は携帯電話を見つめて、呆然とした。
「お母さん！　お母さんっ！」

ドタバタドタバタと音を立てて、階段を下りてくる。
母は眉をひそめた。

「どうしたの、騒々しい。お行儀悪いわよ、優奈ちゃんのお手本にならないじゃない」
「湊、振られたって！」

湊の姉は、コテで巻いて綺麗にセットされた髪を振り乱して、飛びこんできた。
質の良いアクセサリーが、胸元や耳元で、跳ねあがる。

母は、口をあんぐりと開けた。

「……やだ、ついに」
「ねぇ、やっぱり。あれは嫁入りする娘のテンションじゃぁ、無かったわよ。すごくテキトーだったもの」
「それが多田君にも伝わったのかしら、やっぱり」
「さぁどうかしらね。そういうのって当人同士にしかわかんないから」
「会社の上司とか周囲の方達にはどうやって説明するのかしら……奏、もう出かけるの？」

母娘で言いたい放題言いながら、湊の姉、奏は玄関に向かった。
細いストラップのサンダルを履く。

「うん。優奈を宜しくね。ちょっと遅くなるかもしれない」
「はいはい、皆さんにお宜しくね」
「はーい」
「最近、多いわね、お友達の集まり。みんな子供はご主人に預けているのかしら？」

奏はクルッと振り向いた。
娘の優奈は馴れたモノで、母親には見向きもせずに、お祖母ちゃんに早速おやつをねだっている。ここぞとばかりに、沢山貰うのだろう。

「子供いる子はね、ご主人が見てるけど、そもそもそんなに子持ちはいないし。独身か、結婚しても子無しか」
「そう。じゃあ湊もまだまだ、これからでも間に合うのよね？」
「あったりまえじゃなーい。それに、結婚しない人生だって今は大アリなんだから、ね」

そう言って玄関の扉を開けた奏は、思いついたように再び母親を振り返った。

「あ、そうだ。お母さん、湊に今は電話しない方がいいよ。きっとショック受けるから」
「えっ？　湊がそんなにショック受けてるの？　やっぱりあれでもかなりの傷心だったのね」

あれでもって……。奏（かなで）は少し呆れて、この少し天然な自分の母親を見つめた。

自分達姉妹が軽く持っているトラウマの原因は、母親にあるのだから。

奏（かなで）は少し首を傾けて言った。

「違うよ、傷心してないの。だからお母さんが、ショックを受けるのよ」

そしてパタン、と扉を閉めた。

「どうぞ」

通された部屋は、こじんまりとしているけど落ち着いた調度品が据えられ、とても好ましい空間だった。

先日の拓也と入ったビジネスホテルとは、ランクが違って見える。

湊はふらつく視界で辺りを見渡し、そのまま視線を、背後の男性に向けた。

お酒のせいだろうか。凄く、カッコよく見える。
身長が高く、肩幅も割とたくましい。スポーツでもやっている様な体つきだ。
男らしい瞳に、キリッとした眉。引きしまった頬。歳は若く見えるけど、３０半ばをいってるのかもしれない。

身だしなみも小ぎれいで、身につけている物も質がいい。
こんなお金も持っていそうな人が、女にも不自由していなさそうな人が、なんであんなバーであたしに声をかけたんだろう？

そして何で、あたしはのこのこ、ここまでついて来たんだろう？
こんな事は、生まれて初めてだった。

彼の目が、欲望を映し出している。私、求められている。

今だけ、だとしても。

ゆっくりと顔を傾けられ、形の良い、薄い唇が降ってきた。そっと重ねられたそれは、すぐさま熱いものに変わり、ゆっくりとけれども情熱的に、口内の隅々まで舌を這われて刺激を与えられた。

この人、やっぱり相当の遊び人だ。しかも自分に自信がありすぎる。キスが、テクニックありすぎる。

背中を上下に撫で上げていた彼の両手が、自然に前に移動して、無駄な動きがなく湊（みなと）の胸のポイントを、確実に責め始めていた。
アルコールのまわった体は性的刺激に敏感に反応し、もはや自分

では立っていられない。

立つ気も、ない。

思い出されたのは、先ほど婚約破棄をした（別れた、と言う気にはならない）壮太では無く、同僚の彼の姿だった。

彼とホテルに入った時は、向こうからは何もしてこなかった。

飲み過ぎの体を介抱して、服まで汚れを落としてくれていた。

ねだれたキスだって、本当はただの冗談だったに違いない。だって彼は直前まで、壮太を保護者（？）として呼び付けるつもりだったのだから。

そんなに大事にしてくれて、私の「尊厳」を守ってくれた彼が、今のこの姿を見たらどう思うかしら？

いや、そんな特別な事ではないのかもしれない。単にあたしに興味が無いだけで、あの行動は、彼にとっての「普通」なのかもしれない。

胸の奥が痛んだ。

彼にとっての「普通」って？

壮太ではなく、拓也を裏切っている様な気がした。

でも、彼はもう私の事を、貞操観念の薄い低俗な女、と思っているのだろう。

だってそうでなきゃ、あんなバイトに誘わない。

湊（みなと）はそう割り切って、この思いを頭から消し去ろうとした。

男から絶え間なく与えられる愛撫が、簡単にそれを手伝った。

壮太の知らない事が、二つ、ある。

一つは、湊（みなと）の初めての相手は、壮太だった事。

もう一つは、壮太の事を本気で好きだったからこそ、その壮太に執着しない様に、気をつけていた事。

涙を、目蓋の中で押し留めた。

「……あっ……」

女の小さなあえぎ声と共に、拓也は唇を軽く噛み締め瞳を閉じた。彼の額から流れた汗が、組み敷いている彼女の肩に落ちる。でも同じく汗を浮かばせた彼女は、それには気付かない。

快感に震える彼女の中に、拓也は膜越しの欲望を放った。

しばらく二人で余韻を楽しんだ後、拓也はそっと彼女から抜け出し、そのまま隣にあおむけに転がった。

二人の息遣いだけが、暗い室内に流れていく。

「……ねぇ」
「……ん？」

女の掠れた声に、拓也は動かず、目を閉じたまま答えた。
彼女は頭を動かして隣の彼を見ると、嬉しそうに笑った。

「妹ね、婚約破棄したらしいわよ」

4（R）（後書き）

複雑な男女関係。人はそれを泥沼、と言う……。

5

最近、コンタクトレンズが渇いてしょうがない。使い捨ての潤いUPの製品を使っていても、辛くてしょうがない。だから本気で仕事モードの時には眼鏡をかける事にした。歳のせいかなぁ、と悲しくなる。

おまけに省エネで蒸し暑いので、髪を無造作にアップにしていた。彼女の首は細く、うなじの線がとても綺麗。おくれ毛がそれにまとわりついてかなり色っぽい。多くの男性社員達の視線を集めていた。

しかし、彼女が視線を集めるのは、それだけが原因ではない。

眼鏡をずらして目元を軽く揉むと、湊(みなと)は気を取り直して立ち上がった。そして課長の机脇に立ち、書類を差し出した。

「課長、これ、高松精機の今月の決算書です」

「あ、うん、ありがとう」

彼は普段と変わらない、柔らかな微笑みを返す。

湊はそれを見つめ、決心した様に言った。

「私、結婚やめました」

すると彼は、先ほどと寸分違(たが)わぬ笑顔をたたえて、滑らかな口調で言った。

「聞いたよ。婚約者がドイツに行って、しばらく帰ってくる見込みがないって。でも藤堂さんは仕事を諦めたく無くって、だから彼についていくのを断念したんだろ？　彼、建築家、だっけ？」

こんな言い訳を考えついたあたしって、天才っ！　それもこれも徹底した、仕事とプライベートの区別による結果ね！　だって誰も壮太の顔も素性も知らないんだから。あー、結婚式は親族だけって事にしておいてよかった。カジュアルな二次会の招待も口頭で行っておいて、本当に良かった！！

湊（みなと）は無表情な顔の下で、ガッツポーズを繰り出していた。あたし、でかした！

先程の課長の台詞の中で、合っているのは壮太の職業だけ。

だから返事は、

「……はあ。ええ」

「こんな時僕は何て言っていいか分からないけど、藤堂さんが決めた事ならそれが一番だと思う。……女の人は、まだまだ生きづらいよね」

「……はあ。ええ」

「頑張って下さい。応援しているよ。人生、やりたいようにやるのが一番だよ」

「……はあ。ええ」

……この人、さっきから笑顔が全然変わんないな。なのに淀みな

く繰り出される、温かい台詞。
察するに、
？真面目で心優しい人見知り屋さん
？心の中で「ばーか、どうせ振られたくせにミエ張ってフカしんてんじゃねーよ」と毒づきながら癒しの微笑みを見せれる性格破綻者の、どちらかじゃない？
ああ、世の中って世知辛い。大人って疲れるなぁ。

「あ、無神経な事を言っちゃったかな？　ごめんね。僕なんか今、自分のやりたい事を何一つやれていないからさ」
「……はあ」

眉を下げて困ったように自嘲する課長を見て、？に一票。やっぱりあたしは、騙されてもピュアな心を持っていたいわ。既に手遅れでも、うん。

そんな彼らのやり取りを、拓也は離れた席からジッと観察していた。

湊（みなと）が書庫の中で、椅子に座り資料を机の上に積み上げて調べ物をしていると、開け放っていた入口から声をかけられた。

「藤堂さん。高松精機の営業外損失の明細をコピーさせて下さい」

拓也だ。彼は仕事中に湊（みなと）を呼ぶ時は、必ず名字で呼ぶ。

彼女はチラッと視線を上げると、すぐまた資料に目を落としながら答えた。

「はい。これに付いている。どうぞ」
「どうも。……ちょっとっ」

拓也は鋭い声と共に、湊に覆いかぶさってきた。気付くと、脇の棚から古くて分厚いファイルが何冊も倒れかかってきて、それを彼が片手で肘から押さえつけている。多分、彼女がファイルを抜いた時にバランスが崩れていたのだろう。

椅子に座っている湊の背中越しから、拓也が体を密着させる形で腕を上げ、その雪崩をせき止めている。もう片方の手は、彼女の肩を軽く抱いていた。

「あーあ、土砂崩れじゃん。誰だよ、こんな風に置いたのは」

頭上から聞こえる声は、どことなく優しさに満ちていて、いつもより低音で、心地いい。
彼に抱かれている部分が、何だか暖かく感じて、柄にも無く恥ずかしい。
ふわっと、男もののコロンの香りがした。

気付かれない様に生唾を飲み、動悸を落ち着けて、視線だけ上に上げる。

腕の力だけで強引に、数冊のファイルを一度に押しこんでいる拓也と、目が合った。

「……ん？　何？」

気のせいか、目が笑っている様な、気がする。女の子達を落とす、あの丸くて人懐っこい、目。

……気のせいじゃない。だって口角が僅かに上がってる。

年下のくせに。なんか、エラソーじゃない。

なんか、甘えたくなるじゃない。

「……別に、あたしのせいじゃないもん」

「もん。また可愛いね。誰もそんな事言ってないでしょ」

「そうじゃなくって。……結婚……」

「ああ、彼氏がドイツ行っちゃうってヤツ？」

よいしょ、とファイルを全部押し込む時、拓也は更に湊に寄り掛かり、肩に置かれた手はグッと彼女を掴んだ。

そして体が離れた。今度こそ面白そうに、彼は湊（みなと）を上から見下ろして言った。

「誰も、あなたが酒の飲み過ぎで男とホテルに入ったせいだ、なんて思っちゃいないよ」

途端に先日の件を思い出した。あの、行きずりの男との一夜。
いやーっ！　何でそんな事知っているのよっっ？

「ちょっ！　しーっ！！」

湊は椅子から飛びあがって叫んだ。
しーって、そんな言葉、普通、大声で叫ぶか？
拓也は少し眼を見開き、それから憮然とした表情で言った。

「そこまで必死で隠す事？　なんか傷つくなぁ」

その様子から湊は、拓也の台詞が先日の飲み会の後の件を言っているのだと気付いた。

「え？　あ……」

そうだわ、ヨシが知っている筈無いじゃない、何焦ってるのよ、あたし。
途端に、別の意味での冷や汗が流れ始めた。
そ、そんな、二回も続けて付き合ってもいない、しかも別々の男とホテルに行くなんて、あたしはどれだけ乱れた生活を送ってるのよ……。

やっぱりあれは、人生の汚点かつ思い出だわ。もう二度とあんな

事はしない。それにあの人とはもう絶対に会いたくないっ。
いや、たしかにイケメンだったけど。お酒が醒めてもそこは変わらなくて安心したけど。だけどだけどっ。
もう、あーゆー過去は封印したいのよぉ。

『ダメだよ、知らない男にホイホイと付いていったら』
散々たっぷりやった後、あの男はベッドに座り、真面目腐って言い始めた。
『俺が危ない奴だったらどうするの？　君、命無いよ？　そんなにバカには見えなかったんだけど』
『……頂いちゃってから、いいますか？』
『頂いちゃったから言えんだろ？　男はまず、ソレしか考えられないんだから。落ち着いて、やっと説教を垂れる事ができるの。ねぇ、俺が変な性癖があるとか、性病を持っているとか考えなかったのか？』

勘弁してよ。カッコいいけど、なにこの男。
やる事やっといてその台詞、何様のつもりなの？

『……変な性癖や性病を、持ってるんですかぁ？』
『持ってねぇよ。幸いにな。それってすげぇラッキーな事なんだぞ

？』

『……あああもう、訳わかんない……』

彼女は枕に顔を埋めた。ついて行けない。ついていくのが、かったるい。

この人、一体あたしの何になろうとしているんだろう？

こんなウザイ人とはこれっきり、お別れしたい……。

『どうしてこんな事をしたんだ？　いつもやってるのか？　そうは見えないけど』

……なんでそんなにあたしに興味を持つのよぉ。

そんなに若者を救いたいんなら、夜回りおじさんでもやればぁ？

『悩みでもあんのか？』

おじさんがきいてやるぞ？　とでも言う様に、彼は微笑んで湊を見下ろしている。

彼女はじっと彼を見て、そして諦めた。どうせ一晩限りだし。旅じゃないけど、恥のかき捨てだ、ええい。

これが、今後付き合いを続けていく人間相手なら、彼女はこんな事を言わない。

こんな、振られてやけを起こした、なんて打ち明け話、プライドの高い彼女なら絶対にしないのだ。

『……婚約者に振られて』
『……おお』
『しかも彼は、バイで。男の方が、いいと』
『……なんと、まあ』

彼は目を見開き、懸命に真顔を作る努力をしていた。

『そりゃひどいな。他人が聞いたら大爆笑じゃねえか。キツイわな』
『……』

コラァっ！　人から無理やり聞きだしておいて何だその態度はぁっ！
ダメ。この人にはもう、一生会いたくない。
だって会ったら今後ずっと、憐みの目かつ笑いを堪えた口で相手されるのよ、冗談じゃないわっっ。

絶対誰にも、本当の事は言えないっっ！

「あーっ何やってんのっ」

回想録で湊（みなと）が動揺して、手が机の上の積み上げた資料に当たってしまい、それらが大きな音を立てて床に崩れ落ちた。拓也が手を伸ばしたが、今度は間に合わない。
その音を聞きつけたのか、入口から女の子の声がした。

「あ、みなちゃん……と、吉川くん」
「舞彩ちゃん、いい所に来た。手伝ってよ、お願い」
「うわ、大変」

パタパタと駆けより、自分が持っていた書類を脇に置き、拓也と一緒に重いファイルを拾い始める。
湊も慌てて座り込み、参加した。拓也はそれらを要領良く、湊が使いそうな物だけ机に残して、後は棚にしまい上げていく。その脇で舞彩が、彼にファイルを次々と渡していった。二人で何やら楽しそうに、短い言葉を交わしている。

拓也は一通り終えると、人懐っこくて爽やかな笑顔を舞彩に向けた。

「ありがと。助かる」
「いえそんな」
「……」

学生時代、この笑顔で多くの女友達が落ちたのを湊は知っている。だからいつも、胡散臭いなー、と思いながら眺めてしまうのだ。

でもまあ確かに、魅力的ではあるけど、ね。可愛いよね、あの笑顔。

そんな彼女の隣で、舞彩は少し顔を赤くしながら、瞳を輝かせて言った。

「あ、そうだ吉川くん。今日5時から、社員旅行の幹事会があるから、上の休憩室に集合ね」
「え、ホント？　それまでに帰って来れるかな？」
「上地さん力入ってるから、遅刻すると大変だよぉ？」
「うわっ。頑張りまーす」

仲がいいな、この二人。同期とは言えこの仲の良さ、ヨシに彼女がいなかったら、そのうち付き合っちゃうかもな。

そう思ったら、胸の奥がキュッと痛くなった。

私って、欲張りだ。

その時、彼の携帯が鳴った。
それを手にした拓也は、一瞬眉根を寄せた。それからすぐに、二人に軽く手を上げた。

「あ、ごめん。じゃね」

書庫から去っていく拓也を見た舞彩は、つまらなさそうな目をしていた。
そして湊を見ると、「あーあ、行っちゃった」と素直に残念がり、それから笑って自分の持ち場へと帰って行った。

かわいいなぁ、舞彩は。やっぱりああいう素直な子が、きっと一

番の幸せを掴むのよ。そうでないと世の中が報われないわ。そんなのあたしが許さないんだから。

調べ物を終えて書庫を出て、飲み物でも買おうと休憩室に向かうと、そこから拓也の大きな声が聞こえてきた。

「ちょっと待てよ、オヤジっ！　俺を斡旋業者か何かと勘違いしてねーか？　こっちだって仕事抱えて忙しいんだよ」

ビックリしてそっと覗くと、部屋には彼しかいない。携帯電話の相手に、ヒートアップをしている様だった。

「おい、勘弁してくれよ、自分の方がいっぱい駒を持ってるじゃないの？　こういう時に使ってナンボでしょ？……知らないよ。とにかく、もう切るよ。……知るかっつってんの」

砕けた口調で話すから、仕事の話ではないんだろうな、と勝手に思う。オヤジ、とか言ってたから、女の子が相手ではないんだろうな、なんてあたしも詮索好きだわ。

その時、彼と目が合った。拓也の驚いた表情。

ヤバい、立ち聞きしていたって思われたかしら？　でもこんな所であんなに大声で話していたんだもの、聞かれて困る話じゃないわ

よね？　あたし、後ろめたくは無いわよね？

うん、だから開き直ろう。

「楽しそうだね」

ニコッと笑って、自販機の前に行った。

拓也は僅かに目を泳がせていたが、彼女が飲み物を取る後ろで、溜息混じりに言った。

「……ま、いいか湊（みなと）になら」

あ、名前で呼んだ。じゃあ、プライベートの話かな？

「何？」

「例のバイト。担当する筈の女の子が、盲腸で緊急入院だって」

湊は一瞬、目が点になった。

「……ああ、あの高級援交」

「え？」

「花魁吉原の現代版でしょ？」

「別に体を売る訳じゃないよ。社長はレンタルハニーだって言っている」

「レンタルハニー？　何、その最低なネーミング」
「やってる事が最低スレスレだから、いいんじゃない？　契約妻、じゃ、お洒落じゃないんだって。じゃ英語でパートタイムワイフっていっちゃえば？　っつったら、ダッチワイフみたいで品が無いって」
「……品……？」
「あの人、ワイフって言葉だけでそれを連想しちゃってるからさ。そっちこそお育ちの悪さとバカ丸出し」

薄く笑いながら携帯電話をもてあそんでいる拓也を見て、湊は「ふーん」と言った。
缶のプルタブを引き、ジュースに口をつける。
そしてそれを、脇のテーブルに置いた。

「……私、やってもいいよ」
「……はい？」
「別人になれんでしょ？……じゃあ、やってみたい」

拓也は動きを止め、目を見開いて彼女を見た。

「……あんた、やけになってんの？」
「いや。でも、身軽になった事は確かだし。変な冒険を犯すよりは、そっちの方が安全らしいし。それに体、使わなくってもいいんでしょ？」

すると彼は押し黙ってしまった。僅かに下を向き、無表情になる。
湊も無表情で、彼を見つめた。

「……いいけど、それって、個人の技量によるよ？」

「ヤバい客とか、来るの？」

「それは無いと思う。社長がちゃんと吟味してるから。でも男って、女と一つの部屋にいたら豹変する奴もいるだろうし、会社の連中がいくら見張ってるっていったって、そんなすぐには飛びこめないよ」

「そんで今まで、トラブルあったの？」

「……今んとこは……でっかいトラブルとかは、無かったと思う……」

「じゃ、やってみる」

湊がそう言うと、拓也はどこか探る様な目つきで彼女を見た。
湊は僅かに微笑んだ。

「クラブのお姉ちゃんかママになったつもりで。相手を気分よくさせればいいんでしょ？　あなただけの物よ、っていう演技を、両者合意の上でやるんでしょ？　あたし、相手に話合わせるの上手いから、結構イケると思うよ」

「……」

今はまだ、やけを起こしている訳ではないと思う。仮にそうでも、そんな事絶対、他人の前で口にはしない。でも、この間みたいな事を繰り返す様になったら、流石にマズイもの。

だったらあえて、この危険な、ゲームみたいな世界に身を置いてみるのも、いいかもしれない。

だってあたしにピッタリじゃない。

本気で人を愛するのが怖い、あたしには。

拓也はふっと顔を背け、そしてしばらく考え込んだ。

「労働時間は、今晩6時から明日の朝まで。詳細は後で知らせる」

空中を見つめたまま、低い声で言う。そして視線をテーブルに移し、置いてあった湊の缶ジュースを手に取ると、グイっと飲んだ。ドキッとする。

振り向いた拓也は、いつも通りのすました表情だった。

「はい」

そう言って彼女に飲みかけの缶を渡す。

湊が本能的に受け取ると、彼は目を細めて、クスっと笑った。

「メガネ、いいね。グッとくるよ。いつもしてれば？」

これにもドキッと来たけど、何かを誤魔化された様な気にもなった。

拓也は飄々とした態度で、部屋を出て行った。

5（後書き）

長いっ。キリの良いまで書いたら、こんなに長くなりました。すみません。どこで切ったらいいのかわからなかった……。

さあ、湊ちゃんのお仕事、はじまりますよぉ？

6

田中桃。趣味は編み物。好きな本は星の王子様。好きな花はかすみ草と紫陽花と真っ赤なバラ。小学生の頃よりピアノを続けている。笑顔が可愛く、心優しく明るくキュート。だけどおっちょこちょいの所があり、泣き虫な一面も……

「何だコレはーっ！！」

湊（みなと）は紙を放り投げたくなった。そこにはメールが印刷されていて、中身は女性の特徴が細かく記載されている。

というか、この女の子、何？　趣味が編み物で星の王子様でバラでかすみ草で、可愛く泣き虫なおっちょこちょいって、これは昭和の少女漫画かっ！

じゃなくて、一体これはなんなのよっ、つまりなんなのよっ！

その時、彼女に無言でその紙切れを投げてよこした、当の本人が通り過ぎた。

同僚とファイルを片手に、真面目な顔で話し合っている。

ここは会社なので、それはもちろん、仕事の話だけど。

「そこは国際会計基準が変わらなかったっけ？」

「外貨建有証の評価ですか？　償却原価法ですよね、これは」

「吉川っ！　……くん」

呼び捨てで呼んでやろうとしたが、先輩がいる手前、かろうじて「くん」を付け足した。

ところが拓也は、熱くなっている湊とは対照的に、冷めた眼差しを彼女によこす。

「はい？」

「ちょっと」

「すみません、後で」

にべも無く断られる。「あんたとは話したくない」オーラをバンバンに出して、湊は彼に背中を向けられた。

何、その態度？　何スカしてんの？

さっきのアレとの、違いは何？？

湊がポカンとしたその時、向こうから舞彩（まあや）が忙しなく駆けて来た。

「吉川くーん、休憩室来てー。打ち合わせー。みんな待ってるー」

「あ、今行きまーす！」

「じゃあねー」と笑って姿を消す舞彩を追う様に、「すいません、僕も」と言って、拓也もその場を去ろうとする。

湊は、頭の中で「ブチっ」と何かが切れる音がした。

…んだとコラア！

小走りに拓也を追いかけると、先ほどの紙切れプラス手にしていたプリント類を丸め、彼の頭を後ろから、
スパァンっ！
と叩いた。

驚いた拓也は後ろを振り返り、湊を見ると目を剥いて言った。

「いって！　何すんだよっ！」
「叩いたんだよっ人の話を聞けっ！」
「仕事中だろっ！　殴る奴がいるかよ、おかしいんじゃねぇのっ？」

後方で同僚の先輩が、唖然としてこちらを（主に湊を）眺めている。だからなんなのよっ。
外面がいい人ったらしの癖に、あたしにはスカした気分屋なんだからっ。その根性、叩き直してやるっ。

湊は拓也のネクタイをグイっと引っ張って、顔を近づけた。

「こっちも仕事っ。無視するそっちが悪いっ」

なんで無視するのかは知らないけれどっ。

グイグイと拓也を引っ張り、彼女はなんと手直な女子トイレに連れて行った。

他に連れ込む場所が無かったし、人前で秘密のバイトの話は出来ない。
幸いトイレには誰もいなかった。拓也は怒って、勢いよく彼女の手を振り払った。

「いい加減にしろよっ」
「何だコレは？」

渡されたメールの紙を、グッと付きだす。

「資料だよ、見りゃ分かんだろっ」
「説明してよ、どうすりゃいいのよ」
「その通りにしろよ、それが設定なんだよ」
「…せってい～？」

怒りで上がっていた肩が落ち、湊は眉根を寄せて拓也を凝視した。
拓也は服を整えネクタイを直しながら、彼女を横目でジロっと睨んだ。

「そう。社長のおじさんが考えた、それが設定。相手の好みや希望に合わせた人物像。それをもとに、自分で自由に想像して、相手に『ご奉仕』するの。ルールはただ一つ。お帰りなさいと行ってらっしゃいを言う事」

「……メイド喫茶か？」

「信じらんねぇ。人前で切れるか？　そーゆー人だとは思わなかった。やっぱヤケになってんじゃん」

「半分はあんたのせい」

「はあ？」

「いやそれ以上」

湊はツン、と勢いよくそっぽを向いた。

拓也は怒り半分呆れ半分、で口を開けて彼女を凝視した後、「ありえねぇ」と一言言って、女子トイレを出て行った。

クッソ。ここまでバカにされたら、やらないでか。

１０万円のお仕事、きっちりさせて頂きましょう。

とある高級なマンションの最上階。

「お帰りなさい」

男が扉を開けると、見慣れない、一人の若い女が立っていた。

彼は無言で彼女を見下ろし、目を細めて、眉根を寄せる。

「……君は？」

彼女は柔らかく微笑んだ。スッキリとした美人だけど、表情に愛嬌がある。着ている服は質が良いが、決して派手ではない。多分この部屋のクローゼットにかけてあったものを身につけたのだろうが、中々、自分にどんな服が映えるかを自覚している女だ。

彼女は綺麗なお辞儀をした。しながら少し脇に移動し、彼に入室を促す。

「桃です。宜しくお願い致します」

「ふーん。泰成（たいせい）も面白い子を見つけたな。君、素人っぽいね」

「……実際、素人だと思います」

「え？」

彼女は控えめに、彼の手を引きながら家に上げた。

廊下の奥の部屋は、まだ日が明るいのにカーテンが閉められて薄暗い。空調がきいている中、間接照明が灯されている。

彼女の長い睫毛が、上目遣いの瞳を縁取った。

「だから、至らない所がいっぱい、あると思います」

ゆっくりと、彼を見つめる。男は充分３０代半ばに見えるが、４０を少し超えている事を、彼女は資料を読んで知っている。しかし最低限の事以上には、あえて目を通さなかった。

小ぎれいな身だしなみだが、着ているスーツが上物である事は触れなくても分かる。ジムで鍛えていそうながっしりとした体つきをして、僅かにコロンの香りがした。

一部の隙もない、男。

その空気をまとって、ここに来た。

それに疲れて、ここに来た筈。だから。

「でも一生懸命頑張ります。気に入らなかったら、追い出していただいて構いません。教えて頂く事は何でもやりますので、」

彼女は、彼をじっと見つめた。

そして彼も、彼女を見つめた。彼女のぷっくりとした唇が、花が咲く様に、ゆっくりと開かれていく。

赤い舌が、僅かに見えた。

「どうか、躾けてください」

艶っぽく、甘い声。なのに表情はむしろどこかあどけなく、頼りなげに見える。

……うわ。彼は心の中で呟いた。思わず、生つばを飲み込む。

玄関先で、二人の視線が絡み合った。

「……見事な設定だな」

「はい？」
「俺の好みに合わせた演技か？　だとしたら合格だ」

皮肉っぽく、口角が上がる。
湊はそれを、冷静な気持ちで眺めていた。

「それが天然だとしたら、大した物だ。無意識の才能ってのは手の中にあってもコントロールが利かないものだから、恐いよ」

とりあえず、第1段階はクリアしたらしい。相手に興味を持ってもらえたようだ。
内心の冷や汗を上手く隠しながら、湊は少し微笑んだ。リビングへと足を運ぶ。彼も後ろからついてきた。

ソファに座った彼の正面に立ち、立て膝をつくと、彼女は彼のネクタイに手を伸ばした。
それをゆっくりとほどいていく。
彼はその動作をジッと見ていた。

ほどき終わったネクタイを脇のローテーブルに置き、彼女は首を傾げた。
ヤバい、この先どう進んでいいか分からない。でもこの人は、この素人の雰囲気が好きみたいだから、このまま相手のペースに合わせてみよう。

あの女の子の好みを見て、純粋な少女を想像して、一か八かの賭けに出た。その上での素人宣言。よかった、それが裏目に出なくて。

「俺の事、知ってる？」
不意に男が、低い声で聞いてきた。
湊は僅かに微笑んだ。

「はい」
「どの程度？」
「テレビに出ている程度には。詳しい事は、存じ上げません」

世間で人気の、若手イケメン代議士。誠実な人柄と家庭的な雰囲気が、その人気を盤石なものにしている。
一方で、そんなにハンサムでやり手の政治家が誠実な夫であるわけがない、とマスコミが日々、彼を虎視眈々と狙っている事も、大人だから容易に想像がつく。

「勉強不足だな」

皮肉っぽく口元をゆがませる彼は、少なくともテレビで見る表情とは全然違った。
まあもともと、これが身近な人達に見せる表情なのかもしれない。
だとしたら、ここでは更に、別の自分でいたい筈だ。

「ここは、外の世界とは違います。浮世を離れて、くつろげる場所」

彼女は柔らかく微笑んだ。
唯一、人目を憚らず違う自分でいられる場所。
だったら、今から相手をする男の細かな情報など、先入観を植え付けるだけで、害になるものだ。

「だから、あなたはここに『帰って』来たのでしょう?」

そう言って彼を見上げた時、湊はいきなりグイっと抱きしめられた。
彼の強い眼差しが降りかかる。

「教えれば、理解できるのか?」

なりましょう、別人に。

「何でも、教えて」

すると彼は、満足そうに片方の口角を上げて言った。

「望み通り、躾けてやるよ」

不思議な事に、その場にいる湊も、彼の事しか見えなくなっていた。

本当に、誰の事も頭に浮かんでこなかったのだ。

壮太の事も、拓也の事も。

「行ってきます」

扉を開ける前に、彼は湊を振り返った。笑顔で彼女を引き寄せる。

「行ってらっしゃい」

彼女はクスっと笑うと、彼の薄い唇に軽いキスをした。

「お仕事、頑張って下さい。お帰り、待っています」

じっと見つめた彼が、満足そうに微笑んで頷く。そして部屋を出て言った。

しばらく彼女は、そのまま玄関に佇んだ。

コレで良かったのかな？　取り合えず返品をされなかった所を見ると、まあ、やりきれたらしい。

結構なんとかなるもんだな。

この部屋はありとあらゆるものが揃っていて、雰囲気を上げる小物などもそれはまあ、色々と置いてあった。へえ、こんな物もあるんだ、これ、プライベートで使ったら面白いかな、とか思ってしまい、それっていつの話だ？　と自分で突っ込んでしまった。足りないものも、電話一本で取り寄せられる事が出来た。一体どういうシステムになっているんだろう、と思う。

手料理をふるまわなくていけないか、と覚悟をしていたけど、それすらディナーのフルコースを「宅配」することで済んだのだ。

湊は頭をぽりぽりと掻いた。

「……しっかし、世の中には色んな男の人がいるなー……」

有名人は大変だ。息抜きするのにも一苦労だ。

「さってと、出勤いたしますか」

7

「おはようございます」

いつもと変わらない日常風景。湊はいつも通り自分の席に腰を降ろした。

程なくして拓也も出社してきた。席に向かって、彼女の後ろを通り過ぎる。

その時、湊は顔も上げずに、書類に目を通しながら無表情に彼に言った。

「吉川くん、昨日の件、終了しました」

ピク、として拓也が立ち止まった。

振り返って、無言で湊を見下ろす。けれども彼女は、全く彼に頓着しない。

拓也が冷めた声で言った。

「はい。上手くいきました?」

「結果は分かりません。そのうちそちらに報告が入るんじゃないですか?」

わざとらしいくらい、冷たい返答。なんでこういう態度を取っちゃうのか、自分でもよく分からない。何故だか無性に意地を張りた

くなった。

「吉川くーん」

次には可愛い舞彩が出勤してきた。胸元で手を小さく振って、こちらにやってくる。

途端に拓也の表情がほころんだ。

そして彼の表情がほころんだ事が、湊は背を向けていても分かる。これが大人の女の勘ってやつ？　使いたくないのに勝手に働いちゃうのよ、この勘は。空気が読めるのも考えものだわ。

「舞彩ちゃん」

「昨日はお疲れ様ー」

「お疲れ様。飲み過ぎなかった？」

「ちょっとねー。もー、瀬尾ちゃんとか強い強い。上地さんもお酒が進むと絡んでくるしさー」

「あー、あれはひどかったよねぇ。舞彩ちゃん、ロックオンされてたでしょ？」

「そだよー。も、笑ってばっかでひどいよー、自分ばっか楽しく飲んじゃってさー。助けて欲しかったのにぃ」

「嘘だよ、俺、助けてたじゃん。さりげなーく、あんなに目いっぱい」

「ダメだよ、あんなんじゃ、あの人には全然利かないのっ。もっとバシっとしてもらわなきゃっ」

「酔っちゃってんだもん、何を言っても無理でしょ。俺と佐藤で結構頑張ってたんだよ？　あ、佐藤！」

…楽しそうだ。実に、楽しそうだ。社内旅行の打ち合わせ幹事会が、そのまま飲み会に突入したらしい。

なんかイラつく。頭に来る。人の席の後ろでいちゃついて盛り上がってんじゃないわよ。今日は一日、絶対ヨシとは話をしない。絶対こっちからは話しかけてやるもんですか。

「あ、みなちゃん、おはよう」

「おはよう」

舞彩（まあや）の挨拶に振り返り、条件反射の大人スマイル。ああ、あたしって悲しい程に大人。

途端に拓也はスッと離れて自分の席に行き、舞彩（まあや）は屈託無く湊に話しかけてきた。

湊は楽しくニコニコと笑いながらも、まるで見えない三つ目の目で拓也を睨みつけている様な気分だった。

…あたしに話しかけられなかったって、奴のＨＰはそれほどダメージを受けないんだろうけど。奴が折れるまで絶対に無視し続けてやるっ。あ、なんかもっとイラッと来た。

「課長、定訪、行ってきます」

「お願いします」

湊（みなと）は鞄を手に颯爽と部屋を出て行き、課長はいつもの頬笑みで見送った。いつもの日常。

同僚の男の一人が、少し名残惜しそうに彼女の背中を見送った。いつもの日常。

そして彼女が外を歩いている時。
携帯がメールを着信した。

『今日の夜、可能なら社長を紹介します。バイト代と今後の話があると思います。夕方6時に渋谷モアイの前でどうですか？』

イラついていた気分が、一気に軽やかな物になった。ふふ、勝った！　私は吉川に勝ったぞ！

思わず道のど真ん中で、拳を作って体をかがめて小さくガッツポーズ。よっしゃ！
そこでふと、我にかえる。

……って、何が？

渋谷の駅は、勤め先からＪＲで五つも先の駅。そこで一人で待たされた。遅い！　遅すぎる！　しかもｉｐｏｄの充電は途中で切れてしまった。
勝利感が一気に消えうせる。くっそー、あの男っ！

すると意外な事に、彼は走って待ち合わせ場所に来た。よっぽど急いだらしく、シャツやネクタイが僅かに乱れている。軽く息も上がって、長めの前髪が額にまとわりついている。

途端に、怒る気が失せてしまった。
ここで見る彼は、職場で見る澄ました表情の彼とは全然違って見えた。

ので、しょうがなく溜息をついて、彼を生ぬるく見てしまう。

「ちょっと、遅ーい」
「ごめん、急に用が出来ちゃって」

拓也は両手を合わせて湊を拝んだ。可愛く拝まれ、彼女は軽く面喰った。え？　よっぽど外せない用事だったの？

は、いかんいかん。ここで手を抜くと舐められる。

「って、一時間近くも待たせてんじゃんよー。間で連絡を入れてくれても良かったのに」
「ごめん、出来なかったの。ほんっと、ごめん。ごめんなさいっ」

もっと勢いよく拝まれ、上目遣いに見られた。
……くっそ。小犬みたいに可愛い。男がソレ、やるか？

「……で？　どこ行くの？」
「ああ、こっち」

彼は馴れた様子で歩きだした。湊は軽い敗北感と共に、慌てて後を追った。

するとごく自然なリズムで、拓也は彼女の歩くスピードに合わせてきた。

手ぶらで、両手をポケットに突っ込んでいる。前を向いているけど、歩調は同じ。

何だか、同じ空気を吸っている気分がした。

それは、妙な気分だけど胸が心地よかった。

けれどもやがて、切ない様な憂鬱な様な気分になってきた。

何故だろう、と考えて、ああ、昨夜の一件だ、と思いだす。

ヨシは、あたしが昨夜、あの人と寝たと思っているんだろうな……。

そしてそれは彼にとって当り前のことで、どうでもいい事なんだろうな。だってあたしにあの仕事を教えたのは、彼だもの。

「……ヨシはさぁ、どうしてこうゆう事、してんの？」

何でも無い様子を装って言うと、拓也は丸っこい眼をチラ、と彼女に向けた。

「……バイトを紹介した事？　実は俺はあんまり関わっていないんだ。そもそも関係者でもないのだけれど、そこの社長がね、知り合いなんだ」

「へー？　なんの？」
「昔のバイト仲間ってところかな。当時はそこの、実質責任者だったの、彼は」

思いの外、彼の口が滑らかだ。もっと自分の事は話したがらない人かと思っていた。ううん、そうだったハズ。

これは、聞いてみるチャンスかな？

「……秘密主義の吉川拓也くん。君の過去のバイトを、聞いてもいいかな？」
「うん、ホスト」

当り前の事の様に、あっさりと言われた。軽っ。

「……やっぱり」
「そこで色んな女の子と親しくなって、なかにはクラブ勤めの子とかもいるからさ。時々、泰兄（たいにい）に頼まれて……社長なんだけど、紹介したりしてたの」

……それって……売春の斡旋なんじゃないの？　あ、違うの？
確かに、本人次第だとは言ってたけど……。

アロハシャツを着た、ヤクザなヨシ。うわっ、似合い過ぎる。

「そのバイト、どのくらいやってたの？」
「大学卒業間際から就職するまでだから……一年ちょっとだよ」

それを聞いた湊は、度肝を抜かれた様に驚いた。

「えー？　専門通いながらそんな事やってたの？　舐めてる、てかすっごい」

器用な男だとは思っていたけど、そこまでだとは思わなかった。もともと世の中を舐めている節があったけれど、それにしてもやる事がハンパない。ホストしながら会計専門学校？　やる気があるんだかないんだか。親にはバレなかったの？

拓也は軽く肩を竦めるだけだった。

「働きながら通ってた人に言われたかないね。しかも合格しちゃってるし」
「一発合格の人に言われても、ありがたくもなんともない」

湊だって学生時代から専門学校には通っていたが、中々試験に合格しなかったのだ。そもそも一発合格なんてあまりいない。この子、絶対に要領が良いに決まってる。

あーあ、世の中は要領の良し悪しで、人生の大半が決まっちゃうんだ。その点、あたしは空気を読むのが上手いけど、要領は悪いも

んなぁ。

「で、なんであたしに声をかけたの？」

何となく自暴自棄な気分で聞いてみると、拓也はやっぱり、なんでもない様子で答えた。

「色んな毛並みの従業員を揃えたい、って泰兄（たいにい）言ってたから」

「……あたしはどんな毛並みよ？」

「……いいんじゃない？」

拓也はクスッと笑った。

「素人丸出しで、でも柔軟性があって度胸もあって、芝居が打てて貞操観念が薄い。……それに見ていて、どこか危なっかしい」

…は？　……えと、何？

湊は顔を軽くしかめた。

それ、褒めてんの？　けなしてるの？

そう言おうと口を開きかけたら、遮る様に彼は言った。

「そういう女は、男心をくすぐるんだよ」

ニヤッと笑った表情が、あの時ホテルで見せた表情を彷彿とさせた。一瞬、胸が大きく骨を打ったみたいだった。

ヤバい。ひっかかりそう。

湊は慌てて顔を背けた。

無理無理無理。だってこの状況でのそれは、ただ自分を惨めにするだけなのが見え見えだもの。

「ここ」

そこはちょっと小ぎれいな、普通の雑居ビルの一室だった。

拓也は無造作に扉を開ける。

「泰兄(たいにい)ー。連れてきたよー」

「おー、待ってたぞ。いらっしゃい、先日はどうも……」

どこかのマンションの一室の様な、絨毯やソファが置かれている奥の台所から、一人の男が出てきた。

髪を短く刈り上げた長身のたくましい男で、スポーツが趣味な様なかなりのイケメン。シャツの袖をまくって太い腕を出し、いかにも料理をしている途中でした、という雰囲気。魚をさばいているの

かもしれない。

その彼が、拓也の背後にいる湊を見た。湊は拓也の背後から、遠慮がちに顔を上げて彼を見た。

そして二人の、時が止まった。

「……あーっ！！」
「ひゃーっ！！」

男の声もかなり大きかったが、湊の叫び声の方が勝った。男は包丁を胸のあたりで抱え、表情が間抜けに驚いてさえいなければ、これから突進してあなたを殺しますよ、みたいな格好だ。

だけど、湊の叫び声には恐怖が混じっていた。

何だよっ！

拓也は一瞬、包丁を持った泰成（たいせい）に湊が怯えているんだと勘違いをして、咄嗟に彼女をかばおうと後ろ手に彼女を抱きかかった。

けれども次の台詞を聞いて思いとどまった。

「君はっ！！」
「二度と会いたくないオヤジっ！！」

……は？

二人の不協和音。

拓也はポカン、として、交互に二人を見比べた。

二人とも、同じ顔をして固まっている。

何、コレ？

……え…と……

「……お知り合い……？」

何となく恐る恐る聞いたのだけれど、双方とも頭を再起動するのに相当時間がかかるらしい。微動だに動かない。

……なんか俺、嫌な予感がするかも。

拓也は眼だけ動かして二人の様子を見ながら、徐々に後ずさって行った。

7（後書き）

そうです。湊ちゃんの一夜のお相手、ウザイ説教お兄さんが、事務所の社長泰成くんだった訳です。

次回、拓也くんが（当然）コレを知って、大ショックです。

8

湊（みなと）が帰った後の事務所にて。

「ごめんっ、拓也っ。許してくれっ。ごめんごめん、本当にマジでごめんっ！」

泰成（たいせい）はがっしりとした体を折り曲げて、床に額をつけて土下座をしており、拓也はそんな彼の目の前のソファに座りこんでいた。

眉間に皺を寄せて眼を閉じ、頭を背もたれに預けて天井を仰いでいる。

「……嘘だろ、マジかよ、おい……」

「まさかお前の同僚とは思わなかった。世の中ってほんっと狭いのな。こんな事が起こるなんて俺もビックリだよ。腰抜かした、うん」

その時、拓也が急に足をバタバタっと子供の様に地団駄踏んだので、泰成はビクっとなった。

それを無視して拓也は体を横にすると、両足をソファに上げて膝を丸め、顔も隠して呻（うめ）きだした。

「……あー、もう、一生腰抜かしてろよ……。そしたらこんな事、もう起こんねーだろー……」

「ごめんっ。すまないっ」
「……」

顔を上げる気にもならない。嘘だろ嘘だろ嘘だろぉ……
よりにもよってこんなスケベオヤジと……何血迷ってんだよ、湊（あいつ）は。顔がよくても、この人、最低（最高？）のエロなんだぞ。

泰成の過去の数々の武勇伝を知っている拓也は、頭を抱えて益々、丸まってしまった。
俺はバカか？　目の前で、身近な穴馬にかっさらわれてしまった気分だ。ノーマークだった。だって普通、こんな事想像しねぇだろ？

くそう。自分がこんなにダメージを受けるとは思わなかった。こうなるのが嫌で、彼女に件（くだん）のバイトを紹介したのに。

彼女に対する、自分の感覚を麻痺させる為に。
彼女が何をしても、動揺しない様に。

効果ねぇじゃん。

拓也は僅かに目蓋を開き、泰成を横目で睨んだ。

「どーするの、これから。雇っている女の子達には、手を出さない主義だったんでしょ？」

「それが渡辺代議士の評価が滅茶苦茶高くてさ。彼女、空気を読むのが上手いくせに天然で、最高にツボらしい」
「……」
「ヤってはいないらしいぜ？」
「聞いてねーよっ」

堪らず拓也は大声で叫んだ。聞いてねーよっ、つか気にはなっていたけど、それより前にあんたが喰っちまってたんだろっ。俺にはそっちの方がヤバいんだよ、モロ想像しちまうんだよバカ野郎っ！

こんな仕事を紹介したって、湊なら体なんか使わずに上手く立ちまわれるだろうし、そもそもそういう真面目な女の子が好みの客もいる、って泰成は言っていた。だから紹介したんだ。泰成なら湊に、体目当ての客はまわさないって思っていたから。
なのにっ！

「そんな睨むなよ。俺だって悪かったと思ってるし、会うなんて思わなかったんだぜ？……まあ、アッチは中々良かったんだけど、なんせ素人の女の子だったし」
「……」

マズイ、俺、視線でコイツ殺せるかも。

「すまん。何でも無い。だから許せ。それ以上俺を睨むな」

泰成は真顔で謝り、頷いた。大変だ、拓也が切れてる。
こいつは一度怒らすと恐えんだ。ずっと根に持たれて、厄介なんだ。

話題転換。矛先を変えよう。その方が身の為だ。

「とにかくさ、あの好みがうるさい代議士を満足させられたくらいなんだから、俺としては今後もキープしておきたい訳よ。知性があって品があって、空気読めて天然な美人なんてそうそういないだろ？　婚約者に振られて、ヤケおこして行きずりの男と寝るよりずっとマシだと思うけど？　相手がゲイだったから振られたなんて過去、そうそう消化出来ないぜ」

泰成が努めて明るく言うと、それを聞いた拓也は唖然とした。

「……え？　何？」

眼を見開いてこちらを凝視している。今度は泰成が固まった。

「え？」
「ごめん、よく聞こえなかった、もっかい言って？　婚約者がゲイで振られた？」
「そう言ってたぞ。違うの？　……まさか、隠していたとか」

え？　俺何かマズイ事を言った？　泰成の頭の中を警報が鳴る。

呆然としている拓也を見つめて、彼は顔が真っ青になっていった。

ヤベぇっ！　口を滑らせたみたいっ？

「……それは……」

拓也は呆然と口を開けた。

それは、確かに、テキトーになるわな。男に対して……。

「おい、俺が言ったなんて彼女に言うなよ？　間違っても言いふらすなよ？」

顔色を変えてオロオロする泰成を尻目に、拓也はなんだか自分の気が遠くなっていく様な気がした。

……んな事、逆立ちしたって言えねーよ……

「ねぇ、お姉ちゃん。洋一さんはいつ帰ってくるの？」

「明後日」

「どこ行ってたの？」
「イラン」
「どれくらい？」
「１０日間。その３日後には、今度は北海道出張だって」
「そっかぁ。お姉ちゃんも、寂しいねぇ」
「別に寂しかないわよ。子供の世話で忙しいもの。でも優奈（ゆな）は段々、寂しがってきているわね」
「だろうねぇ。こんなに出張続きじゃねぇ」

奏（かなで）と湊の姉妹は、表参道のカフェにいた。日曜の午後。奏の２歳の娘は、目の前のケーキと格闘する事に夢中だ。
奏（かなで）はテーブルに肘をつき、湊を横目でジロッと睨んだ。

「今、『結婚しても幸せとは限らないんだな』とかって自分を納得させたでしょ」
「は？　何であたしが自分を納得させる必要があるのよ？」
「だって多田くんに振られたじゃん」
「振られてないわよ」
「嘘だー。絶対振られたね。湊（みなと）のそのテキトーで相手に冷めている所が伝わって、相手に逃げられたんだって私とお母さんは踏んでるんだから」

湊は少し膨れてストローを咥えると、アイスコーヒーを掻き回した。
壮太に、冷めていたんじゃない。
自分をセーブしていたんだ。

誰かにのめり込む事が、とても恐くて。相手にのめり込む事が、恐くて。

「本当に違いますっ。当人たちにしか分からない『しがらみ』ってものがあるんだから、外野が口を挟まないでよ。お姉ちゃんこそ、洋一さんがそんなに出張続きなら、二人目作るのも難しいね」

湊が反撃をすると、奏（かなで）は綺麗な巻き髪を揺らして娘を覗き込み、口を拭いてあげた。

そこに湊が覆いかぶさる様にして、ニヤニヤと笑いながら言う。

「夜とか、寂しいんじゃなぁい？　ダメだよ、浮気なんかしちゃ」

「……」

「既婚者はね、安定と引き換えに、自由恋愛を放棄しなくちゃいけないのよ」

「じゃあ独身娘よ、自由恋愛を謳歌するのだ」

勢いよく顔を上げると、奏（かなで）は綺麗にマスカラを施した瞳を輝かして、湊に顔を近づけた。

「恐がらず、諦めず、さっさと次を捜すのよ。いないの？　身近に湊（みなと）を気に入っている男は？」

「そんなの、いません」

「本当に？　よくみてごっらん、かんがえってごっらん♪」

「とっまとっ、とっまと♪」

「あーあー♪」

突然に姉と姪が歌い出す。童謡？

「……あーあ」

湊は二人を眺め、溜息をついた。

完全に姉のオモチャになっている。だから嫌なんだ。こんな家族に真実なんて、話せる訳無いじゃん。

……壮太がバイだなんて、アイツの名誉にかけて言えないよ。

「ところでさ、湊（みなと）、部屋はどうするの？」

奏（かなで）に言われて、湊はキョトンとした。

「は？」

「は？　って。多田くんと住むつもりで、今住んでいる所は今月中に出る予定だったんでしょ？　今から延長出来るの？」

途端に彼女は、絶句した。

「……わっ……すれてたっ！！」

呑気な気分が一転、顔がスーッと青ざめる。

そんな妹を、姉が覚めた目で見た。

「ばっかだねー。自分の住む所を確保するのは、社会人の基本じゃない。早く探さないと家なき子よ」

いやぁ本当だっあたしってバカだっ！　どうやったらこんな大事な事を忘れられんのよっ！

彼女が頭を抱えた時、ふと、見慣れた顔が目に入った。

瞬間、固まる。

今度は心が、スーッと冷たくなる気がした。

「……どうしたの？」

姉がキョトンと聞く。

湊はハッと我にかえった。

「あ、いや何でも無い」

そう言ってさり気なくアイスコーヒーをすする。姪がケーキをぶちまけるのを観察する。

姉は妹の様子を見ながら、そっと、彼女が凝視していた視線の先を追った。

そこには、奏（かなで）の見慣れた男の背中があった。若い女の子が腕をからめている。

楽しそうだった。

「……」

彼女は無表情でそれを眺め、そして再び、視線を妹に移した。

仕事が収束に向かっていた夕方、急に拓也がやってきて、湊の隣の椅子にドカッと座るとクルッと体ごと向け、片肘を机について聞いてきた。

「ねー、俺、分かんない事があるんだよね」

書類にかぶりつくように仕事を進めていた彼女は不意打ちをくらい、顔を上げると目を瞬(しばたた)かせて、拓也を見る。

「唐突に、何？」

「高松精機。俺今、コンサル担当してるじゃん。それで決算書3期分貰ったんだけど、あそこ、なんであんなに銀行から借り入れが出来てるんだろう？」

「……業績が、伸びたから？」

「……だよねぇ」

言いながら彼は何故か、湊が使っていたボールペンを取ってくるくる回している。そしてケースが色違いの自分のボールペンを取りだすと、湊のそれと自分のそれを、分解して、組み合わせている。

……何してるんだろ？

「あ、そうだ。はい」

今度はいきなり、机の上に缶コーヒーを置かれた。

「……何これ？」

「俺の下心」

「え？」

「藤堂さん、銀行時代、運転資金とかの計算の仕方を習ったんだよね？　俺、そこらへんうろ覚えだから教えてほしい」

あの、うるうるっとしたつぶらな瞳。それだけなら良かったのに、真剣な眼差しときりっとした表情が混ぜ合わさり、

不意打ちを食らった。

「……いいよ」

「よかった。ありがと」

にこっと微笑まれる。可愛い。この子、自分の笑顔の破壊力を知っている。それをワザとあたしに使ってる。

もう、やだ。何よ。

使う相手、間違っているじゃない。

湊は無言で彼の後ろ、部屋の出入り口を指さした。拓也が怪訝な顔をして後ろを振り向く。
そこには舞彩（まあや）が立っていて、拓也が振り向くとほっとした顔を見せた。手を小さく振って、呼んでいる。

「あ、そっか。じゃあね」

拓也は当り前の様に立ち上がると笑顔を見せ、当り前に彼女の元に行った。
湊の手元には、拓也が組み立てた、二本のボールペンのパーツがミックスしたうちの一本が残されていた。
二人で楽しそうに、何かを小さく話している。舞彩の輝く様な笑顔。拓也が優しい瞳で、彼女に何かを囁いた。
そして彼女も何かを囁き、頷くと、湊の方を向いてこちらにやってきた。
拓也はそのまま部屋を出て行き、姿を消してしまう。
湊は慌てて机に向き直ったが、仕事をしようとしても胸がドキドキしていた。

「みなちゃん、あのね、聞いて」

周りに聞こえない様に小さな、でも彼女の明るい声。きゅん、来たよ。
湊は顔を上げ、ぎこちない笑顔を彼女に向けた。

「うん」

「あたしね……吉川くんと、付き合う事になったの！」

知ってるよ。

この間、二人で歩いていたよね、表参道。

それが言えない。

「本当！　凄い、おめでとう！　いつから？」

「この間の金曜日。仕事が終わった後に、思い切って告白したの。もう、すっごい緊張した」

「……この間の金曜日……」

ヨシが、あたしとの待ち合わせに遅刻した日だ。

急な用事、ってそれだったのか。

「給湯室であたし、片付けの食器とかひっくりかえしちゃって。そうしたら吉川くんが通りかかって手伝ってくれたの。すごく優しくって、そしたらあたし、チャンスは今しかないって思ったんだ」

「……わお。で？」

「最初はビックリした様にあたしの事をじっと見ていたの。超かっこよくってドキドキしちゃった！　そのあとにこって笑ってくれて、『じゃ、付き合おっか』って。あー、信じられない、ずっと好きだった、しかもあんな素敵な人と付き合えるなんて」

ほう、と熱っぽい溜息をつく舞彩を、湊は笑顔で見つめていた。
なんてかわいいんだろう、この女の子は。
本当に、本当に、ヨシが好きなんだ。まっすぐに、なんの躊躇いも無く。

「おめでとー！　本当に良かったね！」

湊は椅子から立ち上がると、彼女をギュッと抱きしめた。残っている数人の同僚が、何事だろうと二人を眺める。舞彩はドギマギした様に、目をキョロキョロとさせながらも抱きしめられていた。

湊はそのまま部屋を出る。
そして廊下の壁にもたれかかると、おもむろに携帯を取り出した。

「あ、泰成（たいせい）さん？　次の仕事、ない？」

別人に、ならなくちゃ。

湊は、拓也が組み立てたボールペンを見つめ、それをそっとポケットに戻した。

8（後書き）

じれじれー。

9

泰成（たいせい）の、デリカシーのない言葉が飛んできた。

「なんだよ。ゲイの元婚約者が姿でも現したのか？」

アンニュイな気分が一気にぶっ飛び、現実のコメディな環境に突き戻された。ちょっと！

旅の恥はかき捨てならぬ、一夜の恥はかき捨て、で打ち明けたのがまずかった。その恥があたしを追いかけてくるっ！　この男はっ！

「ゲイじゃなくってバイっ。彼とはそれっきりだし、というより他言したら殺すっ」

と言う事は、彼の命は拓也が握っている事になる。

俺、風前の灯だな…、と泰成は遠い眼をした。

「人を脅して仕事を取るのか？　いい度胸してんなー。モロ好みだぜ。な、俺と付き合わない？」

「し・ご・と。はっ？　何も無いの？　干上がってんの？」

「とーんでもない、大繁盛さ。これこそ左ウチワってやつだぞー？　俺と付き合うと楽しいぞ？」

「切るよっ」

「まあ、待てって」

泰成の横柄な、しかしどこか明るい大声。思わず顔をしかめて、耳から遠ざけた。うるさっ。

「これはどうだ？　ベンチャー企業の社長で、やり手の２８歳。お前と同い年だな、話も合うぞ？」

「２８歳の社長？　なんでそんな奴が泰成（たいせい）さんの所に来るの？　夜遊びしまくってそうじゃん」

「そうだな。彼の会社が教育関連で急伸しているから、妻子持ちの女遊びは体裁が悪いんじゃねぇか？」

「……」

湊は目つきが生ぬるくなった。世の中って、ホントいやだ。子供には明るい未来を。どうかみなさん。

「期間はどのくらい？」

「今回は長いぞ？　一週間だ。向こうがこっちに出張中に、滞在する予定だからな。どうか、出来そうか？」

「……一週間……もっと出来ませんか？」

「はあ？　なんだよ、そんなに現実逃避したいのか？」

「そうじゃなくって……」

彼女は、現実的に今一番頭を痛めている悩みを打ち明けた。

「部屋探しが、上手くいかないんですよ」

「部屋探し？」

「そう、今月中に出て行かなくちゃならないんだけど、新しい場所が見つからなくて……」

「今月中？　なんでそんな中途半端な時期に……ああ、そうか。結婚して出ていくつもりだったんだな。すっかりその気でサッサと契約解除をしていたって訳だ」

「……」

今、エアで思いっきり殴った。殴り足りない。もう一回殴ろう。

湊は拳を握りしめた。ところが電話の向こうでは大声が途切れ、どうやら溜息をついているみたいだ。

彼女は怪訝な顔をした。なんでこの人が溜息をつくの？

「一件、融通がきくぞ？　一昔前のルームシェアみたいな感じになるが、共有するのは玄関と台所とリビングルーム。風呂トイレは別々、部屋は１０畳あったかな？」

台所とリビングが共用？

彼女はぼろい木造アパートもどきを想像してしまった。だけど部屋が１０畳？　風呂トイレ付？　なんだ、それは。

「場所は？　家賃は？」

「……立地も環境もいいし、セキュリティもちゃんとある。家賃は俺の事務所が補助しているから、４万円でいい。ルームメイトに干渉さえしなければ、他は最高だぜ？」

立地も環境も良く大家が用心棒のぼろアパート、ただし１０畳で家賃４万円！　隣の人に関わらなければ……

湊の頭の中では、もくもくと妄想が膨らんでいった。この際、背に腹は代えられないわっ。

「変人なんですか？」

「……うーん、なんつうか、一人好き？　ま、コツさえつかめば快適に過ごせるとは思うけど……」

「押さえます。そこ、取っといて下さい。今すぐでも移ります」

盛り上がった彼女は勝手に日時を決め、「それでは」と言って電話を切ってしまった。

自宅のソファに座っていた泰成は、勢いよく切られた電話を見つめ、目を丸くしていた。

こいつ、仕事の話で電話をかけてきたんじゃないのか？　結局仕事は引き受けるのかよ？　やらないのかよ？

……それより彼女、本当にあの部屋に住むつもりかな？

「……いいのかな？　……ま、いいか」

泰成は肩を竦めると、携帯をソファに放り投げた。それもなんか面白そうだし、ほっとくか。

「見たわよ、先週の日曜、表参道。あの子、新しい彼女なの？」
「え？」
彼女に唐突に言われ、拓也は眼を丸くした。今まさに、彼女の乳房に唇を這わそうとしていたが、顔を上げて、自分の下に組み敷いた裸の女性を見つめる。
日曜？　表参道？
あ、あれか。
「ああ、うん、そう」
「ふーん。可愛いじゃない」
「まあね」
「どうするの？」
会話をしながら再び彼女の胸に唇を寄せていた拓也は、どうするの？　と聞かれ、また動作が止まった。
ゆっくりと、覗う様に、彼女に視線を戻す。

「あなたとの事？」
「……」
「奏さんはどうなの？　俺と別れたい？」
「……」
「手放す気なんて、ホントは無いんでしょ？」
「顔もいいし性格も合うし」
奏はベッドに横たわったまま、天井を見ながらクスッと笑った。
拓也は口角を上げ、すかさず言う。
「セックスもだろ？」
「……そう。最高に物わかりのいい坊や、手放すのは惜しいわ」
奏は満足そうに微笑みながら、胸に下がった彼の顔を両手でそっと包み、自分の顔に引き寄せた。
ベッドの中で、既に二人は裸で抱き合っている。
お互いの鼻が触れる程近くにより、視線を絡ませた。
奏がふっと真顔になった。
「でも私が聞きたいのは、湊の事」
その途端、拓也は眼を見開き、息を止めた。
「……」
「私、あなた達がお互いフリーになったから、そのうち付き合うん

だと思ってた」

奏は真顔を崩さずに、拓也を捉えて言う。
拓也は一瞬、顔を歪めた。そして彼女の脇に両手をつくと体を離し、まるで少し睨みつけるように彼女を見下ろした。

「……あなたとこういう事をしておきながら、妹に手を出せって？俺も流石にそこまで節操無しじゃないよ」

「私のせい？　私に責任求められても困るわ。だって私、夫も娘の幸せも、自分の安定した生活も手放す気がないもの」

「俺だって人の家庭を壊そうとは思ってないよ。面倒臭いのはごめん」

「じゃあ、別に……」

「言ったでしょ、面倒臭いのはごめん」

そういうと彼は身をすっかり起こし、彼女の隣に座った。
肩膝をついて腕を乗せ、無表情で前方を見つめる。
そして何の感情も交えずに言った。

「彼女は、俺が自分の姉の不倫相手だって知ったら、絶対、俺の事許さないよ」

「……不幸ねぇー」

奏（かなで）は拓也の背中に、指を一本ツツ…と落としながら、仰々しく溜息をついて言った。

「私の事、湊（みなと）の身代わりとして抱いているくせに」

すると拓也は振り向き、僅かに唇を噛み締めて言った。

「そっちこそ、俺は旦那の代わりのＳＦのくせに」

お互い、埋められない空間を、埋める為にここにいる。
そしてその空間は、決して埋まる事はない。
こんな行為では。

いいお姉ちゃんになるには、私はまだ若いのよね。もう少しこの子が必要なの。ごめん、湊。

奏（かなで）は拓也を見つめて、心の中で呟いた。

家の玄関を開けようとした拓也は、鍵をさしかかってビクッとなった。
人の気配がする？　つか、鍵が開いている？
中から僅かに人声までする。彼は眼を見開いた。

マジかよマジかよ、まさか俺んちでこんな事が起こるなんて。俺んち何もねーぞ？　ここで鉢合わせなんかしたら、逆切れして殺されるかも。冗談じゃないっ。

拓也が背を向けた瞬間、

「おう、拓也」
「うわあっ！」

逃げながら携帯で１１０番をしようとした拓也は、驚いて電話を取り落とした。
「……」
それを泰成が無言で見下ろす。
こいつ、ビビりだ。

信じられない、と言う様に振り向いた拓也は、一気に安堵の表情を見せた。

「泰兄（たいにい）かよ、驚いたー。急に来ないでよ。強盗かと思ったじゃん」
「強盗の方がよかったかもよ」
「えっ？」
「いや、お前に電話かけてんだけどさ、一向に出ないからよ。しょうがねぇから先に話を進めちまったぜ？」

相変わらずの大声を出しながら、泰成は再び玄関に引っ込んだ。
その後に、拓也がしかめっ面で続く。

「うるさいっ。声大きいよ、近所迷惑だろ、静かにしてよ」
「ヒッキーなくせに遊び歩いてんなよ。どうせ女の所をはしごでもしてんだろ、このスケベ」
「してねーよ」
「いつか刺されっぞ」
「どうしてみんなおんなじ事を言うんだよ……って」

靴を脱いで部屋に上がった拓也は、リビングの入り口で固まった。
そこには、彼と同じように固まっている人がいる。

目の前の光景が理解出来ない拓也は、ゆっくりと彼女を指さすと、呆然と泰成に訪ねた。

「この人、何？」
「……何でこの子がここにいるの？」

荷物や段ボール箱に埋もれている湊が、目を見開いて口を開け、まるでロボットみたいにカクカクとした動きで泰成を見上げた。

泰成はそんな二人にニッコリと笑顔を見せると、両手を広げ、朗らかに宣言した。

「はい、ご挨拶ー。これから宜しくお願いしまーす」

時計の秒針が、耳に痛い。

「……えええーっ！！」

まるで測ったように、二人が同時に叫んだ。絶対、近所に響いている。

「聞いてないっ」
「何だよそれっ」
「だって言ってねぇもん」
「一緒に住めっての？　無理だよっ一応男だよっ？」
「なっ、一応って何だよっ」
「煩い煩い煩い」
「何で最初に言ってくれないのっ！」
「どうしてこういう事になる訳っ？」
「あーもう、黙れチビッ子っ」

泰成は高校の頃、応援団に所属していたらしい。したがって、発声の仕方が根本から違ってる。

その野太い有無を言わさぬ声で、ハンサムな有無を言わさぬ瞳で、湊と拓也を交互に指さして睨みつけた。

「言おうとしたらお前がサッサと決めちまったから！　お前が贅沢な部屋を安い家賃で一人占めしてるから！」

湊と拓也は、絶句。未だに状況を理解出来ていない。どう言う事？　どう言う事？

泰成は腕を組み、知った様な顔をして頷きながら続けた。

「大人ならうまくやれ。藤堂が次を見つけるまでの繋ぎだし、他の社宅は埋まってんだよ、我慢しろや。困った時のお隣さんだろ？　助けあえよ」

……助けあえって、組合じゃあるまいし！　そうよ、だから組合の無い会社は嫌なのよっ！！　って違う違うーっ！

湊は頭を抱えた。どうしよう、もう部屋は引き払って来てしまった、後には引けない。

本来なら下見をして当り前だったんだ。だけど泰成の斡旋だし、隣人の顔色を事前に覗うのは面倒臭いし、もうすぐバイトで一週間部屋を開けるし、そしてすぐに次の住まいに移るだろうし、

で、手を抜いたのが悪かった！　というより、この男を信頼したのが悪かった！

よりにもよって、彼と住むだなんて！　うきゃあぁぁぁっ！

「いやなら追い出すぜ？」

泰成の、凄味の入った睨み。

「……」

嘘でしょ、俺、呪われてる？

拓也は横目で湊を見て、スーッと青ざめていった。

俺、人でなしになるかも。いやもう、充分その自覚あんだけど。

嫌なんだよ、他人にのめり込むのは。もう、あの時みたいに再起不能に陥りたくない。

なのにこれは。

部屋、捜さなくちゃ……。

二人は同時に、心の中で呟いた。

9（後書き）

第一部、終了です。
さあ、人でなしの拓也くんと貞操の薄い湊ちゃん、お互いにどう、決着をつけるのでしょうか？
そして姉はどこまで割り込んでくるか？
舞彩ちゃんはどう出るか？
スケベなオジサンはどこまでかき回すのか？

次部より新キャラ登場で、さらにややこしくなります（笑）少しお休みを頂きます。

このお話が、皆さまのお暇つぶしになっておりますように。

戸理　葵

1

二度寝をした。そんな記憶はある。だってそれくらい疲れていた。

「……げ、もうこんな時間」

湊（みなと）は呟いた。携帯に点滅している時間は、相当、やばい。

ベッドから飛び起きると、その勢いで転んでしまった。

「いったぁい！　うわ、信じらんないっ」

床には、片付けが間に合わずに放り投げられた段ボール箱が転がっている。どうせすぐにまた引越すのだから、と思うと中々箱を開ける気にもなれない。それらにつまづいて、足を強く打った。

「顔洗って、えっとどこだどこだ」

新居だからイマイチ勝手も掴めない。

それでも１０分で支度を整え、自分の部屋を出た。少しの期待を込めて。

もちろん、キッチンには誰もいなかったし、何も無かった。

何も無かった、わけではない。非常に雑然としているキッチンは、以前の彼の一人暮らしの雰囲気をそのまま引きずっていた。湊が新しく来た事を何も気にしていない、むしろ無視しているかのように、彼の私物が彼の部屋としてカスタマズされて、置かれているだけ。

てかあの子、あたしに一言も声をかけずに行っちゃったのね。

「……わかっちゃいるけど、信じらんない」

そんなにあたしと暮らしたくなかった、て事？　たかがルームシェアじゃない。部屋もお風呂もトイレも別々だし、何をそんなにピリピリしてるのよ。

と、最初は自分も飛びあがって大騒ぎした事など棚に上げて、湊は心の中で文句を言った。

それほど親しくは無かったとは言え元は友人なんだし、今では同期なんだし、ちょっとは楽しく愛想よくしてくれたっていいじゃない。以前の方がよっぽど仲良かったわよ、私達。あの付き合いは全て、上辺だけって事だったの？　まあ、あのスカした秘密主義者なら分からないでもないけど。

キッチンの流しを見ると、洗った形跡も無いことから多分、朝食を食べずに出たのだろう。ひょっとしたら朝ご飯を食べる習慣が無いのかもしれない。

湊は少し考えた。

どうせすぐに引越すのなら。

いい嫌がらせを、考えついたかもしれない。

同期兼友人、というスタンスで。うん、そうよ。それなら、許されるわよ。

つか、許して貰おうじゃないの。うひゃひゃひゃ、これはいいっ。

彼女はクスッと笑った後、慌てて部屋を飛び出した。

「おはようございます」

爽やかな朝、湊はいつも通り爽やかに出勤をした。当然、拓也は既に席についていて、眉をひそめながら難しい顔つきで仕事をしている。普段の彼の可愛い表情は何処にもない。彼女はそんな彼をチラ、と見ると、手前の自分の席についた。

軽く溜息をつき、肩を回す。
それを課長が目ざとく見つけた。

「どうしたの？　疲れが溜まっている？」
「あ、いいえ、そんな事ありません。ごめんなさい」
「いつも仕事が早くて、定時にしっかり終業出来る藤堂さんでも、やっぱり肩が凝るか。何でも余裕でこなしている様に見えるけどね」

面白そうにクスクスと笑う。
湊もそれに合わせてニッコリ微笑んだ。

違うんですよ、課長。
昨日の夜まで相手をしていたお客が、なんていうか、最悪だったんです。

湊は連続5晩を共にした、あの男の顔を思い出した。
顔は良かったのかもしれない。思いあがった、勘違いした、似合

わない高級品を身につけた、自己完結をしていたあの男。
まだ２０代なのに今時髪を七三に分けて、朗々とトチ狂った様に喋りつづけていた。

『まずね、高学歴の人間が頭がいいとか思慮深いとか、物事を見通せるとか社会で役立つ人間だとか直結させる事は間違いだ。そこはまず脇に置いといて、どうやったら高レベルの大学に入れるか。これだけを考えるのであれば、それは幼児教育に答えがあると言っても過言ではないんだ。幼児期にどれだけ脳を発展させて、その後の暗記能力とパターン化された問題の応用に対応できるか、にかかっている。ここをクリアできるのであれば、高い授業料を払ってエスカレーター式の付属小学校に入れる必要はどこにもない』

唖然、とした。
この人が喋っている言葉、日本語？

『そもそも小学校受験と言う物は、母親が子供と一体になって取り組む物でつまりは母親の力にかかっていると言っても過言ではない。そしてその母親は自分がかけたエネルギーの見返りを求めるべく、彼らの学校生活に強く関わろうとする。つまり子供は自立の機会を失う訳だ。これが普通に高校受験、大学受験を経験した場合、自分の力で合格を目指す訳であって……』

……頼む。お願いだから、黙って？　一回黙って？　出来る事なら、ここから消えて？
初めて思った。この人、なんでここにいるの？　つか、なんの癒

しを求めている??

目を見開く湊の前で、教育関連のベンチャー社長は熱弁を振るい続けた。地方の平均的サラリーマン家庭から、東大理二を一発合格。井の中の蛙の筈が、海も案外狭かったってヤツ？　だけどその海、舐めてんじゃないわよってか？　ああ、それを言えないサービス業の辛さ。あり得ない、こんな奴と一週間も過ごせって？　嘘でしょ？

彼女は瞬時に考えた。こんな人が、なんでここに来たんだろう？お山の殿様をしたいなら、もう充分自分の会社でしてるじゃない？

資料によれば、確か奥さんは会社で雇った女の子だった筈。普通の短大を出て、今は普通に主婦をして、普通に子育てをしている筈。いやこんな旦那がいたら普通の家庭にはならないでしょう、って普通って何？

そこで湊は閃いた。

……ひょっとしてこの人って……

『バーカ』

湊が言うと、彼は目を丸くした。

『何だって？』

『バーカ。バーカバーカ。あなたの話、ちっとも面白くない。だから何、ってカンジ』

直感を信じよう。これに、かけてみよう。一か八かだわ。

……正直、これは本音ですがね。バカ殿め。
呆気にとられた彼は、次に怒りを滲ませて言った。

『そう言う事を商売女が言ってもいいのか？　どういう教育を受けているんだ？』
『あたしはあたしの言いたいように喋るわよ。嫌なら帰れば？　どうぞさようなら』
『はっ。これだから低レベルの教育しか受けていない連中はダメなんだ。先を見通せない。社会の勝ち組になれないから、ひがんでばかりだ。一生底辺を這いつくばるしかないんだ』

あんたの教育を疑うわよっ一回殴らせろっ！
湊は無表情の下で、自分の怒りを押し鎮めた。
こういうコ秀才には、なにを言っても理屈で跳ね返される。
そして厄介な事に、その理屈はヘ理屈なりに一見筋が通っている様に見えるから、つまりはやり合うと堂々巡りになってしまう。

そういう男に、周りは従って来たに違いない。
一方この男は、商売とは言え、賢い筈の自分が周りの顔色と機嫌を覗いながら金を稼ぐ、という事に嫌気がさしてきたのだろう。だからここで、思いっきり自分の理屈をぶちまけている。

つまりこの二つを足し合わせたあたしの答えは……

『あなた、そそられない』

湊は、見下すような目つきで相手を眺めた。

『三角関数だか微積だか論語だかママとのお受験だか知らないけれど、男してのあなたはちっともそそられない。目の前の男は、女のあたしに、一体何をしてくれるの？　それしか興味がないんだけど』

彼の求める癒しは、男と女の関係になる事。人間的上下関係ではなく。

その為には、相手と同じ土俵には立たずに、けれども相手に舐められてはダメだ。それとなく、出来る女だと思わせないと。

あーあ、男の人って嫌ね、人付き合いをヒエラルキーでしか見れない傾向があるんだから。

湊は気付かれない様に、生唾を飲み込んだ。

セックスはオプション。体を使うかは自分次第。

あたし、どこまで切りぬけられる？

「……で、とりあえず五日間を切りぬけましたー……」

湊の報告に、電話の向こうで泰成は感心した様な声を上げた。

『すげぇな、お前。あんなややこしそうな奴をよくあしらえたよな』

「あんなややこしそうな奴って……それをよこしたのはあなたでしょ？」

見えない相手にキレそうになる。だってそれぐらいしんどかったんだってば、今回は！

何かを勘づいた彼の妻が電話を寄越してこなければ、あと二晩は一緒だった。そう思うとぞっとする！

『なんか普通の女じゃ満足出来無さそうな、難しーい感じがしたんだよ。俺をそこらへんの一般人と同じにするなよ、中身が違うんだぜ、みたいなさ。ああいう奴ってちょっとSMが入ってたりするんだよな。どうだった？　Sだったか？　Mだったか？』

なっ……し、信じられないこの男っ！

「腐ってる、このエロオヤジっ！　早くバイト代よこせっ！」

つい会社にいると言う事を忘れて、携帯に向かって大声を出した。そこはいつもの休憩室。

ブチっと電話を切るのと同時に、舞彩（まあや）がキョトンとした表情で近づいてきた。

「バイト代？　みなちゃん、バイトやってるの？」

「あ、舞彩（まあや）っ。いたんだっ」

「うん、ごめんね、聞いていた訳じゃないんだけど……」

困ったように口がへの字になる。その顔を見て湊は焦った。なぜなら従業員は、他所でのバイトは禁止だから。

「バイトっていっても、ただの家業手伝いみたいなものよ、うん、親戚の、ね。それより舞彩、ヨシとのお付き合い、順調？」

焦って話題転換をした。した後、この話題はあまり好きではないな、と思ってしまった。

「うん。この間の日曜日、江の島に行ってきたよ」

「江の島……若いなぁ」

熱い太陽。焼ける素肌。駄目だあたし、発熱しそう。日焼けに体がついて行けなくて。

「何言ってるのー？　みなちゃんだって彼氏と……」

明るく笑った舞彩は急に、ハッとした顔をした。

「……ごめん」

「いいよ、気にしないでよ。別れるって言っても円満だし、困った事はなにもないのよ、本当に」

「……でも最近のみなちゃん、ミステリアスだからなぁ」

何故なのか、少し不満げに口を尖らせて彼女が言う。湊はオウム返しをした。

「……みすてりあす？」

「そう。なんか不思議で、捉え所がなくて、ドキドキしちゃう」

そう言った彼女は僅かに顔を赤くして、はにかんだ。

「ちょっと吉川くんと似てるの」

思いもかけない言葉に、息がつまり、心臓が跳ねあがった。そして何故心臓が跳ねあがったのか、自分でも分からない。このドキドキは、何が理由なのか。

「……えっ？」

「なんか私に、隠してる事、なあい？」

これには、先ほどとは種類の違う、だけど比べ物にならないくらい強烈な動悸が襲ってきた。

かかかかか、隠している、事？

「……なあい……と、思う……」

な、なに、この返事の仕方は。はい、隠していますよ、って言っている様なものじゃない。
隠していますよ、私、あなたの彼氏と住んでいるんです。いえいえ今までは訳ありバイトで家を開けていましたがね、今朝から寝食を共にしているんですよ、ええ。

「ふーん、そっかぁ。いいなぁ、吉川くんと似ていて」
「……似てる？　どこが？　まさか？」
「吉川くんも隠し事しているのかなぁ。教えてくれないかなぁ。でもまだ、付き合いだしたばっかりだもんね」

……隠し事……してるでしょう、間違い無く。
湊はゴクっと生唾を飲み込み、冷や汗がだらだらと垂れていくのを感じていた。
ああ、マズイマズイ、若くて初々しいカップルを邪魔しない為にも、早くあの部屋は出なくちゃいけないわ。あたし、頑張れっ。

「あ、そうだ。これ、社内旅行のパンフ。今週末、覚えておいてね」
舞彩は明るく笑って、湊にプリント冊子を渡した。

「これが私達の、初めての旅行になるんだー。他にも人はいるけどね。うふっ楽しみだなぁ」

うふっ。あたしも言ってみたい。かわいく。うふっ。

湊は可愛く無邪気に笑う舞彩を、羨ましく眺めながら思った。

似合わないな。自分で寒気がする。

何故だか、拓也が冷めた目で『はいかわいいー』とバカにしている姿が、思い浮かんだ。

2

二人でちょっとお洒落なダイニングバーに入っていた。料理の味は素晴らしく、一品の量は少ないけど品数が多くて値段も手ごろ。お酒の種類も豊富で、女性受けする様な綺麗で口当たりの良いものばかりではない。ゆっくりとがっつりと、豊かな風味を味わいたい通の男性にも評判がいい。

でも、なんでこの人はこんなお店を知ってるのだろう？

舞彩（まあや）は隣に座っている拓也をチラ、と横目で覗った。彼は仕事中と同じ表情、僅かに眉根を寄せてスマホを眺めている。多分、仕事の資料を見ているんだ。

吉川くんって、そんなに豪快に食べたり飲んだりする方じゃないのに。そんな彼がこういう食通のお洒落なお店を知っているっていうのは、多分、女性を連れてくるデート用のお気に入り店なんだ。

胸が、小さくズキっと痛む。

さっきから彼は、顔を上げてくれない。こっちを見てくれない。なのにその横顔は、狂おしいくらいにカッコよくて見とれてしまう。カッコよすぎて、胸に刺さって、苦しい。

付き合い始めても、彼は特段態度を変える事が無かった。社内でも外でも。それが舞彩を不安な気持ちにさせた。

それでもね、私と話す時はすごく楽しそうだから。私の目をじっと見てくれるし。声を上げて笑ってくれるし、楽しそうに喋ってくれるし、優しく見つめてくれるの。

なのに、どうしてこんなに切ないんだろう。

側にいるのに、彼女なのに、どうしてこんなに苦しくって、泣き

たくなって、不安なんだろう。

多分、私が彼の事を好きすぎるからだわ。

大好き、大好き、大好き。世界で一番、大好き。
あなたが手に入るなら、もう他には何も要らない。あなたが私を側に置いてくれるなら、私、どんなことでも耐えてみせる。
あなたを繋ぎとめる為なら、私、どんな事でもしてみせる。

だから、お願いだから、顔を上げて？　こっちを見て？
そして私に微笑んで？
お願い。ほら。

「ん？」

不意に拓也が顔を上げた。丸っこい眼で舞彩を見る。舞彩は驚いて、ドキッとした。

「あ、ごめん、ちょっと飛んじゃった。ごめんね。これしまっとく」

彼は微笑みながら携帯をポケットに滑らせる。
舞彩は嬉しくなった。

「ううん。最近仕事が忙しそうだね」
「まあね。コンサルの仕事を一件丸々任せて貰えたんだけど、初めてだしさ。どうも要領がつかめなくて」
「吉川くん、要領良さそうだもんね」

「うん、俺、器用なの」

そう言いながら彼は笑う。目元が優しく細められて、今は自分だけを見つめてくれていて、彼女は泣きたくなるくらい嬉しくなる。

なんか飲む？　と言いながら、彼は楽しそうにメニューを広げ始めた。

舞彩はメニューを覗き込む為に、そっと彼の肩に頬を寄せた。あ、吉川くんの匂いがする。大好き。

「今度の社内旅行の温泉、楽しみだねぇ」

「そうだね。久しぶりにゆっくりしたいなぁ。温泉の中で浮かんで、上がったらビールでもかっくらって、みんなでバカ騒ぎやった後縁側でボーっとしたい」

「温泉に縁側なんて、あるの？」

「なかったっけ、あそこ？」

「そんな高級なお部屋は、室長だけよ」

「そっかー。くー、じゃ、室長のとこに押しかけようか」

「そういう事が出来るのは吉川くんだけよ。吉川くんって、目上の人達ともすごく仲いいんだもん」

「そう？　だって室長も、結構腹の出たタダのおっさんよ？」

「わーっ。言っちゃったーっ。そーゆー事言えるのが吉川くんなんだよぉ」

「ひでぇな、みんな陰で言ってるよ」

二人で声を上げて笑いあう。

心の中で、舞彩は思った。

私達、まだ軽いキスしかしていない。今日は平日だし明日も仕事だから、きっとこのままお開きよね。

いつかな、次のステップに進めるのは。いつ頃彼は……私に、手を出してくれるのかな？

私、色気が足りないのかな？　彼の豊富な女性経験からすると、私ってまだまだなのかしら？

上目遣いで彼を見る。

そんな彼女に拓也は軽く視線を移しニコッとすると、目の前の店員に注文を始めた。

今度の社内旅行。それに賭けてみよう。

それまでに色々と研究をして、きっと彼を誘ってみせる。

「ほい、バイト代」

「どもどもどもー」

湊（みなと）は満面の笑みと共に、ちょっぴり卑屈な姿勢でそれを受け取った。やっぱ現ナマって嬉しいよね。月給の足元にも及ばない金額だけど、無機質な銀行振り込みよりずっと生々しくってギラギラしていて、欲の匂いがする。

……って、あれ？

「なんか多くない？　一晩5万じゃなかった？」

「もとが1週間の予定だったから申し訳ないって相手が言ってた。

受け取れや」
「えー…？　…ま、いいか」
精神的にかなり、疲れたもんね。それに今はとにかくお金が必要。早くあの部屋、出なくちゃ。
ほくほくと現金を懐にしまう湊を、泰成（たいせい）は腕を組んでニヤニヤと笑いながら見ていた。

「早速金貯める準備か？　なんなら俺んとこに来るか？　部屋、余ってるぜ？」
「泰成さんが屍となって発見されるまで、決してあなたの部屋は訪れません」
「無理しちゃって。知らない仲でもないだろ？　俺の事嫌いじゃなきゃあんな事しないよな？　だろ？」

ハンサムな顔で迫られる。長身で体つきもがっしりとしているから、威圧感まである。
湊は目を吊り上げて、泰成を睨みつけた。さっと携帯を取り出す。

「ヨシにチクる、今から」
「嘘嘘ごめんっ冗談冗談っ冗談だからやめてっ」
「うるさいっ」

泰成の大声に湊は耳を塞いだ。声が大きいのよ、このオヤジはっ！　しかも見た目に似合わない動揺の仕方をするなっ。あんたが体

全体でうろたえると、部屋が揺れるのよっ！

湊と泰成が一晩限りの関係を持ったと聞いた時、拓也は呆然とした。そしてその後、どこかのネジが飛んだかのようにキレたのを湊は目撃した。騒ぐでも暴れるでもなかったけど、目が、ヤバかったのだ。

そしてそれを見た泰成は、顔をすーっと青ざめて後ずさった。

それらを確認した湊は、早々にその場を後にしたのだ。

きっと、あれだ。泰成さんは名だたる狩人、女殺しなホストでハンパなかったに違いない。

そんな彼と数年間を共有しているヨシとしては、身内が（友人だし同僚だしで、身内って事でいいよね？）泰成さんの餌食になる事が、堪らなく嫌であるに違いない。うん、きっとそうだわ。

だからあたし、ヨシの火の粉が飛んでくる前に、逃げよう。

以来、泰成の弱点は拓也に違いない、と踏んでいる湊だった。

「それにしてもあの客、藤堂にご執心だったぜ？　すぐに次の申し込みがあった。なあ、5日も一緒にいてヤった訳じゃないんだろ？　どういう手を使ったんだよ？」

「どう言う手って…別に。元ホストがそれを聞く？　あなただってお客みんなと寝ていた訳じゃないんでしょ？」

「まあそれはそうだけど……。お前、あの客はどういうタイプだと思う？」

タイプ、と聞かれて、湊はしばし考え込んだ。

「うーん……自分に自信がありすぎるけど、同時にコンプレックスも激しい。表面的には爽やかだけど、一旦裏に回るとかなりのS。でもそれは劣等感の裏返しでもあるから、そこをつつくと、相手に自分を認めて貰うまで付きまとう。特にそれが女だと」

それを聞いた泰成はポカン、とした。

「……すげぇ。それでその劣等感、つついたんだ」

「てかそれで五日間引っ張った。なんか向こうは、疑似プラトニック恋愛をしている気分にでもなったんじゃないかしら？　あたしの気を引こうとして、あたしに認めて貰おうと結構頑張ってたよ」

「お前……素質あるんじゃねぇか？」

「だからこのバイトやってるんじゃない」

もちろん、五日間も一緒にいるんだから、全く何も無かった訳ではない。とりあえず下着の中に手を入れられる寸前で押し留めたが、下着の上からはくまなく触られた。それは思ったよりも気持ちの悪い物だったし、思ったよりも冷静でいられた。こっちももう大人だし、複数の男性と一通りの経験はあるし、今は彼氏もいないし。こんなのもゲームの一環、という事で。それにしても男って、つくづくしょうがないなぁ。

泰成が事務所の居間に置いてあるパソコンを覗き込みながら言った。

「そんな小悪魔ちゃんに早速別の仕事のオファーがあるぞ。代議士さんとパーティーだ」
「……代議士？　って、あの渡辺って人？　お忍びなんじゃ無かったの？　世間と家族にバレずに息抜きをしたかったんじゃないの？　それが何でパーティ？」
「違うよ、あいつじゃない。あいつの紹介で、別の政治家。３２歳独身、かなりイケてるらしいぞ？　女性同伴で出席したいらしいんだが、知り合いの女を連れていくと後々もめごとが起こりそうで、嫌なんだと。知識と常識があって、空気が読める美人な大人の女性をご所望だ」

……知り合いの女を連れていくと、後々もめごとが起こりそう？　なんかまた、しがらみの多そうな奴だなー。

「……と人を持ちあげておいて。どうせもう、引き受けたんでしょ？」
「まあな。まだ先の話だけど、準備しておけよ。パーティーマナーとか、話のネタになる様な話題とか。そこそこ業界の事と時事問題に詳しく、あとは女としての色気を醸し出せるような話題」

なにそれ。美味しいの？

「はいはーい」

湊はかったるく返事をすると、帰り支度を始めた。
泰成が意外そうに顔を上げる。

「なんだもう帰るのか？　まだ早いし、久しぶりに誘おうかと思ったのに」
「……」
「食事に、だよ」

ジロッと睨んでやると、慌てて言葉を付け足す。
そんな彼を尻目に、彼女は扉に手をかけた。

「今日はいい。なんかもう疲れた。家でのんびり一人になりたい」

そう言ってあっさりと部屋を出ていく。
そこに残された泰成は、ポツン、と独り言を言った。

「……一人ったって、あいつがいるだろうが」

あいつら、部屋ではお互い何をやってるんだろうか？　元々仲は良さそうだったけど、うーん、なんかお互いけん制し合ってるんだよな。なんでだろ？　適当にやりゃいいのに。

泰成はソファに座ると、テーブルの上のグラスを手に取った。周りは結露していて、水が滴ってくる。中身は氷も溶け切って薄くなったウィスキーが少量。それに口をつけて、半分ほど飲んだ。手から肘にかけて、水が伝って落ちてくる。

拓也（あいつ）が誰かに執着をしているあの目、あれは出会った時の目と同じだ。あの時のあいつは、激しく何かに執着していた。そしてそんな自分のバランスをとる為に、不特定多数の人間と差し障りの無い会話を楽しむあの業界に入ってきたのだと思う。

それが一年半程前から、変わった。あいつの瞳に漂う警戒感と適当感…投げやり感が急激に色濃くなった。一方で、自分の周りに高い壁を作って、人懐っこい笑顔を武器に他人を中に寄せ付けない。

ありゃ、そうとうでっかい失恋でもしたんじゃねぇかな。

泰成はウィスキーをテーブルに戻しながら、小さく笑った。

若いって、いいねぇ。傷つくのも怯えるのも、警戒するのも没頭するのも、力いっぱい。俺もそんな想い、もう一度してみてぇなぁ。

「で、あいつは今、誰に執着してんだ？」

答えが分かっていそうな問いを口に出してみて、泰成は肩を震わせて笑ってしまった。

3

「……」

拓也はリビングの入り口で立ち往生した。

え？　これって俺、どうすればいいの？

そこにはローテーブルの上にいくつかの空（から）の缶チューハイを転がし、突っ伏して寝ている湊（みなと）がいた。Ｔシャツに短パン姿である所を見ると、会社から帰ってきて着替えた事は確かだ。つまり本人が自覚の下、気合を入れての一人呑みだったらしい。

「……」

ここで目を覚まされたら、なんかヤバい気がする。

スッゲー絡まれる気がする……。

拓也は湊に触らない様に触れない様に、息を殺して、壁伝いにカニ歩きをして横切った。そしてそのまま自分の部屋に向かう。振り返った時、彼女はまだ、すーすーと平和に寝入っていた。思わず顔をしかめてしまう。

自分もＴシャツと短パンに着替え、手も洗い、じゃあ漫画でも読むかな、とベッドに腰かけた。手頃な読みかけの一冊を取り出しパラパラとめくる。だけど、頭に入って来ない。

……当り前か。こんな状況で、そりゃ無理だろ。

そう…っと自室の扉を開けた。中から顔を突き出し、リビングの様子を覗う。彼女は先ほどと寸分違わぬ姿勢で眠り続けている。

はあ、と溜息が出た。

もう、いい歳した女が何なんだよ。あの人、何回俺の側で酔い潰れれば気が済むの？

時計は２２時を回っている。ここで俺が無視したら、それっていくらなんでも大人げ無いよね。人としてあんまりだよね？　社会人としてどうよ、って話よ。

結局、拓也は渋々と彼女に近づき、屈んで、その肩を揺さぶった。

「ちょっと。…ちょっとオネーサン。起きてよ。ここで寝ないでよ」

「……」

「おいっ。いーかげんにしろよ、この酔っ払い。頭叩くぞ？　おいってば」

「……」

「…んだよ、めんどくせーなー……」

改めて盛大な溜息をつくと後ろに回り、彼女の両脇に手を入れた。しょうがねぇから部屋に運んでやる。だけど泥酔したこんなに重い人間を運ぶのはごめんだから、このままズルズルと引きずってやる。

その時、湊の手が拓也の腕を掴み、グイっと前に引っ張った。

「うわっ！」

拓也がバランスを崩し、彼女の背中に覆いかぶさるようにつんのめる。慌てて脇から机に手を付き、彼女を後ろから抱く様な形で突っ張った。

「わーい、引っかかったーっ！」

えらく陽気に湊が振り返った。テーブルから顔を上げて身をよじって拓也を見上げる。顔がもろにぶつかりそうになった。拓也は慌てて体を起こした。

「え？　は？　何だよ、騙したのか？」

「騙してないよーん。気持ちよくここで飲んでいましたよー、一人で」

接近し過ぎた顔の事など全く気にしていない様子で、湊はへらへらと笑う。ビールの空き缶をこれ見よがしに振って見せられたので、拓也はカチン、ときた。

「それで人が帰ってきたら寝たフリしてたのかよ？　なんなのあんたは！　性格悪(わり)ぃなっ」

「あなたほどじゃぁ、ありませーん」

湊はご機嫌な笑顔で拓也の腕を再びグッと引っ張り、自分に近づけた。

拓也はドキッとするよりもギクッとなる。俺、何をされるんだ?!
湊の目は、気のせいでは無く、座っていた。

「吉川拓也っ。君はどうしてあたしを避けるっ?」
「なっ、避けてねーよ、会わなかっただけだろ?」
「いーや、避けてたね。大体何であの冷蔵庫には物が何にも入っていないのよっ」

いきなり話題を遠くに吹っ飛ばされる。拓也は目が点になった。

「は?」
「あんたは日頃一体、何を食べて生きているんだね? 霞かい? 仙人なのかい?」
「はぁ? やっぱ湊(みなと)酔ってる。自分の部屋行って寝ろよ……って、うわ、お前! 俺のビール全部飲んでんじゃねーかよっ」
「全部って、たった三本じゃんかよう。冷蔵庫に缶ビールがたった三本。これって何ぃ?」
「何って、俺のアルコールだよっ」
「あーうるさいっ。たっぷり買ってやったから文句言うなっ! ほら、あれだけ揃えりゃ充分でしょ? 文句あるか!」

そういうと、まるで少年探偵が犯人を特定した時の様に、ビシッと真っ直ぐ指を指した。
冷蔵庫を。
拓也はついて行けずに、眉根を寄せて目を細める。
湊は「見ろ、見ろ」と言って、酔っ払いの有無を言わさぬ瞳で拓

也を冷蔵庫に促した。
渋々、恐る恐る、湊を振り返りつつもそれを開けてみると、中には食料品がびっしり、飲み物もびっしり、そしてアルコールもたんまり、入っていた。調味料もやたらとある。

冷蔵庫を開けたまま拓也はしばらく突っ立ってしまい、呆れた様に湊を振り返った。

「……お前、これ、全部お前が食うの？」
「んふふー。これからは私が、朝ご飯を作ります」
「……何？」
「わ・た・し・が！　朝のご飯を作るの。あれはその材料。よろしくね？」
「……よろしくね、って……」

絶句。さっきからコイツ、一人で盛り上がってる。ウィンクなんかしてる。
なにがどうしちゃったわけ？
口を閉じて、息を整えると、拓也は気を取り直して言った。

「好きにすれば？　でもちゃんと食べきってよね」
「食べきってよね、って、あなたも食べるのよ？　ちゃんとね」
「……えーっ！！」

今度こそ度肝を抜かれた。評判の『つぶらな瞳』が大きく見開かれる。

そんな拓也を見て、湊は本気で笑い転げた。マジウケルっ。

「あははー。ガチで固まってるー」

「ちょっと待てよ、なんで湊がそんな事すんだよ。いらねーよ、そんなん。必要無いって」

「必要ありますぅ。どっちみち、どこかで朝ご飯を食べるならどこで食べたって同じじゃない。まさか朝からデートって訳でもないでしょ？　友達同士で住んでてさ、いくらお互い干渉し合わないって言ったって、職場も同じなのにお互いまるっきり無視。これっておかしくない？　不自然だよ」

「知るかよ。不自然かどうかは、当人達の問題だろ？」

「そうよ。それであたしが不自然って言ったら、それは不自然なの！」

ビシっ！　と、今度は拓也が指を指された。つまり拓也が不自然ならしい。それは決定ならしい。

しばらく固まった彼は、ガク…と肩を落とした。

「……俺、朝は喰えねーのよ……」

「お腹減らないの？」

「……うん。１０時過ぎないと」

「ほう。ほうほう。了解いたしました。朝は低血圧とね？　ふむふむ」

湊は勿体ぶって頷くと、何かをメモする仕草をする。

そんな彼女を拓也は冷蔵庫の前で、疲れ切った目で眺めた。

「……」

「いいのいいの。一人分用意するのも二人分用意するのも同じでしょ？　いきなり押しかけてきて悪いと思ってるし、舞彩（まあや）にバレないうちに必ず、この部屋を出るから。ね？　それまでの間、受け取ってよ朝食ぐらい」

そうやって素直に笑顔を見せられると、結局太刀打ちが出来ない。

拓也はすっかり諦めて、溜息混じりに言った。

「……まあ、あんたが俺より早く起きれるんなら……」

「ふふ。交渉成立ー。それじゃしばらくの間、どうぞよろしくねー。ほら座って」

缶チューハイを開けながら「来い来い、こっち来て」と隣を促す。

拓也は重い足取りで、少し間を開けて近くに座った。

「……俺、外で飲んできたから、いい」

「舞彩と？　それはよかったねー。まあまあそう言わず」

そう言って湊は、開けたチューハイを拓也に渡した。

拓也は生ぬるい目つきで彼女を見やる。

「……この酔っ払い。随分ご機嫌じゃない。湊がそんなに立て続けに酔うなんて珍しいね」

「そ？　流石に仕事のかけもちは疲れちゃってさー」

あっけらかんと言う彼女とは対照的に、拓也は缶を口に運ぼうとした手が、一瞬止まった。
湊は立ち上がると、「おつまみでも作るねー。梅キュウはどう？結構いけるよ？」と言いながらキッチンに向かう。

「……嫌なら、やめれば？」

アルコールを口につけながら、拓也は目だけで観察するように彼女の後姿を覗った。
ところが彼女はたいして気にもしていない様子で

「うーん、今は大丈夫。実入りもいいし、確かに別人になれちゃうし？　こっちも大人だし、危ない人も今んとこいないし、うん」
「……」

とか言っている。人の気も知らないで。

お互い合意の上での、大人の駆け引き。そんな世界に、身覚えがある。
やっぱ現実逃避しちゃってんじゃないの？　そう言おうと思って、そのまま飲み込んだ。湊を見つめながら缶チューハイを少し飲む。

２９歳目前の女が、彼氏がゲイだっつって結婚フラれたら、そりゃ現実逃避もするわな。

「それよりそっちはどうよ？　舞彩（まあや）とは順調？　あの子可愛いでしょ？」

くくく、と笑いながら、彼女は早くも出来上がった一品を持ってきた。キュウリを梅干しと塩とごま油で和（あ）えたもの。

「何、その近所のオバサンみたいな話題の振り方。……まあね。可愛いですよ？　知っているでしょうが」

言いながら拓也は一口つまんだ。あ、ウマい。

湊は頬に両手を添え嬉々として叫んだ。

「ひゃーっのろけてるーっ！」

「あんたが言わせたんだろうがっ」

「ね、ね、舞彩のどんな所が可愛いの？」

「絡むなよ、酔っ払い」

「ねぇってばぁ。教えてよー、どんな所ぉ？　あの子ってばヨシにべた惚れよぉ？　この色男っ」

「ちょっと勘弁してよ」

「どこが気に入っているんだぁ？」

遠慮なくグイグイ迫ってくる。絡まれる。覗きこまれる。

もうやだ、完璧にオバサン化しているよ、この人。頼むから俺を解放して。

「……俺の事を、好きって言ってくれる所、かな？」

流石に恥ずかしいので、あさっての方向を見ながらボソッと言う。
その後、チューハイを大きく飲むと勢いよくキュウリを口に放り込んだ。

「……へ？」

ぼりぼり、とキュウリを咀嚼していると横から間抜けな声が聞こえる。
見ると、声の通り間抜けな顔をして湊がこちらを見ていた。

「へ？　って何さ？　ちょっと口閉じて。よだれ垂れそう」
「……ヨシが舞彩と付き合う理由って……舞彩が、ヨシの事を好きだから？」

湊が、驚いたように聞き返す。
それに今度は拓也が驚いた。

「他に何があるの？」
「ヨシは、自分の事を好きだと言ってくれる子と、付き合うの？」

繰り返される質問に拓也は耳を疑った。
この人、何を驚いてるんだ？

「はあ？　すいません、俺、突然日本語に不自由しちゃったみたい。確認してもいいっすか？」

拓也は、自分を凝視している涼やかな眼差しを覗き込んだ。
あ、唇、綺麗だな。

「俺の事が好きな子と付き合う。当り前でしょ？　決まってんじゃない」
「自分の気持ちはっ？」

かぶせるように言われ、キョトンとした。

「へ？」
「あんた自身の気持ちはどうなの？　自分からは好きにならないの？　どうしても自分の物にしたい、とかいう気持ちは湧いてこないの？」

「……」

胸を、ナイフで突かれた様な気がした。
思いっきり、深く。

「今はいなくても、例えば今までに、とか。そーゆー恋愛はしてこなかったの？」
「……」

邪気の無い表情で、涼やかな瞳で綺麗な唇で、彼女を言葉を続ける。

一瞬拓也は、目の前の彼女を滅茶苦茶にしてやりたい衝動に駆られた。

あんたが、それを言うか。

失った恋の大きさを思い出して、その痛みと悲しみと憤りを思い出して、それらの全てを目の前の女に刻みつけてやりたくて、グッと唇を噛んだ。

俯いて、押し黙る。

「そんな黙んないでよー。ま、人には色んなタイプがあるからさー。男なんてそんなものかもねー。自分の側にいて可愛く笑ってくれる女の子が、一番好き、みたいな？　隣の席の女の子を必ず好きになっちゃいます、みたいな？」

「……」

「ごっめん、ごめん。ヨシがそんなに悩む必要はないよ。おねぇさんが悪かった。ね？　ほら飲んで。今が楽しければそれが一番！」

バンバン、と激しく背中を叩きながら湊は拓也を揺さぶった。そしてグイっとビールを飲み、キュウリを食べ、「おいしー？」と言っている。

拓也は顔を上げた。
ここで見る彼女は、あの時、あの場所で見た、静かに涙を流している彼女とは全然違った。
自立していて、周囲とも調和が取れ、隙が無く、適度に明るい。
けれども実は他人を寄せ付けず、そんな所が自分と似ている。
だけど時々見せる、突き抜ける様な笑顔に目を奪われた。根暗な自分が救われるんじゃないかと思った。
そしてその後偶然見た、静かな涙に心を奪われた。ありきたりに訳を知りたいと思った。
だからあんたとは距離を置いていたんじゃないか。
自分から好きになる事は無いのか？　笑わせんな。人には人の事情があんだ。勝手に踏み込んでくんなよ。
「俺は……」
怒りを込めた眼差しで、知らず知らずに、彼は湊に近づいていた。
彼女の瞳を凝視する。彼女の弱冠潤んだ瞳が、彼を見返す。
時間の感覚を、失っていった。感情が熱を保ったまま、別の色に染まっていく。
吸い込まれる。コントロールが利かない。
手に入れたい。味わいたい。

二人の距離は鼻先が触れる程。お互い見つめ合い、吐息が混ざり合った。

「……俺は……」
「……ごめん、ヨシ」

視線を絡めたまま、湊が掠れた声で言う。
その色っぽさに、拓也の心臓は大きく跳ね上がった。

「……え？」
「……吐きそう……」

僅かに、二人の間に沈黙が走った。

「……てちょっと待て！　ここはやめろ！　ここではやめろ！！
立って、トイレトイレっ」
「……出る……」
「出すなっ！　耐えてっお願いっ」

よろよろと立ち上がる湊を支えながら、二人は彼女の部屋に駆けこんだ。そのままトイレへ直行。
青白い顔でトイレに座りこむ彼女に結局夜中まで付き合う羽目になり、拓也は疲労困憊するのだった。駄目だ、またやられた。

……この人、空気読むのマジで上手い……天才的かも。

4

スーツ姿の湊（みなと）は、キッチンで洗い物をしながら頭をまわした。
ああ、やっぱりすっきりしない。歳のせいかなぁ。アルコールの分解能力が落ちてるのかなぁ。

「歳のせいなんじゃない？　若い時みたく飲むと、体がついていかないんじゃない？」

後ろから冷めた声が聞こえた。
湊は驚いたように天井を見上げた。

「あれ？　あたしの心の声？」
「俺の声。心の声じゃ無くって、俺の声」
「何故二度も言う？」
「二度も吐かれたんですよ？　可哀想だな、とかは思わない？　自覚ある？」

振り向くと彼もスーツに着替えていた。昨夜（ゆうべ）みたラフで洗いざらしの髪も、今朝は整髪料で固められている。

昨日の彼はまるで出会った頃、学生時代の頃の様で可愛かった。
当時も、童顔で可愛い瞳の子だなぁ、一体いくつなんだろう、と思ったものだ。あの頃と全然変わっていない。女としては全く羨ましい。肌も綺麗だったし、ムカ。

昨夜は彼に見つめられた様な気がした。あの時あたしは、何を考

えていたんだろう？
ただあの綺麗な瞳に吸い込まれていた。もう少しで大事な友人を裏切る所だった。やっぱり早くこの部屋を出なくちゃ。

そう考えながら湊が拓也から視線を反らした時、拓也の呆然とした声が聞こえてきた。

「……これって……」
「朝ごはん」

間髪入れずに彼女が言う。ダイニングテーブルの上には、白いご飯にお漬物。そして夏なのに暖かいお茶が急須に。それだけ。あ、お茶漬けのモトもあるか。て、そういう問題？

「……これってさ、俺が食べない、っていう選択肢はあるの？」
「ならおにぎり持ってく？」

自分の食器を片付け終わった彼女が、手を拭きながら振り返る。真顔。つか、挑戦的。

「……いい。食べます」

あぁめんどくせぇ。拓也は逆らう気力もなくて（朝だし）そのまま椅子に座った。手荒に漬物を乗っけ、お茶漬けのもとをかぶせ、適当にお茶をぶっかける。そのまま乱暴にかき混ぜて口に運んだ。

あっつ。

部屋に引っ込んだ彼女の見えない後姿を目で追いながら、拓也は箸を進めた。

こんなんなら、昨夜遠慮せずに襲っちゃえばよかった。

そのまんま人でなしの同僚として生息。別にそれでもいいかも。

その時、舞彩の可愛い笑顔が思い浮かんだ。

「……」

やっぱ人でなしプラン、却下。あの子は傷つけたくない。

こんな俺だけど、あの子思ったより真剣だし、真っ直ぐだしいい子だし。

拓也は突然、奏を思い出した。

シーツの中で、気だるそうに浮かぶ彼女。しじまの様に広がる彼女の髪。その波に顔を埋め、お互いを確かめ合わずに交わった事もある。ただ冷えているから、温めるだけ。ただ劣情を、ぶつけるだけ。

先に誘って来たのは彼女だった。それに溺れたのは彼だった。

潮時、という言葉が頭を掠めた。ステディな彼女が出来て、思ったよりも落ち着きを取り戻した自分がいる。

やっぱり俺は、自分を愛してくれる人が側にいる事が必要なんだ。

って、女みたいだな、俺。

いやひょっとしたら、イライラのタネが手を伸ばせば触れそうな

所にいるんで、俺の体が錯覚を起こしているのかもしれない。
……一体、何を？

いずれにしてもこの状況は不自然だよな。彼女と住むなんて計算外だ。どの面下げてあの人と会える？　もう、身代わりなんて出来ない。

俺も人の子だったという訳ね。やっぱ笑っちゃう。

ギラギラと照りつける太陽の下、泰成（たいせい）は信号待ちの間に自然と木陰を捜していた。ここの交差点は中々信号が変わらない。
木陰にはベビーカーを連れた若い母親がいた。美人だな、と盗み見てしまう。涼しげなブラウスにタイトスカートを履きこなし、品のあるアクセサリーをつけ、およそ所帯じみていなかった。きっとこんな時間に出歩けるなんて、優雅なセレブもどきをやってんだろう。でもなんかどっかで見た事あるよな。

彼女がふと顔を上げ、二人は目が合った。
泰成はギクッと気まずくなったが、彼女の物言いたげな眼差しに、視線が反らせなくなった。
え？　これは何だ？

「……」

「あれ？　ひょっとして、泰成さん？」

女の顔がパアッと輝く。

泰成は驚きながらも、脳内で必死にページをめくった。どんなに女に手を出しても、物覚えがいいのが彼の自慢だ。だから女に不自由しなかったし、大きな修羅場も作らずに済んだ。だけど思い出せない。ここまで引っかかっているのに、思い出せない。どっかで見た事があるんだ、どこでだ？

ダメだタイムリミット。あまり長くは引き延ばせない。こういうモノは、雰囲気が大事。

なるべく丁寧に、礼儀正しく。相手に敬意を持って、それでいて親しみやすい笑顔で……

「え？　っと、あの、あなたは……」

「覚えてないですか？　3年くらい前、あなたのお店に結構通っていた女です」

彼女は戸惑う事も無く、綺麗な笑顔全開で泰成に言った。

俺の店？　それって、俺が仕切ってたあの店？　オーナーは違うけど。

ホスト時代を強烈に思いだしながら、彼は脳内で再び彼女の顔を捜し続けた。…あった！

「……ああ！　ひょっとして、奏ちゃん？」

「うわ！　名前まで覚えてくれていたんですか？　うれしい！」

「覚えているよ、だって名前の字が似てるって盛り上がったじゃん。それに美人だし。え？　お子さんがいるの？」
「はい、２歳です」

彼女は嬉しそうにベビーカーの中の子供を見せた。見上げる子供は造形こそ可愛いが、かなり生意気に見える。これでベビーカーに乗るなんて、ちょっと大きすぎる気がした。でも最近は５，６歳かっていう男の子も乗ってるからな、あれにはビビるぜ。

泰成は視線を彼女に戻した。目の前の女性は、３年前と変わらず美しい。あの頃もその整った顔立ちで、客の中でも目立っていた。

「……へぇー。見えない。全然変わって無いね。綺麗だなぁ」
「またまた～。何にも出ませんよぉ？　もう、あの頃みたいに自由が利かない身なんですから、一応」
「俺も今商売やっててさ、あんまり自由が利かないんだよ」
「知ってますよ」
「え？」

何を言われたのか分からず、泰成が聞き返す。すると奏（かなで）は嬉しそうに微笑んだ。

「ね、お茶しません？」
「え？　今から？」
「そう。お暇だったら、ね？　可愛いカフェ、知ってるんです、行きましょう」

そう言って弾けるように笑うと、泰成を見ながらベビーカーを押し始める。泰成は正直かなり面喰った。だって赤ん坊連れの女性と二人でお茶なんて、色んな意味で気が引ける。俺どう見てもカタギじゃないし、彼女だって世間体が悪いだろ。誰か知り合いに見られたらどうするんだよ？

ところがそんな泰成の戸惑いなど気付かぬ様子で、奏はどんどん先を行く。当然彼がついてくると思っているようだ。そういえばあの頃もそんな強引さがあったかもしれない、と思いながら彼は後を追った。とにかく自分に自信が溢れている女だった。

彼女お薦めの可愛いカフェ、とはビルの二階にあって道路側は全面ガラス張り。よりにもよってその道路側に通された。ここだと通りから丸見えだ。なのにやっぱり彼女は全く気にしない。本当に人目が気にならない様子だ。

テーブルを挟んで泰成の目の前に座り、楽しそうに会話をする彼女。彼と彼女の間には、小さな女の子がベビーチェアに座っている。これってどう見ても家族連れじゃねぇか、俺達。と言う事は俺が旦那？　嘘だろ？

泰成は大きな体を窮屈そうに小さな椅子に沈め、長い脚をテーブル下に投げ出して、両手をポケットに突っ込みながらガラス越しに通りを眺めた。なんだかなぁ。人生初の経験。家庭を持つとこんなんなのかな？　俺にはまだまだだわ。

彼の生返事にも気を悪くせず、彼女は相変わらず楽しそうに話す。泰成はふと我にかえり、そんな彼女に思わず微笑んだ。

「本当に変わらないね。とても子持ちには見えない。きっと、自分をしっかり持ってるんだろうな」
「そう言われると嬉しい。あまり家庭に染まって無いって聞こえて。専業主婦って不本意なの、人生も女も捨てている様な気がするから」
「……」
にっこり笑ったまま結構な爆弾発言をされた様な気がして、泰成は言葉を失った。

「あ、別に旦那を責めたり不平不満を言ってるわけじゃ無いんですよ？　自分で決めた事ですもの。子供が出来ちゃった時、あの人にきっちりと責任を取ってもらうには結婚しかなかったし。それに私の妊婦生活って結構大変だったんです。私の子宮、妊娠には向いていないみたいでね。仕事を辞めるしか無かったの」
「……」
この女性は、これを聞いてもらいたくて俺を誘ったのかな？　と今初めて気付いた。
誰にも言えない鬱憤を、昔の他人に言いたくなったのかもしれない。そう言えばホストって都合のいい心理カウンセラーみたいなもんだもんな。
それでも今の自分は、昔の自分とは違う。それなりに歳を重ねたお陰で、いい意味で常識的な考えにも目を向ける事が出来るようになった。
「……俺、女の人の人生とか立場ってよくわからないし、この歳で

まだ独身だし、実際女に…女性に色々と迷惑をかけてきたから、偉そうなことは何も言えないんだけど」

真顔で、言葉を選んで話すと、それを聞いた彼女は肩をすくめてクスッと笑った。

「人気ナンバーワンでしたものね。陰でどれだけの女の子達が入れ上げて泣いてきたか。本当ならこんな所でお茶なんか気軽に誘えませんよね。幾ら取られるのかしら？」

「やめてよ、笑われるよ、こんなオヤジ。……でもさ」

泰成は苦笑いを浮かべた後、彼女の切れ長な瞳をジッと見つめた。

「奏（かなで）ちゃん、女も人生も捨ててないよ？」

一瞬、虚をつかれたかのように彼女の目が見開かれる。その隣で娘が「あーっ」といいながらプリンをすくった。

「……よかった」

彼女が見せた微笑みは、まるで緊張が解けた少女の様だった。けれどもその後に続く言葉は、そんな綺麗な作り物ではなかった。

「子供が出来なきゃ、結婚なんか考えなかった。なんで女ばっかりこんなハンデを背負わなくちゃならないんだろうって、悔しくってしょうがなかった。子供を殺す勇気も無いし、自分の人生を捨てる勇気も無いしでイライラしたわ。……でもね」

言葉の内容よりも彼女の表情に息を飲んだ。
笑顔の仮面の下にある、したたかな女の微笑。妖艶、とも違う妖しい暗さと芯を持った、艶やかな微笑み。

「挑戦する事にしたの。私の体に流れる血と幸せな環境、どちらが人生にて勝るか」

何を言っているのかはわからない。ただ、彼女を見つめた泰成は、このままいくと何かが自分に降りかかってくる様な気がして来た。
本当に彼女は、ただ話を聞いてもらいたくて、俺を誘っただけなんだろうか？

「……女性は色々と考えるんだねぇ」

深々と椅子に座り直すと更に足を投げ出し、煙草に手を伸ばそうとする。そして思いとどまった。カフェだし、子供がいる。
さり気なく話をそらそうとした彼を見ながら、奏はクスッと笑った。

「私、不倫で出来た子なの」

泰成の、動きが止まる。
無言で彼女を見つめた。

「育った環境は素晴らしくまともで幸せなんだけど、ね」

幸せな環境で育った不実の子は、幸せな結婚生活を築けるのか？
泰成はマジマジと彼女を見た。そう言いたいのか？　それとも俺を誘ってんのか？　子連れで？　まさかあり得ねぇ。

子供が無邪気にスプーンを振り回した。

終業後、休憩室でぐったりしてると優しい声がした。

「大丈夫？　随分疲れている？」
「舞彩（まあや）。……ああ、舞彩はいつみてもお肌がツルツルだねぇ～」
「えぇ～？　みなちゃんだってツルツルじゃあ～ん」

二人してお互いの頬を両手で撫であう。ツルツルーツルツルーと、周囲が白い眼で見ている。

正直、かなり疲れていた。昨日のお酒もそうだけど、今からオツトメが発生したし。急に会いたいって、何を考えているんだあのバカ殿は。それを応諾する泰成も泰成だ。

その時、舞彩の携帯ストラップが目に入った。

「……何、そのブキミなの？」

「あ、これ？　可愛いでしょぉ？　土下座くんって言うの。お昼を食べに行った時に見つけてね。たまたま吉川くん達と合流したんだけど、その時彼が、こっそり買ってくれたのぉ」

「……へぇー……」

今の若い子達は、これが可愛いんだ？　噂のブサカワイイってヤツ？　にしても酷過ぎる。

湊は笑顔が引きつった。今からジェネレーションギャップを感じていたら、これからあたしどうなるの？　それに確か、ヨシはオーソドックスで可愛いモノが好きだったハズ……

「本当はお揃いにしてもらいたかったんだけど、吉川くんがどーしてもコレはイヤだ、って言うからね、うふふ。しょうがないなぁ」

「……へぇー……」

やっぱり。うふふってあなた、引かれちゃってない、彼氏に？

あぁでもこんな無邪気な所がこの子の可愛い所なのよ。何をやっても私達は許す！

強烈なストラップから目を離せずに湊が思っていると、舞彩が楽しそうに顔を寄せてきた。

「面白かったんだよ。あのね、今日は吉川くん、ガツガツお昼ご飯を食べていたの。カツ丼だよ？　びっくりじゃない？　いつもはあんまり食べないのに」

「カツ丼？　勝負でもすんの、あの子？」

「それがね、今日はお家で朝ご飯を食べたんだって。いつもは午前中にこっそり休憩室で食べたりするのに、今日は朝早くに食べたから、それでそれがもの凄く粗食だったから、もう死ぬほどお腹が減ったんだって。拷問かって感じだって言ってた。皆で笑っちゃった」

「……」

……拷問……。

本気でしてやりたくなってきた。

あの野郎。あたしの耳に入ると分かっててワザと言ったな。メッセージ、しかと受け取りました。今すぐ倍返しにしてやりたいけど、あいにく今晩は無理だ。奴め、今度顔を合わせたら無礼打ちにしてくれる。

「どうしたの？」

「あ、ううん。きっと彼、あしたはその拷問を避けるだろうね。お腹減るなんて大変だもんね。仕事にならないもんね」

湊はにこっと微笑んだ。
だって明日は、あたしは彼に朝食を出せない。きっと彼はホッとするだろう。

低血圧だから、と聞いて胃に負担の少ないお茶漬けにした。フルーツですら、飲んだ翌日は辛いだろうと思って。
それが足りなかったと？　そうよね、真面目に朝ご飯を食べちゃったりするとかえってお昼までにお腹が減るもんね？

それを狙っていたのだよ、吉川クン。
そのうちキチンとした朝食を出すから覚悟して。あたしがいる間はまともな食生活を送ってもらうから。ふふふ。

4（後書き）

長かった……。

5

キンコーン。チャイムが鳴った。

「お帰りなさい……」

ルールはお帰りなさいと行ってらっしゃいを言う事。なんて白々しくって、バカかって思っちゃう。全く泰成（しゃちょう）のセンスを疑うよ。っていうか、あの人の趣味なんだろうね。

バイト部屋の扉を開けた湊（みなと）は、想定外の人物がそこに立っていたので固まった。ついでに、絶句した。

「……すみません……」

眉毛を下げながら気まずそうに立っている若い男は、今日のお客の勘違いベンチャーバカ殿ではなく……

「……コタロー!?　え?　の、そっくりさん?　マジで似てる何で?」

「どうも。初めまして。えと、桜川ありささんですか?」

目の前の彼は、ハンサムな甘いマスクという形容がピッタリの男。コタローという名で俳優活動をしている男だった。歳は彼女と同い年の２８歳。テレビ、映画、舞台に大忙しの大人気俳優で、多くの

女性ファンを抱えているが、湊もまさしくその一人。
その彼が、チャイムを鳴らして自分の前にいる。開いた口からよだれが垂れそうになった。
あたし、今、越えちゃいけない妄想の一線を越えちゃったのかしら？　幻が見える？　嘘でしょまさかそこまで変態？

「……」
「あの、僕……聞いてます？」
「あ、はい！　聞いてます！」
「僕、沢畑健悟の友人なんですけど、彼、急に来れなくなったものですから、代わりに僕が……伝言に……」

全く耳に入らなかった。生コタローが目の前で、あたしだけに喋ってる。大きめの可愛い瞳に男らしい整った眉、完璧な鼻筋に形良い薄い唇、魅惑的なあごのライン。
あたしっ。自分が変態でも構わないっ。というかこの際変態に感謝っ。ここまで細部にわたり生々しく幻影を再現出来るなんて自分の妄想能力を称えたいっ。そしてもっと鍛えたいっ。てか、沢畑健悟って誰？　ああ、あのバカ殿か。

……え？　なんでこの妄想コタローがバカ殿の名前を知ってるの？

湊は凝視していた目を、更に見開いた。

……まさか本物？

「桜川さん？」
「あの、サイン下さい！」

湊は物凄い勢いで詰め寄った。気持ち的には襟首を掴み上げて迫る勢いだった。彼的にも、襟首を掴まれて迫られる気分だった。
従って体が引ける。しょうがない事だ。

「はい？」
「すいません、ファンなんです。ドラマも映画もほぼ制覇していますっ。仕事のルールふっ飛ばすくらいにファンなんです。お願いしますっ」
「……はあ……」
「何か書く物書く物っ！　ノートノートっ！　あーっ色紙持ち歩いてればよかったっ！」
「……」

普通は遠慮するものである。節度を持って、他人と接するものである。
興奮した女性の集団に取り囲まれる事もあったが、それは彼女たちが集団だからだ。あのテンションを、初対面で、一人で再現できる人間がいるとは知らなかった。
彼は呆気に取られた。

一方の湊も、知らなかった！　と心の中で叫んでいた。知らなかった、バカ殿が実はこんなに使える男だったとは。自分の代わりに彼（コタロー）をよこすなんて、ミラクルすぎるぞバカ殿っ！

湊は鞄からノートとペンを取り出し飛んで戻ると、彼にそれらを押し付けた。
自分を取り戻した彼は、営業スマイルでそれを受け取った。彼女はまだまだ興奮絶好調だ。

「すみません、プライベートにこんな事を押し付けちゃって。でも二度と目の前には現れませんから、一つ、これだけは！」
「いいですよ。えーっと、桜川って桜と三本川？」
「藤堂湊（みなと）ですっ」
「……はい？」
「藤のお堂に、さんずいに奏でるってかいて湊（みなと）。桜川ありさなんてふざけた源氏名、社長が勝手につけたんですっ」
「……」

目をキラキラさせて、声高らかに宣言をする。大人の女性が。クールそうな彼女が。
彼は思わず口元がゆるんでしまい、それを隠そうと慌てて下を向いたが間に合わなかった。
抑えきれなくて口元に手をやり、肩を震わせて笑っている。

湊はきょとんとした。

「……おかしいですか？」
「うん、色々と」

必死で声を押し殺しつつも一通り笑った彼は、目尻に涙を溜めて顔を上げた。頬が緩んでいるその表情に、この人ってこんなに笑い上戸だったんだ、と感心して湊は眺めてしまう。

「そもそも君の名前、藤堂湊？　それってさ、桜川ありさに負けないくらい雅やかな名前だと思うけど？　それこそ源氏名でも使えそうだよ？」

「……そうですか？」

湊はなんとも微妙な気持ちになった。つまりあたしの名前がツボにハマったって訳？

そうこうしている間に彼はノートにサラサラとサインを書いて、笑顔で彼女に渡した。彼女の顔が再び輝く。

「うわぁ。ありがとうございます。一生の宝物にします」

「こちらこそありがとう」

お互いに微笑み合い、何となく穏やかな空気が流れた。

それに浸っていた湊はハッと我にかえった。そうだ仕事中だった。

「それで、沢畑さんはいらっしゃらないのですね？　なんでコタローを……あ、コタローさんをよこしたのかしら？　電話でキャンセルすればいいのに」

「コタローでいいよ」

甘いマスクでクスッと笑う。うっテレビとおんなじ、なんてカッコいいんだ。

「あいつ、『桜川』さんに逃げられたくなかったらしいよ。なんとしても繋ぎとめたかったらしくって、キャンセルなんかしたら君に愛想を尽かされると思ったんじゃないかな？」

「……」

湊は思わず顔をしかめた。彼に対する愛想なんて元から無い。従って尽きようが無い。

「それにしても、あの人があなたとお友達なんてなんか信じられない……あ、どうぞお入り下さい」

つい客の前で、別の客の悪口もどきを言ってしまった。接客業としては失格で、湊としてかなり珍しい。それくらい気が抜けていた。彼は笑顔を崩さずに言う。

「いや、僕はここでいいです。伝えに来ただけだし。……彼はね、本当はいとこ。同い年で、まあ縁があるっていうか」

こっそりと耳打ちをするように、そして気のせいでは無く苦笑していた。湊はそれを見て、彼のいとこのあの性格は昔からだったんだな、と理解した。

「……それは、また」

お気の毒に。

「はは……」

眉を下げて苦笑いをする彼を見つめて、湊は素直に言った。

「コタローさんって、テレビで見るより普通の人ですね」

「そう？　実はよく言われるかな」

「テレビでは、他の役者さんと空気が違います。それって勉強して身につくものじゃないんだろうなぁって」

湊はテレビやスクリーンで見る、彼の存在感ある演技を思い出した。彼が言うと、台詞の一つ一つが息付く。彼が登場すると、その場の雰囲気が輝きを増し、魅力的な物となる。

「私、あなたの空気感が大好きです」

「……」

それらの光景を思い浮かべ、彼女は心の底からの笑顔を見せた。それはまるで、花開く瞬間を見た様だった。大人の女性という仮面が剥がれた無邪気な笑顔で、彼は目を見開いて、魅入られた様に凝視した。

慌てて口元を手の平で隠す。

「……スゲ」
「はい？」
「あ、いや、あなたの空気感も相当な物だよ？」
「え？　またまた～」
「……ね、よければこれから、外で一緒に食事をしませんか？」
「え？」

あまりに突然の申し出に、今度は彼女が目を見開く番だった。
二次元の人物が三次元になった瞬間。単なる憧れでは無く、生身の一人の男性。
彼女は戸惑いを覚えた。

「……ごめんなさい。お客様とは、外で会ってはいけない事になっているんですよ」
「でも僕は客じゃないでしょ？」

怯む事無く可愛く微笑む。こういう事にはなれているのだろう。
当り前よね。

「でも……あ、そうだ」

湊は思いついた。

「よければ上がって下さい。これからお夕飯を作る予定だったんです。家庭料理なんていかがです？」

こういう場で出会った関係。彼はあたしのバイトの内容を知っている。だったら余計な気遣いや駆け引きなんて無意味だわ。そう考えたらとても気が楽になった。

相手に期待をしなければ、自分を必要以上によく見せようとも思わない。つまり、無理な豪華料理なんか作らなくてすむもの。

場末の酒場という言葉がピッタリの場所。

「ここ、煙い」

煙草の煙がもうもうと立ち込める店内で、拓也は顔をしかめた。カウンター席に座っている男の後ろに立つ。

男が振り返って、勢いのいい手振りと声で言った。

「おー来たな。まあ座れや」

「呼びだしといてなんなの。あんたの椅子じゃないでしょ」

泰成（たいせい）にはどうしても一言、難癖をつけないと気が済まないらしい。それが拓也独特の甘え方だと知っているので、言われた彼は馴れた表情で聞き流す。

拓也は笑いながら彼の右隣に座り、すぐさま泰成のシガーボックスを掴み、勝手に一本取り出すと火をつけた。

正面を向いたまま大きく吸い込み、味わうように吐き出す。

「さっそく一本か。ジャンキーみてぇ」
「その煙が呼び水なんだよ。せっかく遠ざかっていたのに」
「なんだよ、禁煙か？」

「図らずともね。一人でいられる空間が無くなっちゃったから。吸わない人間が近くにいると、落ち着いてふかしてらんないでしょ？　会社は禁煙だし彼女は吸わないし、リビングが煙草臭いと可哀想かなとか思っちゃったら、同居人がいなくても吸いづらくなっちゃったし」

「はっ、珍しいっ。お前がそんなに煙草をやめていられるなんてビックリだぜ。結構気ぃ使ってんじゃねーか」

「随分前に付き合ってたコが、煙草が大っ嫌いだったの。俺、それで振られたのかもしれないし」

「……コレが原因で？」

泰成は驚いたように、自分が吸っている煙草を持ちあげた。こんな物が原因で別れるなんて、随分神経質な女だな。

「『やめて』も『吸わないで』も何も言わないの。ただ、諦めた様に俺を見るだけ。だから無視してやめなかった。俺、人見知りが激しいから周りに気ぃ使っちゃってさ、こう見えても。そーゆー所で彼女に甘えたかったのね。で、それがダメだったみたい」

一気に言い切る拓也を見て、まるで今まで何度も自分に言い聞かせてきた台詞みたいだな、と思った。それはつまり、その事ばかりを考える日々があったと言う事だ。

相手に自分の要求を伝えず、諦めた様に見つめる彼女。煙草はどうやら、拓也にとってその象徴ならしい。

「相手に無理させるくらいなら、こっちが先回りして気遣ってあげればいいし、それに疲れたら離れればいい」

「……で、離れるのが前提で相手に深入りしない、と」

泰成の鋭い指摘に、拓也の片眉がピクリと上がった。

泰成は構う事無くさらっと言う。

「病んでるなー。あ、元からか。それっぽいもんな、お前」

「うるさいな」

ジロッと横目で睨んでやるが、泰成が年上の余裕でニヤニヤと笑ってるのを見ると、自分もおかしくなってきてしまった。二人してしばらく笑い合う。「病んでる病んでる」「うるさいっエロ変態には言われたくないっ」

一通り笑った後、泰成は事のついでの様に言った。

「今日さ、珍しい人に会ったんだ」
「ふぅーん。誰？」
「昔、俺らの店の客だった女性。奏（かなで）ちゃんって、覚えてる、お前？」
「！」
不意打ちのアッパーパンチに、思わず目を剥いてしまう。
そんな拓也を横目で見やりながら、泰成は淡々と続けた。
「確かお前の事が結構お気に入りだったよな、彼女。それを思い出して」
彼は拓也を真正面から見詰めた。真顔で問う。
「違ってたらすまん。お前、今でも彼女と会ってるか？」
「……」
拓也はあえて視線を合わさず、カウンターの正面上方を眺めながら、肘をついて煙草をふかした。
しばしの、沈黙。
泰成は、想定していたとは言え、驚かずにはいられなかった。
「……マジかよ。彼女、子持ちの人妻だぜ？　ヤバくね？　旦那に知れたらどーすんだよ？」
「泰兄（たいにい）、デリカシーないくせにこういう事は無駄に鋭いのな」

「お前、本気なのか？」
「まさか。俺も向こうも本気じゃないよ。ただのＳＦだよ」

冷めた口調で拓也が言う。
泰成は絶句した。美人妻がＳＦ？？

「……羨ましぃー……」
「どの口が『旦那にばれたらヤバい』って言いました？」
「お前、彼女出来たんだろ？　マジカノだっつってなかったか？　奏ちゃんとは続けんのかよ？」

すると拓也は眉間に皺を寄せ、苦笑いをしながら首を捻った。

「……うーん、どっちかってぇと、別の理由で続け辛いかな……」
「何？　何だよ？」

おいおい、おっさん、喰いついてきたよ。
拓也は、本来は言わなくてもいい筈の事を、彼に伝えたくなった。伝えてどうなるものでもないのに。多分彼と秘密を共有したくなったのだろう。一人で抱える事に疲れて来たのかもしれない。

「……あの人の旧姓、なんだか知ってる？」
「旧姓？　んなの知らねーよ。今の名字だって知らねぇし」

「藤堂って言うの。旧姓」

泰成の、時が止まったようだった。

「……この鬼畜ーっ！！」

「やっぱり」

拓也はかったるそうに日本酒に手をつける。

泰成は開いた口が塞がらなかった。こいつ可愛い顔して人畜無害なフリして、どんだけなんだよっ。

「いつ知ったんだよっ？」

「1年くらい前かな」

「どうやってっ？」

「向こうが言ってきた。藤堂の話を聞いて、俺だって気付いたらしい」

「いつから付き合ってんだ？」

「その時から」

「藤堂は知ってんのか？」

「全然。つか、これ何？　尋問？　その為に俺を呼んだの？」

鶏肉のかけらを箸でつまみながら、拓也は眉根を寄せて泰成を見る。

「そもそも泰兄はさ、なんでそれに気付いたの？　彼女がなんか言

った？」

泰成は努めて気を落ちつけると、ふてぶてしい９つ年下の男を睨みながら腕を組んだ。

「彼女は久しぶりに俺と会ったのに、久しぶりって雰囲気じゃ無かったら。俺と彼女を繋ぐものって、お前しか思い浮かばなかったし」

「すげー第六感。少年探偵も真っ青」

全くどうでもいい様子で、拓也はつまみをポンポンと口に運ぶ。

そんな彼を眺めて、泰成は溜息をついた。

「拓也。彼女はなんかヤバいよ。やめた方がいいぜ？」

「……別にヤバくなんかないよ。むしろ気持ちがいいくらい自己中心的」

「……それがヤバいんじゃねぇのか」

「違うね。自己中は、自分の為にならない事はやらないし興味が無い。だから案外、騒ぎを大きく広げないんだよ」

ニヤニヤ笑う彼はかなり投げやりに見える。泰成は眉根を寄せた。

拓也は淡々と言葉を続ける。

「でも確かに潮時かも。俺も思ってたんだ。藤堂と暮らしている以

上、ちょっと無理だなって」

「……別れる原因が、彼女じゃなくてそっちか……」

泰成は呆れてしまい、ハッと思いついた様に言った。

「ひょっとして、奏と付き合うきっかけになったのも、藤堂？」

「……」

再び、無言の肯定。新たな煙草に手をつける拓也。

「……病んでんなー……」

泰成はもはや呆れるを通り越して、感心した様に呟くしかなかった。

5（後書き）

今回も長かった……。
やっと新キャラが出てきました。もっと早くに登場させる予定だったのに。

そして拓也の悪行を泰成が知りました。
説教オヤジなのでくどくどと言いそうですが、男同士の説教は暑苦しいので飛ばします（笑）

目を通して下さっている読者様、本当にありがとうございます。

6

「おいしかったーっ」
「そう？　よかった。お世辞でも嬉しいです」
バカ殿仕様に気合の入らないメニューしか用意していなかったけど、どうやらそれがよかったみたい。白いご飯に唐揚げ、ゴーヤーチャンプルーと酢の物とお味噌汁。具は油揚げとワカメ。
全部、湊（みなと）自身が食べたかった料理。唐揚げは彼用だけど。
コタローはハンサムな顔を綻（ほころ）ばし、心の底から満足している様に見えた。でもこの人役者だからわかんないぞ。
「いや、お世辞なんかじゃなくって、マジで旨かった。いいのかな、僕がごちそうになっちゃって。って平らげてから言う台詞じゃないか」
「いいんですよ、食べて頂かなきゃ無駄になる所でした」
「ね、敬語はやめようよ」
身を乗り出して彼が言った。瞳が、柔らかく笑っている。澄んだ黒い瞳の奥が、穏やかに微笑んでいる。
湊は柄にも無く胸がときめいてしまい、なんとなく恥ずかしくなった。
彼って確かあたしと同い年だった筈。なのになんて、純粋な色を見せるんだろう。こういう素敵な歳の取り方も、あるんだな。

「……はい」
「メニューも味付けも、すごく僕の腹に合ってた。本当に美味しかった。いいなぁ、湊ちゃんの旦那さんになる人は、毎日この手料理を食べれるんだー」
「それは甘い考えね。働く夫婦は家事も分担してもらわないと」
「じゃあ俺、掃除やる。うわダメだ、苦手だった」

自然に軽く言われたので思わずつられて笑ってしまい、直後にあれ？　と引っかかった。何、この会話の流れ。
彼とバチッと目が合う。すると彼は少し照れた様に、少し緊張した様に笑った。そして視線を、おどおどと空中の色々な所に漂わせて、言った。

「……ね、これからも湊ちゃんの手料理を食べるには、僕、どうしたらいいんだろう？　事務所の社長さん？　ってのを通せばいいのかな？」
「……」
「あ、その、イヤラシイ意味では無く、その」

湊は驚いた。こんなに素直なアプローチを受けたのは何年振りかしら。相手の純朴なドキドキ感が伝わってきて、こっちまでドキドキしてくる。
この人は私とは別世界の人だ、と実感した。住んでいる世界が違う、という事ではなく、彼は自分の直感を信じて感覚を大事にして、素直に行動する。ごちゃごちゃと余計な事を考えながらつまらない駆け引きをする私とは、別世界の人間なんだわ。

なんて羨ましいんだろう。

そこまで思ってから、はたと気付いた。

そっか。この仕事を通して知り合ったからだ。これ、仕事のオフアーなんだ。

なあんだ。仕事の話なら、駆け引きなんて必要ないわよね。素直に申し込めばいいだけだもんね。

そうだよね。天下の人気俳優が、あたし相手に本気の会話をする訳無いじゃない。

なんだか一気に力が抜けた。うう、舞い上がった勢いそのままに堕ちていく……。

それでも営業スマイルは忘れない。大人ですから。

「ご飯を作るくらいなら、いつでも」

そしてこの営業スマイルには結構効果があって、湊は色々な場面をコレで切り抜けてきた。

事実、彼も少し彼女に見とれている。

「でも、本名では仕事をしちゃいけないルールなんです」

茶目っ気たっぷりに可愛く切り返したら、彼は真顔で言ってきた。

「でも君は、湊ちゃんなんでしょう？」
「……」

真剣に見つめるその空気感に、ドキッとする。理屈抜きで、心を奪われる。
一瞬、時が止まってしまった。
次の瞬間、彼がにっこりと笑った。その微笑みに呪縛を解かれ、湊はハッとする。

しまった。先手を打ったつもりが切り返されてしまった。これ、この人の空気感、彼の十八番なんだわ。
敵も中々さるもの。素直な良い子のフリをして、やっぱり結構なやり手だわ。

……これが天然だったら怖い。抜け出せなくなりそう……。

コタローは椅子から立ち上がると湊に近づき、彼女の真正面に向き直った。彼女も慌てて立ち上がる。
真面目な、優しい眼差しで覗きこまれた。

「俺、君の事何にも知らないけどさ。笑顔と料理が最高だった。だから、もう一度会いたい。ダメですか？」

これ、どこかでカメラが回っているのかしら。だってテレビで何度も見ていた彼が、あたしの目の前に立っている。あたしを見つめて（錯覚？）あたしに甘い言葉（幻聴？）を囁いている。

ク、クラクラする……。

湊は視線を反らせずに、少し掠れた声で答えた。やっとの思いで。

「……事務所を、通していただけるなら」

「わかった。桜川ありさ、をだね？」

クスッと悪戯っぽい瞳。これがまた胸にキュンっとくる。ダメだわっ、心臓が持たない。

この数時間で心拍数がやたらと上がって、あたしは確実に寿命を縮めているわ。

彼は礼儀正しく頭を下げた。

「必ず、また来ます。今日はありがとう」

「あ、はい……」

最初から、食事をしたら帰る予定だった。最初の宣言通り、食事を終えた彼は部屋を出ていった。来た時と同じ、とても身軽な格好で。

湊に一度も触れる事無く。

ビジネスマンばかり相手をしてきた彼女にとって、ラフでセンスいい今時の私服姿で登場した彼は、まるで文字通り「彼女の部屋に遊びに来た彼氏」の様だった。

それがあの、コタローだなんて。

「……すっごぉい……」

湊は思わず呟いた。戸口に立ちつくして、彼が消えた玄関をいつまでも眺めてしまう。

一生の思い出だわ。例えもう二度と来なくても、うんきっと来ないだろう、あれは社交辞令だったのよ、それでも全然いい。なんて素敵で紳士的な人だったのかしら。

あー、もうこれはファンクラブに入るしかないわね。

本気でドキドキしたぁ……。

湊は夢見心地で家路に着いた。ふわふわと浮いた感覚で、電車から降りる。

ところが部屋の前に着いた途端、一気に現実に引き戻された。ここには、拓也と住んでいる。

そして拓也は、舞彩（まあや）と付き合っている。

彼はまだ、戻ってきていない様だった。

「……この家って、ホント散らかってるなぁ……」

最初に泰成と足を踏み入れた時には少しギョッとした。結構なも

のが床や机の上に散乱している。キッチンなんて目も当てられない状況だったから、復元（？）するのに苦労したものだ。拓也は見かけによらず、片付けがあまり得意ではないらしい。それでもサイドチェストの上などには、彼の小物が数個置かれていた。それらは湊にとって、割と好ましいセンスをしていた。

湊は溜息をつきながら、床に転がっているものを手早く拾い上げて籠に入れていった。これは拓也専用の籠として湊が買って来たもの。この中に、散らばっている彼の私物を入れていく。あたしは姉かっつーの。

その時、一枚の絵ハガキを拾い上げた。

青空の下、乾いた土がむき出しの地面に僅かな枯れ草がある景色。どこかアフリカの景色の様に見えた。なぜならそこには沢山の、肌が黒い人種の人達が写っているから。そして彼らと一緒に、一人の日本人の女の子が並んで立っていた。年の頃は二十代前半。可愛らしい顔つきに、素直そうな笑顔。

湊は少し息を飲んだ。

拓也の大切な人だ、と言う事がダイレクトに伝わってきた。

これ、ペーパーホルダーに挟んであったんだ。それが落ちているのに気付かないなんて。

……ある意味彼女は過去の人物、なのかもしれない。ヨシの中では、既に。

舞彩（まあや）が、いるからかな？

あたしは今日は急なバイトが入った。そしてそれが急にキャンセルになった。こんな事、ヨシは知らない。
あたしがバイトで具体的に何をやっているのかも、ヨシは知らない。ここについては時々、弁解にも似た報告をしたい衝動に駆られるけど。

あたしは、ヨシの知らない世界を持っている。
そして彼も、あたしの知らない世界で生きている。
同じ部屋に住んでいるけど。同じ部屋に住んでいるってだけで。

湊は拓也の部屋の扉を眺めた。そしてしばし、その前で佇んだ。
この扉の向こうはどんな空間が広がっているんだろう。
隙間が僅かに開いている。鍵をかけていないんだ。今までずっと一人暮らしだったから、その習慣が染みついちゃっているんだ。

湊はしばらくその隙間を見つめ、
そっと扉に手を伸ばし、
パタン、とそれを閉じた。

数時間後。

拓也は湊の靴があるのを見て驚いた。今日はバイトの日だった筈

なのに。

リビングは静まり返っている。暗くて、綺麗に片付いた部屋。なんか、自分の部屋じゃないように感じる。自由に煙草も吸えなくなった、俺の家。泰成の説教が未だに頭の中を響く。彼女、寝ているんだろうか？　確かに時計は深夜を指していた。

湊の部屋は閉まっている。彼はその前で歩みを止め、しばし佇んだ。じっと彼女の部屋のドアを見つめる。

「……」

僅かな物音も聞こえない。でも帰ってきているのは確かだから、きっともう眠っているのだろう。もちろん、寝息が聞こえる筈も無い。

……なんかバカみたいだな、俺。

拓也はそのまま無言で部屋に戻った。

部屋では、ベッドの中で、湊が息を詰めて拓也の気配を追っていた。

翌日。

テーブルの上にはご飯と、漬物と、お茶と、焼き鮭の切り身が出

ていた。
……一品増えてる……。
「食器はつけといてー」
彼女の部屋からはいつも通りの声が聞こえる。
彼女は昨夜の事も、バイトの事も、拓也の拷問ネタの事も何も言わない。
「いただきまーす」
拓也が朝ご飯を食べ始める。
「いってきまーす」
彼女は部屋を出ると慌ただしくリビングを通り抜ける。その際二人は無言で、軽く手を上げる。そして彼女はいつも通り、爽やかに玄関を出ていった。バタン。玄関の扉が閉まる。
「……」
拓也は閉まった扉を横目でジッと見た。
湊は閉まった扉の前で佇んだ。
なんか俺ら、あたし達、
やっぱビミョー？

久しぶりに舞彩と二人でランチが出来る。会社を出た湊は、ウキウキしながら外を歩いた。彼女と賑やかに話をしながら、一緒にコンビニに入る。彼女の携帯にぶら下がっている土下座くんは今日も健在だ。

話題は明日の一泊二日、社内温泉旅行に移っていた。

「舞彩（まあや）と同室で嬉しいよー。お菓子買い込んで語ろうねぇ。楽しみだなぁ」

言いながら雑誌コーナーの前を通る。自然とテレビ雑誌に目が行った。手に取ってパラパラとめくって、えっと連ドラのページは…あったあった。あ、いたいた。

くーっかっこいい。でも本物はもっとかっこいいっ。

「……あのね、みなちゃん」

舞彩がとなりで、低い声で囁いてきた。まるでスパイが情報を交換する時の様な、緊迫感に満ちた囁き。

「聞いて」

「……どうしたの？　なんか深刻そうに」

「私、決心したの」

「何を？」
「明日、吉川くんに勝負をかける」
可愛い瞳をグッと開き、胸元には両拳をグッと握りしめ、確かにとっても決心している。
湊はドキッとした。勝負？　何を挑むの？
「……勝負をかけるって……」
湊が驚いたように呟くと、舞彩は更に声を潜めて、言った。
「舞彩を、捧げるの」
一瞬頭が白くなり、言葉を失った。
「……それは、まったく、すごい」
まだだったんだ。
「それでね、その……言い辛いんだけど……」
舞彩は急に俯き、もじもじとし始める。顔を赤らめている。
湊は何か嫌な予感がした。
だって何で今、もじもじと赤くなるの？　普通「私を捧げる」宣言、つまり彼をセックスに誘い込むって宣言する前に、赤面モジモ

ジちゃんをするものじゃない？　あたし、舞彩ってそういうタイプだと思っていたんだけど。

「……何？」

「……部屋を……」

そう言うと彼女は、言い辛そうに上目遣いで湊を見た。目で、物を言う。お願い、わかって。

「……あー、成程、そう言う事！」

突然ひらめいた湊は、納得しながら思わず大声を上げた。

舞彩は更に恥ずかしそうに、弱冠潤んだ目で彼女に縋りつくように訴えかけてくる。

「……みなちゃん、協力してくれる……？」

「もちろん！　そうしたいけど……そうしたらあたし、……どこに行けば……」

途中から湊の台詞は尻すぼみになった。そうしたらあたし、その日は一晩中家なき子……？

舞彩が焦ったように、けれども歯切れの悪い口調で言った。

「あの、一晩中って事にはならないと思うから、その、すぐに出るっていうか……」

そこまで言ってから、もうこれ以上赤く出来ないと言う程顔を赤らめて、舞彩は恥ずかしさのあまり俯いてしまった。

「……ラブホだって、休憩が2時間くらいでしょ……？」
「……まあ、そかな……」

二人して、無言。
舞彩の赤い顔につられて、湊まで顔が赤くなってきた。ヤバい、もろに想像しちゃう、二人がこれからしようとする姿……。ギャーっ消えて消えて耐えられないっあっちいけあっちいけ、うわーん、消えないよぉ。

「ベッドだっけ？」

湊は目を反らしながら聞いた。舞彩も相変わらず俯きながら答える。

「和洋折衷の部屋だから、うん」
「じゃあ、お願いがあるんだけど……」
「何？」

湊は深く息を吸うと舞彩に向き直り、思い切ったように、けれども低い声で小さく言った。

「……あたしのベッドでは、しないでね……？」

弾かれた様に顔を上げる彼女は、何故だかどこか嬉々とした表情で答えた。

「もちろん！　私のベッドを使うよ！」

そうですか。安心です。

「ああ、それなら……喜んで、うん」

なんて言えばいいんだろう、こういう時。「素敵よ舞彩、応援してるわ頑張って？」とか「あたしの事なんか気にせずに、ガンガンやっちゃいなさいよっ」とか、そんな事を言えばいいのかな？

そんな言葉が、喉まで出かかっているのに、言えない。

きっとそれは、あたしがこの温泉旅行を楽しみにしていたからなんだ。ゆっくりお風呂に浸かった後、部屋で女友達とまったりと寛ぎたかったのを、邪魔された様な気分になっているからなんだ。うん、きっとそうに違いない。

別に、彼の事が、気になるからなんかじゃない。今更。

湊は引きつった笑顔を見せた。しかし年季の入っているその笑顔は、舞彩からみるとごく自然な、いつも通りの柔らかな笑顔だった。

6（後書き）

舞彩ちゃん、発動！

彼女くらい素直に積極的に動けたら、いいですよね。羨ましいです。

でも、いくら自分のベッドではないとしても、自分の部屋で友達が彼氏とシテいたとしたら……私は嫌です（きっぱり）。逃げ出したい（笑）

7

明日は社員旅行と言う事で、今日は残業無しとなった。強制的に帰らされる。

すると当然帰る時間が重なる訳で……

「あ」

「あら」

拓也と湊（みなと）は、電車を降りた所で顔を合わせた。

そのまま人の流れに合わせて、なんとなく二人で改札を出る。

帰る場所が同じ。なんて妙な気分なんだろう。

……だけど、それが嫌じゃ無い。だから、焦る。

「夕飯喰ったの？」

「まだ」

「どっか寄ってく？」

「…いいや。冷蔵庫のもの、消費したいし」

「あなた沢山買ったものねー」

拓也は歩きながら愉快そうに肩をすくめた。その様子が柔らかで、本当にリラックスしているみたい。会社仕様に短い前髪を立てて額を出した、精悍な顔。そんな顔でそんな風に柔らかに笑われると、何だかとても包容力のある大人の男性に見える。いや、実際大人なんだけど。あたしの知っている馴染みの彼は、どっちかって言うと甘えた様な仕草をするから。……舞彩（まあや）と一緒にいる時は、いつもこ

んな表情をしているのかな？

湊は訳も無く、なんとも落ち着かない気分になり、俯いた。

さっき聞いた舞彩の話が、頭の中を駆け巡る。明日、あたし、吉川くんに捧げるの。吉川くんに捧げるの。お願い、みなちゃん、部屋を出てて？

ああ、頼んでもいないのにあたしの脳内で、彼が舞彩を抱く様子が勝手に繰り広げられていく……うおぉぉっやらしい、エロい、あたしよ止めろーっ。

湊は一人、悶絶した。

拓也はこうやって緩やかな雰囲気の時と、今朝の様に見えない緊張感を持って自分を見つめてくる時とがあった。それが時々、湊を戸惑わせていたのも事実。

ええいっ、妄想よ消えろっ。ヨシもなんでそうコロコロ態度を変えるのよっ。

彼女は顔を上げると、試す様に彼に言った。

「……一緒に食べる？」

拓也は少し驚いたように振り向いた。何に驚いたのか分からない。湊の台詞に驚いたのか、それとも口調に驚いたのか。

けれどもやっぱり、彼は柔らかに笑った。

「……いいよ」

今度こそ、本当にドキッとした。文句無しにカッコいい。いつもどこか捻くれた雰囲気の彼にこうも素直に微笑まれると、胸をキュッと掴まれた様な気分になる。

くっそ、またやられたっ。

なのに頭の中は既に、彼の言葉に触発されてもう次の事を考えている。

男の人に料理を作るなんて、壮太の部屋に行った時以来だ。どれくらい振りだっけ。湊は必死で頭を巡らせた。うーんうーん、何を作ればいいんだろう？　バイトで腕を振るった事はカウント外よね。友達だし、気軽にさり気なく、頑張りすぎずに美味しい料理。

「何が好き？」

「何でも。俺、好き嫌いないし。あ、でも一つお願い」

こいつっ！　何でもってそれが一番困るのよっ。何でもって言って本当に何を出しても文句を言わない男なんて、殆んどいないんだからっ！　……て、あれ？　何か言った？

「何？」

「酒、飲まないでね。湊、吐くまで飲むだろ」

ジト、と横目で見下ろされて、彼女はすっかり肩身が狭くなった。め、滅多に飲まないのよ、たまに飲むから羽目を外したくなるのよ、

それでも奇行には走らないからいいじゃない、って吐く事事態が既に奇行かこの歳なら。

「すいません。もうご迷惑はかけません」「そうじゃなくて。明日の旅行、もたないだろ」と会話をしながら、二人は真っ直ぐ部屋に戻った。仕事が溜まっているのか、拓也は笑いながらもどこか疲れた様子だった。いつもの斜めに構えたかったるい様子とは、何となく違う。

部屋に着いた湊はすぐに手早くシャワーを済ませて、いつものTシャツ短パン姿で出てきた。髪を高めの位置でアップにして気合を入れる。時間はまだ6時半。よし。急いであげなきゃ。

チーズがたっぷりの、ミックスベジタブルとソーセージのドリア。大根サラダは鰹節と小魚をまぶしてごま油和え。そしてトマトの冷製クリームスープ。

拓也がシャワーを浴びて部屋から出る頃には作り終わっていた。所要時間30分。テーブルに乗せられた料理を見て拓也はポカン、とした。

お腹が減っていたらしく、そのままストン、と床に座る。「いただきます」と小さい声で言ってから食べ始めた。

湊は並んで食べるのも気恥しかったが、かといって突っ立っている訳にもいかないので、努めて平静なフリをして自分の食事をした。拓也はそんな彼女に目もくれないで半分ほど一気に食べ進み、それからやっと、湊を見た。

「すんげぇ、うまい」

「ありがと。というかすんげぇ、っていいね」

「すげぇ、なんか意外。湊って料理とか全然しないタイプかと思ってた。興味無いって言うか」
「……あー、朝ごはんの事？」
「そりゃ普通、誰だって思うでしょ。さんざ豪語した後のメニューがあれじゃ。お茶漬けだよ？」
「だって朝が弱いって言ったじゃん」

スプーンをくわえたまま、拓也がキョトン、とした。

「……言ったけど？」
「……だから、いきなり重いの出されたって食べれないでしょ？朝はとにかく水分。寝ぼけたお腹でも入ったでしょ、あれなら」
「……あんた、それ、気、使い過ぎ」

呆れた様に言うと、拓也はさじを置いてマジマジと彼女を見た。

「しかも分かりづらい」
「すいませんね」
「お礼に食器は俺が洗うよ」

そう言って一気に食べ終える。どこか真剣な表情だけど箸の進むスピードが速いので、湊は嬉しくなった。だって拓也は気が乗らないと食事にあまり手をつけない事を、彼女は知っている。

食べ終わった二人分の食器を洗っている彼の後姿を見ているうち

に、湊はあの写真を思い出した。
いや、思い出したと言うより、あれからずっと頭に引っかかっていた。

「……この間は、ごめんね」
「何が？」

彼は振り返らずに返事をする。
湊は空中に視線を漂わせながら、勇気を振り絞って、とつとつと言った。

「その……自分からは人を好きになった事は無いのか、とか……渡したくない子はいないのか、とか……」
「……ああ」
「酔った勢いとは言え、本当に失礼な事を言いました。ごめんなさい。土足で踏み込みすぎました」

ペコっと頭を下げる。それを聞いて拓也は顔をしかめた。シンクに片手をついて体を預け、湊の方を振り返る。

「何深刻になっちゃってんの。やめてよ」

それでも湊は上目遣いで、けれども真剣な面持ちで続けた。

「それに、何がきっかけだろうとどっちが先だろうと、相手を好きになっちゃえば始まりなんて関係無いもんね。……自分の事を好きって言う子を好きになる、なんて最高の幸せだもんね」
「……」
「……あたしは、今思えば……」

湊は遠慮がちに立ち上がると、拓也の隣に立った。ふきんを手に取り、彼が洗った食器を拭きはじめる。

「壮太の事を、ちゃんと好きって出来ていたかなぁ」
「……好きって出来る、ってどういう事？」

眉根を寄せて、湊を見た。
けれども彼女はぼーっと前面を見つめたまま、話を続けた。

「……『好き』を、きちんとやる、と言うか、まっとうする、と言うか……」
「は？　益々分かんないし。気持ちの話でしょ？　やるとかやらないって、行動じゃないんだから」

すると彼女は俯いてしまった。真剣な表情で、少し唇を尖らせている。
長めの前髪が頬を滑って、影を作った。それを見た拓也の心は、何か柔らかいものに包まれた様にぼやけていった。

アップにされた後ろ髪からはおくれ毛が垂れ、細いうなじにかか

っている。

拓也は急に、喉が渇いた様な気分になった。

そこへ湊の低い声が響いた。

「……怖いんだよね」

拓也は弾かれた様に目を反らした。あ、ヤベ。慌てて湊の顔をに視線を戻す。前髪はやっぱり影を落としたままで、その横顔は触れたい程綺麗でやっぱりイヤになる。

「……何が？」

「……人をキチンと好きになるの。友達でも、彼氏でも、なんでも。どうしてだか分かんないんだけど」

それを聞いた拓也は、少し眼を見開いた。そしてしばらく彼女を見つめ、それからその視線を、ゆっくりと前方に戻した。

「……それは、俺も、何となく分かる」

「……」

それはあの写真の子？　湊は心の中で聞いてみたけど、分かりきっている答えだから、口には出さない。

こうやって大人はコミュニケーションを不足させていくのかな？

分かっているから。……傷つきたくないから。

「でもさ、それって自分じゃどうしようも出来ねぇよな」
「……そうだね」

二人して黙り込み、そしてそれぞれが小さく溜息をついた。なんだか本当にどうしようもないなぁ。似たモノ同志だと、こういう時に話が進まない。

そして似た者同士だから、なんだか同じ所でつまづきあっている様な気がする。
そして同じタイミングで相手を覗いあい、同じタイミングで顔を反らし合い、

同じように何かを期待して、怯えている様な気がする。

二人は再び、相手に気付かれない様に、こっそりと溜息をついた。

7（後書き）

うっかり遅くなりました。すみません。しかもじれじれ。
明日も深夜にアップします。

大人は子供以上に二面性を持っていて、それに対して諦めと言うか折り合いをつけている、という事が描きたいのです。
例えば、本音と建前。この二人の場合、臆病な慎重さと気軽なセックス。

でも臆病と慎重は違いますよね？

8

水道を止めて手を拭きながら、拓也は彼女を振り返った。こうなったら話題転換だ。

「な、湊。前に教えて欲しい事があるって頼んだじゃん。あれ、今教えて欲しいんだけど」

「え？　何の事？」

「ほら、運転資金の計算方法。銀行で習ったってヤツ」

「えっ？　今仕事すんの？？」

「どうせ暇でしょ？　俺、結構抱えちゃってんのよ。どーしてもわかんなくて」

「いいけど……。どうしよう、あたしも忘れちゃってるかも。ちょっと待って、テキスト取ってくる」

湊はふきんを戻すと、慌ててパタパタと自室へ行った。拓也は彼女の後姿を見送り、もう一度溜息をついた。

湊がリビングに戻ってくると、拓也はローテーブルに仕事の書類を広げていた。脇にはＭＰ３が置いてある。湊は持ってきたテキストの山を彼の脇に置くと、自分が教えるよりもこれらを読んだ方が早いだろう、と伝えた。彼女はもう、数年前に勉強した事がうろ覚えになっている。

「俺、ここでやってもいい？　自分の部屋だと誘惑が多くてさ」

「もちろん。だって元々自分の部屋でしょ、ここは。煙草も吸って

いいよ」
「え？」
「ヘビースモーカーが無理しちゃって。それとも健康が気になり始めた……訳じゃ無さそうだよね。その生活態度を見てれば」
「おいおい。そんな酷くないでしょ」
「煙草、嫌いじゃないよ」

隣に座って頬杖をつき、彼女はにこっと笑った。拓也はグッと息を飲み、再び目が反らせなくなる。
この不意打ちを食らわせるような笑顔がヤバいんだよ。あんた、分かってやってんの？

「懸命に仕事をしている人や人生を送っている人が吸う煙草って、深みがあるもの。女性でも男性でも、ね」
「……ふぅーん」
「家の中でくらい自由に吸いなよ。外ではちゃんとマナーを守っているんだからさ。あたしの事を気遣ってくれてたんでしょ？　ありがと」
「……でも、湊、吸わないじゃない」
「嫌になったらやめてって言うし、我慢できなくなったら容赦無く換気するし。っていうかヨシ、随分気を使うね。前から思ってたんだけど、」

気を使うなんてお前も同じじゃん。朝飯の件は何なんだよ？
そう拓也が思っていた時、湊はズイっと拓也を覗き込んだ。

「ヨシって怖がりだよね。ちょっとした対人恐怖症？」
「……えぇ？」

覗きこまれて、拓也は後ろ手をつく。近い近い近いっ。つか、何言ってる？

「だから周囲に気を配って、でも真の怖がりだから気を配っていると言う事すら悟られたくなくて、結果誰とでもフラットに仲良く出来るけど、実は自分の居場所を必死で捜している、っていうか？」

「……何、その分析……」

「それでイザ相手を自分の身内として認識すると、途端に凄く我儘になって、外で気遣いをした反動を持って帰っちゃったりしない？　自分のしたい事しかしない、欲しいものしか手にしない。相手に合わせるのが嫌で、時には一人になりたい、みたいな」

「……」

「で、そんな我儘でちょっと変わっている自分を自覚しているから、そしてかなりの寂しがり屋でもあるから、自分を愛してくれる人が欲しいです、って感じ。というか、一人になりたいのに寂しがり屋ってどういう事よ？」

長い睫毛の綺麗な瞳で覗きこまれた。大人の、どこか笑いを含んだ瞳。それがかえって柔らかく、色っぽい。

だけど言っている事がメッチャ恐ろしいし！

「……あんた、こえぇーっ！　どんだけ見てんの俺の事っ！！」

びっくりして目を見開き首をすくめながら、拓也は座った状態で後ずさった。

言われた湊は反射的にかあっと赤くなった。

「なっ、みんなの事もこれくらい見ていますっ！　あなたの事だけじゃありませんっ！！」

「こえぇーっこえぇーっ。あんた何もんっ？」

「おかしな鳥みたいな叫び方しないでっ！」

「毎日そんな事ばっかり考えてたら頭痛くなんない？　よくやってられんね？」

「しょうがないよ、性格なんだもん」

「それで何で自分の事は分かんないの？　人を本気で好きになれない、とか言ってたじゃん。そんなの、自分のその分析能力にかかれば一発なんじゃないの？」

「……うーん、何でだろ？　あんまり自分の事には興味が無いのかも」

湊はバカ正直に考え込み、首を捻った後でこう答えた。

「だって自分がどう言うタイプであれ、この世界を生きていかなきゃならない事には変わりがないから」

何が起こっても。どんな事が身に降りかかっても。どんな状況になっても。それでも地球は回っていて、自分は生きて行かなくてはいけない。自分がどんな性格かどういうタイプか、なんて話は、与えられた選択肢の中には入っていない。

「……ふぅーん……」

後ろ手をついたまま、拓也は人懐っこい瞳を丸くした。

「自分の事ばっかそんなデジタルで、疲れない？」

「……えぇ？」

「自分の気持ちだけは考えないようにする。それってかえって疲れない？　ま、俺もその手だから何となく分かるけど」

湊はマジマジと拓也を見つめる。

それから難しい顔をして考え込んだ。

「……」

「……」

「仕事、しよっか」

「そだね」

似た者同士の二人。こういう時もやっぱり、新しい意見や考えが浮かばない。だから諦めるタイミングも、同じ。
拓也は書類を開いた。
湊はテキストを開いた。

３０分後。

どうして昔から、勉強ってのは眠くなるんだろう？

「湊いいよ。もう寝たら？」
「うん……使えそうなページだけ……選んどくから……」
「いいって。もともと俺の仕事だし、後は自分でやるよ……て、おい」

彼女はテキストの上に顔をつけていた。

「はやっ。秒殺？」

のび太くん並みの眠りの落ち方に、拓也は口を開けた。この人本当に寝ちゃったのかな？
試しにそう……っと彼女の手を握ってみた。

「……わ、ぽかぽか。赤ちゃんみてぇ」

手の平が温かい、と言う事は、本気で睡魔に襲われたと言う事。

この間みたいなタヌキ寝入りでは無いらしい。

拓也は彼女の寝顔を見つめた。少し口が開いてマヌケ。昼間の隙が無い颯爽とした顔は、みる影も無い。さっきの色っぽさも、欠片も無い。子供みたいだ。

クスッと笑った。

よかった。この際、こっちの状況の方がありがたい。起きている時の彼女の、天然だか計算だか分からないあの雰囲気は身が持たない。

とても気持ちがよさそうだから、もう少しこのままにしてあげよう。

しばらく、彼女の手を握ったまま見つめ続ける。

それからその手をゆっくりと持ち上げ、顔を近づけると、

自分の唇を、彼女の手の甲にそっと押しつけた。

彼は耳にイヤホンを入れると、ＭＰ３の音楽をかけながら、書類とテキストを開きはじめた。

彼女が目を覚ましたのは3時間後。

ふと気付くと、まだリビング。曲げたままの足と、頭を乗せたままの手が痺れている。ついでに言うなら腰も固まっている。

状況が瞬時には理解できなくて顔をしかめていると、隣からすーすーと寝息が聞こえてきた。
見ると拓也が自分の足元で、床に大の字に寝転がっていた。耳にはミュージックプレイヤー。机の上には仕事の書類。お腹の上には湊のテキスト。

ポカン…としてから、徐々に思い出していった。そっか、あたし寝ちゃったんだ。その後もヨシは頑張ったんだ。で、もたなかったんだ。笑える。

初めて見る彼の寝顔は、本当にあどけない物だった。この子寝顔まで童顔だなんて、どう言う事？　しばらく見とれてしまう。
それから散らばった机の上に視線を移した。これ、あたしが片づけてあげた方がいいのかな、いやむしろ触らない方がいいのかな？　うーん、どっちを取っても後で文句を言われそう。

そうだ、もう少ししたら起こしてあげればいいんだ。

思いついて、安心した。そうと決まれば、あと小一時間くらいかな？　うん、それくらい寝かせてあげよう。それまであたし、何してよう。

部屋に戻る、という手段もあった。
部屋に戻って雑誌を読んだりテレビを見たり、マンガを読んだり映画を見たり。

でもこの時は、この場を離れたくなかった。

もう少し、彼と同じ空気を吸っていたい。

どうせ相手は寝ているんだから、あたしがどこにいようと関係無いよね？

彼女は再び視線を拓也に戻した。ああもうやだ、かわいいな。

こんな気持ち、正直壮太に対しても持った事がなかったかも。

舞彩に後ろめたい。脳裏に浮かんだ彼女の笑顔を、慌ててかき消す。

その時、拓也のイヤホンが目に入った。

彼、一体どんな音楽を聞いていたんだろう？

彼女はそっと彼の耳に手を伸ばした。ためらって、けれども少しづつ、指を近づける。

イヤホンを取る時、かなりドキドキした。自分が彼に悪戯を仕掛けているようで、どこかとてもイヤラシイ事をしている気になり、後ろめたささえ覚えた。

拓也の寝息は乱れなかった。やっぱり凄く疲れているんだ。

ドキドキしながら、イヤホンを自分の耳にはめた。再生ボタンを押した。

流れてくる曲に耳を傾ける。

湊は瞳を閉じた。

しばらくして、頬が緩んできた。

拓也の隣に、床に同じように大の字になって転がってみる。

なんだか彼と同じ空間を共有できたような気になった。すぐ目の前にある彼の部屋の扉が、向こうからすぅっと開かれた様な気分になった。固く閉ざされた彼の心の中に、入った様な気持になった。

天井が、まるで空の様にグルグル回っている感覚を覚える。

気持ちがいいな。

いつの間にか、彼女は再び眠ってしまった。

8（後書き）

いい歳した男女が、床の上でただ雑魚寝……もったいない（笑）

9

新宿駅朝９時集合。

９時１５分、拓也が息を切らしてやってきた。

「吉川、遅刻だぞ！」

上司（４０代、既婚）に怒鳴られた拓也は、肩で息をしながら手を膝につけ、その人懐っこい眼でためらう事無く彼を見上げた。ここが彼の、甘え上手な所以（ゆえん）。

「す、すいません。出かける直前に……すっげぇ信じらんないモノ見ちゃって……そいつ、追いかけてたら……」

「信じらんないモノ？　追いかけるって何をだよ？」

「それが……」

拓也は起き上がると、口を手の甲で拭って、苦笑いをした。

９時２０分、湊（みなと）が息を切らしてやってきた。

「藤堂！　お前どんだけ遅刻してるんだよっ！　一番最後だぞっ。早く乗れっ！」

「す、すみませんっごめんなさいっ！」

彼女は電車に飛び乗った。先輩同僚（既婚男）がやってくる。

「どうしたの？　藤堂が遅刻なんて珍しくないか？」

「……それが……出がけに、とんでも無い事が起こっちゃって……」

舞彩（まあや）も心配そうに近づいてきた。それでもチラチラと拓也をうかがっている。二人とも、なんで一緒に息をきらしているのかしら？

ここのところ、みなちゃんと吉川くんがなんとなく……シンクロしている事が多い気がする。

でもそれは多分、会社に入る前からのお友達だから……

「……ゴキブリが……」

「えっ？　吉川くんと同じ！」

思わず舞彩は叫んでしまった。仲がいいとゴキブリまで出るタイミングが同じなの？

それを聞いた湊はギクっとなった。しまった！

「……そ、そうなんだ……」

あ、あいつ先にネタばらしをしたなっ。くーっ早いもん勝ちってか？　卑怯モンっ！

もちろん、拓也と湊は一緒の電車に飛び乗った。ただ湊は、引っ越しをした事を会社には伝えていない。従って二人一緒に待ち合わせに遅刻したら不自然だろうと思い、新宿に着いた彼女は律儀にもトイレで時間調整をしてから、集合場所に向かったのだ。

普通こういう事、男がやるでしょ？　女に恥をかかすなよっ。っ

たく、こういう時は本当に要領がいいんだから！

「おう、なんかあいつんちは白いゴキブリが出たらしいぞ。すごく大きくて真っ白だから、すげぇ不気味だったらしい」

「……へぇ……」

「あのね、吉川くんが言うには、多分どっかのお家で白いスプレーをかけられて、そのまま脱走したゴキブリなんじゃないかって。すごくない？　信じられる？　巨大な白ゴキブリなんて人生で最高に恐い生き物だったって言ってた。うふふ。でもさ、ゴキブリにカラースプレーなんてかける人がいるかしら？」

「……ねぇ……」

舞彩の無邪気な笑顔に、湊は引きつった笑みを返した。何を隠そう、そのゴキブリに白スプレーをかけたのは彼女だから。

ゴキブリが大っ嫌いの二人は、これまた二人同時にパニックになり、湊は、隙間に逃げ込んだゴキブリを追いだそうと手近に置いてあったカラースプレー（拓也が趣味のプラモデル制作に使用して、廃棄しようとゴミ箱付近に放っていたもの）を引っ掴むと、そこにめがけて噴射した。

『うわあっっ！　何だコレっ！　気色悪いっ白い白い白いっ！』

『やだぁっ恐いっやだ恐いっ！　早く潰して潰してっ』

『お前何すんだよっ！　押すなよ俺をっ！　滅茶苦茶ブキミじゃねぇかっ。うわっ飛んだっ！　白が飛んだっ！』

『いやだぁーっ！』

二人してゲームセンターのモグラたたきゲームの様に床中をモノで叩きまくり、最終的に、その白い生き物は湊の手にかかって息絶えた。

『……あんた……それ、俺の……』

拓也の、靴で。

『ご、ごめん。だって少しでも面積が広い方がいいと思って（嘘です）』

『……（絶対、嘘だ）』

拓也の視線がかなり痛かったのを覚えている。

湊は笑いを強張らせながら、目の前の舞彩達に言った。

「うちは、あの……ゴキブリの他に、ネズミも出ちゃって……」

「ネズミィ？　藤堂んち、どんだけボロい所に住んでんの？」

「やだ恐ーいっ！　私、そんなお家に帰れなーい。みなちゃん、引っ越しなよ！」

「……うん。そうしようかな……というか、そうするつもり……」

もうダメだ。こんなに無邪気な舞彩をいつまでも騙してられないよ。いやむしろ、このシチュエーションに耐えられない。疲れすぎ

る。本当に早く部屋を捜さなきゃ。
湊は小さく頷いて、決心をした。

どうしてかしら？　二人とも、前と態度が変わったりしていないのに、何だかとても引っかかる物を感じる。
別に二人で特に仲良くしている訳でもないし、特に喧嘩をしている訳でもないし、見つめ合っている訳でも、目配せをしている訳でもないのに、
何だかすごく、気になるものを感じる。
そしてそれが、私を不安にさせている。

舞彩（まあや）は４人がけボックス席の、斜め前に座っている拓也を、そっと眺めた。彼は楽しそうに自分達と話している。今日は仕事から離れているせいか、いつもより賑やかにはしゃいでいるように見える。
拓也とは、付き合い始めてもその事を周囲には公にしない、という約束をした。「他人（ひと）にあれこれと詮索されるのはイヤでしょ？」と彼はにっこり微笑んだ。

イヤでしょ？　じゃなくて、嫌なんだ、じゃない？　つまり吉川くんは嫌なんだ。私とのお付き合いを、人に尋ねられるのが。

だから舞彩は反論出来なかった。だって好きで好きでどうしようもない人に、そんな事を笑顔で言われたら、反論出来る訳が無い。

それに彼は、会社ではその後も今まで通りの態度で舞彩に接してきた。良くも悪くも。
つまり今まで通り、あの大好きな人懐っこい笑顔で彼女に話しか

けてくるのだ。みんなの前で。

もちろん、彼はその笑顔で誰とでも喋る。分け隔てなく、喋る。だから舞彩は、そんな彼を遠くに見ると、素敵でカッコよくて益々好きになるのに同時に、すごく不安になった。

あ、誰とでも分け隔てなく、じゃないわ。

みなちゃんと喋る時、吉川くん、時々すごく不機嫌な顔をする。みなちゃんも時々、すごく冷めた目で彼を見る。

だから私、あの二人はむしろ仲が悪いのかしら、と思っていたくらいなのに。

何故だろう。今はとても気になる。何故だかとても、胸騒ぎがする。

その時、拓也と目が合った。

ドキッとする。すると拓也は優しくニコッと微笑んできた。

舞彩は益々鼓動が高鳴った。手にしていた携帯ストラップをギュッと握りしめる。彼に買ってもらったモノ。

『これが欲しいの？』

あの時、彼はみんなに気付かれない様に小声で話しかけてきた。

ストラップを笑顔で見つめていた舞彩はドキッとした。本当は欲しいと言うより、おかしなものを売っているなぁ、と眺めていたのだ。

彼は目を丸くしてそれを見ると、『変わってるね』と言って小さく笑った。

そしてそれをヒョイと手に取ると、さり気なく、でも素早くレジに行った。

『はい』

驚いている舞彩に買った物を渡す。慌ててお礼を言おうとした彼女を制し、拓也は悪戯っぽく、人差し指を唇の前で立てた。

『しーっ』

仲間にばれない様に、彼氏から彼女への、どうでもいい小さなプレゼント。そんな日常。

特別感、がぶわっと舞彩を包んだ。私はやっぱり、吉川くんの特別。

妙な不安感は今日で消える。だって今晩、私は彼を誘うんだもの。私の初めての我儘、きっと彼は拒まないわ。それぐらい、今の私の気持ちは本物よ。

それに、みなちゃんだってあんなに笑顔で、協力してくれるって言った。

美人で頭がよくて、優しくって誰の悪口も絶対に言わないみなちゃん。彼女の言葉に、嘘は無い。

みなちゃんは、私を裏切らない。

湊の楽しそうな声が、同じ車両の後ろの方から聞こえてきた。

身を乗り出してみると、彼女は四人がけボックス席に男三人女一人で座っていた。既婚者二人に独身一人。全員年上。狙われてるな

ぁ。みなちゃん、年上の男性がタイプみたいだし。

吉川くんは、確か年下の子がタイプだって言ってた。

舞彩は少し、安堵した。

どうやったってピッチは速くなると思う。

だって、話し相手がいないんだもの。

湊は笑顔でビールを飲み干した。

彼女は誰とでも楽しく話が出来るが、猫をかぶっている為に本人的にはかなり楽しめない。唯一気が合って楽しかったのが舞彩だった。だけど今日、舞彩は隣にはいない。

遠く部屋の隅にいる。楽しそう（？）に同僚と笑っている。

舞彩っ！　早くやっちゃって！　そしてあたしをベッドに戻らせて！

……戻れるのかな、ベッド。

湊は無言で立ち上がった。ここは貸し切りの座敷大部屋。早めの夕飯を皆で取った後に男女に分かれて温泉に入り、そして再びこの部屋に集合しての宴会になっていた。

彼女が立ち上がると、隣で楽しそうに話をしていた同僚男性が不思議そうに彼女を見上げる。湊は微笑みながら少し頭を下げると、そのまま部屋の外に出た。少し歩くと、庭を臨める外の渡り廊下に

出る。そこで夜の風にあたった。

他人の前じゃ、何杯飲んだって酔えない。あたしのプライドは高いから。

それに２９歳間近な女が人前で酔っぱらったって、みっともないだけよ。

手にしているポーチの中にはＭＰ３が入っている。昨日久しぶりに音楽を聞いたら、とても心地よかった。自分の曲を聞くのはもう殆んど一年ぶりだから、中には古い曲しか入っていない。それでも何となく聞きたくなって、今朝慌てて充電してきた。

それに手を伸ばそうとした時、後ろから声をかけられた。

「どうしたの、藤堂さん。具合悪い？」

振り向くと、げ。先程まで隣にいた先輩同僚。３０歳独身男性、酒癖悪し。普段はとてもいい人なのに、飲むととにかくセクハラをするのよ。

まあセクハラって言っても、この人は仕事上なんの強制力もあたしに対して持ってはいないから、厳密に言えばハラスメントじゃないらしいんだけど？

つまり、ビシッと跳ねのけた所で、今後自分の仕事に支障をきたす訳ではないのだけれど……現実は、中々そうは行かない。

それにこの人、普段は可哀想なくらい、小心者の小物なのよぅ……。

何か言ったりやったりしたら、ともするとあたしが悪者にもなりかねないくらいで……。

「いや、大丈夫です。ご心配無く」
「心配だよー。だって急に消えるんだもん。行くなよ」

……どーしてそーゆー台詞が出るかな？　なんでそこまで簡単に、自信満々に馴れなれしく出来るのかな？　あたしの目を見つめて、囁いちゃったりして。
チビなくせに。デブなくせに。酔わなきゃ、それでもイケてる時もあるのに。

「どこにも行きませんよー。戻っていて下さい。私もすぐに戻りますから」
「お前はそれまでどこにいるんだよ？　……一人じゃ寂しいだろ、俺が」

……お前って……シラフでは「藤堂さん、ごめんね、今いい？」なのに。
寂しいって……俺が、ってそんな意味深に言われても、あたし、激しく無関係だし。

「お手洗いに行きます」
「嘘だよ。行くなよ」

げっ！　腕掴まれたっ。

「寂しいって言っただろ。側にいてくれよ。……それとも二人でどっか行くか？」

「いえ。ですから私はお手洗いに行きます」
「何だよ。お前、俺の事が嫌いでそう言ってるんだろ？　トイレか？　俺も一緒に行ってもいい？」
「……」
どーしよう。可哀想だけど、みんなに突き出すか……。でもそんなことしたら、この人、これから仕事で村八分かもなぁ。気の毒だなぁ。上司に睨まれるだろうなぁ。日頃はあんなに小心者なのに……。
「なあ、俺も行くよ。一緒に行こうよ。どこ？　どこ行く？」
あーあ。もうあたしの腕をがっしり掴んで、抱きつきかねない勢いだよ。顔も目も真っ赤にしちゃって、酔いに勢いを任せちゃってるよ。こりゃあたしが何を言ってもダメかしら？　しょうがないなぁ、もう。子供だよ、子供。エロい、子供。
こうなったらもう、付き合ってやるか……
「先輩、この人、吐きますよ？」
……はい？
いきなりの台詞に、湊は目を剥いた。
ギョッとして振り向くと、そこには拓也が立っていた。

「この人、いきなり相手に向かって吐きますよ、ゲーって。酔っても顔には出ないんですよ。だからホント分かりづらくて」

ラフな短パンに両手をつっこみ、飄々と言う。

言われた同僚は、気まずい現場を見られた上にとんでもない事を言われたので、一瞬目を白黒させた。

「え？　そ、そうなの？　僕は、藤堂さんが寂しそうだったから、一緒にみんなの所に戻ろうと思って……」

「今からこれ、吐きに行く所なんです。気をつけた方がいいっすよ、急に来ますから。ちょっと、離れた方が、ほら」

そう言って拓也はさり気なく、同僚の手を湊の腕から離した。ニコニコしながら、さも湊が手のかかるしょうがない女だ、とでも言うように彼に意味ありげな視線まで送っている。苦笑して、ペコペコ頭を下げている。

頭を下げられた先輩は、慌てて離れると引きつった笑いを浮かべ、まさしく飛んで帰って行った。

……信じらんない。

「……ちょっと」

呆然と彼の後姿を見送った湊は、目を見開いて拓也を睨んだ。

「なんてみっともない事を言うのよっ」
「だって本当の事じゃん」
「恥ずかしいでしょっ。本当の事なら何を言ってもいいのかっ」

湊の勢いと台詞に、拓也は唖然として言った。

「……スゲー。貞操の危機より、自分のプライドを取っちゃうんだ。しかもそのプライド、メッチャちっちゃくない？」
「おいこら吉川っ！」

湊が思わず声を大きくした時、

「あ、みなちゃん」

舞彩がヒョイと姿を現した。
途端に湊は我にかえった。我にかえったどころか、現実に突き落とされた。
舞彩はどこか不安そうな、戸惑った目をしている。

「と言う事で、私はこれからお手洗いに行ってきます」

湊が姿勢を正して言うと、拓也はキョトンとした。

「はぁ？」

「吉川くん、助けてくれて本当にありがとう。あなたは空気を読むのが本当に上手い。恩人です。じゃあね、舞彩！」

ペコっと頭を下げ、最後に元気よく手を振って、湊は廊下を歩きだした。

拓也がポカン、としている。

湊の後ろで、二人の会話が僅かに聞こえてきた。

「吉川くん、あのね、見せたい物があるの。ちょっと今、舞彩の部屋に来てくれない？　お願い？」

「あ、うん。いいよ」

大部屋に戻る訳にもいかない。自室に戻る訳にもいかない。

あたし、どこに行けばいいのよ？

胸が痺れるように痛んで、無意識に胸元を握りしめた。

……温泉にでも浸かっている？　二時間……。

10　自覚

「どうぞ」
「お邪魔しまーす」
扉を開けた舞彩（まあや）の後に、拓也が続いた。彼女は緊張に顔を強張らせているが、彼はそれに気付かない。何も考えず気軽に足を踏み入れた。
拓也に背を向けて、舞彩は僅かに唇を噛む。
ついに来た。ここまで来た。……ここまで来ちゃった！　もう、後には引けない。
勇気を振り絞って、頑張るの舞彩。頑張れ、頑張れ。
だって絶対に後悔なんてしない。これは今、２３歳の私が今、一番したい事なんだから。私の一番の願いなんだから。
今これをする事には意味がある。私が今行動を起こす事には、絶対に意味がある筈なんだ。
そう思って、今まで準備をして来た。覚悟をして来た。
だから、やるんだもん。

そんな事を知らない拓也は、ツインベッドルームの中に置かれている荷物をふと見た。
そしてつい、言ってしまった。

「あれ？　藤堂さんと一緒の部屋なんだ」
「あ、うんそうなの。……どうして分かったの？」

「だって鞄……」

そこまで言って拓也は失言に気付いた。しまった、と咄嗟に口に手を当てそうになり、寸前の所で押し留める。

「鞄？　みなちゃんの鞄、分かるの？」

そんなに珍しいかな？　レスポの鞄って割と巷に溢れているけど。

「あ、そうそう。今朝駅で見た時……鞄が同じだなぁ、と思って」

「同じ？」

「そう。あの、姉貴のと」

「ああ、お姉さん」

言いながら舞彩は拓也の姉を思い浮かべた。たしか三つくらい年上のお姉さんって言ってたっけ？　じゃあ、みなちゃんと同い年くらいか。……でも、お姉さんの鞄の柄なんて、イチイチ覚えているものなのかしら？

一人っ子の舞彩には、見当もつかない。弟ってそんなものなのかな？　吉川くん、シスコンなのかも。

舞彩が思いにふけっている間に、拓也はそっと冷や汗を拭った。やっべ、超ヤベぇ。危なかった。

その時にふと、今度は机の上に置いてある物に気付いた。

それは湊のテキストで、昨晩、彼女が拓也に貸したうちの一冊。まだ彼が目を通していない本だった。

なんで湊、こんな所にまで持って来たんだろう？

拓也は眉根を寄せた。

ひょっとして、旅行先でまで俺に勉強をさせる気だったとか？

嘘だろおい、勘弁してくれよ。

「吉川くん」

不意に呼ばれて、拓也は弾かれた様に顔を上げた。

「あ、ごめん、何？　そか、見せたいものって」

「私と、シよ？」

消え入るような小さな声で、でもハッキリとした言葉。

拓也は驚いて舞彩を見た。

彼女は緊張と恥ずかしさのあまり大きな瞳が潤んでいた。それでも懸命に、拓也を見つめ続ける。

拓也は耳を疑う様な心境だった。

「……え？」

今、なんて言った？

「……ね？」

舞彩は泣きそうになりながら、それを堪える様に拓也を見上げ、小首を傾げた。長い睫毛に前髪がかかり影を落とす。綺麗な肌に、潤んだ唇。洗いたての髪が彼女の頬を滑る様に撫で落ち、甘いシャンプーの匂いがした。

彼が息を飲むと、それに合わせるように彼女の白くて細い首も、僅かに上下に波打った。

「……ここで？」

「うん。……ダメ？」

「でも……誰か入ってくるかも」

「鍵をかけるよ、もちろん」

「藤堂さんはどうするの？　同室だから鍵持ってるでしょ」

「みなちゃんには……事情を話してある」

ここで初めて、彼女は恥ずかしそうに目を伏せた。

その台詞を聞いた拓也は思わず目を見開いた。

そんな彼の様子を見る事無く、彼女は俯いたまま、どこかくすぐったそうに言った。

「頑張って、って言われた」

拓也は舞彩を凝視し続ける。それでも黙って彼女の言葉を待った。だってイマイチ、状況が飲み込めない。

みんながいる社員旅行先で、舞彩がこんな事を言い出すとは思ってもみなかったし、それに湊が絡んでいると言う事が理解出来ない。

理屈抜きで。

舞彩は視線を床に這わせながら、まるで今まで準備して練習して来たかのような台詞を、一気に言った。

「私、吉川くんがすごく好き。すごくモテて、経験豊富な吉川くんにとっては、私なんて色気が無い事くらい分かっている。でもね……」

そこで言葉がグッと詰まる。

拓也が相変わらず見つめ続けていると、彼女はおずおずと顔を上げて、真っ赤になりながら言った。

「色気、これから頑張って、一生懸命つけるから……」

消え入るような声で、縋りつく様な眼差し。
あまりの可愛さに、拓也は息が止まった。うっわ。
考えるより先に言葉がついて出る。

「舞彩ちゃんは今でも滅茶苦茶可愛いよ。じゃなきゃ付き合わねぇよ」

そう言って彼女の肩にそっと手を伸ばす。舞彩の顔が、まるで泣き笑いの様にパアっと輝いた。
切ない、恋する女の子の微笑み。
それを見た拓也はグッときた。

嬉しい。すごく、嬉しい。私、この言葉を待っていたの。
お決まりの台詞じゃなくって、型どおりのフレーズじゃなくって、吉川くんの、本気の本当の言葉を、待っていたの。

「じゃあ……キスして」

舞彩が、潤んだ瞳と潤んだ唇で、拓也を見上げる。
言われた拓也は一瞬、戸惑いを見せた。じっと彼女を見つめる。
そして少し切なそうに、目を細めた。

そっと唇を重ねる。
拓也のキスは、いつも優しい。舞彩はいつも、それだけで天にも昇るくらい幸せだった。

でも今日は、それじゃ足りない。

少し長めのキスをしながら、舞彩はおずおずと、唇を開いて自分の舌を彼の唇にあてた。

何度か往復して、彼を誘う。

恥ずかしい、やっぱりもうダメかも。

そう思った時、彼の唇が開いた。彼の舌が入ってきて、舞彩に応えてくれた。

初めての感覚に彼女はビクッとなる。

けれどもその後の感触に、彼女は一瞬我を忘れた。あまりの痺れと、陶酔感。

彼は角度を変えて、もう一度深く口づけてきた。

「……私の事、好き？」

唇を離したとき、彼女の声は掠れていた。

彼女の瞳は相変わらず潤んでいるけど、先ほどまでの様な緊張感はもうない。どこかぼうっとしている。

拓也はクスッと笑った。

「……好きだよ」

「……じゃあ、抱いて」

再び縋りつく様な色を見せる。拓也は当面の問題を思い出した。

「ここは、マズイよ。俺ら二人で長いこと消えたら、誰か絶対なんか勘付くし。そう言う事得意な奴、絶対いるから」
「いいもん、勘付かれたって。私はみんなに知られたっていい。だって恥ずかしい事でもなんでもないじゃない。人を好きって気持ちの、どこが恥ずかしいの？」

まくしたてるように言う彼女に、拓也は気押された。今まで舞彩がこれほど激しい自己主張をする所を、見た事が無い。
するとそんな彼の様子を見た舞彩が、急に不安そうな表情になった。

「それとも吉川くんは、私と付き合っている事がばれたら恥ずかしい？」
「そんな事ねぇよ。ある訳ないじゃん」

咄嗟に否定する。男の本能だ。
そこで慌てて付け加えた。

「でもここはマズイだろ？　俺達の上司だっているんだよ？　男はどうにでもなるけど……女の子は、なんか変な噂を立てられたら、一生モンの傷がつくって事もあるんだよ」

彼女の両肩に手を置き、少し体を離して、顔がよく見えるように屈んだ。まるで子供に言い聞かせるように。
その時彼の後ろが机に触れ、置いてあった湊のテキストが落ちた。

本能的に振り返り、拓也は舞彩から手を離してそれを拾った。
そこから一枚のルーズリーフが滑り落ちる。
それを咄嗟に掴んだ拓也は、書いてある内容が目に入り、眉根を寄せた。

「？」

そこには、湊の字で、テキストの内容と思われる抜粋や数式が書いてある。
資格試験受験時の物かな、と思ったけど、そうでもない。

拓也は目を見開いた。

その内容はまさしく、彼が求めているもの。
教えて欲しい、と彼女に頼んだ内容の一部が、コンパクトかつ丁寧にまとめられているものだった。

これ、俺の為にだ。

彼女がここにこの本を持ってきたのは、俺に勉強をさせる為なんかじゃない。
自分がこれを、まとめる為にだ。

俺に渡す為に。俺の時間を省く為に。
俺が仕事でかなりテンパッているのを、彼女は黙って見ていたから。

昨日の続きを、やってるんだ。

旅先で。当人ですら、放棄していたのに。

……何でだよ。どうしてそこまで。

今朝の彼女の寝顔が、脳裏をかすめた。

湊。

「……私、不安なの」

舞彩の声が背後から聞こえ、拓也は慌てて振り返った。
舞彩は、泣きそうな顔で彼を見上げていた。

「もう、いい子ちゃんでいるのが嫌なの」

お願い。拒否しないで。

「吉川くんの事が、世界で一番大好きなの」

お願い。うんって言って。

拓也は胸を掴まれる思いがした。この真っ直ぐな一途さ、覚悟を

決めた眼差し、取る態度こそ違うけれどまるで過去の自分を見ている様だ。
気持ちが、痛いほど分かる。

「……俺も」

拓也は瞳をキュッと細め、舞彩を見つめながら、テキストとノートを机の上に置いた。
そして、舞彩の大きな瞳を、深く深く覗きこんだ。

「君が、好きだよ。……世界で一番」

そう。俺はこの子が好きだ。こんなにも俺の事を一生懸命に思ってくれる、この子が好きだ。
こんなに真面目で可愛い子、俺には勿体無いくらいだ。
自分を愛してくれる人を、愛する。それは俺の理想じゃないか。
そして俺は、その子を一生大事にし続けるんだ。そう決めたろ？

だったらもう、何も迷う事は無い。この子に一生モンの傷がついたら、俺が責任を取ってやればいい。

舞彩の目が驚きと喜びで見開かれる。拓也はそっと抱きしめた。
目を閉じて、心の中で念じる。

彼女は、危険。
本気で人を好きになれない、って言ってたろ？　あれは、ダメだ。

俺じゃ、彼女を救えない。
一緒に、堕ちてしまう。

そして多分、彼女を滅茶苦茶にしてしまう。

温泉の入りすぎって……

「……おばあちゃんになって行く様な気がする……」

湊は自分の手を見つめた。お湯に浸かり過ぎて、手が皺くちゃだ。

「これってさ、効能成分がしみ込んでくるんじゃなくって、体内の水分を取られてってる気がするよ」

独り言。真夜中の１２時に、独り言。誰もいない、大浴場の脱衣室で。

「くたびれた。甘い物でも飲もう」

ジーンズにレイヤーカットソーを重ね着して、髪をラフに乾かした湊は手荷物片手に自販機の前に立った。イチゴミルク。いいねぇ、お約束。

ジュースを手に、手近な椅子に座る。ストローを指してごくごくと飲みながら、自分の事をホトホト呆れていた。

こうしてみるとさぁ、あたしって今更ながら友達が少ないよね。舞彩とヨシがいなかったら、話し相手がいないじゃん。いやヨシは、話し相手として頼ると痛い眼にあうけど。あの人、色んな意味で裏切るから。

ボーっと天井を眺める。

あとどのくらいで終わるのかなぁ。でも終わった直後の部屋に戻るってのも嫌だよなぁ。

しかし舞彩、ラブホに誘えない、ってよっぽど切羽詰まってたんだなぁ。女の子にそう言う思いをさせちゃうなんて、男としてどうよ、って話でしょ？

ふと、ポーチの中のＭＰ３を思い出した。

そうだ、久しぶりに音楽でも聞いてみよう。ここなら邪魔も入らないでしょう。

イヤホンを耳に入れて電源を入れると、見慣れないリストがあった。

『無題』とある。

「あれ？　何だっけ、これ」

開いてみた。ざっと１０曲程あるが、どれもこれも、見た事の無い題名だ。

「あれぇ？　こんな曲、あったかなぁ？　何だっけ、全然覚えてない」

ブツブツと独り言を言いながら、湊は再生ボタンを押してみた。何が入っているのか見当もつかないからビビってしまい、音量を最小にしてしまう。

だから当然、何も聞こえてこない。

恐る恐る、徐々に音量を上げていった。

のびやかな、男性シンガーの声が聞こえてきた。

あれ？　この曲、どこかで聞いた事がある。どこでだっけ？

感じのいい曲。気持ちのいい曲。まるで誰かの世界観を彷彿とさせる様な……

「！」

湊は思いだした。

これ、ヨシのプレーヤーに入っていた曲だ！！

「え？　え？　何で？　どうしてここに入っているの？」

湊は軽くパニックになった。だって全く身に覚えがない。次から次へと再生をしてみる。どの曲もどの曲も、昨日彼女がこっそり聴いた彼の曲だった。

あれ？　でも途中から曲に覚えが無いぞ？

……あ、そうか。あたしが途中で寝ちゃったからだ。

「！」

そこまで考えて、再び気付いた。

そうよ、途中で寝ちゃったって事は、あたし、ヨシのイヤホンつけたまんまだったじゃない！

え？　え？　あれってどうなったんだっけ？

その後の記憶が無い。えっと、確か次に起きた時はもう朝で、時間が無いから早く支度しろ、と急かされて……。

……つまり、あたしが彼のイヤホンを、寝ている彼の耳から勝手に外して、勝手に聞いちゃっていた事がバレバレ……？

一瞬かぁっと赤くなった。恥ずかしさが一気に襲ってくる。とにかくもう、ドキドキしてきた。なのにどこか甘い。

だって今朝は何も言ってなかったじゃない。まさかバレていたとは……。

彼、どう思ったんだろう？

再びふと思い直す。え？　じゃあどういう事だろう？　ヨシは、

あたしが盗み聞き（って言うの？　こういうの）をしたのに気付いて、それで……

この曲達を、あたしのコレに、内緒で入れた……？

彼の悪戯っぽい笑顔が、思い浮かんだ。
同時に、あの時の感覚が再び蘇ってきた。

拓也の、閉ざされた部屋の扉が、内側から開いた様な、あの感覚。
彼の世界観の、中に入れた様なあの感覚。

今は、耳から流れてくる彼の音楽が、湊を包み込んでいく。
彼の世界に入れたのではなく、彼の世界に包まれている様に感じる。

耳から彼の息遣いを感じるようで。
背中から彼に抱きしめられている様で。

湊は一気に、涙が溢れ出た。

なんでこういう事をするのよ。
甘えた様な、ちょっと得意げなあの笑顔。時々射るように見つめる、あの黒い瞳。
ひどいじゃない、何考えているのよ。どうしてくれんのよ。

なのに、自分じゃどうしようもないくらい、胸が痛い。

苦しい、苦しい。苦しくって苦しくって、胸が潰れそう。
どうしよう、どうしよう。これって、どうしたらいいんだろう。

彼はいつも憎まれ口を叩いてばかりなのに、時々こうやって、容赦無く人の心に割り込んでくる。強引に、鋭い一付きをあたしの胸に刺す。
さっきだって、あたしが絡まれているのを敏感に察知して、相手を潰す事無くあたしを守ってくれた。
さり気なく、自分の身内である事を言外に主張して。
そんなのちゃんと分かってる。ただ、それに引き寄せられて転がっていく自分が怖かったんだ。だからこっちも憎まれ口を叩いて、大急ぎであの場を去ったのに。

彼に掴まれた腕までが、甘く痺れて、痛い。

どうしよう。
こんな自分が怖い。他人に自分の心を縛られるなんて、依存させるなんて、怖すぎる。だって恋ってそういうもの。
なのに。

この歳になってまで、こんなに泣けるなんて。

どうしよう。彼が、好きだ。

１０　自覚（後書き）

あーあ……ますますややこしい（笑）

1

大人って本当に、いい。
だって好きな行動が取れるんだもん。
湊（みなと）はタクシーに乗っていた。

真夜中の1時。荷物は宿に置いてきた。だって取りになんて戻れない。
まさか自分がこんなに感情的になるなんて、信じられなかった。夜中に泣き腫らしてタクシーを拾うなんて、ドラマのヒロイン気取ってるのかっつーの。しかも「新宿まで」って言った時の、運転手さんの輝く様な驚きの顔。……一体、いくらかかるんだろ。うっ、食費削んなきゃ。あとエステも。ああ、マッサージも今週は諦めようかな。でも新色のリップは買いたい。あ、そうだ、今度こそゴルフに行こうと思っていたんだ。

……あたしって、色々と金のかかる女だったんだなぁ……。

はっ。そうではなくて。

ポーチの中をがさごそと漁る。現在の所持品はこれのみ。
携帯電話を取り出すと、まずは社員旅行の幹事にメールを送ろうとした。

……幹事って誰だろう。
……ヨシと舞彩（まあや）じゃんっ。

再び、後部座席でうずくまってしまった。
どーすんのよ。真っ最中の彼らを邪魔するなんて、あたしのプライドが許さないっ。ちっちゃくったって、ええ！

うずくまりながら、目を僅かに上げて電話帳を検索。いるかなー、適当な人。あ、上地さんのメアドが入っている。確かあの人も幹事だって言ってなかったっけ？

湊はメールを打ち始めた。もういいや、コレで。

本文
藤堂です。すみません、家族の容体が急に悪くなりました。
随分ひどい様ですので、現在帰宅中です。
慌ててしまい、皆さんにお声をかける余裕がありませんでした。
申し訳ありません。
よろしくお願い致します。

……うち、誰か入院している人がいたっけ？　お母さんもお姉ちゃんも元気だし。うーん、お母さんは膝が痛いって言ってたな。よし、それで行こう。

結局さ、後先考えずに行動しても、後始末をするのは自分なんだよね。こういう所で世間を捨てられないっていうか律儀になるっていうか、いずれにしても興ざめだよねぇ。
興ざめと言えば去年の冬に嘔吐下痢にかかった時、部屋で一人で

吐いちゃった後、一人で後片付けをしたんだよな。あれって虚しかったよなぁ……。

はっ。そうではなくて。

湊はズルズルと座席に身を起こした。

あたしってばどれだけ現実逃避を試みているのよ……。今現在、考えなくてはいけない事があるじゃない。

あの部屋には、戻れない。

ヨシが帰ってくるのは明日の午後の筈だけど、今のあたしは、あの部屋には戻りたくない。彼と顔を合わせたくないとか以前の問題なの。

……でも、今からホテルなんて無理だし……。

夜中に迷惑をかけても心が痛まない相手。湊は一人しか思い浮かばなかった。

電話をかける。コール5回。8回。10回……。鳴らし続ける。諦めません、勝つまでは。意地でも出してやる。

ついに相手が根負けした。

「お客様がおかけになった電話番号は現在使われておりません。お

時間をお確かめになってもう一度おかけ直しください日中に、ってんだ」

……妙なセンスだよなー、この人って。いっつも思うけど。

電話に出た泰成（たいせい）は、明らかに不機嫌な声を出した。だけど大きい。

声にも台詞にも遠慮が無い。そんな彼に今はホッとして、だから拓也は泰成が好きなんだろうか、と思った。

わざと、少し甘えた声を出してみる。

ところが口から出た声は、自分で思った以上に疲れていた。

「……まだ1時ー」

「だから真っ最中なんじゃねぇか、人が楽しんでいる所によぉ。何の用だ」

おおっと、こちらもお楽しみ中でしたか。

「……用がなきゃ、かけちゃいけない？」

うわっ。なんてベタな台詞。言った自分が恥ずかしくなってきた。

ところが。聞いた相手は、それほど恥ずかしくは無かったらしい。

拍子抜けするほど、簡単に話に乗ってきた。

「……何があった」

真剣な声。え、この人こんなんじゃ、今まで数多くの女の人に騙

されてきたんじゃないの？　よくこれでホストなんてやってこれたね？

「……何にもないー」
「じゃお前、俺に惚れてるのか？」
「それもないー」
「じゃ、嫌がらせかよっ。藤堂、社員旅行に行ってんじゃなかったのか？」
「そうなの。今帰宅中なの」

すると電話の向こうで、相手が絶句しているのが伝わってきた。

「……一人でか？」
「……うん」
「用件はなんだ？」

鋭く、短く。単刀直入に聞かれる。
湊は恥ずかしさを堪えて言った。

「……あのね、泰成さん。今晩……というよりしばらく、事務所に泊らせてもらっちゃ、ダメかな？」

ああこれって、いかにも「ヨシと何かありました」って言ってるようなものだわ。

ところが泰成は、それに関しては何も言わなかった。
しばらく無言が続く。電話の向こうで、衣擦れの様な音がした。
それを聞いた湊は、ベッドの中の女性を想像した。あの時の自分は酔っていたけど、それを差し引いても彼はかなりのテクニシャンだった。女性馴れをしている手つきだった。

「……そこまで甘えるんじゃねーよ。二、三泊なら置いてやる。その間に、何とか自分でカタをつけろ」

思いの外、厳しい台詞。湊は少し驚いて、少し落胆した。そしてすぐさま、頭を巡らせる。
……三泊。その間に部屋を見つけるのは無理だなぁ。
じゃあやっぱり、あの部屋に戻らなくちゃいけないのかぁ。そしたら逆に、今日から部屋に戻らない事をヨシにどう言い訳しよう……。

「じゃあさ。バイト、無い？　この間みたいに長いやつ」
「ないな。二件程お前に申し込みがあるが、どれも一晩も無い。数時間だよ」
「それ、いつ？」
「ＡＳＡＰ。お前が決めろ」
「じゃあ、明後日（あさって）と明々後日（しあさって）」

湊はきっぱりと言った。

「日中に」

電話の向こうで、再び沈黙が起きた。

「本業はどうすんだよ？」
「大丈夫。取らなきゃいけない休みだったから平気。とりあえずそれでいい？」
「……先方に聞いてみるよ」
「よかった。あたし、あと数時間で事務所行くから、部屋の鍵を開けておいてね」
「お前何様のつもりだ？　俺がどこにいると思ってんだよっ」
「お願いっ。さもなきゃ今晩路頭に迷う」
「迷ってろっ。あと3時間もすりゃ夜明けだっ」

ブチっ。勢いよく切られた。

「あ」

思わず携帯を見つめてしまう。それからふふ、と笑ってしまった。何故だか分からないけれど、根拠なんて無いけれど、彼は部屋の鍵を開けに来てくれると思う。そんな気がする。

「すみません、行き先変更します」

湊は運転手に、自分の……自分と拓也の家の場所を告げた。まずは荷造りをしないと。

大きな鞄を背負って部屋の鍵を閉めた時、時刻は深夜2時をまわっていた。

軽く溜息をつく。舞彩、あたしの事を捜しているかな？　いなくてきっと焦るだろうな。いやまだ気付いていないか。

ここはちょっとした住宅地なので、深夜にタクシーはそうそう走ってはいない。拾う為には、結構歩いて大通りに出なくてはいけない。

湊はとぼとぼと歩き始めた。

拓也の笑顔が、頭にこびりついて離れない。

みんなと一緒にいる時の、バカ騒ぎした笑顔。皮肉っぽい笑顔。優しい笑顔。

……真剣な表情。キョトンとした顔。……時々こちらを真っ直ぐに見る、丸い瞳。

怖い。こんなハズではない。私は誰かに依存したりしないし、振り回されたりもしない。

だから何も期待していないし、だから自分が傷ついたりもしない。

大丈夫。大丈夫。

私は何も願っていない。だから叶わないモノもないんだ。
大丈夫。大丈夫。

私は、これからも自分の足で歩く。だから自分を見失う訳にはいかないのよ。

だから。
だから。

「あれっ？」

どこからか、驚いた様な声がした。
それを聞いた湊は本能的に顔を上げる。何事かとあたりを見回した。

程なく、一人の若い男性が立っている事に気がついた。こちらを見ている。気のせいか。え？　気のせいじゃない？　あたしを見ている？

「……ひょっとして……ねえ、湊ちゃん？」

嬉しそうに驚いたように言う彼は、それでもこちらには近づいて来ない。だから湊もひたすら遠くから凝視するしかなかった。誰？
こんな夜中に。こんな知り合いいたっけ？　誰？　誰？

「……あ、コタロー！　……さんっ」

気付くと同時に大きな声が出てしまった。うっそ、信じらんないっ！　何でここにいるのっ？

彼女の言葉を聞いた彼はやっと、嬉しそうに近寄ってきた。

「すげぇ、滅茶苦茶偶然！　え？　こんな所で何してるの？」

興奮して彼も声が大きい。酔っているのかと思ったが、湊のすぐ前まで来た彼にそんな気配は無かった。純粋に、驚いているらしい。

大きな瞳が特徴の、整い過ぎるくらいに甘いマスク。それが全く嫌味に見えない、彼の爽やかな笑顔。

うっわー、オーラがキターっ。きらっきら！　目がくらむー。

「コタローさんこそ、なんでここに？」

「僕はここで知り合いと飲んでたの。で、一人帰るって言うからタクシー呼んで乗せたところ」

そう言って彼は、後ろにあるちょっとコジャレたバーを親指で差した。

それを聞いた湊は、ハッと息を飲んだ。

「……そっか！　タクシーって、呼べば良かったんだ！！」

「……え？」

コタローがキョトンとする。

湊は笑顔が引きつった。

「あたしバカだから、タクシーを拾える大通りまで歩こうとしていたんですよ」
「……その荷物。今からどっかに行くの？」
「ええ、まあ」
「……そうかぁ。急ぎ？」

彼はニコッと笑った。ああっ、やられるっ。

「よかったらさ、僕らと一緒に飲まない？」

その申し出に、湊は目を剥いた。

「ええっ。そんな訳には……」

彼は優しく笑いかける。

「みんな楽しいよ？」
「……でも……」

ゲーノージンと飲み？　だ、誰がいるんだろう。そもそも話について行ける訳がないじゃん。
今度は愛想笑いを浮かべながらも、彼女は自然と顔が俯いてしまった。ダメだ、やっぱ今日は疲れている。
いつもなら誰とでも適当に話を合わせられるけど、今日は無理だ。

だって泣くって、体力消耗するんだもん。しかも久しぶりだったから。

すると彼は「ごめんごめん」と明るく言った。

「みんなが楽しくったって、湊ちゃんが楽しめなきゃダメだよな。素性も得体も知れない連中が、こんな時間に女の子を誘うなんて。ごめんね、不躾な事を言って」

「いえ、あの、そんな」

今日の一連の騒ぎから、最も無関係な人を謝らせてしまった。それにあなたのその笑顔、不躾って言葉から世界で一番遠い所にあります。とんでもない。

「タクシー呼んであげるよ。ちょっと待ってて」

そう言って彼はポケットから携帯を取り出した。

湊は慌ててそれを制した。

「いいですよ、悪いですっ」

「……どこが？」

彼はプッと噴き出した。

おかしそうに、屈託なく笑う。

「悪い、だって」
「だって、あの、そんなにお世話になる訳には」
「こんなのお世話でも何でもないでしょ。それに女の子をこんな時間に一人にさせる程、僕、人でなしじゃないよ？」

優しい眼差し。多分、本当に人柄が滲み出ている。
もしこれが彼の演技だとしたら、天才的だわ、本物よ。

湊が見とれていると、彼は口角を上げてニヤッと笑った。まるで何かを企んでいる子供の様。

「じゃあさ。一緒にタクシーをつかまえに行こう？　……その間、僕と」

そう言うと左手を腰の後ろに、右手を高々と上げ、その手をヒラヒラと舞わせながら深々とお辞儀をした。

「どうかお話頂けませんか、お姫様」

その動作は優雅そのもの。指先まで、見とれる程美しかった。

貴族の騎士に突然、とんでもない申し出をされた様な気分。湊は知らずに、肩にかけてあった荷物をドサ、っと地面に落としてしまった。

あ、あたしとした事が。
でもこれに動揺するな、って一般人には無理な話よ、動悸が収まらないっ。

やっぱ早死にするーっ！

2

綺麗な姿勢でお時儀をした彼は、優雅に体を起こした。
見とれている湊と目が合うと、得意げに口角を上げる。それがまた、やんちゃに見えてかっこ可愛いかった。
この人ってやっぱ、自分の見せ方を知っている。プロだわ、かっこいいなぁ……。

「それにしてもマジで嬉しい。こんな所で君と会えるなんて。あの後俺、健悟の首絞めて連絡先訊きだして、すぐに君の事務所に電話して、申し込んだんだよ。桜川ありさ、を」

健悟って誰？　ああ、あのバカ殿社長か。桜川ありさって？　あそうか、あたしの芸名だ。
彼女がボーっとそう考えている間に、彼は近づいて、湊が落とした荷物を拾った。
咄嗟に彼女は慌てる。

「わわわっ、いいですよっ」
「あれ？　結構重いね。ひょっとしてプチ家出？」
「……」
「……え？　ひょっとして図星？　マジで？　あ、ちょっと……マズイ」

今度はコタローが段々と慌て始めた。あれ、暗い、……暗い暗いっ。俺何だか地雷踏んだみたいだ、どうしよう。

湊はどよーんと俯いて顔を上げない。彼は焦って考えた。

これは話題を変えるしかないのでは？　話題話題話題……

「そうだ。俺の本名ってさ、すごいんだよ。虎太郎（とらたろう）って書くんだ」

な、何を言ってるんだ、俺。何を言いたいんだ？　話題、ぶっ飛び過ぎじゃね？

「……えっ。小さい太郎かと思ってた」

ところが湊は驚いたように顔を上げた。それを見て虎太郎も驚く。は？　ここで喰いつくの？　……この子のポイントってどこ？

とは言え、内心ホッとした。よかった、地雷、回収できたみたい。

「でしょ？　子供の頃は人よりちっちゃかったし、いつもコタ、コタって呼ばれてた」

「……コタ。かわいい」

湊はクスッと笑った。今日一日疲れた彼女が、少しホッと出来た瞬間。

その様子が何だか自然に綺麗で、彼も自然に笑みがこぼれた。

「虎っぽくないでしょう？　名前負けしちゃって、昔は結構重かったんだよ」

すると彼女は目を丸くした。じっと彼を見つめる。うわ。今度は何だろう？

しばらくして、彼女はボソッと言った。

「……ううん、そんな事ないかも」

「え？」

「虎って、美しいじゃない。しなやかで、美しい。なのに威圧感があって強引。そして物凄く存在感がある」

空中をぼーっと見ながら、考えるように湊は言う。

そして彼に視線を戻すと、にっこりと微笑みながら言った。

「コタローさん、それ、全部持ってますよ」

虎太郎は目を見開き、呆然とした様に口を開けた。

彼女の笑顔に目を奪われ、彼女の台詞に度肝を抜かれた気分だった。

「……そんな事、初めて言われた。正直、容姿の事は色々言われた事があるけど……僕って、威圧感が、……ある？」

すると湊は困った様に眉を下げ、ゆるゆると視線を上空にさまよわせて、言った。

「……ない」

「あれ？」

「でも仕事になると、ありそう。命賭けていそうだから。威圧感も存在感も、強引さも持ち合わせていそう」

そして再び、彼に笑いかける。

「やっぱり、虎太郎ですよ」

しなやかな笑顔。

そんな表現があるならピッタリだ。なんて素敵に笑うんだろう、彼女は。前と言い、今度と言い。

虎太郎は片手で口を覆った。

「……ヤバい、はまりそう」

「はい？」

「いやあの……湊ちゃんって、なんであんな仕事をしているの？」

慌てて再び話題を変えてみる。今度は本能的に。

それを聞いた湊は、また考え込む様子を見せた。俯いて、小首をかしげる。

「……あたしも、演技をしてみたかったのかな？」

あなたみたいに。

「え？」

「……別人に、なりたかったのかも」

いつも別人になっている、それが仕事の虎太郎に、湊は自分でもよくわからない愚痴をこぼしていた。

「でも大人の駆け引きなんて、多少別人になった所で、やってる事は変わらない」

伏し目がちに前を見つめ、独り言のように呟く。

そんな彼女の横顔は、ついさっきの笑顔とはまるで違ったものだった。虎太郎（こたろう）は魅入られた様に立ちつくした。

その様子に、湊はふと顔を上げる。

「何ですか？」

「あ、ごめん……」

我にかえって咄嗟に謝った彼は、それでも、彼女から視線を反らす事が出来なかった。

「……」
「……」

一方の湊は、虎太郎に見つめられて次第に戸惑っていく。
な、何だろう……何が起こったんだろう……？　一般人には耐えられないその視線……。

「大丈夫だよ」
「え？」

虎太郎は視線を外さない。そのまま彼女の荷物をそっと降ろした。

「君って（僕にとっては）和み系だし。何があったのか知らないけれど、大丈夫だよ」

「……私が和み系ぃぃ？（しかも台詞に繋がりが無いっ）」

「君はいつもと同じ。だから、大丈夫」

そう言って彼はフッと微笑む。
湊はその台詞に、言葉を失ってしまった。

「大丈夫」

彼はダメ押しの様に言葉を重ねる。微笑んで、そっと彼女の頭を撫でた。

湊は絶句して、胸をキュッと掴まれた様な気分になった。

しまった。心の琴線に触れられてしまったっ。

「……私のいつも、知らないのに……」

ドキドキする。俯いて、まるでなんだか悪あがきの様な台詞を言ってしまった。

悪あがき？　何に対して？

あたし、どうなっちゃってるの？

虎太郎は彼女の頭を撫で続けながら、優しく微笑んだ。

「そうだね。でも当たってるでしょ？　確かめてみたいけど」

手の動きがすっと止まる。

湊は益々緊張してきた。だけど顔が上げられない。

「やっぱりさ、俺、桜川ありさじゃなくて、藤堂湊と、会いたい」

「……え？」

思わず彼を見上げてしまった。ハンサムな甘い瞳とバッチリ目が合ってしまう。

しまったっ、目が合ってしまったっ。一般人には限りなく不利な状況だっ早く反らさねばっ。

「素の君が、知りたい。……ルール違反だっていうのは分かっているけど……」

真顔の彼が、彼女の瞳を覗き込んだ。ううヤバい絡め取られた打破できないっ。

彼は真剣に、真っ直ぐに、そして柔らかに言った。

心地よい低い声で。

「こういうの、言わなきゃ始まらないし。始めないと、前には進まないし」

その瞬間、湊はある意味、彼の甘い瞳も忘れて頭が飛んでしまった。

……すご……。

これって、あたしには無い物だ。

それどころかこれは、あたしの弱点で、泣き所。コンプレックスだ。

この前向きさと、行動力。

一方の虎太郎は、フリーズした湊を見てヤバいっと焦り始めた。しまった、この子また固まってるっ。「あ、その前に彼氏がいるかどうか聞くべきだった」と言ってあたふたした。俺ってバカだ。いっつもよく考えないで行動するから、後から色々な取りこぼしに気付くんだよな、またやっちまったっ。

ところが湊は聞いてはいない。それよりも先程の台詞に捕らわれて、頭の中がそれしか考えられない。どうしても、尋ねずにはいられない。

「……でも、始めたせいで、前に進むどころか悪化するって事も……」

「はい？」

虎太郎は慌てて湊を見た。俺、なんか悪化させちゃった？　何を？　彼女になんかヤバい事、言っちゃった？　ねぇ、何を？

「物事って、言わなきゃよかった、とか、やらなきゃよかった、って事が多くありません？　だったらジーッとしてた方がよかったと言うか……」

言われた彼は一瞬時が止まり、目が点になった。

そしてしばらくして、明るく大きな声で言った。

「ああ、あるあるある。そんな事、俺しょっちゅう」

よかったーっ。何か知らないけど、俺が粗相した訳じゃ無かったみたい。あぶねぇーっ。

「でもさ。時間って進むだろ？　止まんないんだから、いくら俺らがジーッとしてたって、物事だって変わるんだよ。今変わるか、後で変わるかの違いでさ」

明るく爽やかに屈託なく、それ程何も考えないで虎太郎は言う。

「だからそんなに考え込まないで。ね？　大丈夫だから……って、あれ？　こんな事を話していたんだっけ？」

ん？　と頭を捻り首を傾げる。

湊は思わず噴き出した。それを見て、虎太郎も笑顔を見せた。

そして次の瞬間。

ふわ……と、すくい取られる様に、彼女は彼の両腕の中に閉じ込められた。わ、わ、何っ？

そして煌めく瞳で、甘やかに顔を覗きこまれる。ひゃ、ひゃ、やめてっ。

「さっきの話。藤堂湊さんは、俺と……岡谷虎太郎と、会ってくれる？」

ドキっとした。それが続く。ドキドキドキドキ……

魅惑的な、罠。頭が痺れてくる。
それでもいいかな、と心の片隅で思い始めてしまった。

それでもいいかな。
これでもいいかな。
これならいいかな。

……これなら、いいのかな。

「……岡谷、虎太郎……」
「うん。……どうかな？」

一体何の解決策になるのか分からない。
でもこの魅力的な微笑みに身を任せれば、この心の痛みを消せるかもしれない。

不安とも、悲しみとも、切なさとも、焦りともつかない、この痛みを。

湊は虎太郎を見つめた。

何かを言いたいのか、それとも息を吸いたいだけなのか、僅かに唇が開く。
虎太郎は彼女のその唇を見て、鼓動が一度、大きく胸を打った。
誘われる。

「おい」

いきなり男性の声が聞こえた。かなり低くてドスの利いた声。
ビクッとなって二人は我にかえり、かなり近づいていた顔を離した。
振り向くと車道脇に泰成(たいせい)が立っていた。
黒いセダンに腕を組んでもたれかかり、不機嫌全開でこちらを見ている。

「あ……」
「あ、三田(みた)さん？」

虎太郎が驚いたように、泰成の名前を口にした。三田泰成。彼のフルネーム。
泰成はキツイ眼で、虎太郎を見据えた。

「岡谷さん。うちの女の子と会うときは、自分を通して頂けません

か？」
「あ、ごめんなさい。たまたまそこで出会って……」
「ありがとうございます。彼女をこんな時間に一人で歩かせたのは、僕の不注意でした」

問答無用の受け答え。泰成は虎太郎に口を開く余裕を与えず、深々と頭を下げた。

「失礼を申しました。本当に申し訳ありません。ご迷惑をおかけ致しました」
「いや、迷惑だなんて」
「それでは失礼します。こちらからご連絡を差し上げますので」

そう言って今度は湊を見据えた。片手を彼女に差しだし、無言で「来い」と言っている。
虎太郎は驚いたようにポカンと、彼を眺めていた。ルール違反をしている自覚はあったが、ここまでの態度を取られる事にビックリしている様だった。

湊は、身が縮まる思いがしてきた。こういう時の妹は、危険を敏感に察知出来る。そして彼女は逆らわない。
ヤバい、怒らせちゃった……。

湊は荷物を拾い上げると、「ありがとうございました。それではまた」と小さく頭を下げた。その瞬間、二人で素早く目配せをする。話の続きは、また今度。しかしそんな様子を、泰成が見逃す訳が無い。顔色を変える事無く睨み続けた。

湊は黙って助手席に乗った。この人何で生計を立てているのかは知らないけれど、車は結構フツーだな。

泰成は無言でエンジンをかけて車を走らせた。そして、無言。

無言。無言。

おいー……。

「……あの……」

「……何やってんだよ」

ここは大人として湊が譲ってあげて（？）口を開いたら、泰成は不機嫌マックスの低い声を出してきた。

「何があったか知らねぇが、嫌な事があるとすぐ男にフラフラとついて行くのか？　この間と状況、変わんねぇじゃねぇか」

「なっ……」

その当人があんたの癖に、何エラソーな事を言ってんのよっ！三回もヤッといてふざけんなコラァっ！！

湊が思わず拳を振り上げかかった時、泰成は急にブレーキを踏んだ。

何事かと驚いていると、彼は体をこちらに向けて、怒りを込めて湊を睨みつけた。

「俺が雇っているのは売春婦じゃねぇ。慰めて欲しければ、自力で見つけた男買えよ」

湊はショックで、言葉を失った。

……あたし、そんなつもりじゃ……

「プライドを無くしたお前に用はない。仕事やめろ」

吐き捨てるように言う。湊は呆然とした。

信じられない。まさかここまで言われるとは思わなかった。

あたしはそんなんじゃ、そんな自分が辛いからって寂しいからって、誰とでも男の人と寝る訳じゃない。ただ彼とは話をしていただけで、そしたら話がどんどん進んでいっちゃって……。

本当に、そう？

本当に、寂しく無かった？

彼に魅かれたのは、本当にそれが理由じゃない？

本当に？

「……あたし、プライド、無い？」

湊は悔しくなって、不本意にも涙声になってしまった。

プライドが無い、なんて。あたしはプライドの塊よ。それが自分を保ってきたのだし、そのせいで自分が苦しんでいるのよ、今。

プライドがこんなに高くなければ、どんなにかみっともなく、自分の想いに突っ走れたのにって思っているのに。もっと早くに色々出来たのにって。

それでも相変わらず、泰成の声は冷たかった。

「……お前の仕事は客に癒しを与えることで、媚を売る事でもなければ縋りつく事でも無ぇ」

「……」

「今後もあいつにプライベートで会う様な事があるなら、この仕事は下りて貰う。わかったな」

湊は目を伏せた。

確かに。お客とこんな風になる女なんて、危なくてビジネスには使えないだろう。しかもお互い遊びの延長ならまだ良かったものの、今のあたしじゃそれも危うい。

「……わかったわよ……」

彼女は溜息をついた。誰かから逃げる為に誰かに走るって、やっぱり不毛な気がする。走った先でやっぱり怖くなって、別のどこかに逃げたくなるに決まっている。

だったらもう少しこの仕事を続けてみよう。冷めた、ゲーム感覚のこの世界は、あたしの病んだ心をリハビリするのに丁度いいかもしれないもの。

そんな投げやりな彼女の横顔を見て、今度は泰成が小さく溜息をついた。

もうあの客は、こいつにはまわせない。というより本気になってしまうような男は、こういう商売の客には向いていないんだ。あの沢畑って奴が俺に断りも無く、勝手に藤堂の所に寄越してきたのが悪かった。普通はまず、俺が客の面接をするのがルールなのに。

だいたいさ、藤堂。

こんな仕事をしている女を本気で好きになる男(やつ)なんて、どっか歪んでるんだよ、気をつけろよ。

……って、俺が言えた立場じゃないか。

「……」

泰成はもう一度横目で彼女を確認すると、黙って車を走らせ始めた。

しょうがねぇから拓也（あいつ）にも連絡してやらんと。俺ってよく出来た男だよなー。モテる訳だ。

2（後書き）

すみません。翌朝更新になってしまいました。頑張って毎日を目指しているのですが……一話平均が５０００字以上になってしまい、中々思うように進みません（涙）

はてさて。

この人達、どう引っかきまわしてやりましょうかね。

3

拓也は目を覚ました。

隣のベッドでは、酔いの醒めない同僚が大きないびきをかいてまだ寝ている。

寝返りを打ってみた。自分がうたた寝をしていた事に驚く。けれどももう、これ以上は眠れそうにも無い。

あっさりと諦めて、ベッドに腰掛けた。携帯を見る。朝の5時前。溜息が出た。

昨夜抱いた舞彩は柔らかかった。

頬を紅潮させ、たどたどしく彼の愛撫に応える彼女は、多分男の理想そのもの。

皮膚の滑らかさも、肌の柔らかさも、色も匂いも、何もかもが申し分無かった。

何より彼女が、心の底から拓也を欲している。ただ彼だけを、欲している。

これ以上望む物なんて、何も無い。

なのに。

頭の芯が冷え渡る。

多分、あの部屋が悪いんだ。あそこでやるから、脳の奥が疼くんだ。

視界に入れないように、机の上の湊のテキストを見ないように、心掛ける。

だけどそうすればするほど、その薄い本は存在感を増して、拓也の上に圧し掛かってくるようだった。

流石に舞彩も、一晩中側にいてくれとは言い辛い。

だからそれに乗じた拓也は、事が終わり、笑顔を見せて彼女を抱きしめた後、するりと部屋を出ていった。

まるで逃げ出すような心境だった。

そして、寝れない。

空が白く開けていく。

あの人、どんな顔してあの部屋を空けたんだろう？　彼女から打ち明けられた時、一体どう思ったんだろう？

……って、今更何を気にしているの、俺は。

思考回路が5時間前に戻ってるじゃない。いい加減割り切れよ、我ながら腹立つぜ。

その時、手の中にある携帯が鳴った。

見ると泰成から。何となく、嫌な予感がした。

そんでもって俺、嫌な予感って大抵当たるんだよね……。

「……もしもし」

かったるく、けれども内心警戒感たっぷりに電話に出ると、泰成の無遠慮な大声が響いてきた。

「あのさぁ。お前、姉ちゃんとヤッてる事、藤堂に話したのか？」
「はあっ？！　何だよそれっ」

思わず、叫び声に近い大声を出してしまった。ハッとして隣の男を見るけど、起きる気配が全く無い。
拓也はベッドから降りると廊下に出た。つい先程までまだ、辺りには宴会の名残が残っていたが、それが今は物音一つ、しない。
彼はヒソヒソ声で、しかし最大限に怒鳴った。

「泰兄（たいにい）話したの？！　嘘だろっ信じらんねぇ！」
「それを俺がお前に聞いてんだろ。ギャーギャー喚くなよ。そもそもお前が自分でまいた種だろ？」
「……」

不機嫌に黙り込む。その通りだよわかってるようっせぇな。
そして大きく息を吸いこんで、イラついた気分を落ち着けた。

「何も言ってねぇよ。彼女とそんな会話しねぇし。何でそんな事を聞くの？」
「ふーん。じゃ、なんでこいつはここに居んだ？」
「え？」

拓也は目を見開いた。耳を疑う。今、何つった？

「どこいるって？」
「ここ。俺の隣。今寝てる」
「……っ」

瞬間、絶句するとか呆れるとかではなく、頭にカッと血が上った。
全く分からない。
自分が何で頭に血を上らせるのか、誰に血を上らせているのか、さっぱり分からない。

泰成が電話の向こうで、面白そうに喉をクックッと震わせて笑った。

「今、焦ったろ？」

「……どーゆーつもり？」

「カリカリすんなよ。事務所のソファで寝てんだよ。しし、すげぇ寝顔だぜ。口が半開きになってて爆睡。こいつ寝ると色気ねーなー。客と夜過ごす時はどうしてんだろ？」

途端に、喉に空気が入ってきた。つまり自分が息を詰めていたんだと、気付く。
くそっ、からかわれた。遊ばれてんじゃん、俺。

彼女のあどけない寝顔を思い出し、それを泰成に見られた事にまで、今度は腹が立ってきた。

さっきからもう、色んな事に腹が立つ。

「……あんた趣味悪いね。色々と」
「あの部屋に帰りたくないとよ」
「……！」
「お前ら、何があったの？」

無遠慮にズバッと聞かれ、拓也は僅かに唇が突き出た。
何があったの、って……

「……何も、ない……」

無いんだよ、何も。

低い声で、ふてくされた様に言うと、電話の向こうの彼はわざとらしく納得してみせた。

「ほお。それが原因か」
「だから何も無いって……」
「客にふらついて結構ヤバかった」
「……」

客にふらついた？　彼女、東京で客を取ったの？　あの時間から？　何で？

「あいつらしくない。しかも相手は結構本気っぽい。面倒にならなきゃいいが。話が違うじゃねぇか」
「……」

美人で頭の回転が良く、空気が読めて出しゃばらず、自分を持って貞操観念が薄い。確かに湊をそう評して、拓也は彼に紹介した。
拓也が黙り込んでいると、泰成が呆れた様に言った。

「お前ってほんと分かんねぇよなあ。どうして彼女にこんな仕事をさすんだ？」
「はあ？　させてるのはあんだだろ？」
「そうじゃねぇだろ。俺が言ってるのは、なんでお前は彼女をこの仕事に選んだんだ、って事」

過去の会話からも今の口調からも、泰成が何を言わんとしているかが伝わってきて、拓也は益々膨れて口を尖らせた。

「……だって向いてるから」

敢えてワザと、論点を避けた回答をする。
案の定、泰成はイラッとしたらしく大袈裟な溜息が聞こえてきた。
ついでに盛大な舌打ちも。

「……そうやって一人で拗ねてろ。藤堂を突き放して、だけど手放せなくて。自虐趣味があるのはご勝手だが、俺やまわりを巻き込むなよ」

「……どういう意味？」

「こいつが何をしようと、引き留めるな。責めるな、誘うな。一人で勝手に嫉妬して、一人でその嫉妬に食いちぎられてろ。マスターベーションは一人でやれって事だよ」

拓也の瞳が、暗く冷たく沈んだ。とっくに気付いてる。泰兄は、俺の矛盾点を突いてんだ。

「……あんたの言葉、散漫しすぎて分かんない。もう切るよ」

冷めた声でそう答えた。

ところが泰成は攻撃の手を緩めなかった。

「お前は元カノに復讐してるんだ。俺がこんなに哀れになったって見せつけているつもりなんだろ。いつかこれが彼女に伝わればいい、ってな。だけどな、歪んだお前に付き合わされる周りの方がもっと最悪だぜ。関係のない女に、自分と同じ目合わせてどーすんだよ」

「……」

一方的に言いたい事だけを言うと、泰成は電話を切った。
部屋の奥を振り返る。彼女は規則的な寝息を立てていた。よっぽど疲れていたんだろうなぁ。あー、それにしても今晩は俺もよく働いた。流石にこの歳で徹夜は堪えるわ。もう眠りたい。
出来る事なら彼女を抱えてベッドに連れて行き、添い寝と行きたい所なんだけどねぇ。ああもったいない。

腕を組んで体を壁に預け、ニヤニヤしながら天井を仰いだ。

「あー、俺って本当にいい人。なんかご褒美、降りてこねぇかなぁ」

一方の拓也は、苦々しげに携帯の画面を見つめた。舌打ちをしそうになるのを、なんとか堪える。舌打ちすると彼の言っていた事を認めた様な気分になって、色々と敗北感に包まれそうだから。

「くそっ。なんてヒマなオジサンなんだよ、あの人」

まるで見合いジジイだ。カンケーねー事まで首突っ込みやがって、自分だって今まで見境無く遊んだ挙句に彼女の事を喰ってんじゃねぇかよ。それが偉そうな口をきくなよ、年上ってだけで。

とん、と壁に背を付き、廊下の窓から外を眺めた。

「……面倒臭い……かったりぃ……」

なんだか、こんなハズじゃ無かったような気がする。
面倒事を避けて、要領良く、適当にその場その場を楽しんできたつもりだったのに。

あいつ、いないんだ。
ここにも。部屋（あそこ）にも。

「……帰りてぇな……」

なんか疲れた。彼女がいないんなら、ゆっくりと部屋で煙草が吸える。

……そか。彼女、俺が煙草を吸うのを嫌いじゃない、って言ってた。
……それって、「煙草が好き」なんて言われるより、本音を言ってくれた気がする。

……そっか。俺、彼女の前で吸っても良かったんだ。

なんでこんなどうでもいい事を思い出すんだろ。

4

銀座のカフェで待ち合わせとなった。
外でお客と会うのは初めてなので、緊張する。

現れたのは、長身で痩せ形だが骨太。切れ長で鋭い目つきが印象の、かなりのイケメン男性だった。うっそ、すっごいカッコいい。大人のダンディズムって感じ。まだまだ若いけど、落ち着いた感じが更に魅力的。え？　この人、顔で当選したの？
スーツのジャケットを手に、彼はすごい存在感をまとってやって来た。

「こんにちは」

けれども向けられた笑顔は、予想外に爽やかな物。
それがまた、ギャップとなって堪らなく映った。わー、この人絶対モテる。遊んでいる事、間違い無し。成程ぉ、だからあたしが必要だったのね。誰か一人をピックすると、後で血みどろの戦いが繰り広げられる訳だ。うひょぉ、顔も頭も家柄も良くってお金を持ってる男って、苦労するのねぇ。

湊は立ち上がり、笑顔と共に綺麗なお辞儀をした。

「こんにちは」
「初めまして。藤田です、宜しく」
「田村です。宜しくお願いします」

田村桃。仕事の内容から言って、彼女の細かいプロフィール設定は今回は無用だ。けれども、泰成がこの偽名は必ず使えと言って来た。本名で仕事はするな、と。

貰った名刺には何だか色々と小難しい肩書と共に、「藤田祐介（ゆうすけ）」と書いてあった。やり手と噂の代議士３２歳独身。湊は政治の事は詳しくないが、その若さとスマートさと静かな強引さが有名だ、と聞いている。

いつもの仕事なら、相手の表の顔はなるべく気にしないようにする。出来る事ならあまり頭にも入れず、先入観を持ちたくない。素の、別人の顔を引き出してあげたい。しかし今回は彼の名前はおろか、彼の肩書も仕事も背景も、全て覚えなくてはならなかった。そしてそれをベースに、立ちまわらなくてはならない。

「今日は軽い打ち合わせね。事情は、事務所の社長さんから聞いているかな？」

「はい。パーティーに同席するように、申し付かっています」

「そんなに固くならなくていいから」

低く小さく、笑われる。思ったよりも柔らかい眼差し。

僅かに心が奪われてしまった。そうか、女性はこのギャップと笑顔に弱いのね。

彼女は最低限の情報しか持っていなかった。政治家のパーティーに同行する事。その為に知的な女性が望まれている事。しがらみが残るような女性は連れていけないから、外の人間を雇いたいとの事。

祐介は大人の男性らしい、穏やかな笑みを見せながら言った。

「二週間後に、地方で慈善パーティーがあるんだけど、僕が呼ばれているんだ。その中に遠い親戚の人がいてね。滅多に会わないんだけど、最近は会うたびに、女性の写真を持ってくる」

「……ああ。はい」

お見合い写真ね。成程。

「それを口頭で断り続けるのが、少々手間取り始めてね。ここら辺で一度、キチンとした女性を連れて見せた方がいいかな、と思い始めたんだ。それで、君に白羽の矢が立った」

「はい。わかりました」

他の女性を連れていくのが面倒だった、とは決して言わない。なんて洗練された言い訳。さすがだわぁ。

今回はまた、随分とビジネスライクな話だな、と思った。妙な雰囲気の演出も、駆け引きも何も無い。想像以上だ。

その分楽だけど、代わりに自分の中身が問われかねない。立ち振る舞い、会話の受け答え、知識、表情。

それらを全て駆使して、この男性(ひと)にふさわしい女性にならなくてはいけない。そして多分評価の厳しい、彼の親戚連中を納得させなくてはならないのだ。

これはかなり大変な仕事になりそうだわ。湊は口元をキュッと結

んだ。気合を入れて、全力で取り組まなくては。

「じゃ、面倒な事は後にして、とりあえずデートをしようか」
「え？」

明るく軽く言われて、湊は肩すかしを喰った様になった。驚いて顔を上げる。
彼は彼女を見ながら、楽しそうに微笑んだ。

「お互いの事をよく知らないと、上手く恋人になれないだろう？ああいう人達は歳の功だからね。すぐに見破られかねない」

そう言ってテーブルの上に、二枚のチケットを差し出した。

「……歌舞伎……」
「観た事はあるかい？」
「いいえ、まだ……観たいとは、思ってました」
「この演目は初心者でも楽しめる、有名どころだよ。一度観ておいて損は無い。さ、行こう」

彼は立ち上がると、ごく自然な動作で彼女の後ろにまわった。
湊が軽く会釈をして立ち上がると、彼は当り前の様に彼女の椅子を引く。
そして僅かに彼女を先に歩かせ、まるで自分がその後から付いて

くるお供の様に、さりげなく彼女を守る様にして店を出た。完璧なるレディファースト。せ、洗練されすぎっ。

自然と彼女の背筋もいつもより伸びた。やっぱりこれは、今までで一番、気が抜けないわ。頑張らなくちゃ。

「拓也くん」

夕方、外回りから帰ってきた拓也は残務処理をしていた。急に名前を呼ばれて、すこし不意をつかれて顔を上げる。

「……あ」

思わず中途半端な声が出た。そこに立っていたのは舞彩（まあや）だったから。

昨日はあの旅行の後、新宿駅での解散となった。お互いに特にこれと言った会話をする事も無く、それぞれが普通に岐路に着いた。

その後も軽いメールをやり取りしただけ。

そして今日もずっと話す機会が無く、今に至る。

舞彩は少し恥ずかしそうにしながらも、どこか戸惑っている様にも見えた。

手にしていた書類を彼に渡す。

「これ、下からの書類」

「どうも。ありがと」

拓也はいつもの笑顔でそれを受け取った。それを見た舞彩は、複雑な心境になった。

この笑顔、すごく素敵。

だけど全く、いつもと同じ。

拓也くんって、エッチする前も、後も、態度が全然変わらない。そりゃ職場なんだから、あからさまな態度をとるのはおかしいかもしれないけど。付き合う前も、今も、やっぱり全然変わらないし。すごい余裕、って感じがして、私はやっぱり不安になっちゃう。

おかしいな。

エッチしたら、この不安、消えると思ったのに。

実際あの最中は、彼はすごく優しくて、いつもよりずっと男らしくて色っぽくて、私は体も心も全てが満たされていた。万事解決、最高に幸せ、これ以上の望みなんて無い、って思ったのに。

足りない。

まだ、足りない。

足りないよ、拓也くん。もっと私を、あなたでいっぱいにしてよ。もっと見つめて、もっと抱きしめて、もっと囁いて、もっと口づけて。

もっともっと、私の事を欲しがってよ。

「……あの……」

「ん？」
「……今日は、遅い……？」

期待を込めて、思い切って尋ねてみた。幸い周囲には人はいない。皆忙しそうに席を立っている。
プライベートな会話は、一昨日の晩以来の気がした。本当は昨日だって、恥ずかしいけれどあの夜の続きを期待していた。帰りにどこかへ誘われるかも、と思っていた。
ところが彼は、他の同僚と共に、爽やかに別の電車に乗り換えてしまったのだ。

だから、いいでしょ？
今晩の予定を今ここで聞くくらい、彼女として許されるよね……？
ところが拓也は、申し訳なさそうに眉を下げるだけだった。

「んー、ごめんね。ちょっと読めないや。先に帰っててくれる？」

優しい笑顔。柔らかな口調。なのに舞彩は、顔が痺れるような軽い絶望感を感じた。
それを悟られないように、慌てて明るく笑う。

「あ、うん、そっか。頑張ってね」
「ありがと」

彼には全く、戸惑いが無い。可愛い笑顔。

拓也くんは、それで、いいの？

舞彩は一瞬俯いて下唇を噛み、それから思い出したように顔を上げた。

「そうだ、あのね。すごくヤバいものがあったの」

「え？」

「ちょっと来て。拓也君でないと分からないから、私困ってたんだ」

「え？　何の事？　仕事の話？」

「ちょっとドキドキしちゃって。私じゃどうしたらいいか分からないし、拓也君が来てみて。ね、お願い」

「あ……うん……？」

グイグイ、と舞彩が拓也の腕を掴む。真剣な顔をして、どこか切羽詰まった表情。

拓也は言われるままに腰を上げて、彼女に続いた。

そこは用具室。仕事に必要な書類様式集から文房具からパンフレットからなんでもあり、割と頻繁に人の出入りがある。

入り口で先輩同僚に声をかけられた。

「おう、吉川。後で俺の席に来て。染谷製作所の件」

「あ、はい、わかりました」

狭い入り口をすれ違い、拓也達は部屋の奥へと進んでいった。彼

は素早く室内を見回す。いくつもの棚が天井まで伸びて、所狭しと物が積まれている。特に変わった様子も無い。人もいない。

「ここに何があったの？」

そう彼が聞きながら舞彩に向き直った瞬間、彼女は背伸びをして、彼にキスをした。

「……」

いきなりの、キス。拓也は驚いて、目を見開いたままそれを受け止めた。

舞彩は唇をじっと押し付ける。

やがて、そっと、離れた。

彼はキョトン、として、丸い瞳を見開き続ける。

舞彩は上目遣いで彼を見つめ、小さな声でそっと囁いた。

「……ドキドキ、した……？」

拓也はなおも彼女を凝視する。

そして、ふ、と微笑んだ。

「……すげぇ、した」
「……やった」
「二度も、俺を騙したな」

人差し指で彼女の額を軽く小突く。
彼女は照れくさそうに、そこを両手で押さえた。

「言ったでしょ？　ドキドキして、私じゃどうしていいか分からないって」

恥ずかしそうに潤んだ瞳で見上げる。拓也は少し驚いたように彼女を見て、「ああ…」と呟いた。

「……じゃ、ヤバいものって？」
「……私の、心。困ってるの。拓也くんじゃないとダメなの」

顔を赤くしながらも、悪戯いっぽい笑顔を作る舞彩。嬉々としている。

拓也はそんな彼女を優しく見つめて、微笑みながら、ハッキリと言った。

「もう職場では、こういう事をやっちゃダメ」

しかし舞彩は舞い上がっていた。拓也くん、嬉しそう。喜んでくれてる！　私も超嬉しい！　幸せすぎてドキドキするっ。

「うん、わかった！　後でメールするね」
「オーケー」

拓也が人懐っこい笑みを浮かべると、舞彩は小さく手を振って、嬉しそうに駆けて行った。
拓也も軽く手を振って、それに応える。

「……」

ビ、ビビった～……。
まさか職場の、オフィスと言ってもいい様な場所で、あんな事をしてくるとは思わなかった！　人が来たり見たりされたらどうすんだよ！　ヤバいものがあったってそれ、俺らの事だから！

拓也は口を半開きのまま、息を吸う事すら躊躇った。今呼吸したら、溜息出そう。それを誰かに聞かれる事すら、何だか俺、怖い気がする……。

積極的な女の子（年上年下問わず）に迫られる、と言うのは拓也お決まりのパターン。
そしてそれに楽しく乗っかっちゃうのが、今までのお得意のパターン。

いやだけど今のはマズイでしょう。
あの夜と言いさっきと言い、あの子って実は最強の突っ走り系なのかもしれない……走り屋？

4（後書き）

だ、出してしまいました……腹黒大魔王を。
拓也と祐介の絡みって前作では殆んど無かったんですけど、どうするんでしょうね、これから。どうしよう？

舞彩ちゃん、積極的過ぎ？
いえいえ、これくらいフツーですよ、フツー。頑張れ女の子。

5

夜。事務所にて。女の子が４人。
玄関の扉が開き、泰成（たいせい）が戻ってきた。

「おー疲れ～」
「社長ぉ、おっそぉい」
「も、くたくた。家に帰りたいよぉ」
「あたし、間に合わないっ。早く鍵ちょーだい」
「悪い悪い」
「行ってきますっ」
「なっちゃん、相変わらず忙しそぉ」
「引っ張りだこ」

一人の女の子が部屋を飛び出していく。柔らかな巻き髪で生成りレースの白いワンピースがよく似合う、可愛い２０代前半の女の子だった。
そして部屋に残ったのは、完璧な化粧を施した２０代半ばの美人と、幼い顔だが厚ぼったい唇が色気たっぷりの女性、そして湊（みなと）と泰成。

湊はソファ前のローテーブルに、本を５，６冊積み上げて読んでいた。
発展途上国がどうの、冠婚葬祭がどうの、一冊で分かる世界のニュース、そうだったのかここが解説、テーブルマナー、歌舞伎……。
泰成は上から覗きこんだ。

「……お前、何やってるの？」

「ねぇ泰ちゃん。湊ちゃん、ずーっと勉強してるんだよ。も、凄い集中力。頭いい人は違うねぇ」

多少舌っ足らずな口調で言う唇の厚い彼女の言葉に、泰成は軽く顔をしかめた。

「お前、せっかくの有給休暇もっと楽しめよ」

すると湊は口を尖らせながら言った。

「だって今日のお客さん、大変なんだもぉん。要求がハイレベルで。聞いてよ、ちーちゃん」

泰成は肩をすくめてキッチンに行った。アイスコーヒーを入れながら、横目で湊を観察する。

なーにが「大変なんだもぉん」だ。猫かぶりやがって。滅茶苦茶プライド刺激されて、本気で没頭してるクセに。

現実逃避に、命賭けてるみてぇだぞ。

泰成の後ろで女子三人が「えー、うそー、信じらんなーい」とか「やーん、ヤバいでしょー」とか「そう言えばあそこのチーズケーキマジヤバいよ」とか言っている。て、おい。いつの間に食べ物の話なんだ。女ってのは本当に話題が跳びまくるよな。

「もう一晩中離してくれなくって、手もヌいてくれないしさー。睡眠不足で腰痛い」

「それはちーがヤリたかったからでしょ？　手を抜くってどっちの

意味よ」
「まあ、それもある。だって色っぽくって逞しいし」
「あたしは今まで3回しかシテ無いよ、この仕事で」
「え？　そうなのユミさん？」

湊が食いついた。ユミは美人顔を重々しくしかめてみせた。

「そうよ。だって相手が望んでいるのは恋愛であって、カラダじゃないんだから」
「でも恋愛の延長にカラダがあるんじゃなぁい」
「だからちーは本命にサクサク振られんのよ。自分を簡単にあげちゃダメよ。男ってバカなんだから」
「だって好きならシタくなるじゃなあい、当然でしょ？　それにシテみないと、体の相性だって重要だし」
「あんた仕事で体の相性求めてんの？」
「んー、それは別かなぁ？　シテみて、それで相手の性格を分析して、より希望するモノを与えてあげるっていう感じ？　更なる癒しとパラダイス」
「ドコで分析してんのよ、性格」

「……二人とも、偉い……なんか、愛を感じる……」

湊の言葉に泰成は力が抜けて、その場で座り込みたくなった。この会話のドコに愛を感じてんだよっお前は。
つかつかと三人に近寄る。
それに気付かないユミは泰成に背を向けたまま、得意げに朗々と言った。

「そう錯覚させるの。それが疑似恋愛。あたし達の仕事でしょ。愛してるって自分の事も錯覚させなきゃ、相手をその気になんてさせられないわよ。命がけで演技すんのよ」
「随分偉くなったじゃねーか」
「いたぁいっ」

後ろからユミの頭を叩いたら、彼女は両手で頭を押さえて泰成を睨み上げた。
そんな彼女を無視して、泰成は湊に言う。

「おい藤堂。次の仕事、時間だぞ。早くしろよ」
「あ、マズイ。行ってきます」
「湊ちゃん、誰？」
「沢畑様」
「えー、ちー、あの人苦手。すっごい人の事バカにするんだよぉ？なのにエッチが粘着質で」
「あー、しつこいよね、あの人。バカにされるのは自分のせいって気がするけど」
「だってぇ」
「あたしまだ、一度もシテないよ？」

笑いを少し堪えながら、湊は玄関に向かった。

「……うそ、ホントに？」

ユミの驚いた声が後ろから聞こえる。

ヒールの高いサンダルを装着して顔を上げると、いつのまにか目の前に泰成が立っていた。
いやに真面目な顔。

「……気をつけろよ。自分の目でよく見んだぞ」
「？　はい、行ってきます」

あのバカ殿ってそんなに危険人物なのかね？　じゃ途中で逃げ出そう。あ、その前に監視カメラの起動か。
そう思いながら、湊は事務所を出た。
扉が閉まる。
泰成は玄関で、閉まった扉をジッと見ていた。

「……」
「過保護ねぇ。オヤジの純愛ってやつ？　切ないわねぇ」

彼の背後に立ったユミが、ニヤニヤと泰成に言う。ちーも側で笑ってる。
ところが泰成は無表情で、ユミを無視して扉を見つめ続けた。

「……」

そして無言で踵を返し、部屋に戻っていく。
ユミとちーは、驚きのあまり口が半開きになった。

ユミがゴクっと喉を鳴らす。

「……ウソ。行っちゃった。まさか図星？」
「本気なの……？　泰ちゃんが？　……かわいそぉ……」
「（それって失恋が前提……）あんたが慰める？」
「あ、いいかも」

両手を頬にあてて、泰成の消えた部屋をウルウルと見つめるちー。
それをユミが白い眼で一瞥した。

「……」

奏（かなで）はカフェのテーブルに頬肘を付き、アイスカフェオレのストローをぽろ……と口から落とした。
信じられない、という風に綺麗な瞳が見開かれる。
繊細な高級アクセサリーが、耳元でサラ、と流れた。

「まさかあなたから別れ話を持ちかけられるとは思わなかったわ。
するとしたら絶対、私からだと思っていたのに」
「うん。僕も」

拓也は軽く口をすぼめた。肘を付いた姿勢で身を乗り出し、こち

らはブラックのアイスコーヒーを、ストローでグルグルと無意味に掻き回している。視線は先ほどから、そのコーヒーに注がれたまま。

奏はそんな彼の様子を、じーっと眺めた。

「どうしたの？　かったるい事は大っ嫌いな吉川クンが別れ話を持ち出すなんて、相当エネルギーがいったでしょ？　何があったのよ？」

「……なんか奏（かなで）さん、その言い方って身も蓋も無い……」

「だって本当の事じゃない」

「……」

拓也はガク……と俯いた。他人に言われるとミョーに凹む。俺ってそんなにやる気無いかな？　たしかにどうでもいい事多いけど。これでも色々と、細かく深く悩んでんのよ？

気を取り直して、机を見つめながら、ゆっくりと言った。

「……実は、新しい彼女が、思ったよりも一途で可愛いいい子で……大事にしたいなぁ、と……」

「ほおほお。建前ね。で、本音は？」

「……」

おい、一蹴かよっ！

この人、なんか泰兄（たいにい）に似ている……。根拠無く自信満々な所とか、エラソーな所とか、自分の事は呆れるくらい罪悪感無く棚に上げちゃう所とか……。

拓也はジロ……と上目遣いで奏（かなで）を見た。

彼女は両手で頬杖をつき、興味津々に拓也を見ている。

……しかも、その目。人を見透かすような瞳。誤魔化そうたってそうはいかないぜ、的な無言のオーラ。ホントそっくり。

別にそんなの無視して、テキトーな理屈を嘘八百並べるのって俺の十八番なんだけど、なんだかこの目を見ていると面倒臭くなっちゃうんだよね、嘘を付き通す事が。も、どうでもいいか、みたいな。絶対この人達の生体エネルギー、俺の二倍は放出されてる。

拓也ははあ、と溜息をつくと、こちらも片手で頬杖をついて奏を見つめ返した。

「最近俺に、同居人が出来たの。同居人っつっても、ルームシェアみたいに部屋は別々なんだけど」

「……その人がなんかヤバメなの？」

「うん。あなたの妹なの」

今度こそ、奏（かなで）は絶句した。

「……」

目を見開き、時が止まった様に拓也を凝視し続ける。

拓也はチュゥとストローでアイスコーヒーを飲み干した。

やがて彼女は驚き半分、呆れ半分で口を開いた。

「……それは……まあ……そこまでくると……無理よね、私とは……」

「でしょ？　どんな顔してあなたを抱けばいいか分からないし、どんな顔して彼女と顔を合わせればいいか分かんない。今更だけど」

「……まあ……ルームメイトとなれば……避けようがないもんね……職場まで一緒となれば……」

そして奏は椅子に深く座り直し、マジマジを拓也を見た。

「……今更、ねぇ」

「だから、ごめんなさい」

拓也は丸い瞳で彼女を見つめた。黒くて、少し潤んだ瞳。そして深々と頭を下げた。

彼女は苦笑する。

「……いいわよ。だってしょうがないじゃない。元々、どこまで続くか試してみるってところにスリルもあったんだから。面白かったわ、中々」

拓也も、ふっと微笑んだ。

「……俺も。奏さん、すごくいい女だった。今まで、ありがとう」

「こちらこそ。お互い身代わり人形としては、上々よね」

「……旦那さんとは上手くいってんの？」

視線を反らしながら彼が言った台詞を聞き、逃げたな、と奏（かなで）は思った。彼女を身代わりだと認める事は、湊を思って抱いていると認める事になり、今はそれが拓也にとってハードルが高いらしい。面倒な事になっているわねぇ。

「な・い・しょ。この間出張から帰ってきたの。だから最近夜が眠れなくって、腰が痛いの」

「はいはいはい。見た目も性格も良くってセックスが最高の旦那ね。フェロモンいっぱいの」

「んふふふふー」

「よかったじゃない。もうあんまり出張が長引かないといいね。いっそのこと付いてけば？」

「子供が小さいのに、何言ってるのよ」

「だよねぇ。会社も非情だよな」

拓也は俯いて小さく笑った後、顔をふと上げ、じーっと奏を見つめた。

自分のカフェオレを飲んでいた彼女は、視線に気付いて拓也を見る。

彼は丸くて黒い瞳を彼女から反らさず、探る様に言った。

「ねぇ。僕らの事、泰兄（たいにい）にバレたよ？」

「泰兄？」

「三田泰成（みたたいせい）」

「三田……ああ」

彼女は思い出したように頷くと、事も無げに言った。

「この間、会ったわ」

「知ってるよ。そんであの人、勘付いたんだもん、僕らの事」

「えー？　見かけによらずに鋭いのねー彼」

「ねぇ。なんで泰兄（たいにい）と話したの？」

「だって偶然に会ったんだもの。昔の知り合いと話ぐらい、するでしょ？」

すると拓也はぷっと吹き出し、口元を片手で覆いながら楽しそうに笑った。

椅子に深く座り直し、からかうように言う。

「独身時代の知り合いホストと、結婚後に子連れでお茶？　奏（かなで）さん、そこまで危ない橋を渡る人だとは思わなかったんだけど」

おまけに俺との事もあるし。

「旦那さんと、何かあったの？」

少し首を傾げ、拓也は面白そうにからかうように聞いてきた。

彼の笑っていない眼。それを見ながら、奏は笑って言った。

「随分話が飛ぶわね。どうしてそうなるの。ただ懐かしかったら話をしただけよ」

「……ふーん」

訝しそうに疑いの目を向けながら、拓也は再び背もたれに身を預ける。

今度は奏が身を乗り出してきた。

「ね、最後に一個お願いがあるの」

「何？」

「どっか遠くに行かない？　知り合いがいない所。そこでデートをするの。日帰りでもいいから」

「……」

「別にえっちしなくていいし。ただ普通のカップルみたいに、街をぶらぶらして、ご飯食べて、またぶらぶらして。私達、暗闇の中でお互いの顔も確かめないで、する事だけする、て状況、多かったでしょ？　なんか勿体無くない？　こんないい男と女が」

「……奏（かなで）さん、やっぱなんかあったの？　旦那さんと」

今度は冗談で誤魔化さない。拓也は真顔で、本気で尋ねた。

「何もないわよ」

奏は先程と同じ表情で答える。

何も無い。
それは最近、俺自信が言った台詞だ。
何も無い。

だからってそれは、状況の変化を否定する言葉ではない。

「いいでしょ？　一方的に捨てられる可哀想な女の、最後の頼みなんだから」
「……何だよ、それー。またすぐ、そーゆー事言うー」
「じゃ宜しくね」
「うわ、強引ー」

拓也は大きな声を上げ、勘弁してくれとばかりに椅子に沈み込み天井を仰いだ。
そんな彼を見て、奏はくすくす笑っていた。

「ただいまー」
「お、早かったんだな。面接は？　上手く行った？」
「うーん、やっぱ難しいわねぇ。優奈は？　もう寝た？」
「今寝た所。本を3冊も読んであげたよ」
「ありがとう」
奏は夫の洋一と軽いキスをした。

「私、お風呂に入るわね」
「どうぞ。優奈は大きくなったなぁ。風呂でも大はしゃぎで疲れたよ」
「ありがとう。お疲れ様」

洋一が雑誌を片手にリビングに行く姿を笑顔で見届け、彼女は二階の寝室に向かった。
ワンピースを脱ぐ。クローゼットに仕舞う。
脇にはジュエリーボックスがある。

「……」

彼女はその小さな引き出しに手を伸ばした。そこから封筒を取り出す。中には、数枚の写真。

洋一と女が、腕を組んで仲良く街を歩いている姿を、隠し撮りしたものだった。

童顔だが唇の厚い、色っぽい女と。

5（後書き）

あーあ、あーあ。

6（R）

扉を開けた湊は呆然とした。

「……え？　どういう事？」

まさか３Ｐ？　それはお断りしたい。そんな趣味は無い。

目の前には本日のお客様、沢畑健悟が何故か憮然とした顔つきで立っている。今日も見事な七三分けだ。しかも光ってる。暑苦しい。顔が濃いから余計に暑苦しい。

そしてその隣には、恥ずかしそうに居心地悪そうにしながら、困った様に沢畑を横目て見ている虎太郎（こたろう）がいた。

「僕が連れてきた。彼にバトンタッチしようと思いまして」

沢畑がいかめしい表情で、堅苦しく言う。

「はい？」

「彼から話を聞いたんだけど、君の事務所の社長さん。出来る人なんだろうけど、ちょっと融通が聞かないね。思い込みが激しい、という感じがする」

……それは、あなたの事ではなくて？

「あれこれと人の事を決めつけるのはどうかと思う。そもそも恋愛

は自由な筈だ」

湊は訳が分からず、彼の隣に立っている虎太郎を見た。

「……あの……？」

虎太郎は眉を下げて沢畑を見ている。瞳と口元が、おかしさを堪え切れない、とういう様に笑っている。そしてそのままの表情で、湊を見た。

「僕ね。あの後……この間の日曜日、三田さんに呼ばれたんだ。それで、湊ちゃんには会わせられない、って言われた」

「……うん」

それは知ってる。だってあたしも直接そう言われたもん。

この人に直接会ったら、クビだ、って。

まあ、どっちでもいいんだけど。

「それを健悟に伝えたら、こいつ、やたら怒りだしちゃってさ」

「客と従業員が外で会うのはルール違反だ、とか、興味本位で気軽に手を出すな、とか、トラブルの元になるからやめて欲しい、とか、色々言われたようだが、それのどれもが当てはまっていない。いやまず前提として、仮に当てはまっていようと本来、人の心は自由だ。誰にも縛る事は出来ない」

沢畑はまるで街頭演説を始めるように、胸を張って（二人を見ず）、滔々と語りだした。

うわキタ、始まった。

虎太郎と湊は、気持ち半歩、後ずさった。

「まず虎太郎は今現在まだ、『クエンチング』の客ではない。従って何をどう行動しようと自由だ。第二に、こいつは気軽に手を出したりしない。興味本位は否定しないが、新たな行動と言うものは大抵、興味本位から一歩を踏み出すものだ。まずは興味を持って、そして行動を起こしてみる。どんなに下調べを積もうと、最初の一歩は皆同じだ。それにトラブルの元になると言ったが、具体的に何の説明もなされていない。説明が出来ない事とは、根拠が薄いと言う事だ。経験則で物事を言われても、それを他人がすんなりと受け入れる事は難しい。これは彼に原因があり、虎太郎には無い」

……この人、どうしちゃったの？

そう言う目で再び虎太郎を見た。虎太郎は驚いたように彼を眺めている。顎を引いて、眉間に皺を寄せている。でもやっぱり口元は笑いを堪えている様で、面白そう。

湊は軽いめまいをおぼえた。

どーすりゃいいの……？

「従って僕は、彼の無根拠かつ支配的な言動には意味が無いと考えた。だからこいつを連れてきた」

まるで何かの宣戦布告の様に、鋭い目つきで宣言をする。

湊も自然と、眉間に皺が寄った。

「……えっとつまり……それは……」

やっぱ3P？

警戒心たっぷりに沢畑を見ると、彼女の心の声が聞こえたのか、沢畑は湊を見返して不機嫌な顔をした。

「君は賢くて多分聡明なのに、デリカシーに欠けた所があってそこが勿体無い。人の些細な心の機微を感じ取る事が上手くないね。相手の想いとか、何を考えているかとか、もう少し丁寧に見たらどうだい？」

……あー、これが身内なら絶対殴ってた。客であるのがホント、惜しい。

「つまりね。二人でどうぞご自由に、って事だよ。どこでも好きな所に行って下さい」

「えっ？」

「この時間は、僕が買ったから」

してやったり、の笑顔。どこか陶酔している感すらある。

「……なんで……」

そこまですんの？
というかその笑顔。なにがそんなに楽しいの？

湊の質問に、沢畑はキラキラと言った。

「僕はこいつにとんでもない借りがあるんだよ。それを差し引いても、こいつには幸せになって欲しい。いとこである以前に親友なんだ」
「お、ありがとう。よかった、でっかい恩を売っといて」

虎太郎が笑顔で、さらっとそれに乗る。まるでそれを見越していたかの様。え？　ちょっと待って？

「でもお客様と勝手に外で会う事は……」

状況に付いて行けない湊は、一瞬たじろいだ。

だって、訳ありなお客様に、人目に触れない別世界と癒しをあげ

るお仕事だもの。先日の藤田さんとの一件は特別扱いだけど。

彼女の台詞を聞き、沢畑は自分の邪魔をされた様な顔をした。

「分からない女だな。さっき言ったでしょう？　こいつは、客じゃない。つまり今から君は、プライベートなんだ。煮るなり焼くなり振るなり、好きにしたらどうですか？」

湊は唖然とした。虎太郎を見る。彼が湊を見た。クスッと笑う。ハンサムで綺麗な顔にある大きな瞳が、甘くきらめいた。

「好きにして下さい？」

その言葉にあらぬ事を想像してしまい、湊は生唾を飲んだ。ああ、あたし腐ってる。でもだってその台詞、あたしの仕事でしょ？　ズルイ、あたしよりも色っぽく言わないでよっ。

「でも……」

「はい、行った行った。じゃ」

沢畑は追い立てるように二人の背中を押して、玄関から出す。ガチャン。カチャリ。

ご丁寧に、鍵まで締められた。

嘘でしょ？　あたし追い出された？

鍵、どうやって社長に返せばいいのよっ。

「……えっと……」

困って斜め上目遣いに虎太郎を見ると、彼はもう堪え切れない笑いを、拳一つで必死に抑え込もうとしていた。ちょっと。

「あいつ今頃、自分に感動しているよ、絶対。哀愁漂う悲しみを背負った男、みたいな？　湊ちゃんへの失恋をじっくり味わっているんじゃないかなぁ。プライドの高い奴だからさ、きっと引き際を得る事が出来てホッとしてるんだろうな」

「……はあ」

つまりあたしは、切られた、と？　そっかぁ、引っ張りすぎたかなぁ。個人的には嬉しいけど仕事的には失敗よね、これって。

「根はいい奴なんだよ。前にも言ったろ？　おまけに単純で……理屈や筋のあわない事には、我を忘れて正そうとするんだ。そうなると大変なんだよな」

戸口の前で立ち話をするのもなんなので、二人でエレベーターに向かう。

彼の言葉を聞いて、湊は考え込みながらポツリ、と言った。

「……ああ、でもそう言う人って、脆いですよね」
「え？」
「相手に理屈で言い負かされると、一気に自分のプライドが崩れて収拾がつかなくなりそう。それどころか、そこに付け込まれると、相手に支配されちゃいそう」

エレベーターの扉が開き、一階に着く。
湊は降りたが虎太郎が付いて来ず、振り向くと彼はまだ中にいた。すこし驚いたように彼女を見ている。

「……虎太郎さん？」
「……すごいね、湊ちゃんって」

言いながら慌てて降りて、彼女に近づく。湊はキョトンとした。

「え？　何が？」
「その人を見る目。すごいと思う。才能だよ」
「そうかなぁ」
「そうだよ。役者って人を観察する能力も必要だから、すごい羨ましい。いいなぁ」

そう言って眼を反らし、拗ねた様に膨れて見せる。その仕草がやたらと可愛かった。

「……ぷっ」

湊が噴き出すと、それを見た虎太郎も口角を上げた。目が柔らかく細められる。

「じゃ、デートしようよ。どこに行きたい？」

「……デート……」

正直、困ってしまった。いいのかな、こんなんで。

でも目の前にいる彼はとっても優しそうで、それに何より、彼女がずっとファンだった人。ずっとテレビで見続けていた人。完璧な、ルックスの人。

気付くとボソッと呟いていた。

「……中華料理が食べたい」

言って自分で驚愕。ちゅ、中華料理？　なんて色気が無いの？　どんだけ食べるつもりなのよ。

虎太郎も驚いたようだった。

「中華？　二人で？　それってがっつりすぎね？　人数が必要だし……」

「で、ですよね、すいません」

しょぼんと頭を下げると、途端に彼は慌てだした。

「うそ。あ、ちょっと待って」

あたふたと、携帯を取り出す。

え、何でこの人が慌てるの？　湊にはさっぱり解らない。

随分しばらく待たされた。彼は携帯をいじったり、誰かにボソボソと電話をしていた。

そして急にクルッとこちらを振り向いた。

顔が、キラキラと輝いている。何、その眩しいオーラ。同じキラキラでもバカ殿とは質が違うわ。

「お待たせ。じゃ行こうか」

「どこへ？」

「二人でも楽しめる中華。友達に聞いたんだ。少量で、沢山の種類が楽しめる所。美味しそうだよ、行ってみよう」

湊はビックリした。

一つは、この短時間にこの時間に、そんな事を聞ける友達が複数いる事。

もう一つは、そこまで自分の為に動いてくれた事。

彼の柔らかな瞳が、愛おしそうに自分を見つめている様な気がした。

ドキドキ、する。

泰成（たいせい）は考え込んでいた。事務所のソファに座って、ウィスキーのロックを傾ける。

沢畑の元に湊を行かせた。その後の展開は読める様な気がする。それでもいいかと思えたのは、岡谷と二人で会った時、思っていたよりも好感を持てたからだ。少なくとも、湊を色眼鏡で見たり、歪んだ愛情をぶつけたりしそうには見えなかった。

まあ、何の足しにもならない事をグダグダと思い悩んでいる様な奴には、ああいう素直で余計な事を考えない奴がお似合いなのかもしれない。

だけどすっきりしねぇな。

湊と虎太郎はお酒を飲んでいた。お洒落な中華料理屋の小さな個室。

先程から彼は饒舌で、心の底から楽しんでいる様だった。

いいなぁ、この人。素直で。嬉しい事は嬉しい、って全身で表現している。美味しいものは美味しい。

一緒にいると、自分まで嬉しくなってくる。素直になれる、気がする。

「湊ちゃんってお酒強いねぇ」
「ああ……そうかも」
「羨ましい。俺、飲むとすぐ赤くなるし、すーぐ楽しくなっちゃうんだよなぁ」
「今、楽しくなってるでしょ？」
「そうそう、わかる？！」

そしてまた嬉しそうに、大きな声で笑うと両手を後ろについて天井を見上げた。
ふっと笑い声を収め、微笑んで上を見ている。

やがて優しい眼差しで、湊を見つめた。

「初めて会った時、君、僕の空気感が好きって言ってくれたでしょう？」

「え？　ああ、そうかも。だってファンなんだもん。コタローの演技、すごく好き」

「君の空気感も、相当だと思うよ」
「？」

意味が分からず湊が小首を傾げると、彼が一瞬真顔になった。

彼女は本能的に、ドキン、とする。
虎太郎の顔が、アルコールのせいで僅かに赤かった。

「背筋がピンと伸びて、しっかり者ってイメージがあるんだけど…
…笑顔が、マジでいい」

湊を捉える、魅力的な瞳。男性なのに、唇が色っぽく見える。

「……それは……どうも……」

彼の視線と唇の動きに捕らわれて、曖昧な返事しか出来ない。動きまで封じ込められた気分。
そんな彼女に、虎太郎はそっと近寄ってきた。

ジッと見つめ、掠れた声で聞いてくる。

「前の続き、してもいい？」
「……」

泰成に邪魔された、未遂のキス。
湊は頷く事も出来ず、だけど彼から視線を反らす事も出来なかった。
虎太郎はそんな彼女をじっと観察すると、ゆっくりと、顔を近づけてきた。

そっと重なる唇。

湿った、柔らかい感触。

信じられない。私、コタローとキスしてる。女優さんって、演技の時に彼とこんなキスをするのかなぁ。

そう思っていると、彼は少し唇を浮かせ、角度を変えてまた口づけてきた。再び柔らかい動きに、口を封じ込められる。

何度かそれを繰り返しているうちに、そっと背中を抱きしめられ、舌が入ってきた。

ぞわっとくる。

それからぞくりときて、少し戸惑ってしまった。

そして戸惑っている自分に、戸惑ってしまった。

「ヤベぇ」

虎太郎の熱っぽい囁きが漏れた。

「スゲー気持ちいい」

そっか。この人は気持ちいいんだ。じゃあ良かった。

そんな冷静な想いが頭を掠めた時、彼の右手が彼女の胸に伸びた。

唇は相変わらず、湊の口を犯したまま。

あ、と思った瞬間、彼の爪が胸の突先を軽く引っかいた。

「……っ」

体を走った電流に思わず湊が反応すると、虎太郎はそれに気付いて、何度かそこを責め始めた。

「んっ……」

ヤバい、体は反応するんだ。

そう思っていると彼の手は、胸の大きく開いたカットソーのボタンを片手であっさりと外した。

そして湊の唇から離れると、下着をずらして簡単に、彼女の胸に唇を寄せた。頂きを口に含む。

「あっ……！」

自分でも情けなくなるくらい、甘い声が出た。

それが止まらない。

「あっ……んっ……ここ……人来たら……アッ」

彼は手と口を使って、湊の胸を責め続けた。彼女はかろうじて、座敷の上に倒れ込むのを留めている。従って、まるで彼の頭を座った状態で抱きしめているかの様な体勢だった。

でもここで倒れたら、あまりにも押し流されすぎな気がする……。

「はっ……ぁ」

なのに声が止まらない。鼓動が速くなる。息が上がってきた。
このまま、流されてもいいかな。あの時と同じ想いが蘇ってくる。
でも今度は、誰も止めには入らない。

彼だったら、どうやって彼女を抱いたんだろう？

必要以上に切なくなった。でもおかげで湊は、やっとの思いで虎太郎を引き離す事が出来た。

彼の瞳は熱に浮かされた様に、欲を孕んでいた。

しばらくお互いに見つめ合う。お互いの息は荒く、唇は濡れている。

「結構、拷問」

虎太郎が呟くように言った。苦しそうな顔。

「……ん……」

湊も呟いた。確かにこれは、拷問だ。

虎太郎が言った。

「場所、変えよう……？」

その時、湊の携帯がメールを受信した。
その音で、なんとなく我に返る。彼も真顔で、少し身を引いた。
湊は鞄から取り出すと、メールを開いた。

一瞬、目が見開かれる。
それを見た虎太郎は、なんとなく不安になった。

直感する。

メールの相手、あの夜の男なんじゃないだろうか？
彼女にあんな表情をさせた、原因の男。

そしてそれは、あの事務所の社長なんかじゃ、ない。
彼女の心に巣食う、別の男だ。

虎太郎は整った瞳で、じっと彼女を観察した。

あのね、湊ちゃん。男にも第六感ってあるんだよ。
たまにしか、働かないけどさ。

拓也は部屋で、携帯をじっと眺めた。
やがてそれを閉じる。

「……」

天井に向けて、紫煙をくゆらせた。
やっぱ旨いな、煙草。

あ、そう言えば俺、夕飯ロクに喰ってないわ。
……なんかめんどくせー。

「どうしたの？」

虎太郎に聞かれ、湊はハッと顔をあげた。

「あ、あの会社の同期から……」
「会社？」

虎太郎が首を傾げる。
湊は再びハッとした。

「あ、あの……普通の会社員なんです、私」
「そっか」

彼が微笑む。湊はその笑顔を見て、訳も無く切なくなった。

「あの……あたし、もう帰ります……だって、今日、初めてのデートだし、……展開が早すぎると言うか……」
「藤堂さん」

虎太郎は真顔で向き直った。
湊がドキッとした様に彼を見る。
虎太郎はふと、彼女の胸元に視線を落とした。自分が乱した後がある。

見えない相手にちょっとした優越感を覚えながら、彼はその胸に両手を伸ばした。
ビクッとする彼女の服のボタンを、そっと留めていく。服を整えてやる。
彼女は戸惑った様子を見せた。

「僕と、付き合って下さい」

湊は大きく眼を見開いた。
一瞬にして、頭の中が真っ白になる。

……何ですって？！

「……あの、でもあたし……」
「俺に本気で惚れて貰うまで、君の裏の仕事、続けていいです。そんな事言う資格もないからスゲー偉そうなんだけど、でも大丈夫だから。俺、こう見えても結構しぶとくて我慢強いんです」

そういうと虎太郎は、瞳にグッと力を込めた。

「君が好きだから」

その瞳に、湊は自分が絡め取られる様な気がして来た。

「……私……」

どうしよう。なんて言えばいいんだろう？
こんな真っ直ぐな告白を受けるのは、本当に久しぶりだわ。
でも私……

その時、拓也の言葉が頭の中に鳴り響いた。

『俺の事が好きな子と付き合う。当り前でしょ？　決まってんじゃない』

すーっと頭が冷える。
きゅーっと胸が切なくなる。

……それが、確かに、理想的なのかもしれない。

「……そんなに……恋愛に没頭するタイプじゃ、ないかも……それでもいいですか？」

湊は虎太郎を見つめ、瞳を揺らしながら呟いた。
あなたに、どこまで夢中になれか分からない。
そう伝えたつもりで。

「いいよ」

虎太郎の瞳が、甘く、愛おしそうに細められた。

「君の笑顔が、手に入るなら」

6（R）（後書き）

難産しました……。

人の事を本気で好きになるのが怖い、って割と普通にあると思うんです。傷つくのが怖い、って。

だから自己防衛してしまう人を、作者は責められません。割とそういうタイプなんで（苦笑）

7（R）

暗闇の中、そっと体を起こした。
相手に気付かれないように、ベッドから抜け出そうとする。

「どこに行くの？」

ベッドに腰掛けて足を降ろした時、後ろから手首を掴まれた。
振り返ると、彼がうつ伏せの状態で片肘をついて、腕を伸ばしている。シーツが腰まで下がり、裸の上半身が露わになっている。
均整の取れた体。男性なのに、滑らかな肌。
その上にある、信じられないくらい均整のとれた甘いマスク。

彼女を見つめる瞳は、彼の身体のどんな部分より、甘い熱で彼女を誘っていた。

それを見た途端、ほんの小一時間前に終えた情事の熱を思い出し、湊は自分の下奥がぐっと疼くのを感じた。
はあ、と吐息を洩らす。心と身体を沈める為に。シーツを手繰り寄せ、慌てて太腿から胸までを隠す。
けれどもそれを見た虎太郎（こたろう）は、自分の欲がますます煽られた気がした。
彼女の色っぽい表情から目が離せない。

「……もう、帰らなきゃ。明日から会社だし」

「帰るって、どこへ？」
「え？」
「家出してたんじゃないの？」
「あっ……」

思わず言ってしまった。そうだ、あの夜、彼に見られていたんだ。
虎太郎が真っ直ぐな瞳でこちらを見上げる。湊は努めて、柔らかな笑顔を作った。

「違うよ。ちょっと事務所に泊りこんでいただけ」
「何で？」
「……」
「ごめん、俺が詮索する事じゃないね」

彼が眉を下げて、自嘲する。湊はあえて何も答えず、ただ微笑んだ。

でも虎太郎さん、あなたのおかげで帰れる決心がついたの。
あなたが、あたしの心のストッパーになってくれるだろうから。
バランスを、取ってくれるだろうから。

彼に、傾かないように。

なんて言える訳が無い。

「あたしこそごめんね、先に帰っちゃって」

「あのメールのせい？」
「……え？」
「あ、また詮索しちった」

そう言うと彼は起き上がり、湊の腰に手をまわす。そっと引き寄せ後ろから抱きしめた。
湊は一瞬彼が何を言っているのか分からなかった。彼が耳元で膨れた様に、「ほら、中華料理屋で……」と呟く。やっと心当たりを見つけ、ぷっと吹き出し、クスクスと笑った。あたし、この人といると噴き出してばかり。可愛いなぁ。

「違うよ。あのメールは同期の女の子から。あたしの荷物の件で」

そう、舞彩からだった。
湊の旅行の荷物が会社にある事、そして彼女の家族の具合を心配する内容。湊は嘘をついているので、その文面を見たときにはちょっと心が痛んでしまった。

「あ、そうなんだ。ごめん」
「ふふふ」

焦った様なホッとした様な声が耳元に響く。湊はそれが心地よかった。
正直、彼とのセックスよりも。
首を傾けて彼の顔を間近に見る。

「拗ねてる？　虎太郎さん」
「虎太郎って呼んでって言ったろ？」
彼は口角をあげると、彼女を抱きしめている腕にグッと力を込めた。
低くてよく通る声が、艶っぽく、彼女の耳をくすぐる。
「まだ、君の体に教え足りない？」
そう言うなり彼の両手が彼女の胸を掴んだ。
優しく揉み上げ、後ろから、突起をきつく摘まれる。
途端に鋭い甘さが、彼女の全身を貫いた。
「ちょ……あっ……」
「このまま溶かしてやりたい、君の事。そしたら足なんか無くなって……」
後ろから囁かれる、誘惑の息遣い。首筋にかかる吐息。ぞわりと粟立ち、甘い電流を増幅させる。
湊は自分の呼吸が甘くなり、再び下が蕩け始めるのを感じた。
「立てなく、なるだろ？」

「……や……それ……揶揄になってない……あ……」

彼女の口から短く何度も吐き出される息遣いに、虎太郎は我慢が出来なくなった。

体ごと彼女を傾けその後頭部を掴むと、深く深く、口づけをする。

俺、溺れてんな。でも手放したくない。もっと欲しい。もっと溺れたい。もっと味わいたい。

もっと。もっと。

長い長いキスの後、湊はやっとの思いで彼を引き離す事が出来た。

勢いそのまま、シャワーを浴びる。

なるべく、余計な事は考えないようにした。

手早く身支度を整える。

虎太郎はベッドの上に再びうつ伏せになって、腕に顔を預けてこちらを見ていた。

静かな眼差し。今まで見た中で一番、大人な男の表情。

目が合った湊は、自分が吸い込まれそうに感じてグッと来た。

心の中で押し留めて、優しく微笑む。

「またね」

「うん。メールしてくれる？」

「うん」

穏やかな別れ。ホテルを出て、大通りを歩きながら、湊は夜の景色を眺めた。
きらびやかなネオン。行きかう車達。

「……こんなものかぁ」

声に出して、呟いてみた。
どんなものも、終わってみると、大抵、あっけない。

初体験の時もそうだった。
ハタチを過ぎて友達はほとんどが済ましていて、彼女はなんとなく焦ってきていた。
本当に好きな人と、なんて思っていたら、あたし一生出来ないんじゃないかしら？　だって本当に好きな人、っていうくくりが既にあたしにはレベル高すぎる。そして曖昧すぎる。

だから、当時一番仲の良かった男友達の壮太と、流れに任せてシテみた。
正確には、その流れを作ったのは湊本人だ。壮太は戸惑いながらも、丁寧に抱いてくれた。

あの時も思ったな。こんなもんかぁ、って。
こんなもん。
人生って、こんなもん。

あたし、多分、割と誰とでも出来ちゃう。生理的に嫌いでなければ。

現実って、こんなもの。

だから、大丈夫。生きていける。

「おはよー。おはよー。起きてー」
「……」

爆睡か。

「起きてー。朝だよー。遅刻するよー」
「……んー…」
「ほら、遅刻しちゃうよ、起きて」
「……っ！」

拓也は跳ね起きた。

「あ、起きた。朝ご飯出来てるよ」

髪をアップにしたスーツ姿の湊が、ベッド脇から彼を見下ろしている。

拓也は丸い眼を更に丸くして、呆然と彼女を見上げた。

「……え？　え？」

訳が分からない、という困惑した表情。長めの前髪が寝癖であちこちに跳ねあがって、少年みたいで可愛い。顔全体が寝ぼけてるし。

「二度と起こさないから。今日だけだよ、早くして」

湊は笑いたいのを堪えてそう言うと、彼の部屋を出ていった。

拓也は呆然としたままベッドの上に座りこみ、彼女の消えた扉を見つめていた。

「……どうなってんの？」

訳の分からないまま支度をしてリビングに行った拓也の目の前に、本日の朝ご飯。

「……」

「何突っ立ってるの？　座って食べたら？　遅刻するよ？」

彼女は既に自分の食器を片づけている。
そしてテーブルの上には、ご飯と納豆とお味噌汁。
ただしその納豆は生卵とメカブがたっぷりと和えられており、味噌汁はすりごまたっぷりの冷製。

「……何このスタミナ満点朝ご飯」
「お腹減ったんでしょ？」

悪戯っぽく湊は、手にした拓也の携帯をフラフラと揺らして見せた。
それを見た拓也は顔色を変えて飛び上がった。

「あっ、おまっ、返せよっ！」
「おおっと」

物凄い勢いで飛びかかって、湊の手からひったくる。
そこには未送信のメールが一件、表示されていた。

宛先は、藤堂湊。
題名は、無題。
内容は、一言。「腹減った」

昨夜彼が意味も無く打って、そのまま送る事も出来ずに放置したものだった。

「人のケータイ見るなんてどーゆー神経してんだよっ」

顔を真っ赤にして拓也が叫ぶと、湊は腕を組んで偉そうに言った。

「自分が共同スペースに放っておくのが悪いんでしょー？　おまけにこれを目覚ましにして起きてるんだったら、ちゃんと手元に持っときなさいっていうの。うるさいから今朝のアラーム、切ってあげたのよ？　そしたら勝手にその画面が出てきたの」

「……っ」

ぐうの音も出ないとは、まさにこの事。

拓也は久しぶりに、湊相手に敗北感を持った気がした。こいつっ。

ニヤニヤと彼女が、勝ち誇ったように笑う。なんなの一体、ちくしょーっ。

「ふふーん、そんなにあたしの手料理が恋しかった？　よしよし、拓也くん」

「……あんたが料理しないと、誰が喰うんだよ、冷蔵庫の中身。今日ゴミの日なんだけど」

「あ、そっちか」

湊はスットボケた表情で、つまんなさそうに言った。

拓也は益々膨れて、彼女を上目遣いで睨み上げる。

湊は飄々と冷蔵庫の前に屈みこみ、扉を開けて中身をチェックし

始めた。

「でりけぇとだねぇ。賞味期限なんて過ぎたって大丈夫。ちなみに消費期限も多少過ぎたって大丈夫。あ、これも平気」

「……それ、間違っても俺に喰わすなよ？」

「いいから早く食べなさい」

まさしく姉の様に上から目線で（しかも綺麗な流し眼で）言われ、拓也は再び赤くなった。

不本意だと言わんばかりにドサッと座り、「いただきます」と低い声で言った後、乱暴に食べ始める。くっそお、しかも旨いじゃん。昨夜飯食ってないから、余計に止まんないじゃんどうすんだよ。食べ過ぎて吐くんじゃないの俺？

そんな彼を得意げに観察していたら、うっかり時間が過ぎてしまい、

湊は拓也と同じ電車に乗る羽目になってしまった。やだ大誤算っ。

ずらそうにも、これ以上後ろにずらしたら遅刻してしまう。今日は拓也も寝坊したせいで余裕が無い。

「あなたどこ行くの？」

ホームを入って拓也と別方向に歩こうとしたら、彼に手首を掴まれた。

ギクッとなって振り返る。その間にも次々と乗客が来て、二人が邪魔だと言わんばかりにぶつかって行く。

「え、だって二人一緒に乗って、誰かに見られたらヤバいかなぁ、と」

「歩いている間があったら並ぶ。さもないと乗り切れなくて遅刻だよ」

そう言って強引に彼の前に並ばされた。

なんだか上手くしてやられた様な気がして後ろを睨もうとした時、既に充分満員になっている電車が到着した。

「……げ」

小さく呟く。信じらんない、数本送らせただけで、これ？　殺人的だ、というより殺人だ……。

ぎゅうぎゅうと詰め込まれて、まさしく折詰の寿司状態。足がもつれてヒールが脱げそう。後ろにいた拓也だって、今はどこにいるかも分からない。

その状態で電車が発車した。そして数分も経たないうちに、何故か大きな急ブレーキがかかった。

「やっ」

皆の悲鳴と共に湊も小さく声をあげる。バランスを思いっきり崩した。すると誰かにグッと支えられた。
顔をあげると、拓也。驚く間もなく二度目のブレーキ。

「うわっ」
「いて」

今度は二人してバランスを崩した。車内が揺れた事により、人波が偏り不自然な空間が出来る。そこに入り込む形になった。通路の真ん中。吊革なんて届かない。なのに再びぎゅうぎゅう詰め。ありがたいのは、皆がこちらに背を向けている格好の為、誰とも眼を合わせずに済む。ついでに鼻息もかけられないで済む。ふう。

「だ、大丈夫？」

右後ろの拓也に小声で言った。二度目も咄嗟に彼にかばってもらった様な気がする。
そしてこんなに彼と体が密着している。な、何か喋っていないと、平常心を保てないよっ。

すぐ後ろで彼がクスッと笑う声が聞こえた。

「拓也クンを舐めないでよね。こう見えて結構カラダ鍛えてんのよ？　だから俺を掴んでれば？」
「うそ。ヨシがスポーツやっているとこ見た事無い」
「失礼な。今でも時々バスケやってるよ」
「そうなんだ……山崎くんとかも？」

「山崎？　そうだな、たまにあいつも。今度見に来る？」
「え……あ、うん」
コソコソと何の会話をしているんだ、あたしは。動揺しすぎでしょ。
そう思った時、三度目のブレーキをかけられた。この運転手、絶対ワザとだ！！
踏ん張りたかったのに、そんな彼女の努力なんて吹き飛ばす程の圧力がかかり、湊はあっさりと拓也の胸に倒れ込んでしまった。
鼓動が大きく跳ね上がったその時、拓也の低くて小さな声が後ろから、湊の右耳だけに注ぎこまれた。
「キスマーク」
「え？」
電車の音でうまく聞きとれない。でも今、キスマークって言わなかった？
そう思って振り向こうとした時、拓也が顔を傾けて、
湊の首筋を、舌先でペロっと舐めた。
その感触が、一瞬で甘い疼きとなって、一気に右の首筋全体に広がる。
「なっ……」

思わず口から声が漏れる。
甘い疼きは鋭い痺れになって、あっという間に全身に行きわたった。

な、な、な、

「何すんのよっ」

それでも小声で叫ぶ大人のあたしの配慮に感謝してっ。
けれども拓也は片腕は離れた吊革を掴み、片腕で湊の肩をがっしり掴んで、つまり彼女は余計に身動きが取れない。だから後ろを振り向いて、彼を睨み上げる事が出来ない。
ちょっと何プレイなのよっその手を離してってばっ。

「やっぱ消えねぇな」
「はあっ？　何言ってんの、この痴漢っ」
「しっ。黙って」

黙って？　黙ってだあ？　あんた今あたしの首筋舐めたでしょっ？　無許可で、それを黙って？？
そう心の中で叫びかかった時、再び同じ個所に濡れた感触をおぼえた。

今度は、口づけだ。

そう思った瞬間、ピリッと小さくて鋭い痛みを感じた。

「んっ」

なのに思わず甘い声が出てしまう。同時に脚の間に、痛みにも似た切ない疼きをズキンと感じてしまい、本気でヤバいと思った。

顔がカッと赤くなる。

なのに身体が、もっと、って言ってる。

唇を離した拓也はそこを見て、満足げに眼を細めた。湊を見ると、可愛くにこっと笑う。

邪気の無い少年みたいに。

……それが……かえって……うすら怖い……。

「な、何……？」

「何だろうね」

それだけ言うと、彼は満たされた笑顔で顔を反らした。

片手で湊を抱いたまま、すごくご機嫌に無言。

湊はますます身体が火照る気がして俯いた。マズイマズイこのシチュエーション、なんかすごく王道で、クラクラしすぎてマズイっ。

そして何よりマズイのは、彼にされた、首筋へのたった一回のキスが、

昨夜のあの人とのセックスより、イキそうになった事。

あたしって、変態?!　いやだぁぁっ。

湊が身悶えている間に、駅に着いた。
人に流されるがままに電車から降りると、拓也が後ろから彼女の髪に手を伸ばしてきた。
ビクッとする。

「何?」

聞いた時には、彼は勝手にバレッタを取ってしまっていた。

「髪。降ろしておかないと大騒ぎだよ?」

そう言いながら取ったバレッタを湊の手にポンと置き、自分はサッサと先に行ってしまう。そして改札の向こうに姿を消した。

「え?　……あ。……ま、まさか……」

湊は自分が青ざめていくのがわかった。

首筋へのキス。そして小さな痛み。

こっちだって大人だ。バカじゃない。

うっそでしょ、どういうつもりなのよっっ！！

「吉川くん？」

「はい？」

「ちょっと来て？」

「忙しいんですけど、僕」

椅子に座った彼が、白々しい表情で湊を見上げる。

彼女も完璧な微笑みを見せた。

「あら奇遇。あたしもです」

この二人、喧嘩でもしてんのかな？

拓也の隣の席の同僚が、無言で二人を観察した。

仕事でなんか息詰まっているのかな？　にしても二人のこのオーラ、笑ってるのにハンパ無く冷たいよな……？

「なんて事してくれるのよっ」

午前中ゆえにまだ人気のない休憩室で、湊は髪をあげた。

右後ろの首筋には、真っ赤で大きなキスマークが、がっつりついている。

こんなおっきいの髪で隠していたってなんかの拍子で見えちゃうし、そもそもこんなに暑い省エネオフィスで髪なんか降ろしていられるかっ！　何のために切らずに伸ばしてきたと思ってんのよっ。涼しくアップにする為に決まってんじゃないっ。

拓也は電車での可愛い笑みが一転、生ぬるい白い眼を彼女に向けた。

「心外だなぁ。もともとあなたが仕事でつけてきたアトでしょ？　それを俺が見つけてやったんじゃない」

「……なっ……」

も、元々ついていた跡？

湊はハッと思い当たった。

……そ、そうか。虎太郎とシタ時に、つけられちゃったんだ……。

そう言えば彼、あの時かなり没頭していたから……。

「減るもんじゃ無し。満員電車で守ってあげたんだから、それくら

いのご褒美下さいって」

甘えた様に、でもどこか挑戦的に、人を小馬鹿にしたように言う。
湊はカチン、ときた。

あんた、彼女がいるくせに何やってるのよ。

言うと自分が、惨めになるような気がした。

「……仕事じゃ、ないもん」
「はい？」

湊は俯き、小さく呟いた。

「……彼氏だもん」

だもん。年甲斐も無く。また可愛いね。

普段の拓也ならそう言っていたのに。

「……へぇ～」

頭上から、怖いくらいに冷たい声が降りてきた。
ズキっと胸が痛む。
やだ。苦しい。

二人の間に、静寂が襲ってきた。
耳が痛くなる程、長く感じる。自分の鼓動だけが響き渡っているかのよう。

「お互い、隠さなきゃいけない秘密が増えたって訳だ」
「……」

湊は浅い呼吸を悟られないように平静を装いながら、ゆっくりと顔をあげた。

拓也は無表情でこちらを見ている。

「部屋探し、うまくいくといいね」

けれども瞳は、氷の様に凍てついて、湊の胸に刺さった。

7（R）（後書き）

拓也は首フェチに違いない。だって前も同じ事をやってた。うん。
さて、どこででしょう？

8

なんかすっげームカつく。
俺が怒る筋合いなんかないって、分かっていてもムカつく。

拓也は机に向かい、前方を凝視したままひたすらペンを指で回し続けていた。

なんだよ。イラついて仕事になんねぇ、何なんだよっ。
こんな思いを避ける為に、彼女を遠ざけたかったのに。
こんなぐちゃぐちゃで、激しくて、ささくれ立った感情から解放されたくて、あの子と付き合ってんのに。

俺の事を大して好きでも無い女に、振り回されんのはごめんなんだよ、ちっくしょう。

その様子を、隣の席の同僚がパソコンをしながら、ずーっと観察している。ついに口を開いた。

「吉川。お前なんかあったの？　藤堂ちゃんと喧嘩でもした？」

拓也はふっと我にかえり、ペン回しの指を止めて彼を見た。

「え？　なんもないっすよ？」

「そうかあ？　さっきも二人して雰囲気寒かったし、今だって眉間に皺寄せて、声も出さずにブツブツ言ってんじゃん」

「お互い疲れてんじゃないすか？　声に出さずにブツブツなんて言えないっしょ」

「やっぱ俺疲れてるわ。クソかわいい後輩が、クソ生意気な事言うわけねぇもんな」

「ないない」

二人でそれぞれの机に向かいながらクスクスと笑う。

そのまま無言で仕事を進めていたが、すぐに拓也が椅子を大きく引き、背もたれに伸びをする形で体を反らした。

「ああぁ。もうホント、マジで疲れたーっ」

「お前、ここんとこ煮詰まってんな」

「どーしたらいいんすかね？　上地さん、教えて下さいよぉ」

「んー、どれどれ……何？　……随分良くまとまってるなー。吉川、お前がやったのか？」

上地は一枚の紙を手にしていた。拓也の机の上にあった紙。

それは湊があの日、旅行先にまで持って行って、未完の状態で机に置いていた書類のうちの一枚だった。

拓也はそれを見つめ、少し戸惑った。

「……あー、それは……」
「わっかりやすいなぁ。すげぇよ、これ。後で俺にもコピーして」
感心しながら上地がそれを読みこんでいく。
拓也は少し切なげに苦笑しながら、でもどこか得意そうにそれを眺めて、言った。

「……書いた人間が、いいんすよ」
「またコイツはそれだ」
呆れた様に言われ、肩をすくめてふふ、と笑う。大事なそれを先輩からそっと取り上げようとした時、上地の、机の上のデスクトップが目に入った。
スクリーンセーバーに、写真が出ている。
拓也は眼を見開き、固まった。
口が、ぎこちなく開いていく。

「……なんですか、コレ」
「あ、よく取れてるだろ。お前もいるか？」
「……え、ちょっと待って下さい……は？」

上地が自慢げに拓也の方に向きを変えた画面には、なんと、浴衣姿の湊がどアップで写っていた。
先日の社員旅行、温泉での湯上り姿を捉えたものらしい。

素顔にナチュラルなポイントメイクを施しただけの彼女が、髪をアップにして、旅館の浴衣を着て、歩きながら談笑している。その隣には舞彩。

拓也は湊の顔に目が釘付けになった。

な、何この写真……ヤバいだろ、ナチュラルすぎて滅茶苦茶可愛い。

このスッピンメイクの顔、彼女がうちに来てからまだ数回しか目撃してない。ヤバいヤバい、会社とのギャップがあって可愛すぎる、しかもうなじにおくれ毛垂れてんじゃん。

え？　上地さん、こんな写真貼りつけて、命あるの？？
あいつめっちゃプライド高いんだけど。え？

「コレな、この間の旅行の時に、隠し撮りしたんだよ。やっぱ思った通り、藤堂ちゃんの浴衣姿って萌えるなっ。それにここ、山田ちゃん。くーっ、かわいいっ。お前の同期、レベル高いなっ」

上地は少し興奮気味に言い、湊と舞彩を交互に眺めている。

そう言えば確かに舞彩ちゃんも可愛いんだけど、と心の片隅で思いながら、拓也は彼から大きく身を引き、口に手を当てた。

「……嘘でしょ？　何やってるんですか？！　げ、信じらんねーっ！」

「今なら一枚５００円で渡せるぞ？」

「安い」

「お、じゃあ７００円……」

つい調子に乗って喋りまくる上地は、空気の異変に気付いて動きを止めた。
……「安い」……って、今、誰が言った……？
「隠し撮りをデスクトップに貼るとはどういう了見で？」
湊が上地の背後に立ち、低ーい低ーい声で言った。しかもそんな大声で騒いで、隠す気あんのかこのやろうっ。
拓也が座ったまま彼女を見上げ、感心した様に言った。
「あ、隠し撮りは責めない訳ね？」
上地はロボットの様にカクカクと湊を振り返る。
「……ぜ、絶賛公開中……？」
「……」
「ご、ごめん藤堂さんっ」
「ごめんで済むならケーサツいらない」
「うわ、マジだ」
拓也は怯えて椅子ごとその場を離れた。
逃げ遅れた上地は、文字通り首根っこを湊に抑えられた。
目が座って、力がこもり、相当なオーラを発している。

「次。私の目に触れたら、写真じゃなくて上地さんを抹消しますよ？」
「……は、はい……」

……よっぽど恥ずかしかったんだ……だったらそれらしい態度を取ればいいのに……。
拓也が呆れてそれを眺めていると、湊が寒い空気そのまま顔をあげた。

「吉川くん」
「はいっ」

俺何もしてないっ。むしろ見せられたから被害者よ、被害者っ！
巻き込み事故っ。

「明日、高松精機行くから。アポ1時半。社長が吉川くんにも出来れば会いたいって」

……あ、仕事ね。
「あ、はい、はい。一時半ね」とあたふたしながら机に手を伸ばす。咄嗟に、湊のあの書類をファイルの一番下に隠した。
彼女の許可無く、頂戴したものだったから。

「……えーっと……」
「……」

湊は立っている。
正面には、泰成がソファに座っている。
足を組み、腕は背もたれに預け、不機嫌そうに彼女を見上げている。

ここは、事務所の中。二人きり。

「……泰成さん、私をクビにして……いいです」

湊は俯き、珍しく殊勝な声を出していった。
ところが泰成は、片眉をあげて、いつもよりも更に大きな声で言った。

「クビにしていいですだぁ？　なんでお前の許可を取らなきゃなんねーんだよ。俺がしたけりゃ、俺がするんだ」

「……す、すみません……」

彼のキツイ口調に、湊は益々縮こまる。本来、彼女は打たれ弱い。

だから愛想がいいのだ。
泰成は彼女をじろっと睨み上げると、高圧的に言った。

「客とデキるのはルール違反だろ」

「すみません……」

「相手が妻帯者や秘密主義でなくてもな、店を通じて知り合った男女が後に何らかのトラブルを抱えたら、まわって跳ね返ってくるのはウチなんだよ」

「……ごめんなさい」

「相手がどんな男か分かってんのか？　女関係は？　性癖は？　この仕事をやっている女をどう思っているのかとか、考えたのか？」

「……あんまり……」

「ったく、藤堂は自分の事になると何も考えねーのなっ。他人の事ばっかり観察しやがって」

かなりイラついたように言い放つと、そっぽを向き、荒々しく足を組み直した。大きく舌打ちまでする。

じっとしていた湊は、恐る恐る、視線を上げた。

「……怒ってます？」

「……」

泰成は顔をそむけたまま、空中を睨み続けている。

「……ありがとう」

「……」

ピク、と彼の眉が動いた。

「……大事に、してくれて」

湊は、素直に言った。何故だかすごく、言いたくなったのだ。

図々しいかもしれない。こんな事を言うなんて。いかにも、あなたはあたしを愛してくれてるんですね、みたいな言い方。

でも嬉しかったんだもん。

怒られてるのに。こんなの、初めて。

……お父さんの時以来、かも。

泰成はなおも厳しい表情であらぬ方向を睨みつけていたが、そのままイライラと、大きく息を吐いた。

「……はぁ。お前、それ卑怯だろ」

「え？」

彼が湊に向き直る。

真剣な眼差しで見上げられて、湊はドキッとした。今度は何て怒られる？　やっぱ調子に乗りすぎたっ。

ところが泰成は、少し身を乗り出すと手を伸ばし、彼女の腕をグイっと引き寄せた。

「わっ」

突然の事に彼女は大きくバランスを崩す。膝がつき、すっぽりと、彼の胸の中に収まってしまった。

そこをすかさず固められる。背中に回された腕が、ギュッと彼女を閉じ込めた。

耳元で、低い声が囁いた。

「いきなり素直になんなよ。……お前はほんと、調子狂わす」

俺の。

「は？」

訳が分からず、素のまま、素っ頓狂に聞き返した。

何故だか今では、彼に対して危機感と言うものがさっぱり湧かな

い。一晩を共にしたのに、この腕に抱かれたのに、まるで別世界の話の様に思える。今は身内にしか見れない。
けれども泰成は、そんな彼女の認識を覆すような事を口にした。

「店やめて、彼氏に内緒で、俺と付き合うか？　……俺ならお前を、守れるぞ？」

衝撃的に、驚いた。今までは冗談のように「付き合おう」と言われていたので、それが挨拶代わりだと思っていたのだ。
そして彼の最後の言葉に、彼女は一瞬唇を噛んだ。

胸に、甘い刃がズサッと刺さった気分。
なんて甘美な、誘惑なんだろう。

守る、なんて。

「俺なら多分、誰よりもお前を傷つけないし、束縛もしない。……でも飽きるほど、愛してやるよ」

体を離し、瞳を覗き込まれた。
甘やかに輝く彼の男らしい眼差しに、彼女はついにあの夜の事を肌ごと思い出してしまった。

クラ、とする。血が、僅かに逆流する。
彼の頑丈な腕と男らしい節ばった手が自分にどんな事をしたのか、

この目の前の唇が自分にどれだけ甘い感覚を与えたのか。

でもあれは一晩だけだった筈。

お互いに何の感情も無かった筈。

「……何で……？」

「何で？　そんな事男に聞くのか？　結構ウザイ女だな。意味ねぇだろ、そんな事」

泰成は自嘲気味に笑った。

彼の真意が分からず、湊はドキドキしながらも彼の顔を見つめ続ける。

「……あの……泰成さん……」

そんな彼女を見つめ返す泰成は、やがて諦めたように溜息をついた。

彼女を自分の腕の中から解放する。彼女の香りから逃れるように、顔を背ける。そろそろ自制がきかない。

ぶっきらぼうに言った。

「順番の問題だろ」

「え？」

「あの岡谷より俺が早かったら、俺と付き合ってた。それだけの話」

「……」

湊はぐっと言葉に詰まった。
否定できない、気がする。もし泰成さんが本気であたしと付き合いたいって言っていたら、今頃どうなっていたんだろう？

「先着がいると思ってたから」
「は？」
「こっちの話」

そう言うと彼は立ち上がり、長身で、上から湊を見下ろした。

「いいよ。好きにしな。藤堂がこうなったのも、僅かだが俺にも責任がある。トラブったら泣きついてきな。カラダが寂しくなったら、いつでもどうぞ？　お相手差し上げるぜ」

腕を組み、ニヤッと笑う。

「俺とお前は、合うんだろ？」

なんだかすごく、バカにされた様な気がした。
あたしがカラダだけで男を欲しているみたいじゃないっ。

「……い、行くかっつの」

それでもなんだか自分が不利な様な気がして、それ以上は反撃できなかった。
あれ、と顔をあげる。
「って事は、仕事は、……やめなくて、いいの？」
「やめたくなったら自分でやめろ。それまではプライドと責任を持つんだ。でもしばらくは休め。キャンセルだ」
「え、何で？」

すると泰成の手が、湊の右肩に伸びた。
「んな派手なのつけて、仕事になるか」

そう言って、彼女の髪を上げる。
ワンテンポ遅れて、湊はバッと後ずさった。しまった、抱きしめられた時に見られたっ！

「ちが、これは……」
「違うのか？　跡なんてつけないのは店のルールだ。お前の客でそれを守れない奴がいるとは思えない。だとしたら岡谷しかいねぇだろ」
「……」

え、えーと、それはそうなんですけど、彼だけじゃぁないんです。

「この仕事を続けるんなら、よーく飼い馴らせ、そのカレシを」
「……」
え、えーと、その、飼い馴らすって……
……どっちを？
……むしろ彼より彼の方が、飼い馴らす必要がある様な気がして……。
「付き合うんだろ？」
「……」
湊は混乱してしまい、口を無意味に開けてしまった。
あたしは結局、一体、誰とどうするのがベストなのだろう？
今的に、将来的に、そして、あたしの心的に……。
泰成は、困った奴だ、とでも言うように、腕を組んだまま眉根をひそめて彼女に言った。
「あのな。自分のプライベートにプライドと責任を持てない奴は、どんな仕事でも無理だぞ？　よく考えろよ」
湊は言われた内容よりも、それを泰成が言った事に感心して、彼

をマジマジを見上げてしまった。
この人って、多分それほどマトモな人生を送ってきた訳じゃないだろうに、時々結構マトモな事を言うよね……。

家に帰ると、玄関から丸見えの台所で、拓也が風呂上がりに冷蔵庫を開けている所とかち合った。
彼が驚いたようにポカン、とする。

「あれ？　早いね？」
「……あんたのせい」
「は？」

なんか前も聞いたな、そんな台詞。
そう思いながら、拓也は機嫌の悪い湊を眺めた。缶ジュースのプルタブを開けて口を付ける。
ごくごくと飲んでいると、気に喰わないっとでも言うように湊が勢いよく噛みついてきた。
バッと右後ろの髪を上げてみせる。

「こんなアト付けたら仕事にならない、って泰成さんに追い出されたのっ」
「あらまあ。ちゃんと彼氏くんに言い聞かせなきゃ」
「お前だろっ」
「俺じゃねぇよ。俺は発見者だよ」

そう言いながら一気に飲み干す。
そして彼女を見ると、ニコッと笑った。
湊は息を詰め、怯えたように後ずさった。

「……何その、黒可愛い微笑み……」

拓也は満足気に口角を上げて、丸くて黒い瞳で湊をじーっと見つめた。湊は意味も無くドキドキしてくる。
そして彼は可愛く口を開いた。まるで純真な小犬の様に。わん。

「それじゃあしばらく、彼氏とも会えないね」

「……なっ……」

なっ、なっ、なっ……

「お前の狙いはソレかーっ」
「ふふ」
「何の恨みがあるのよっ」

拓也はさっさと自室に引き返す。

湊は玄関先でひたすら地団駄を踏んでいた。

なんだとなんだとなんだとそう言う事かっ！　くっそー、なんて躾の悪い生き物なんだっ！

犬だか猫だか知らないけれど、あたしの生活を掻き乱さないでよっ絶対飼い馴らしてやるっ！

そか。だからそんな労力使うくらいなら、早く部屋を出ればいいんだって。ううう。

8（後書き）

第三部終了ー。
第二部では拓也くんに彼女が、三部では湊ちゃんに彼氏が出来ました。
さて、少しお休み頂いて（書けるものなら書き溜めて）第四部に行きます。
いちゃいちゃさせて、ごちゃごちゃさせます。お姉さんとオヤジにも、頑張ってもらいます。ちょっとRを高めかも。15ギリギリ？
いつも目を通して下さり、ありがとうございます！

1（R）

奏（かなで）の肌の上を、大きな手が這う。背中につつ、と舌を滑らす。

「……っぁ……」

彼女が体を震わす。先程からじらされて、どこもかしこも敏感になっている。

後ろから彼の手がまわり、彼女の下の嘴（くちばし）を再び弄び始めた。彼女の口から、頼りなく感極まった声が高まる。

「……洋一……っ…もう、…ダメ……我慢……出来なっ……い……」

「我慢、出来ないんだ？」

夫の低くて掠れた声が、後ろから聞こえた。

その直後、背後から貫かれる。彼女は大きく嬌声を上げた。

「そうだ、四日後からまた出張」

事後処理をしながら洋一が、今思い出したように言った。

「そう。今度はどこ？」

「国内。名古屋とか、あのあたりを色々とね」

避妊具をゴミ箱に捨てる後姿を、彼女は眺めるともなく見ていた。

無駄なぜい肉など無い、鍛え上げられた背中。３０代半ばには見えない。それが、この人の自慢だから。

「何泊するの？」
「んー、まだ未定だな。3泊ぐらいかな？」
「近くだから帰れそうな気もするのに」
「忙しくってね、中々そうもいかないんだよ」
でしょうね。忙しいでしょうから。帰るのは無理よね。
「そういえば奏（かなで）、就職活動はどう？　うまくいってる？」
「うん。また数社からオファーを受けてね、面接に行こうかと思っているの」
「すごいよなあ、君は。このご時世に引く手あまたの再就職が出来るなんて。すご腕のＳＥだな。シャワー浴びる？」
「お先にどうぞ」
洋一は裸で立ち上がると、浴室へと姿を消した。
シャワーの音が聞こえ始めると、奏は携帯電話に手を伸ばす。メールを打ち始めた。
『寝てた？』
「起きてたにょー」
本当は寝ていたけど。そんな事言えないでしょ、優しい彼氏、天下のイケメン君に。
湊は寝ぼけた頭で考えた。あたし、今、にょーとかって言わなかった？　にょーって何？　ネコミミでも付けるの？　この歳で？
あいたたた、ああ呂律（ロレツ）がまわらないー。

右手に持っている携帯も、今にもベッドに落としそう……。

『ごめんね、こんな時間に。……どうしても、声が聞きたくなって』

彼の声が、一段と低くなった。心地良いバリトン。胸にしみわたって、今からいい夢が見れそう。

「うん、あたしも。ありがとう、電話してくれて」

意識は飛びそうなのに、ちゃんとマニュアル通りの受け答えが、マニュアル通りの声色で出来るあたしって偉い。やっぱこの仕事が向いているのかも。

『朝からずーっとスタジオにいてさ、もうぶっ通し16時間近く。この調子じゃ今日も午前様だよ。昨日も似た様な物だったし』

「寝てないんだ。大丈夫？」

『うん。とりあえず楽屋とかでちょこっと仮眠はとってるから』

「そっかぁ。楽しみだねぇ」

『何が？』

「何が、って。ドラマだよー。今頑張ってる虎太郎（こたろう）が、そのまんまテレビで見れるんでしょ？　放映が楽しみー。凄く凄く、楽しみー」

『……うん、ありがとう』

そう言うと、虎太郎は言葉が途切れた。心のもやもやが、彼女の言葉で刺激された気分。いやこれは多分疲れているからだけで、その疲れも単なる睡眠不足から来るだけで、だから本当は弱音を吐く程の事でもないんだ。

だけど彼が口をつぐんでいる間、電話の向こうの彼女は何も言わ

ない。
それがまるで、自分の次の言葉を優しく待ってくれている彼女の気遣いの様で、虎太郎は尖った心が溶けていく気がした。
彼女の、あの柔らかな体。滑らかな肌。潔い、ハッとするような鮮やか空気。涼やかな目元。それが堪らなく艶やかに変わる瞬間……。
会いてぇな……。
実はこの時の湊は、半分寝かかって夢に片足を突っ込んでいる状態だった。
ああ、美味しそうなフルーツケーキ。よし、虎太郎のドラマでも見ながら食べよー。録画しなくちゃー。やだ仕事持ち帰ってた、でもその前にケーキ食べよー。ふわふわふわ……。
『でもさ、どんなに頑張っても、見てくれる人達がどう思うか、だから。……過程じゃなくて、結果だから。自分では精一杯やったつもりでも、見た人達が面白いと思わなければ、それってただの自己満足だから。……そう思うと、怖いよ』
自分でも驚くくらい、低い声で呟いた。
今まで割と多くの女性と付き合って来たけれど、彼女達に弱音を吐く事はなかった。
別にそれは無理をしているという訳ではなく、ただ、彼女達には話す気にならなかっただけ。それすら、信用していないとか言う意味でもない。ただ、そう言う気にならなかっただけ。

なのに俺、どうして湊ちゃんにはこんな事を言うんだろう。

言ってしまった後、自分が何だか女々しい男になったみたいで少し後悔をした。

けれども電話の向こうの彼女は、爽やかに、柔らかく、屈託なく言った。

「どんな仕事も結果が全てだよ。それは誰でも同じ。だから大丈夫。それに、自己満足している事に気付けなかったら、先には進めないでしょ。それに気付くだけ虎太郎は凄いよ」

「……」

「それに過程はね、自分の中で積み重なるものなの。そして、それがいつかの結果に繋がるんだよ」

何でも無い事の様にさらっと言う。自分が思いつきもしなかった言葉を。

「だから大丈夫。虎太郎は大丈夫だよ」

自分が欲しかった言葉を。

彼女は、自分が手にしたかった物を、まるで軽々と掴む様で。

そしてそれを、見とれるくらいの鮮やかな笑顔で僕に渡す。

憧れ。

『……湊ちゃん』
「んー？」

何が大丈夫、よ。あたしって適当な事言ってるなぁ。あ、流石にバレたかな？　もう少し考えて言葉を選ばないと……でも眠いっ！　眠いのよっだって１２時まわってるっああ目もまわるっ。

『会いたい』
「……うん、そうだね」

会いましょう、夢の中で。おやすみなさい……。

『すげー会いたい、今すぐ会いたい』
「……ほんとだね……」

そんで夢の中で、一緒に捜しものを……

『ごめんね、我慢させて』
「うん、そんな事……」

我慢？　していませんよ？　だって毎日テレビや雑誌でお姿を拝

見してますし、ほぼ毎日ナマのお声を拝聴しておりますので、一般人はもう充分……

『休みも合わないし、滅多に会えないし。それに、一緒に街を歩いてあげる事も出来ない。友達に、彼氏の話をする事も出来ない。見せる事も出来ない。……ごめんね、辛いだろ』

「……え？」

ここに来て、湊の頭が急に覚醒してきた。

一通り眠気のピークが過ぎ去ったのかもしれない。けれど、聞きなれない話に頭がさーっと冴えてきた。

「……えっと……」

あたし、何言われた？

話を反芻しようとして、どもってしまう。

滅多に会えないって？　でも2週にいっぺんくらい会って、しかもえっちしているし……。

一緒に街を歩けない？

友達に紹介出来ない？　見せられない？

……だから、辛い？

『前に付き合った女の子が……いや、その前も。よく言われたから、そんな事。それが原因で別れるんだ、俺。堂々としたデートが出来ないし、ほっとかれるって。ただでさえ仕事と友達づきあいを優先

させすぎているのにさ、その上こんな仕事をしているから、外もまともに歩けないってさ』

「……あら、まあ……」

そんな事、考えた事も無かった。

虎太郎と一緒に外デート？　街中を二人で歩く？

……ヤバいでしょ、それ。フツーに考えてもマズイでしょ。取り囲まれて、視線で刺されて、そんで二週間後とかあたしマジで刺されるわよ、狂ったファンの誰かに。絶対、ヤダ！

友達に、紹介する？

……げ、あたし、考えてみれば、そこまで打ち明けられる友達って……い、いないっ？

「……だ、大丈夫だよ、あたしは……」

『……そう？』

「うん。だって虎太郎優しいし、沢山連絡くれるし、テレビで見れるし、たまに会えるし、……こっちも仕事で溺れちゃってるし、うん」

『……そっか』

虎太郎は穏やかな声で言った。

湊は少し焦って頷きながら、心の中で考えた。そ、そっか、彼女って本当は、もっと会いたいって文句を言うものなのか。そんな事、あたしの人生で言った事がないよ。だってそんなに会いたいなら結婚すりゃいいじゃん。

……あたしが壮太と婚約した理由。それは毎日彼と会いたかったから？

……違う。そんな相手を見つける事が、面倒臭かったからだ。

だけど、一人で生きていく勇気も、無かったから。

『今度、湊ちゃんちに行きたいな』

突然虎太郎に、電話口で囁かれた。

「あ、うん、……え？」

あ、うん、いいよ、と言いそうになり、湊は寸での所でそれに気付いた。え、何？

……う、うわ！

「ご、ごめん、それはちょっと……申し訳無いけど、あの……」

いやーっそれこそ気付かなかったわーっ！　彼氏が自分の部屋に来るって言うシチュエーションっ！　何故今の今まで気付かなかったの、藤堂湊っ！

ここの所色々忙しすぎて、すっかり見落としてしまっていたっ！

何て事っ不覚！！

「あの、ね……仕事の書類や資料が山積（さんせき）していて、一応外部流出禁止なのに、おっつかないから内緒で持ちかえっている訳で……それからあの、もうすぐ引っ越しするから」
『え？　引越すの？　どこに？』
「まだ未定……でもあの捜し中で、だからとにかく、今は人生で一番部屋が散らかっているの。だから無理っ」

ああ、汚ギャルならぬ汚アラサーと思われたかしら。片付けの出来ない女、うう……屈辱なり。

電話の向こうで、虎太郎がクスクスと笑う声が聞こえてきた。

『そうか。じゃ、僕もいい物件が無いか、チャンスがあればそれとなく不動産屋を覗いてみるよ』
「あ、それは心強いかも」
『だよね、出来れば……あ、ごめん、順番がきたみたい。電話切るね』
「うん。頑張ってね」
『ありがとう。じゃ、お休み』
「おやすみなさい」

電話が切れる。
その後、湊はベッドの上に起き上がった。順番が違うだろ、って。
そしてふぅ、と大きく深呼吸。

ああ、ビックリした。部屋に来たい、だなんて。考えてみれば当然だけど、突然過ぎてビビったわ。青天の霹靂って感じ。でもその

雷の音に、事前に気付いていなかったのはあたしだけ、みたいな？
あははは－……て、笑えない。

湊は部屋を見回した。まだ所々残る段ボール箱が、自分はこの部屋の出る意思があるんだ、と自分に対してわざとらしいパフォーマンスをしているみたい。妙に気分が白ける。

お金が足りないから。時間が無いから。いい物件が無いから。
そう言い訳し続けて、もう何か月この部屋に居続けたのだろう。
あたしそのうち、ヨシに嫌われる。あ、もう嫌われているのかも。

一気に落ち込み、彼女は俯いた。

切れた携帯を見つめ、虎太郎は壁にもたれかかった。
結局3日に2日は、彼女に電話をしている。しかも夜。色々と言い訳をつけて、つまり俺は探っているんだ。

彼女が、今晩はあの仕事をしていないか。
彼女が、今晩はあの男と一緒にいないか。

俺の知らない彼女が、
俺の知らない男と、
俺の知らない、何かをする。

何が我慢強いだよ。寛容なフリ、しやがって。
まだまだ彼女を手に入れ切っていない。この、不安感。

『出来れば……』の後、俺は何を言おうとしたのだろう？
出来れば……『一緒に、住まない？』

ふと、今まで付き合った女の子達を思い出した。
彼女達も、こんな気持ちだったのだろうか。

1（R）（後書き）

お久しぶりです。約1週間ぶりに復活です。
いきなりR度高めのシーンを目指しましたが、あれが限界。才能がございませんでした。だからこっちにいるしかない（笑）

虎太郎くんの募る思い。手に入りそうで入らない。この生殺し感が堪らないのだと思います。ふふ。

2　キス

日曜日、湊（みなと）は公園にいた。

そこは住宅地にある割と小さな公園で、いくつかの遊具、砂場、そして適度な木陰とベンチがある。

湊はそのベンチの一つに座って、砂場に群がる子供達を見ていた。

気の強い姪が、早速他人のスコップを使って穴を掘っている。持ち主らしい3歳くらいの男の子が、恨めしそうにそれを見ている。

子供のやる事。だから放っておきたいんだけどそうはいかない。ほらあたしって、外面がいいから。

「優奈ちゃん、それ、お友達のでしょ？」

「やだ！」

2歳の姪がキッとこちらを睨んだ。あんたが嫌なのは知ってるって。でもね、この台詞、あんただけに言ってるわけじゃないのよ。

「でも、『かして』ってまず頼まないとダメでしょ？　言ってご覧？」

「……」

「優奈ちゃん」

「いいんですよ」

湊と同じくらいの年頃の女性が、笑顔でこちらに声をかけてきた。どうやら持ち主の母親らしい。湊は眉を下げて「すみません」と頭を下げた。目的達成。子供がトラブルを起こした時、注意すべきはその相手でなくてその母親。だってどう考えたって面倒臭いじゃん。

母親って子供と一心同体らしいから、自分の子供がやられたら過剰反応するらしいし？

今日は姉の奏（かなで）に頼まれて、天気の良い休日に子守りをしている。こういう事は割とよくあるので、湊は姪の取り扱いに馴れていた。

あーあ、こんな事にまで気をまわせるあたしって、いつでも子供が産めるよね？

「ぼく、かしてくれてありがとう」

男の子に笑顔を向けた。すっごい、子供にまで気ぃまわしちゃってるよあたし。どこまで愛想がいいの。きっと母親になったらご近所さんの人気者だわね。

再び遊び始めた子供達を、ベンチに座りなおしてボーっと眺める。ふと考えた。

例えば虎太郎との結婚。

あり得ないくらい、現実味が無い。でもあの人、きっといい父親になるわ。

「関、奏（かなで）さん？」

急に声をかけられた。驚いて顔を上げる。

そこには、仕立ての良さそうな品のいいポロシャツとパンツを身につけた、５０代くらいの男性が立っていた。バーで声をかけられ

たら思わずついていきそう。ロマンスグレーってモロタイプっ。

湊は、年上好き。

だけど、公園で知らない人について行っちゃいけないのは、子供でしょ？

というか、声をかけられるのって普通子供でしょ？　え？　なんであたし？

しかもなんで、お姉ちゃんの名前？？

だからせっかく好みのタイプが相手でも、彼女はなんとなく警戒をした。

「……どなたですか？」

「……ああ、私は……」

「湊（みなと）ちゃーん！」

優奈がスコップを振り回してこちらにかけてくる。ああ、泥が飛び散っている、あの男の子の目が吊り上がってる、優奈、パクッてると思われてるよっ。

優奈の台詞で湊が奏で無いと気付いた男性は、少し焦った様に言った。

「……あ、すみません。人違いしました」

「失礼ですが、どなたですか？」

「いえ、あの、昔の知り合いでして。たまたまお姿を拝見して……

申し訳、ありませんでした」

とっても怪しい、嘘くさい言葉。

ところが彼の態度は好感が持てて笑顔も素敵だったので、湊の警戒感はそれ以上は上がらなかった。

「……はい」

「失礼します」

「あの……本人に伝えましょうか？」

思わず声をかける。だからあたしってどんだけ愛想がいいのよ、いくら好みだからってっ。

「いえ。大丈夫です。機会があればこちらから、またご挨拶が出来るでしょうから」

彼は優しい、素敵な笑顔を残して公園を去って行った。

その後ろ姿を湊は眺める。小首を傾げた。

……でもさ。住宅地の中の小さな公園を、たまたま通りがかった、って……何で？

ああ、近くに住んでいるのか。そうか、そうよね。

昔の知り合いが。なんだろう？　そうだ、同級生のお父さん？

あり得るあり得る……

……か？

舞彩（まあや）が書類を持って会社の階段を上っている時、上からバタバタと足音が聞こえてきた。
馴染みの声が近づいてくる。

「あっ……」

拓也くんと、みなちゃんだ。
彼女の心は跳ねあがり、二人に声をかけようとした。

二人は、険しい顔をしながら勢い良く階段を下りてくる。拓也が手にしている書類を二人で覗きこみながら、足の勢いは緩めない。

「なんでそう思うの？」
「だって疑問に思うならそれくらい調べなきゃ。売り上げの企業別明細と掛けと手形のサイト、リストアップしてみようよ」
「実はやったんだよね」
「ホントに？」

舞彩はその勢いに押され、声をかける事が出来なかった。
「……」
二人が彼女の側を通り過ぎる。

その時ふと、拓也が顔を上げた。

「あ、舞彩ちゃん。じゃあね」

彼女の大好きな、笑顔。

「え、舞彩？　あ、行ってくるねー」

湊が明るく手を振る。

舞彩はやっと、金縛りが解けた気がした。

「いいなー、どこ行くのー？　舞彩も行きたーい」

「ほんとー？　あたしも代わって欲しいよー」

言った後、湊はニヤッと笑って拓也を見た。

「でも舞彩と二人で外訪なんて行ったら、ヨシが何をするか分からないねぇ？」

「やめろよ。オヤジみてぇだぞ」

「ひゃー、ラブラブぅ」

拓也の代わりに、舞彩が赤くなった。

拓也は冷ややかな目を湊に向けた。

「人の事をあんまつつくと、あんたの事もいじるよ？」

「照れてる照れてる、喜んでる。じゃあねー、舞彩」

湊は肩を竦めると、わざとらしく背中を丸めて逃げて見せた。

拓也も後に続こうとし、ふと舞彩を振り返った。ドキッとする。

彼は、軽く片手を上げて、親しみを込めた笑顔を見せてくれた。

そして急ぎ足で去っていく。

舞彩は立ち止って、それをじっと見送った。胸が、柔らかい切なさで優しく締めつけられる。
彼とは昨日の日曜日に会ったばかり。最後には、ホテルに行った。だから今日は、心が満たされている。
抱き合う度に、ドンドン好きになる。

そしてドンドン、貪欲になる。

前は好きな人が近くにいるだけで、幸せだった。
そしてその人が笑顔をくれると、幸せになった。
その人と肌を重ねる事と、もっと幸せになった。
私は望むものを全て、手に入れた。

なのに。恋って貪欲だ。
幸せになればなるほど、望みは形を変えていき、どこかに不安は無いかと心が捜す。

もっと。もっと。

会社を訪問した二人は、外の公園にいた。ベンチに座っている。
時間は昼食時。二人はカフェで買ったサンドイッチを手にしていた。
込み入った話をしたくて、けれども人には聞かれたくなくて、こ

の公園を選んだ。昨日湊がいた所と違い、花壇はあっても遊具は無い。噴水はあっても砂場は無い。従って、小さな子供を連れた親子連れは殆んどいない。むしろビジネスマンやＯＬばかり。

湊はファイルを膝に広げ、感嘆のため息をつきながらサンドイッチを頬張った。

「それにしても良くここまで調べたよね。飲み込みが早いってか、要領良すぎ。あたしここまで教えてないよ」

「あなたは最初から教えていないでしょ？　俺にテキスト投げてよこしただけで」

拓也が偉そうにベンチの背もたれに身を預けながら、足を投げ出してサンドイッチを食べている。

湊は下からジロッと睨み上げた。

「投げてません。渡したでしょ、ちゃんと」

「はいはい。それで寝ちゃったんだよね」

寝ちゃった？　あ、あの時？　た、確かにあたしの方が先に寝ちゃったけど……。

日頃のクールさと笑顔は何処に行ったのか、湊はサンドイッチを振り回すぐらいの勢いで反論した。

「適切な資料を提供するのだって、充分な労働なんだからねっ。センスが問われるのよっ」

「……わかってるよ」

拓也が真面目な顔で、小さく呟いた。

思いもかけないシリアスな反応に、湊はあれ？　と思う。拓也が彼女の手書きの資料を拝借した事を、彼女は知らない。それを大事にファイルに挟んでいる事も、もちろん知らない。

あんたのセンスがいい事ぐらい、知ってるよ。充分にね。

なんだろう、変なの、と湊は思った。減らず口は多くてもシリアスなヨシって、珍しい。

「でもいつそこまで調べたの？　勉強するにしたってそこを捜しだ……んっ！」

急に湊の動きが止まった。

口に手を当て、身悶えている。

「～……！」

「……どうしたの？」

「ベロ噛んだ～！」

彼女が涙目で拓也を見上げた。

拓也は一瞬、目を剥いた。

「……バカでしょ?!」

「痛ぁい～」

「その歳でそんな事やれるって一種神業じゃない？　俺、姉貴の子供がやってるトコしか見た事無い。ちなみにその子3歳なんだけど」

「どうしよう？　どうなってる？」

いきなり湊が、小さく舌先を突き出してきた。……舌を、突き出してきた?!

拓也は思わず固まり、その後最大限、のけ反った。

「……は？」

「血、出てない？　見て見て」

彼女は白い歯で軽く舌先を噛んで、拓也に見せている。彼女の小さな赤い舌が、拓也の目の前でチロチロと動いている。

こ、こいつ、俺に何をやらせたいのっ？

「……出てねーよっ」

拓也は顔を真っ赤にし、必死で酸素をかき集めて呼吸をしてから言った。

けれども彼女はそんな彼の努力を、いとも簡単にブチ壊す。

「嘘、ホントにぃ？　よく見てよ、すっごく痛いんだよ、ココ、ココ」

「知らねぇよ、出てねぇって」

「ちゃんと見てよぉ」

「見せんなっんなもんっ」

「ヒドい～……」

湊は涙を浮かべて口を閉じた。手にしていたペットボトルのお茶を飲む。

拓也は一息ついた気になった。正面に向き直る。

「それ天然？　仮に血が出ていたところで、どうしようもないだろ」

「そうなんだけどぉ……うう、痛い。ね、本当に出ていない？」

うわ、こいつまた見せやがった！

「……出てたら自分で、血の味がするんじゃねぇの？」

横目でチラチラと覗いながら、表面だけでも取り繕ってみせる。

湊はそんな拓也を大して気に留める様子も無く、眉間に皺を寄せながら、口の中でグルグルと舌を動かしていた。

つか、マジエロいんですけど、その表情。

ルームシェアを始めてから、俺に対する彼女の垣根が、高くなる

のに穴だらけに見えるのは気のせいだろうか……？

「……わかんなあい」

こいつっ！　２９にもなろうって女がそんな事言うなっ！

「あんたってそんなキャラだった？」

「うぅ、情けない……あー、痛かった」

しょぼんと肩を落として言う。

そんな姿を見て、拓也の中で何かが切れた。

おい。

いい加減にしろよ？

「ちょっと舌だして」

「え？」

「見てやるから」

急に嬉しそうな顔になり、湊は小さく舌を出した。

拓也が真顔で、低い声で言う。

「そやって噛まれちゃよく見えない。口、ちょっと開けて」

彼女は素直に、口を開けた。

全く警戒を、していない。太陽が輝く、昼間の公園。人通りもそれなりに。

「！」

湊は飛び上がった。ゆっくりと近づいてきた拓也の顔が、急に、彼女の唇に重ねられたのだから。

後頭部に手をまわされ押さえ付けられた直後に、彼の柔らかな舌がぬるっと侵入してくる。

舌の付け根を、舐め上げられた。

「っ！」

どうしようもない感覚。体中が一気に粟立つ。

その間に、彼女の舌は彼に絡み取られた。なんども擦られ、なぞられ、絡まれ、甘く噛まれる。

口の中の隅々まで、彼の舌が這う。

「……っふっ」

人が見てるっ何してんのよっせめて人がいない所でっ！

そんな気持ちが湧きあがって、一気に消えた。

頭が痺れて、首筋が痺れて、胸の先が痺れて、体の下と奥が痺れる。

すべてに靄がかかり、彼のキス以外何も考えられなくなる。口内を掻き回されているだけなのに、まるで体中を掻き回されている様。

……せめて、人が、いない所なら、……いいの？

好きな人とのキスって、こんなに感じるんだ。ヤバすぎる。

彼が角度を変える度に、体の血が逆流する。息が上がってくる。彼女の口内が絡み取られる代わりに、彼の熱が注ぎ込まれる。与えられた唾液を飲み下す事すら、必死だった。思わず彼のYシャツの胸元を、小さく掴む。

拓也の唇が離れた。最後に小さくペロっと唇を舐められる。体も離れた。そして冷めた瞳で、見下ろされた。

「血の味、しねーよ？」

「……ちょっと……」

湊は顔が真っ赤になっていた。上目遣いで彼を睨む。余裕な体（てい）の彼の前で、自分は呼吸まで痺れているみたいで、涙が出る程悔しい。

けれども拓也の表情は、益々冷たいものになっていった。

「何、その目。誘って来たのはあなたでしょ？　あんまり俺の事、

舐めないでよね」

瞳の奥に浮かぶ、抑えきれない苛立ち。
湊はそれを読み取る余裕が無かった。自分に起こった今の状況と、心の状況と、カラダの状況を把握する事に精一杯。

な、舐めないで？　その言葉、そのままそっくり返すわよっ文字通りっ。

そんな彼女を眺めて、拓也は突然ニヤッと笑った。

「じゃ、戻ろっか」

意味ありげに見つめる、笑いを含んだ黒い眼。
俺が精一杯強がって笑ってるなんて、あんたは知らないんでしょ？

おあいにくさま。一生教えてやんねーよ。

俺の動揺の半分でも、あんたを動揺させられれば。
頭ん中では、いつもあんたを滅茶苦茶にしている。そんな俺の憂さも晴れるかもしれない。

一方の湊は動悸と体の熱を抑え込みながら、必死に自分を鎮めようとしていた。

悔しい。こんな男が好きだなんて。

気まぐれであたしを振り回す、猫みたいな奴。本心なんて絶対に見せない天邪鬼。よりにもよってこんな男を好きになるなんて、

本当に、悔しい。

3

まずいまずいまずい。今日のアレは記憶から抹消っ。
さもないとさもないと……とんでもない事態が待ち受けてる気がするっ。舞彩（まあや）との泥沼、会社での噂、同じ部屋で劣情が止まらない二人……
って、あたしは変態かっ！　ああ、いやらしい妄想が止まらないっ。
そうだ、そもそもあの男が本気な訳がないんだ、何だか知らないけど軽くムカついた女にした仕打ちがアレなんだ、つまりはそーゆー男なのよ、天然ホストの血が脈々と体に流れているのよっ。
だから舞彩っ！　奴はやめろって！　くっそー、自分がこんな立場じゃ無ければあの子にチクリたいっ！

「うるせーな二度と俺に電話を寄越すなっ」

事務所の奥、閉じられた扉からの大声。
いつもニコニコ現金払いを数えていた湊（みなと）は、札を弾くその手を止めた。

「……何、あれ？」
「お父さんよ、多分」
「だよね。泰ちゃんがあんなに熱くなるのって父親くらいだもんね」
「父親？」

ちーとユミを交互に見つめる。
ちーは事務所のソファに身を沈め、両手を前で組むとうっとりとした顔で言った。

「そう。かっこいいパパなんだよー。お医者様でね、泰ちゃんを柔らかくして知性を加えた感じ？　大人の男の魅力満載で、ダンディで」
「悪かったな、俺には柔らかさと知性が欠けていて」

いつの間にやらソファの背後で、泰成が威圧感を持って見下ろしている。
ユミは彼女の隣で白い眼をして言った。

「ちーはすぐ話をそっちに持って行くー」

湊は札を封筒にしまいながら、話に乗った。

「でもあたしもオジサマ好きだから分かるなー。この間ね、すっごい好みのオジサマに声をかけられたの」
「湊ちゃんも大概好きね」

ユミの呆れた声。湊は笑顔を崩さない。いいじゃん、現実逃避させてよ。

「上品なポロシャツを着たロマンスグレーの人でね、歳は若く見えたけど多分６０前くらいなんだろうなぁ。今思えば首の付け根に少し傷跡があった。あれも良かった」

それをきいたちーは、少し眼を丸くして彼女を見た。
その隣でユミは相変わらずの態度。

「何フェチよ、一体」
「行ってきまーす」

湊は玄関へ向かった。その後を泰成が、少し焦った様子で追いかけてきた。

「なあ、その男って、何の用があったんだ？」
「知らない。お姉ちゃんと人違いされただけだから……え？　何でそんな事聞くの？　ひょっとしてこのお店の関係者？」

湊は一瞬身構えた。
泰成が顔色を変えるなんて、仕事がらみとしか考えられない。あの人、見た目と違ってヤバいお客だったのかしら？　お姉ちゃんの名前を出したけど、実はあたしのストーカーとか？　え、でもあたしあんな人知らないし。
そんな彼女の様子を見て、泰成は驚いたように軽く手を上げた。

「いや、まさか」
「……ふーん？」

不思議な沈黙。目が呆然としている泰成。何これ？

……ま、いっか。

「行ってきまーす」

パタン、と湊が出ていった扉を、泰成が固まって見送った。
その後ろから、ちーがそうっと近づく。
恐る恐る、彼に小声で言った。

「……確かおじさんも、首に気管支挿管のアトがなかった？」
「……」

なんだこの嫌な予感は……？
あのオヤジが、わざわざ、会いに行った？

「……それで今、……娘を、捜してるんでしょ？」

親戚故に、ちーは三田家の複雑な家庭事情を知っている。

泰成は片手で口を覆った。やべえ、やべえ、やべえ！
先日会った、奏（かなで）の姿が思い出される。

『私、不倫で出来た子なの』

嘘だろ、おい。勘弁してくれよ！

「ああ面白いね。彼、絶対君に気があるよ」

高級フレンチの席で、祐介がクスクスと肩を震わせながら笑った。彼の身なりと雰囲気が、この店に嫌味なくらいマッチしている。上品な表情の中の鋭い瞳が、ちょっとしたギャップを生みだしてかえって色っぽい。

湊は何となく恥ずかしくなりながら、赤ワインに手を伸ばした。今日のメインはラム。

来るパーティー同席にあたり、二人のデートを既成事実として作っておこうという計画だった。この店は彼の家族や関係者が御用達にしている所。

湊は少し俯いて、照れ臭さに口を尖らせた。スリットの割と深く入ったタイトスカートの中で、足を組みかえる。誰に見られてもいい様に、一応、勝負服なんだけど。会社のロッカーに忍ばせておいた。着替えて出る時、何人かの同僚に冷やかされた。

その時、拓也とは会わなかった。

彼が、あたしに、気がある？

「……それはまあ、薄々、何となく、ぼんやりとは感じておりますが……」

仮にそうだとしても、あたしと彼とじゃかなりの温度差があるだ

ろう。だって舞彩とラブラブじゃん。

「かっこいい彼氏と秘密の恋をしながら、身近な年下の彼に振り回される。そして秘密の仕事を抱えながら、僕とこうやって食事をする」

「その前にバイの彼氏と婚約破棄、があります」

「そうか。波乱万丈紆余曲折。これだから人生は、ってやつだね。それにしてもこういうお仕事の女の子から、プライベートの話を聞くとは思わなかった」

「す、すみません、ついペラペラと」

慌てて頭を下げる。誰にも言えない本音を、ちょこっとこの人にぶちまけてしまった。

しかも、ヨシを好きだ、なんて。

男女の駆け引きが無い、ビジネスライクな間柄のせいだろうか？

それとも彼の、物腰の柔らかさからくる安心感からかしら？

「いいよ、楽しいから」

祐介はテーブルに肘をつき、笑顔で目を細めて、本当に楽しそうに言った。

「でも君、幸せになりたくないんだろう？」

声のトーンも流れも変えずに言われたので、湊は一瞬理解出来なかった。

「……はい？」

「聞こえなかった？」

声の柔らかさも、笑顔も変わらない。けれども目が……笑ってない？　いやむしろ、メッチャ笑ってる？

どっちにしろ、なんか……

「……あの、おっしゃってる意味が……」

「別に不幸になりたい訳じゃない。けれども幸せにもなりたくない。だからもがいてる」

微笑みながら言って、彼はパンをちぎった。それを口に運ぶ。咀嚼しながら、何か裏を含んだ瞳で湊を見つめた。

「違う？」

「……何で？」

「さあ？　それは自分に聞いてみればいいんじゃないかな？　ま、

そこまで自分に興味があればの話だけど」
「……」
笑いながらも、どこか冷たさを感じる台詞。背筋がゾクっとした。
息を飲んで相手を覗う。彼は続ける。
「本命の彼と結ばれなくて、もがいている自分が好きとか。親友を裏切り、彼氏に対する後ろめたさもあり、それが甘美な媚薬となって、ベッドで余計に盛り上がる」
「……」
柔らかに紡ぎだされる声に、悪意は感じられない。むしろ事実を淡々と述べられている様。
しかも図星な気がして、湊は更に自分の息が浅くなる様な気がした。
落ち着け、落ち着け。
ひょっとして、怒らせた？
あたし、試されてる？
すると彼が湊を見て、にこっと微笑んだ。
「なんてね。ちなみにコレが、僕の女性を落とす常套手段」
え？
「はい？」

「こうやって相手を分かった振りをして、決めつけるんだ。相手が否定したら『それは君が本当の自分を知らないだけだ』とかなんとか言って言いくるめる。すると大抵の女性はそんな気がしてくる。そこにすかさず『本当の君を理解しているのは僕だけだよ』みたいな事を、耳元で囁くんだ」

呆気に取られる彼女の前で、彼が満足そうに口角を上げた。

「そうすると、大概一発でオチる」

「……」

湊は、口がパクパクと開いてしまった。

く、く、

「……く、黒ーいっ！」

ああ、人にナイフを向けてはいけません。フォークもダメです。

「よく言われるよ」

祐介はすましてワインに口を付けた。

ちょっとちょっと、いくらお互い最低限の事は理解しておこうって言ったって、このネタバレ本性丸出しのカミングアウトって何よ？

そっか、僕の腹黒も知っておいて頂戴、それは周知の事実だからね、みたいなやつ？　こ、恐い恐い恐いっ。

「その黒さで、数ある女性もさばいて、その内の一人を今回のパーティーに連れていけばいいのでは？」
「僕は余計なトラブルは極力避けたいタイプなんだ。その為の根回しには、力を惜しまない」
「……笑顔で言う事ですかね……」

湊は引きつり笑いを浮かべるしかなかった。陰謀とか裏工作って言葉が、背後で渦巻いてるわこの人。政治家だから？　職業病？　それともＤＮＡ？

「と言う事で、会場の近くに身内が温泉宿を取った。一泊二日、申し訳無いけど一緒にいて貰うよ。仕事だからね。もちろん、天に誓って神に誓って、君には何にもしないからご安心を」
「……天も神も信じていなそう……」
「……」
「しかも笑顔で無言だしっ」

いやー、この人ってキングオブ外面だわっ。あたしだって外面愛想がいいけど、ここまでお腹の中は黒くないものっ。

「桃ちゃん、食べる姿が綺麗だね」
「えっ？」

いきなり言われて驚いた。
先ほどとは微妙に空気が違って、彼が今度は柔らかに、こちらを見つめている。

「上品だし、洗練されている。パーティーの為に勉強したんだろう？　……頑張ったね」
「……」
「でも品って、本来は内面から滲み出る物なんだ。元々、君にはそれがある」

僅かに甘く煌めく瞳。再びドキッとする。

……この人、これ以上何を企んで……

「……ひょっとして、下げて、上げるってヤツでは……」
「もちろん。効果あったろ？」

湊は軽く目眩を感じた。出来る事なら手にしたフォークを放り投げたい。白いタオルの代わりに。
寒いっ。寒いですっ先生っ。油断も隙もなくって、なんだか食事が喉を通らなくなってきましたっ。
あたしにこれ以上、プレッシャーを与えないでっ。

……つっかれた……。

湊は車から降りて溜息をついた。家まで送ると言ってくれた祐介を断って、それなりに離れた所で降ろしてもらった。

一応形だけの申し出をしていた祐介も快諾してくれた。

そりゃそうでしょ、場所をしられるのもマズイけど、ヨシと住んでいる事まで知られたら……。

時計を見ると10時近く。彼も帰宅しているかしていないか微妙な時間だ。とはいえ祐介には、流石に本命の彼と同居している事までは言っていない。

言ったら……なんかすごく軽蔑されそう……。

「湊ちゃん?!」

突然声をかけられて、湊は弾けた様に周囲を見回した。すぐに気付く。目を疑った。

虎太郎(こたろう)が、立っている。

みると彼の後ろには、先日偶然会ったレストランの看板。そっか、彼、よくここに来るって言ってたっけ? 芸能人の隠れ家だって。

二十日ぶりくらいに見る彼は、やっぱりカッコ良かった。王子さまが、佇んでいるみたい。

後ろに(彼の仕事関係であろう)人の集団がいるのだけれど、そ

れが全く目に入らない。彼だけ縁取りされたよう……。

「……虎太郎……」

「どうしたの、その格好。……うわ、すげ……」

彼は目を見開いて、片手で口を覆った。

その仕草に湊はギクッとなる。

「え？　へ、変かな？」

スリットの割と深い、青と紫の中間色のワンピース。黒いベルトを合わせ、小さなパールのロングネックレスをしている。耳元にも、揺れるパールのピアス。

似合わない？　気合、入れ過ぎた？

「や、すげぇ……似合うっつーか……」

虎太郎は心もち顔を赤くして、ドギマギした様に彼女を見た。

そしてとても優しい瞳で彼女を見つめる。

「ヤバい。俺、すげぇ嬉しい」

湊は胸の奥がズクっと疼いた。

こんなに優しい眼であたしを見てくれるのは、きっと彼だけだわ。

どうしよう、胸が切なくなる。

「虎太郎……」

彼は湊にゆっくりと近づくと、正面に立った。そっと両手を握ってくる。
笑顔で、でも少し掠れた声で言った。

「すごい偶然。超ラッキー。今日、すげぇついてるわ」

その掠れた声が、彼の渇きを表している様で。ひょっとしたらお酒を飲んだせいなだけかもしれないけれど。
でも、彼の瞳の熱さは、多分本物。

湊は小さく笑った。

「……さっきから、すごい、すごいって……」
「……会いたかった」
「……うん。あたしも」

びっくりするほどすんなりと口から出た。あたしも、会いたかった。抵抗なく言える、あたしって嫌な女だ。
だって彼がマメにくれる電話をなんの疑問も無く受け入れ、それ以上の事を欲していなかったのだから。
会いたい、なんて。

でも目の前の彼の笑顔を見ていたら、彼が望む台詞を躊躇い無く言えてしまう。

虎太郎が少し潤んだ瞳で、彼女を見つめる。熱の籠もった声で、

囁く。

「湊ちゃんち、この近くなんだろ？」

「え？　あ、うん……ん？」

あれ？

「俺、行ってもいい？　散らかってもいいから」

きゃーっ！　やっぱり今日も忘れてたーっ！

「ええ？　あの、その……あの人達は？」

「大丈夫、もうお開きだから。それよりも……君と、離れたくない。つか、離したくない。……うわ、俺、台本無しでこんなコト言ってるよ。痛ぇな」

照れた様に顔を伏せる彼。

やだやだ、そんなに純朴に語らないでよ照れないでよっ、嬉しそうにしないでよっ。

「ちょ、ちょっと待って……実は、あの、弟と住んでいて……」

「弟さん？　そうなんだ。じゃあ挨拶しよっかな」

「えええっ！　そんな軽くっていいのっ？」

「いいでしょー、身内くらい。何なら俺、ご両親にも挨拶してもいいよ？」

親にっ？　家族にっ？

いや百歩譲ってそれはＯｋとして、いえいえ譲るなんておこがましい身に余る光栄なのですが、「出会いは何処で？」「レンタルハニーと言うものでして」あり得ないっ！

あれ、弟？　そうかヤツは弟ではないし、別にあたしの彼氏を紹介したところで何の支障も無い訳で、そうじゃなくて今阻止するのはヨシとの同居がバレる事で、

ああ、パニクってきたっ！

「冗談だってば」

頭上から虎太郎の苦笑した声が聞こえてきた。

顔を上がると、やっぱり少し潤んだ瞳で見つめられる。

「……やっぱ、ダメ？」

長い睫毛。大きな黒目。通った鼻筋。柔らかい唇……

「……ちょっとだけなら……」

ああっ、あたしのばかーっ！！

「お邪魔しまーす……」

「あの、お茶入れるね。あっちがあたしの部屋だから、入って入って」

興味深げに中を覗き込む虎太郎より先に、湊はバタバタと玄関を上がった。

拓也には何度電話しても繋がらない。しょうがないから「今彼氏が訪問中っ！　帰宅禁止っ！」のメールをした。でも夜１０時を回ったこんな時間、帰宅禁止メールを貰った所で、拓也だってどうしようもないだろう。

こうなったらとっとと彼をあたしの部屋に押し込めて、その後からこっそり帰ってきてもらうしかないっ。そんでヨシは朝まで自室に監禁よっ。

「いいよ、こんな時間に。仕事で疲れている人が動かないで。俺が押しかけただけなんだから」

「でも」

「こっち、来て」

キッチンに立った湊の後ろから、虎太郎がそっと腕を掴む。

振り向くのと同時に、彼の腕の中に包み込まれた。

「こうしたかっただけ。外だと、人の目があるだろ？　だから来たんだ。ごめん、振り回して」

耳に染みわたる、心地よい声。耳を通して、心にまで染みわたる

様。
久しぶりの彼の腕の中に、何とも言えない温もりと甘さを感じて、湊は顔を上げた。
彼女を見つめる彼の視線と、絡まる。

「出会った時から、俺の都合で振り回してばかり。本当に、ごめんね」
「……そんな……」
「毎日、湊ちゃんの事ばかり考えていた……」

唇にかかる、彼の吐息も甘くなった。
そう思った時、湊は唇を塞がれた。

今日、二度目のキス。
だけど彼との、二十日ぶりのキス。

「俺、君に溺れてる」

耳元で囁かれる声には、彼の想いと欲が溶けあっている。
それが彼女の、心を溶かす。

湊が薄く息を吐いたら、彼の親指が口の中に軽く入り込んできた。
口内を少し引っかきまわす様に動く。
その指に思わず舌を這わせようとしたら、再び彼の唇で塞がれた。
彼の舌が激しく口淫するように掻き回す。情熱的なその熱に、彼

女は足元をすくわれそうな気になった。
このまま絡め取られて、どこかに連れて行かれそう。

その時。

がたっと物音がして、二人は反射的に顔を離した。

拓也が、靴を脱ぎかけた姿勢で、丸い眼をして固まっている。

「……えっと……」

ポカンとした口から、拓也の戸惑う声が漏れた。

4

しーんと静まる室内。呆然とした三人。
卓上時計の秒針が響く。

……こういう場合、誰から口を開けばいいの……？

え、俺？

「……あの、すいませんでした……」

拓也は二人を見比べて、試しに謝ってみた。だけど、他に何て言えば良い訳？

「わっ、ごめん、すいませんっこんな所でっ。申し訳ありませんっ」

虎太郎が勢いよく頭を下げた。
それに拓也は圧倒され、手にしていた脱いだ靴が、ポトっと落ちた。

「……はあ。あの……」
「君が、弟くん？」
「はい？」

素っ頓狂な声が出る。
顔を上げてみると、虎太郎の後ろで湊が、真っ青な顔をして、激しく頭を上下に振っていた。肯定しろ、と言っているらしい。

……本日二度目。あの女にキレたっ！

おいっ当事者！　何とか言えよっ！
あんたあんなに厚い面の皮で世間も仕事も渡ってきてる癖に、自分のプライベートの事だとあっさりフリーズしてんじゃねぇっ！

くそう、とにかくここは話に乗るしかない。例え引きつった笑顔しか作れなくても。

「そうです、いやぁ、まさかねーちゃんの彼氏がゲーノージンとは」
「よろしく」
「俺、部屋に入ってもいいんすかね？　ちょっとちょっと」

そう言って拓也は湊に手招きをした。彼女はビクッと飛び上がる。
このやろう。
そんな彼女の様子に気付かない虎太郎は、ハンサムこの上ない顔に人の良さそうな表情を浮かべた。

「もちろん、俺はすぐに帰るから」
「いえ、大丈夫っす。……『ねぇちゃん』？」

拓也のダメ押し。可愛い笑顔。
黒目がジッと湊を見つめて、口角は理想的に上がっている。
けど……けど、その目が……笑ってなぁいっ。

「……はい」

恐る恐る玄関に向かう彼女の肘辺りを掴み、拓也は笑顔で連行した。

「すいません、すぐ、済みますんで」

玄関を出て、廊下を歩き、階段の踊り場へ。
音声はもちろん、小さくしましょう、夜中ですからね。
ドスを利かすのは声の大きさではなく、秘めた怒りのパワーです。

「あんたどういうつもりだよっ。男連れ込むなんてルール違反だろっ！」
「ごめんごめん、どうしても不可抗力でっ」
「ふざけんなっ！　何が不可抗力だよっ男言いくるめるスキルあんだろっ！　どうにかしろよ自分でっ」
「すみませんすみませんすみませんごめんなさいっ」
「しかも俺の事、弟って言ってどうすんの？」

へ？　と思った。
言われた事の真意が、イマイチ良く分からない。

「……どういう意味？」

そろそろと上目遣いで覗うと、拓也のイライラとした視線とぶつかった。ぎゃっ。

「馬鹿だねー。深い付き合いでもして、家族に紹介したらバレちゃうじゃない。そうしたら一巻の終わりだろ？　どうすんだよ、また婚約破棄でもするの？」

「こっ婚約……考えてなかったっ！」

「ああ、いずれは別れるつもりで付き合ってんのね」

「……」

「何も考えてねーのかよっ」

「フツー何も考えないでしょーっ」

「お前、それじゃ婚期逃すぞっ」

「親と同じ事言わないでーっ」

両手で耳を塞ぎ目をギュッと瞑って「やあーっ」と言うと、その声があまりにも大きいものだから、「うるさいよっ近所迷惑だろっ」と拓也に慌てて口を塞がれた。

溜息を一つついて、拓也は彼女から手を離す。

「じゃあこういう事にすれば？　俺はあんたのオヤジが作った、腹違いの弟。あなたのお母さんには家族総出で隠している為、存在すら知らない。子供達同志でだけ、交流がありました、と。スッゲー不自然だけど、これなら巻き込むのはあなたのお姉さんだけで済む

でしょ？」

それを聞いてしばらくした彼女は、驚いたようにゆっくりと目を開け、おずおずと両手を耳から離した。

「……ヨシ……なんでうちの家族構成知ってんの……？」

「気になるのはそこかよっ」

寝ぼけんなよっ状況把握しろよっ、俺がしてるのはあんたの尻拭いっ。

拓也は息を整えた。

彼女の家は父親が１０年以上前に亡くなっていて、二歳年上の姉との二人姉妹。

「４年越しの付き合いでしょうが。知ってるよ、それくらい」

「……おっそろしいくらいの策士だね。瞬時にそこまで考えるなんて。口から出まかせ言うの、マジうまいよね。しかもリアルに設定細かいし「あんたさ、俺に協力して貰いたいの、貰いたくないの、どっち？」

今度はかぶせるように突っ込まれる。湊が拓也を見ると、うわ、恐い。さっきと違って根暗に怒（いか）ってる。目が据わってる。

「お願いします」

「じゃあ死ぬ気で嘘つき通せ」

強い口調で、上から見下ろされ、言い放たれた。
死ぬ気で？　湊は息をのむ。ごっくん。ばれたら、かなりヤバい？

「この貸し、高いよ？」

そして冷めた目で、突き放す様に、拓也に睨まれた。

……ど、どこでどう、お返しを要求されるんだろう……？

部屋に戻ると、虎太郎が不安げにリビングに座っていた。

「お待たせしました、コタローさん」

拓也が声をかけると、彼は弾かれた様に立ち上がる。
顔が、申し訳なさで一杯、といった表情だった。

「すみません、俺、帰ります」
「いやいいっすよ、自分、部屋に引っ込みますから。どうぞごゆっくり」
「でも湊ちゃん、明日も会社だし。今日も随分疲れているみたいだから。僕はここで」

形の良い眉を下げ、ペコペコと頭も下げる。

「そうですか？」

拓也も眉を下げ、「すみません」と苦笑いの会釈を見せた。

じゃあなんでここまで押しかけて来たんだよ、なんて野暮なことは聞かない。

秘密主義の彼女に、我慢が利かなくなってきたんだろう。強引にでも、部屋に入りたかったに違いない。見る感じ純朴そうなこの俳優男には、きっと思い切った行動だったんだろうけどな。

自分の目で色々と確かめたかった、ってヤツだ。この状況、今はどう言い訳したって、俺は要注意人物だよね。

拓也は、甘く見つめ合う二人を冷めた目で観察した。虎太郎の、愛しむ様な眼差し。湊の、少しはにかんだ柔らかい笑顔。

あんたさ、男を蜜で誘って、真綿で包んでおいて、自分の大事な中心部は隠す。それがどれだけ相手をハマらせるか、分かってんの？　まるでアリ地獄みたいに、相手はどんどん堕ちてくんだよ。

本気で相手を好きになれない、って言ってた彼女。彼はどこまで、耐えられるんだろうね？

でもそうしたら、湊（あいつ）の幸せって、結局何処にあるんだろう？

十分後、虎太郎は夜道を一人で歩いていた。
両手をパンツのポケットに突っ込み、ボーっと前を向いて進む。

「……弟ねぇ……」

知らず知らずに言葉がついて出た。
視線を一瞬下に落とし、そして夜空を見上げる。星は、一つも見えない。

「……弟、ねぇ……」

傍から見ると、まるでドラマのワンシーンの様なんだろう。どっかで似た様な芝居、した気がするし。
でも現実なんだよな。

この際、彼が弟だろうが従弟だろうがはとこだろうが他人だろうが、関係無い気がする。
虎太郎は軽く目を細めた。

問題は、全く別の次元だ。

彼は、彼女のキーを、握ってる。

今の彼女の、全てを支配する、キーを。

泰成は携帯電話に向かい、低い声で言った。

「あんた、会いに行ったのか？」

電話の向こうで、一瞬の戸惑いが覗える。

『何の話だ？』

「……娘……奏（かなで）って女に……」

少しの沈黙が、あった。

『よく知ってるな』

畜生、やっぱビンゴかよ！！

怒鳴りつけたい気持ちを必死に抑え、彼は唇を噛んだ。

自分の父親に外で作った娘がいる、と聞かされたのは一年前の事だった。

母親も亡くなり、その後大病をした父親が、無事生還した後に急に言いだしたのだ。

母の命日に。親戚連中の前で。

再発するかもしれない。それに怯えたくない。後悔はしたくない。
妻に正々堂々と報告したい。彼女は全てを知っていた。そして、
そんな自分を受け入れてくれた。

あのなぁ、そう言うのを、立つ鳥後を濁すって言うんだよっ！
何もせずにサッサとぽっくり逝っちまえ！！

「……会ったのか？」
『いや。だけど孫は見れた』
淡々とした口調の中にも、嬉しそうな様子が伝わってくる。
それが泰成を更にイラつかせた。

「……どの面下げて会いに行くんだよ。しかも今更人の家庭まで壊すのか？」

『……全くだな』

父親の、静かな声が聞こえる。

『けれども、これは私の問題だ、泰成』

このエリート男は、一般的な医者が辿る様な教育パパとは全然違い、究極の放任主義だった。最初から俺にあまり興味が無かった。
中学で俺がグレた時も。高校を中退した時も。
『全てはお前の自由、自己責任だ。好きにしろ。ただし、金は出

さない』

泰成は、忌々しく電話を切った。

今はそんな事、どうでもいい。好きにさせて貰った人生、これも充分満足だ。暴力を振るわれる家庭や親が蒸発する家庭を友人の中に見てきた自分としては、全く恵まれた環境だったと思うから。ああそうだよ、俺の自己責任だ。

だけどこれは別っ！　全くの、別物っ！

奏（かなで）ちゃんと俺が、兄妹っ？　俺ら、兄妹でホストクラブでいちゃついてた訳かよっ！

つーより、藤堂！　そしたらあいつ、俺の義理の妹って事かっ？！

俺、やっちまったよ、義理の妹とっ！！

「……うおおおおおおっ！」

なんつー燃えるシチュエーションなんだーっ！！

「あ、泰ちゃんが壊れた」

扉の向こうの事務所のソファで、ユミが紅茶をすすりながら平然と言う。
ちーは心配そうに、チラチラとこちらを覗っている。

義妹と禁断の関係、あの夜の勢い、
じゃなくって、これからはあいつをそう言う目で見ないようにしなくては……

……無理だーっ！！　益々意識するーっ！！
どーしよ、迂闊に抱きしめる事も出来ねぇ。ってえ、俺？　やっぱあいつを抱き締めたかったの？

とかなんとか言ってる場合じゃ無くって、俺、妹に何の仕事をさせてるんだ？

……げ、ヤバいだろっ、妹を男に斡旋してんじゃねぇかよっ！！

ヤバいヤバいヤバいマズイっ、即効あいつにやめさせなくてはっ！　俺、鬼畜の風上にもおけねぇっ！！

あああああああっ！！

親父っ！！　世の中、自己責任じゃ済まされない事もあるんだよっ！！

4（後書き）

ああ、ややこしい。
でも泰ちゃん、最初からこの設定だったんで我慢して。オヤジのパニックは見苦しいよ？

そして拓也の心には、新たな波風が。
虎太郎も徐々に、事態を把握してきてます。彼は直感で動くタイプです。
湊ちゃん、どうします？
心のリハビリ期間をそろそろ終了させないと、大変な事になりますよ？

5

虎太郎（こたろう）は控室にいた。ソファに横になって、雑誌をめくっている。長い睫毛をした大きめの瞳が、ジッと紙面を凝視している。整い過ぎるぐらい整った顔は、ともすると能面のように、表情が無い。

そこに女性が入ってきた。３０代半ば。長いサラサラのストレートの髪に、黒いスーツをスタイリッシュに着こなした、虎太郎のマネージャー。

彼女は無表情の虎太郎を一瞥して、それから彼が手にしている雑誌を覗き込んだ。

「何？　住宅情報誌なんか読んでるの？」

「……ねぇ、れーこさん。俺、引っ越してもいい？」

「えー？　どうしたの、急に？」

相変わらず紙面から顔を上げない彼に、彼女は明るく受け答える。虎太郎が無表情な時、それは彼が真剣で、かつ多少のストレスを感じている時だと言う事を、彼女は知っているからだ。

「ひょっとして、女の子？」

「……うん。一緒に住もうかな、と思っててさ」

「まあ珍しい。真面目に好きな子がいるんだ？　あんなに来るもの拒まずの、入れ食い状態だった子が。へぇー」

「やめてよ」

彼女がからかうように言うと、虎太郎は少し居心地悪そうに、顔を多少赤らめて彼女を睨み上げた。

彼女は笑いながら、彼の様子を意に介さない。

「どんな子なの？」
「……いい子だよ」

俺よりかなり頭が良くて、美人で、笑顔が可愛くて、

「一般人」

普通の会社員なんだけど、ちょっと特殊な仕事もやっていて。

「へぇー。ラブラブなんだ？」
「うーん、努力中？　あともうちょいって気もするんだけどね。……一応、付き合ってるんですよ」
「あははー。片思いか」
「れーこさん、にこにこ笑いながらグサグサ言うなよ」

ついに拗ねて、唇を突き出して彼女を睨んだ。けれども彼女はおおらかな笑顔を見せたまま。
そんな大人の女性の瞳の奥は、彼には読めない。
あ、今俺、色々と見透かされているかも。

「大人ならうまくやりなさーい。本気で真剣にその子だけって言うなら、いいんじゃない？　私が上にはうまく言っておいてあげる。でも、変なトラブルは起こさないでよ？　例えばケイとか。あの子本気よ。気をつけてね」

ケイ、と言われて、長い付け睫毛に縁取られた、小柄で可愛い共演者を虎太郎は思い出した。

「へぇ、そう？」

「試しに味見、は禁止だからね」
「しねぇよ、そんな事」

突き出した唇そのままに、わざとらしくプイっとそっぽを向いてみせる。
そして彼女と目が合い、お互い笑ってしまった。

だって随分前に、もう喰っちゃったもん。
とは流石に言えないっしょ。それにあの時はまあ、彼女を結構好きだったし。

虎太郎は肩をすくめた。ケイと関係があったのは、もう数年前。
あの時は、虎太郎が彼女を追いかける様な形だった。

それより湊ちゃん。
彼女を、彼(あいつ)から引き離す。
これをしない事には、物事が前には進まない。

……俺、あの子と結婚したいのかな？

虎太郎は一瞬、眉根を寄せてしまった。
こんな事を考えるなんて、いくらなんでも早すぎね？

……でも、そういえば、今まで思った事も無かったな。結婚、だなんて。

虎太郎とのキスを、拓也（ヨシ）に見られた。
それが湊の、憂鬱のモト。

あーっ、あいつ、何であんなに飄々としてんのよっ！
びっくりはしていたけど、その後はあんなに冷静にあたしと口裏合わせるなんてっ。そりゃ、自分に飛び火するのが嫌だったからでしょうけどっ！
拓也の憎ったらしい笑顔が、脳裏に浮かぶ。
あたしにっ！　あたしにっ！　キスまでしておいてっ！！　舌まで絡めといてっ！　あの時だってあったまくるほど冷静だった！！

湊は拳を振り上げかけて、溜息をついた。

未練がましい、っていうか女々しいわ。ヨシは舞彩とラブラブ付き合っているじゃない。片やこっちは、思いっきり対象外だったし。ほら、なんてったって貞操観念の薄い女で？　だから男の相手が簡単に出来るでしょ、みたいな？　だから僕とも簡単にキス出来るでしょ、って感覚なんだ、絶対。

……そんな奴を、何で好きなのよ、あたしは。
自問。

……ああ、そうか。好きに理由なんて、無いんだ。
あの笑顔の前には、全てがぶっ飛んじゃうんだ。
自答。しかも大正解。

湊は涙がこみ上げてくるのを感じた。え？　こんな所で？　このタイミングで？
唇を噛んで、上を向く。

くっそ！　ええ、どうせあたしは、突っ走るのが怖い、臆病な大人ですよっ！
せめて天下のあんなイケメンとキスしている所を、あいつに見せつけられただけでも良かったわっ！
そうよ、こっちだって、あたしの事を好きって言ってくれる人とラブラブするんだからっ！
その方が何かあっても、傷が浅くて済むじゃない？

……ってうわ最低。何て自己中なの、自分。

「ねえ、みなちゃん、週末デートしない？」
「きゃあっ」

更衣室で帰り支度をしていたら、舞彩にいきなり話しかけられた。
「ええ？　デ、デート？」

部屋にはいつの間にか、湊と舞彩しかいない。
考えていた事が事だけに、湊は彼女の顔がまともに見れなかった。

「……ご、ごめん。週末はちょっと用事が……」
「わーん、こっちも振られたー」

舞彩が湊の肩に抱きつく。

「……も？」
「拓也くんも」

あの旅行以来、舞彩は『吉川くん』から『拓也くん』と呼び方を変えた。
それがいかにも、「私達、あの夜に結ばれました？」と湊に言っているみたいで、聞いている湊は何とも言えない気持ちになる。

「ヨシに振られたんだ？　デート」
「うわーん。急にいい所が取れてね、だからお泊りデート出来るかと思ったのに、そーゆー時に限って、拓也くん用事があるってー」

いい所？　お泊りデート？　と言う事は、舞彩が宿を取ったんだ？
湊は少し驚いた。この子、ホント積極的ー。つか、ヨシ、ホント受け身ー。

「へー？　どうせバスケとかなんじゃない？」
「違うみたいー」
「めっずらしい。大した趣味も無い癖に」

湊は苦笑すると、「なんなんですかね、忙しい振りなんかしちゃって」と拓也の口調を茶化しながら、ロッカーを閉めた。舞彩を見て、小首を傾げながら肩を竦める。
するとそれを眺めていた舞彩が、ボソッと言った。

「……みなちゃんと拓也くんって、やっぱり似てる」
「……はい？」
「……好きになりそう……」
「ちょ、ちょっと待って」

湊は気持ち後ずさり、ロッカーに背中がついた。

「というかソレ、前も言ったよね？　どこが似てるのよ？　あたしあんなに図々しくないよ？」
「雰囲気が似てるのー。言葉遣いとか、会話の間の取り方とか、言ってる事とか。遅刻も一緒だし、ゴキブリが出るタイミングまで一緒っ」
「……」

……こ、これは色んな意味で、突っ込み所が満載だ……。

湊が引きつった笑いを浮かべていると、舞彩は可愛い顔をグイっと彼女に近づけてきた。

「何でそんなに二人は似てるの？」
「……さあ？」

だから似てないし。

「実は姉弟（きょうだい）？　そう言えば拓也くんのお姉さんって、たしかみなちゃんくらいだったよね？」

湊は目が丸くなってしまった。

……その設定って、どっかで聞いた事がある。っていうか、アレだわ。

「……実は、えーっと、腹違いの弟なんです。死んだ父の隠し子で、私の母は何も知らないのですね。けれども子供同士は交流がありまして、私と姉と、弟拓也の三人は、時折連絡を取り合っていました」

スラスラと口から出してみたら、舞彩が大きな目を更に大きくして、ポカンとした様に湊を見つめた。

二人で、しばしの無言。

「……って言ったら、信じる？」

「……そういう設定のドラマ、絶対売れない」

「だよね」

湊は真顔で、真剣に溜息をついた。ヨシ、これは失敗だよ。

「あたしの男友達が、彼女にコレを言われたら信じてて」
「それはみなちゃん、信じた振りをしているんだよ。それぐらい彼女の事が好きなんだよ。だってそうすれば、付き合っていられるでしょ？　私だって拓也くんにソレ言われたら、信じる振りするもん」

舞彩がためらう事無く言ったその台詞が、思いの外力強いものだったので、湊は一瞬言葉を失ってしまった。

「……そっか」
「拓也君を手に留めておくためなら何でもするし、何でも信じる。見てって言われたら何でも見るし、見て欲しくないもなら、見ないフリも出来るよ」
「……舞彩……」

言葉を失うどころか、絶句してしまう。
彼女のここまでひたむきで激しい想いを聞いたのは、初めてだった。

つまり、信じた振りをしていた虎太郎も、同じ想いって事なのかしら……？

自分がつけたかもしれない、相手の傷を想像して、一人で勝手に胸が痛む。
舞彩はそんな湊の目を、真っ直ぐに見つめて言った。

「私、拓也くんの事が大好き。でもね、あんまり好き過ぎて、だか

ら不安なの。もしかしたら私ばっかりが好きなんじゃないかって。彼の気持ちはどれくらいなんだろうって。……もし彼に振られたら、って考えると、恐くて不安で堪らなくなる」

彼女は切なそうに顔をしかめる。

それを見た湊も、痛んだ胸を何かで掴まれた様に、キュッと切なさを感じた。

……なんか、分かる気が、する。

「おかしいね。彼と付き合う前は、側にいるだけで良かったし、自分に笑顔が向けられるだけで嬉しかったのに……付き合い始めると、逆に、恐いものがどんどん増えて来るなんて。不安が増してくるなんて。……先に進めば進む程、抜け出せなくなって、益々彼に縋りつきたくなるの。もっと、もっとって」

俯いた彼女の長い睫毛が、瞳に影を落とし、湊は益々胸を掴まれた気分だった。今度は、鷲掴みだ。

でも不安(そこ)から逃げないで、むしろ更に彼に向かっていけるのは、舞彩がそれだけ強いからで、或いはただ若いからだけで、

いずれにしても、あたしには無いものだわ。

「こんな女の子、重いよね」

「そんな事無いよ。舞彩は一途だし、可愛いよ」
「私、拓也くんの彼女なの」

急に会話が繋がらない言葉を言われた気がして、湊は止まってしまった。
え？　それは知ってるよ？
すると舞彩が、湊をジッと見つめた。

「でも、彼の特別、じゃない気がする」
「……え？」

意味が飲み込めず、でも何となくよろしくない雰囲気がして、湊は眉根を寄せて舞彩を覗き込んだ。
舞彩はじっと湊を見つめ続ける。
胸の中で、呟いた。

……この表情とこの仕草、やっぱり拓也くんに似ている。

……ねえ。

拓也くんの特別は、みなちゃんなの？

それだけは、絶対に、ダメだよ？

……なんだったんだろ、アレは……。

湊は舞彩と明るく別れた後も、彼女の最後の様子が気になっていた。

何かあれ、ビミョーな雰囲気を持ってた様な気がする……。

「ごめんね、藤堂さん。こんなおじさんに付き合わせちゃって」

レストランで、向かいの席の課長が、人のよさそうな顔にすまなそうな表情を浮かべた。仕事中の、隙の無い瞳の光が今はなりを潜めて、目の前にいるのはただの小柄なオジサン。

「あ、いえこちらこそ、こんな素敵なお店に連れて来て頂いて」

湊はニッコリと微笑んだ。

課長に今夜の夕食を予約されたのは、随分と前の事。湊は彼の人柄が好きだったから、彼と二人で食事に行く事になんの抵抗も感じなかった。家庭を大切にする、穏やかな人。下心なんて、絶対に無い。

それに二人の会話は自然で、それでいて途切れる事が無い。彼女が素でも楽しめる、数少ない人間の一人だった。

「……実はね、あなたに、話したい事があるんです」

急に彼にかしこまられ、湊は緊張した。
あたし、なんかヘマをやったかな？　全然、見当がつかない。

「僕が、もうすぐ独立する事はしっているよね？」
「あ、はい。来月末ですよね？　ご家族の事務所を引き継ぐとか。随分大きいんですよね。おめでとうございます」
「ありがとう。実はそこなんだけど」

急に彼の目に、仕事の時の強い光が宿った。

「君に、来てもらえないかな？」
「……え？」
「前から、会社の若手を一人、誰か引きぬこうと考えていた。室長には了解をとってあるんだ。藤堂さん、あなたに来てもらえると、大変、ありがたい」

湊は頭が真っ白になった。
事を理解するのに、随分と時間を要してしまう。

「……あたし、ですか……？」
「そう。仕事が出来て、しかも確実で、そして一人一人のお客様を丁寧に扱う。そういう人材がほしいんだよ。君は仕事にムラがなくて、人当たりも良くて信頼出来る。それをね、言いにくいんだけど、この間あなたが婚約解消をした時に、感じたんだ。しっかりしてるな、って」

「……はあ……」

呆気に取られて、次に段々焦ってきた。

……ダメよ、あたし、あれをきっかけに出張ホステスみたいな事をやってるもん。うひゃひゃ、充分動揺していたんですよ、陰で、たっぷり。結構な自暴自棄なんです。そんな女が、ヘッドハンティングなんて受けられる訳がありません、しかもこんなにいい課長にっ。

……でも、職場を移れば。

ヨシと、会社で顔を合わせずに済むんだ。

突然、仕事と全く関係ない事が頭をよぎった。

ヨシと、舞彩を。職場を変えれば、この二人の様子を、見ずに済むわ。

どうしよう。

思考が、これ以上働かない。

課長と別れた後、地下鉄の乗り場に向かってボーっと歩く。

転職かあ。あたしにも、そんな話が、ついに来たか。

その時ふと、向かいのビルの壁に掲げられている、虎太郎の大き

な広告が目に入った。清涼飲料水の大きなアド。

屈託がないけどどこか色気を感じさせる、彼の笑顔が輝いていた。
あんな人と付き合っているなんて、信じられないわ。
あの唇が、あたしにキスをして……あそこにも、あそこにも……。

湊は立ち止った。やっぱあたし、変態かも。街のど真ん中で何考えているのよ。さっきまでえらく深刻で真面目な事を考えていなかったっけ？　ほら、エロが全く顔に出ていないでしょ？　完璧じゃない。男だったら絶対ムッツリスケベだわ。

……そうだ、虎太郎に電話してみよう！
考えてみれば、自分から電話するなんて初めてかもしれない！
変態チックなエロ妄想は内緒にして、「今あなたの事を考えてたの、急に声を聞きたくなって（うふ？）」とかってどうかしら？
うん、可愛いっ。
あたし、転職しようかどうか迷ってるの、どうしよう？　なんつってね、可愛くね。うん、こういう路線も研究、研究！

コールは、7回目で出た。
「もしもーし」

女性の、声で。

「……」

湊は思わず耳から離し、ディスプレイを確認した。ダイヤル先は、確かに虎太郎。

「もしもーし。えーっと、藤堂さーん？」

若い女性の声。多分、向こうのディスプレイにも湊の名前が出ているのだろう。だから、バレている。

というか、この人、誰！

湊は再び携帯を耳にあてながら、どうしていいか分からず口が半開きになった。

ちょ、ちょっと待って？

え？　女？　女の人？

……あああ……

……転職話が、頭から完全に吹っ飛んで行く……。

5（後書き）

間が空き過ぎました。ごめんなさい。反省ですっ。
それにしても、一人になれる時間が少なすぎるっ。

6

泰成が事務所の扉を開けると、拓也がソファに両足を投げ出して寛いでいた。
手には携帯ゲーム機を抱え、膝の上には旅行雑誌が伏せて置かれてる。

「あ、泰兄おかえりー」

そしてゲームから目を離さず、当り前の様に声をかけてきた。
泰成は、唖然とした。

「……拓也？」
「あ、拓ちゃんクリアした！　すっごい！」
「いぇ～い、ライフ一個も減らしてなーい」
「いぇ～い」

拓也は隣に座っているちーと、二人で盛り上がってハイタッチ。
そして再び、今度はソファの背後のユミも交えて三人で、小さな画面を覗き込むようにゲームを再開させた。
しばらく呆れたように見入っていた泰成は、思い出したように靴を脱いで部屋に上がる。

「……お前、何でここにいるんだよ？」
「んー？　だって泰兄、なんか話があるって言ったじゃない」

やっぱり拓也は顔を上げない。この図々しさ、今に始まった事じゃねぇけど。

「言ったけどよ、来いとは言ってねーだろうが」
「だって電話しても繋がらなかったし、今日はたまたま近くから直帰だったんだもん。え、何？　僕がココ来ちゃいけなかったの？」
「そーんな事無いよぉ。拓ちゃんなら大歓迎。だって従業員みたいなものじゃん」
「そうよ、拓也の引き抜きで随分この事務所、助かってるもんね」
「ねー」

再び三人で盛り上がり、やがて泰成の雰囲気の変化に気付いたのか、三人そろってやっと、彼の顔に視線を移した。
拓也がわざとらしく、眉間に皺を寄せる。

「……なんかあのおじさん、メッチャ怒ってる」
「どしたの、泰ちゃん？」
「そういえばここの所、様子おかしくない？　この間も吠えてたでしょ」

ユミが言って、拓也は迷惑そうな顔をした。

「吠えてた？　うわ、うるさそー」
「あー、もういいから！　お前らもう、帰れ！　今日は仕事ないだろ。ここはラウンジじゃあねーんだ」

泰成がイライラとした声を上げ、拓也が小さな声で「ホントだ、吠えた」と呟いた。
ユミとちーは憤慨した様に膨れる。
「え、何それいきなり。ひっどーい」

それでも泰成の様子に何かを察したのだろう。手早く帰り支度を済ませると、拓也に小さく手をふり「バイバーイ」と声を揃えて言った。拓也もにっこり笑って「バイバイまたねー」と手を振る。

二人が出て行き静かになると、拓也は膝の上の旅行雑誌を机に置き、ゲーム機もその上に置いて泰成を見上げた。

「で、どうしたの？　なんかあったの？」

「お前さ、奏（かなで）ちゃんとはもう別れたか？」

「……え？」

不意をつかれたように、拓也が口を開ける。それを泰成が黙って眺めた。

拓也は、探る様に彼を見つめ返した。

「何で？」

「その調子じゃ、まだ別れてねぇな」

「いや、だから何で？」

「別れろ。今すぐ、別れろ。彼女は何か、企んでる気がする！」

彼女はきっと、俺が腹違いの兄貴だって知っている。街角で偶然出会った時のあの妙な雰囲気は、ソレだったんだ。ひょっとすると、俺らがホストをやっていた時から既に、彼女はこの事を知っていたのかもしれない。

そんな彼女が、俺の弟分みたいな拓也と付き合うなんて、偶然だと考えにくくて当然だろ！

「はあ？」

事情を知らない拓也は、突拍子もない台詞に思わず大声が出てしまった。

ところが泰成はパタっと口を閉じ、ローテーブルを挟んで向かいにある一人掛け用ソファに、腕を組んで座りこんだ。

ついでに目まで閉じている。

拓也は唖然とした。

「どう言う事？」

「……」

「……もしもし？」

「……」

「……ちょっと。寝てんの？」

「……」

「もしもーし。うわ、この人ふざけてる？」

「……いつ別れるんだ？」

眉間に皺を寄せて、目を閉じたまま、難しそうに口を開く。イライラしている。

何、この空気。拓也は呆れかえった。何、その眉間の皺。何、その腕組。あんたム○イさん？　事件が現場で起こっちゃってんの？

「……だから何であんたが、そんな事に首突っ込むの？」

「きっちり自力で、うまく別れた後に教える」

「はっ。何なのそれ」

「察しろよ。でっかい事情があるんだよ、もんの凄くでっかいヤツが。そもそも俺が今まで、お前の女関係に口を出した事があったか？」

目を開けた泰成が、我慢できない、と言う様に言ってくる。あ、三田に戻った。

「……そりゃあ、無いけど」
「だろ？　お前がどんなに女遊びをしても、果ては過去の女が忘れられなくてバカやっても、包み込む様な暖かい瞳でこう、見守ってやってただろ？　そんな俺が今、アドバイスしてんだよ別れろって」
「包み込む様な暖かい瞳のくだり辺りは受け入れらんなけど、言いたい事は分かった」

拓也は、あしらう様に手を顔の前で軽く振った。
そしてチラッと泰成を見ると、胸ポケットから煙草を取り出す。

「ってやっぱよくわかんないけど。でも強いて言うなら、もう俺ら、別れてるよ」
「ほんとかっ！」
「うん。一応今週末に、けじめ旅行みたいなものに行くけどね」
「なんだそりゃっ！」

泰成は勢い良く立ち上がると、煙を吐き出す拓也を、仁王立ちで指さした。

「あり得ねぇ事、特大山盛りじゃねぇかっ！　人妻と旅行？　けじめ旅行？　お前ら一体何なんだよっ！」
「そっちこそ、だから一体なんなの？　俺に自力で綺麗に別れて欲しいんでしょ？　だったら黙っててよ」

ジロッと睨み上げられて、泰成はグッと言葉に詰まる。

「……」
「……その目すら、うるさい」
「……」

目がうるさい、って何だよっ！　こいつは何でこうも生意気で図々しい奴なんだっ！
こんな奴っ、こんな奴っ、俺と関わりにならない所でなら、象にでも思いっきり踏み潰されちまえっ！

……でも今は、俺の妹（ほぼ確定）とヤッっている身……今何かあると、俺まで絶対巻き込まれる……。

「えー、話って、コレ？　じゃ、もうおしまい？　なんか飲まして」

凄味ある目つきが一転、いつもの甘える表情に戻った。拓也がニコッと笑う。

一人っ子だけど長男気質の泰成は、彼のこの笑顔に、結局弱い。
なんなんだよ、こいつ。

「ウィスキーでいいか？」
「いいでーす」

溜息をついて、グラスを二つ並べながら泰成は口を開いた。

「それで？　奏（かなで）ちゃんと別れた後は、可愛い彼女に一直線なのか？」
「うーん。かわいいねぇ」
「お前ー。女を甘く見ると、後が恐ぇぞー？」
「それは泰兄を間近で見ていたから、知ってるよー」

丁度拓也がクラブに入ってきた頃、泰成は離婚のゴタゴタで揉めていた。その事を言っているらしい。
琥珀色の液体をグラスに注ぎながら、泰成は低い声で尋ねた。

「……じゃ、藤堂の事は、もういいのか？」

これは、拓也に聞きたかった、もう一つの事。
拓也の瞳が一瞬揺れたが、ウィスキーから反らされる事は無かった。

「……俺ね。自分が一番幸せになれる道を、手に入れたいの」
「……」
「それで、その道は、多分彼女には続いていないワケよ」

「……なんで分かんだよ。姉貴とセフレだったからか？」

瓶をテーブルに置いて、グラスを片手に向かいのソファに座りながら、泰成は聞く。

拓也は液体に口を付けながら、彼を見る事無く答えた。

「ああ、それデカイね」

「だって最初から分かってたんだろ？　その時は藤堂の事をそれほど好きじゃ無かったって事？」

「そん時は、彼女には彼氏がいたの。俺、追っかける恋愛はもうこりごり。ましてや彼氏持ちなんてあり得ねぇ。揉め事とか略奪とか、超めんどくせーし」

「人妻に手を出した奴が、よく言うぜ」

「あれは俺が出されたの。それに奏（かなで）さんのパワーに押されちゃって、逆らう方が当時は面倒臭かったくらい」

「おまけに藤堂を彷彿とさせるビジュアルだしな。フラッときた訳だ」

父親が違う、姉妹の癖してよ。

泰成は唇の片端を上げて、皮肉っぽく笑った。拓也は肩をすくめただけで、無言で酒を味わっている。

泰成は拓也を観察するように、その様子を眺めた。

「今はどうなんだ？」

「んー？　お陰様で、いいお友達をさせて頂いてますよ。それに彼女、もう新しい彼氏がいるんだぜ。これがすっげー、いい男」

それを聞いて、一瞬目を見開く。

「……見たのか？」

「だってキスしてんだもん、ウチで」

「……」

「びっくりだよ、あんなイケメン俳優。泰兄、知ってるんでしょ？ありゃ太刀打ち出来ねぇって」

チラ、と彼を見上げた拓也の瞳は、珍しく笑っていなかった。口元は自嘲気味に上がっている。

そんな様子の彼を見て、泰成は再びイラッときた。

太刀打ち出来ない、という彼の言葉に、彼の熱がたっぷり込められている。

「……俺だったら、諦めねぇな」

睨みつけるように言うと、拓也の僅かな微笑がすっと消えた。

「……」

「ましてや一つ屋根の下。それが好きな女だったら、絶対、モノにする」

「……」

拓也は両肘を膝の上に付きながら、前屈みになって、じーっと泰成を見つめた。真剣な瞳。

「……あんたさ、さっきから俺を、どうしたいの？」
「……どういう意味だよ？」
「ここんとこ、色々俺の事を詮索してさ。それって俺じゃなくて、湊の事に興味があるからなんじゃね？　好きなのかよ、彼女が？」

どうしたいのか。そんな事、俺自身だってわかんねぇよ。色々あり過ぎて、混乱してんだよ。
泰成は、拓也を睨み返した。

だけどな、お前の事だったらわかるぜ？

「……だったら、どうすんだよ。この間みたいに、騒ぐのか？」
「……」

ふっと拓也が、視線を外した。

「身近な男に取られるのは、我慢ならないってか。本当に勝手な奴だな、お前」
「……」
「……あのなぁ、拓也」

泰成はいかにも上から目線で、拓也に言い放った。

「物事に対して、どれだけ本気で行動を起こせたか。それが人生を彩るんだと思うぜ？　仕事でもプライベートでも、恋愛でもよ。そこに手を抜いていると、いつか絶対、後悔する」

「……」

俺も大概、エラソーだよな。心の中で苦笑しながら、台詞を続ける。

「いい加減、カッコつけるのはよせ。もっと形振り構わず、熱くなれ。やる時も、やらない時ですら、熱く回避しろ」

「……何だ、ソレ」

堪らず拓也が、噴き出した。

それをしばらく見て、泰成も我慢が出来ずに噴き出した。

藤堂湊、今、人生の数少ない岐路に立たされています。

彼女は路上で、携帯電話片手に呆然とした。

え？　これって今、どう言う状況？　ちょっと落ち着いて？

問題です。電話の相手の女性は、誰でしょう？

湊は頭の中で、瞬時に様々なパターンを想定した。

?彼女（二股）
?仕事仲間（マネージャー込み）
?友人
?家族

二問目です。この場合、あたしの立ち位置は、どれがベストでしょう?

……よし、ここはお友達でいこう。

以上。約5秒。彼女は本来、大変リスク回避能力が高いので、心を決めたら瞬時に、いつもの作り笑いと作り声で喋りはじめた。なるべく好感が持たれる様に、あえて多少どもり気味を演出したりして。

「あ、あの、私、虎太郎（こたろう）さんのお友達で、藤堂湊と申しますが「何だ、女だったの?」

電話の向こうでの、女性の不機嫌な声。
はい、???消えたー。

「虎太郎なら今、シャワーを浴びてるわよ。なんなら携帯渡してあげてもいいけど? コレ、防水だし」
「……あの」

「用件は何？　伝えるわよ。これから二人で食事するところだから。明日は二人とも午後からだし、その時おかけ直ししても、どうぞ」

二人二人、と強調する。

成程ね、と湊は思った。

まあ、あんまりいい気はしないけど。しょうがないか。

「あーっ、お前、何勝手に！」

そこへ僅かだけどハッキリと、虎太郎の声が聞こえた。遠くで叫んだらしい。

「やーだ、服ぐらい着てよ」

どこか得意そうに言う彼女に返事をせず、携帯をひったくる音がした。

「もしもし？」

「……」

こういう時の、理想的一問一答集、あったら売れると思うんだけど。ねぇ、なんて言えばいいの？

向こうで「え、湊ちゃんっ？」と言う焦った声がした。今気付いたのね、あの人らしい。

「ど、どしたの？　え、電話くれた？　もしもし」

「……うん、まあ」

「わ、ごめん、彼女の事は気にしないで、何でも無いからっ」

「早く服着て虎太郎ー」

「ケイっ！」
「なんなら着替え、出して来て上げようか？」
賑やかなやり取りが聞こえてくる。彼女が……ケイが強調した通り、二人は旧知の仲なのね。彼の着替えの場所が分かるくらいには。
あたしはまだ、彼の部屋には行った事がないけど。

「忙しそうだから、またかけ直すね」
「あ、湊ちゃん」
焦った声を残し、電話を切った。
携帯を見つめ、湊は溜息をつく。

悩みの種が、一つ増えてしまった。
あたし、これからどうすればいいんだろう？　うーん……。

怒ってみせるのも？　泣いてみせるのも？　体力いるなぁ……。
むしろ素敵な理解を示せちゃう、自分がいるんですけど。こういう場合、ホント、どうすればいいんだろう？

……なんか、こう、ショックじゃない自分に、ショック。
それでもやっぱり、切ない思いもこみ上げても来る。
思ったよりも彼が好き（コタロー）で。
だけど想像以上に、冷めてる自分。

「……ケイ……お前……」

ギリッと虎太郎が彼女を睨んだ。

「何？　恐い顔して。あたし何にも悪い事してないよ？」

「人の携帯に出る時点で充分悪いだろっ」

「だって留守電に切り替わらないのが悪いんじゃない。仕事の話だったら大変だと思ったのよ」

「切り替わるよ、留守電に！　勝手に出るなよっ」

「何それ。こわーい、そんなに怒んないでよ」

ケイは派手めな化粧を施した顔で、わざとらしく膨れて見せる。すっぴんの方が可愛いのにな、と思いながら、虎太郎は腰にバスタオルを巻いたまま、寝室に引っ込んだ。

服を着ながら彼女に言う。

「ほら、そこにＤＶＤあんだろ？　それ持って、サッサと帰れよ」

不満げに、まだごちゃごちゃと言い続ける彼女を、顔も見ずに冷たくあしらい続けたら、ケイは不服そうに頬を膨らました。

「……コタってさあ、あたしの事、好きじゃ無かったの？」

「……振った女が、よく言うよ」

「でも今、ここにいるじゃん」

「俺ね、今、彼女がいるの」

Tシャツとジレを重ね着、下はハーフパンツ。
服を着終わった虎太郎は、真っ直ぐに彼女を見下ろした。

「だから、悪いけど、全然ダメ」
「……それって、さっきのあの子？」
「ケイには関係ない」
「彼女がいなかったら、あたしとまた一緒にいる？」

懲りずに食い下がる彼女。その姿は、どこか自信に満ちている。
あの時あれだけ自分を追いかけた虎太郎を、今の彼に重ね合わせているのだろう。
可愛くてバカな、年下の元カノ。

「……物事には、タイミングって言うもんがあるだろ？　悪いけど、マジ、帰って」

そう言って彼女ごと、彼は自宅を出る。何処に行くの？　と不思議そうなケイ。

やっぱ引っ越そう。
虎太郎は思った。

部屋のある建物（古いけど、結構立派なマンション）の前まで来た時、湊は人影を見つけた。
不審者か、と思って身構える。すると向こうが彼女に気付いた。
近づいてくる？

「湊ちゃん！」

声をかけられて、ビックリした。

「……虎太郎？」
「良かった、電話かけようか迷ってたんだ」

嬉しそうに駆けよってくる彼は、さっきビルの広告で見た姿と違い、生身の人間。
この人、やっぱり普通の人なのね。って何、呑気に考えてるの？

でも、何でここに？

驚いた彼女の表情を読んで、彼は苦笑いをした。

「すいません。……ストーカーかも」

湊は唖然としてしまう。と言う事は、あの電話の後、慌ててここまで来たって事？

「さっきはごめん。本当に、ごめん」

彼は深々と、彼女の前で頭を下げた。
そのまま、ジッと固まる。
……そんな、謝られても……

湊は僅かな焦りと共に、言葉を失ってしまった。
しばしの、沈黙が広がる。

「……なんか、言って？」

頭を下げたまま、虎太郎が言った。
湊は、益々困った。なんかって……。

「……なんか」
「……」
「……」
「……」
「……言ったよ？」
「あ、やっぱり？」

顔を上げた虎太郎が、慌てて作り笑いをした。

「本気台詞かと思って、待っちゃった」
「本気だよ？」
「……」
「だって何て言っていいか、分かんないんだもん」

絶句する虎太郎を、真顔で見つめる。
内心ちょっぴり、申し訳無い気がした。ごめん、ちゃんと怒れなくて。

けれどそんな淡白な彼女の反応に、虎太郎は益々焦った。

「彼女とは、何も無い。電話貰った時は、俺はたまたまシャワーを浴びていたけど、彼女には仕事上渡すものがあって、ちょっとの間

だけウチに上がってもらっただけ。それだけ」
「……」
そっか、と湊は無言で頷く。
「俺、湊ちゃん以外あり得ないから。絶対、誰とも、もちろん彼女とも何も無いから。お願い、信じて。本当にごめんなさい」
正直、どうでも良かった。
騙されていても、いなくても。どうでもいい。仮に騙されていても、それすら自己責任。
……だからね、どういう顔をすればいいのよぉーっ。
「あのさ。こんなタイミングで言うのもどうかと思うんだけど。どうしても、言いたい事があって」
「……なあに？」
結局真顔で、小首を傾げる。だってここで笑うのも、変じゃない？
すると彼は、深呼吸をひとつして、言った。
「一緒に、住まない？」
「……スマナイ？」
「そう。住む」
「……それって……」
「うん。引っ越そう、一緒に」
「……ええ？！」

こ、これは分かるっ！　今はここ、驚いた顔だっ！　というか、それしか出来ないっ！

「湊ちゃん、今住んでいる部屋、出たいんだろ？　俺も丁度引越したくってさ。……それに、一緒に住めば、お互い忙しくっても、会えるじゃない？」

な、なんですって？？

「……まさに、なんでこのタイミング……」

「早すぎるかな、と俺も思ったんだけど」

いや、早いでしょ、滅茶苦茶。しかも浮気疑惑の直後に持ち出す話題ですか？！

少し赤くなって俯く虎太郎を、感心半分、呆れ半分で、とにかく驚愕しながら眺めた。

すると不意に顔を上げた彼と、目があった。

「俺、本気なんだ」

真剣な眼差し。

湊は、気押された様に感じた。

この人と、一緒に暮らす？

……そうしたら、あたし……

一瞬、頭の中が白くなった。

ヨシとは、もう繋がりが切れるんだ。

職場も、住居も。

ゴクっと、生唾を飲み込む。

それって。

7　戻れないキス

どうしよう。
ヨシと、まったく離れた生活を送る。
でも彼は、舞彩とラブラブな男で、あたしの友達。
ちょっぴり手癖の悪い、愛しい、友達。

迷う事なんて。
そうよ、迷う必要無いじゃない。これがあるべき姿よ。
そしていつか、ヨシと舞彩から、結婚式の招待状が来て……

想像した瞬間、まるで毒薬を注入された様に、黒い何かが一気に広がり、痛みで、呼吸が出来なくなった。胸が切ない、なんてものじゃない。
慌てて、でも無意識で、小刻みに首を横に振る。

落ち着こう落ち着こう、もう一回、振り出しに戻って、状況把握……

そう、普通、こういうのって、段階を踏むもんじゃぁありません？
それが一足飛びで、いきなり、同棲ですか？

湊は顔を上げて、虎太郎を見た。

……この人、直感で動くプラス、かなりの突っ走り系……？　どこぞの豆腐屋も真っ青の走り屋？

舞彩に押された拓也が内心思っていた事と、同じ事を呟いているとは、もちろん彼女は知らない。

虎太郎が、距離を縮めてきた。

あれ？　近づいてくる？

え？　そしてここで抱きしめますか？？

「君の香りを、……いつも感じていたい」

そう言って彼は、彼女の頭に顔を埋めた。湊は顔には出さずに、軽くパニックをする。このシャンプーが好きなんですか？　それは量販店で買える安物です。資〇堂です。

虎太郎は柔らかく彼女を抱きしめた腕に、段々と力を込めてきた。湊の顔が、すっぽりと胸の中に収まる身長差。この腕の中は、心地良い。

ああ、コレがドラマなら最高に盛り上がるシーンね。音楽が鳴って、それで二人は唇を近づけるのよ。

「君の、体温。……いつも、感じたいんだ」

そうそう、こうやって耳元で囁いてね……って、え、お約束？？

本当に唇が近づいてきたっ。

そしたら当然、この後はベロチューが待っているんでしょっ？
湊は動悸が激しくなってきた。

ヤバいっ。完全に攻略される自信ありっ。
だって彼、とんでもないイケメンな上に、キスもえっちもやたらと上手いっ、ええ、ハッキリ言って！
女がのぼせない訳が無いでしょっ。
なのに今ここでキスされたらっ。ディープなのをされたらっ。

色んな事をうやむやにされて、このままあたしは彼と同居ーっ？
そしてフライデーっ？？

「ちょ、ちょっと待って」

慌てて両手で、軽く彼の胸を押しのけたら、虎太郎はじっと湊を見つめてきた。少し切なげな瞳。うっ、その目は反則だってば。

「……あの、頭が混乱して」
「……うん」
「ちょっと……待ってもらえると……」

すると虎太郎が、再びぎゅうっと湊を抱きしめた。
彼の匂いがする。それとシャンプーの香り。いつもつけている香水が香らないのは、多分シャワーの後すぐに、飛び出してきたからかもしれない。

「待てねーっ、うおーっ」
「……うおーって……」
「でも、待つ」
ポツン、と湊の肩の上で、彼は呟いた。

「ちゃんと、待つ。君が返事をくれるまで。俺、本当に君を……側に、置いておきたい。だから」

こんなに誰かに求められた事、無かったかもしれない。
そんな思いにとらわれながら、湊は何を言っていいのか分からず、口を開けても結局言葉が出なかった。
無言が、広がる。
それを虎太郎は、どう捉えたのだろう？

「ごめん。もうちょっと、抱きしめていても、いい？　……ていうか、抱きしめさせて」

そう言うと彼は、更に強く、彼女を自分の胸に押し付けた。
彼に全身を固められた湊は、想像以上の安堵感に包まれる。今それに、初めて気付いた。
愛されると、安心するんだ、あたし。

「利用してもいいから、俺の事、もっと頼ってよ」

徐々に徐々に、虎太郎が自分の中に入ってくる。空いた隙間を、埋めてくれる。

そうやっていつか、彼の中が、あたしの居場所になる日が来る。それも素敵な事なのかもしれない。

仮に将来、虎太郎（こたろう）に捨てられる事があっても。あらかじめ、心のガードを固めていればいいんだ。

そうよ、それでいい。

その為の、同棲。

ムカつく。すっげー、イラつく。そんな自分に、益々腹が立つ。

拓也はリビングに座り、机の上の雑誌を凝視していた。

彼女が男とキスをしている姿を見た時、一瞬頭が沸騰した。そしてそれに気付かないフリをして、すぐに必死で冷ました。

だけどその激情は、地熱の様に胸の奥深くに潜んでいて、油断すると表面に這い上がってくる。そして彼の心を、ドロドロにする。

拓也は、睨みつけていた不動産情報誌を手に取った。
自分が部屋を出ていくつもりだった。湊（おんな）を追い出すわけにはいかない。なのに。

決心が、つかない。情けない。

結局、たった一回のキスの光景が、頭を離れずに俺を支配する。
そして俺は段々と、コントロールを失っていくんだ。

彼女が帰宅する音が聞こえる。
彼は雑誌を閉じ、ゴミ箱に放り投げた。

湊が玄関を開けると、ローテーブルに書類を広げて作業中であったらしい拓也が、振り返った。お気に入りのロックバンドのTシャツが、良く似合う。

「おかえり」

童顔の彼らしい、可愛い笑顔。湊は不意に、ポツン、と思った。

……これは、同居。同棲ではナイ。

「湊さ、高松精機。あれ、やっぱヤバいよ。粉飾っぽい。今、上に

上げてんだけどさ、お宅の後藤課長にも……」

彼は再び書類に視線を落としながら、一気に何かを話し始める。
湊はそれを、ボーっと眺めていた。

「……どうしたの？」
「……」
「湊さん？　もしもし？　……あれ、え、ひょっとして無視？」
「……え？」
「うわっ」

我に返った湊に、拓也は大袈裟に驚いてみせた。
湊はヒールを脱いで、彼のいるリビングに入った。テーブルを、見下ろす。

「……何やってるの？」
「例の決算書だよ。ほら、これ。あなたに教えて貰ったヤツ」
「ああ……」
「どうやら提出先に分けて、それぞれに粉飾をしていたっぽいんだよね。どれが本当かはまだ分かんないんだけど、どれも本当じゃないかもしれない。もう既に上には提出済みなんだけど、課長連中が褒めてくれたよ。よくここまで調べ上げたね、って」
「よかったじゃん」
「湊のお陰だよ。俺がそう言ったら、後藤さんがかなり喜んでいた」
「へぇ」
「今日、彼とご飯食べてたんだろ？　何か言われた？」
「……情報早いねぇ」

「舞彩（まあや）ちゃんが教えてくれたから」

舞彩、の名前を聞いて、初めて自分が覚醒したような気がした。
頭に、なんとも言えない血が駆け巡った様な気がして、目の前の書類を凝視する。

……あ、なんかあったな。

床に座って、そんな彼女を見上げていた拓也は、クスッと笑った。

「とりあえず、着替えなさい。なんならシャワーも浴びて。そしたらここに、戻っておいで」
「……え？」

普段とは少し違う、優しい声のトーン。湊は眼を丸くして、彼を見下ろした。
拓也は飲みかけの缶ビールを掲げ、にこっと微笑んだ。

「飲も？　一緒に」

ドキッとする。目を反らしたいのに、反らせない。
虎太郎の瞳が反則なら、ヨシのこの笑顔も、反則技だよ。

「おー、来たの」

言われた通りシャワーも浴びて、ラフな姿でリビングに戻ったら、拓也はキッチンで何かを炒めていた。

湊はなんとなく、後ろから覗きこむ。

「……何作ってるの？」

「うん？　おつまみ。結構イケるよ。喰ってみる？」

「うん……」

「ほら」

菜箸で、口元に突き出された。シメジと青野菜。

再びドキッとしたが、拓也は普段と変わらない表情をしている。

……こ、ここで変に動揺するのは、二人の関係を意識しているみたいで、ダメよね？

湊が小さく口を開けると、中に入れられた。彼の、表情が読めない瞳がこちらを見ている。

心臓をバクバク言わせながら、彼女は無言で彼の出した箸を咥えた。

拓也の動きが止まる。

え？　見つめられてる？

思った瞬間に、口の中から箸が抜かれた。残ったのは、少し唐辛子の利いた、ゴマ油の風味豊かな感触。

拓也はすっとフライパンに視線を戻すと、馴れた手つきで再び炒

め始めた。

「……おいしい」
「だろぉ？」
「ヨシってホント器用だね」
「んー、器用貧乏ってヤツ？　まあ、滅多にやらないけど」
「だよね。料理してるトコ、初めて見た。だってあたしが来た時、冷蔵庫の中空っぽだったじゃん」
「そうだ。ねぇ、冷蔵庫の中の、あの団子ってなんなの？　喰っていいの？」
「団子？　……あ！」

お菓子類をあまり買わない湊が、珍しく買って来たみたらしとあんこの串団子は、確かに庫内で浮いていた。

「お月見！　今日なんだよ！」
「……お月見ぃ？」

火を止めた拓也が、呆れたように間近の湊を振り返った。
湊はもう、顔だけで部屋の中をキョロキョロと見回している。

「ねぇ、この部屋からお月さまが見える窓って、どこかな？」
「知らねぇよ、そんなの」
「捜してよ。お供え出来ないじゃん」
「えぇ？　本気？」
「ガチで」

俺、腹減ってるのに……とは言えない。
彼女はこう見えて、言いだしたら聞かない所があるから。他人にはあまり見せない部分だけど。親しい人間にだけ。
だからつい、付き合ってしまう。せめてにやけない様に気をつけねぇと。

「どこからも見えなーいっ。やだ、許せなーいっ。これだから都会は嫌いだーっ」

3分後、リビングの真ん中で彼女が叫んだ。
狭い室内、窓の数なんて限られている。自分達の部屋までくまなく探した後（拓也が見た窓も、信用出来ない、と彼女が再びチェックした。じゃ一人でやれって）、湊は悔しがって地団駄を踏む。
つか、すっげー。地団駄を踏んでる人間って、リアルに見たの初めてかも。

「……俺、一か所、見える場所知ってるけど……」

呆れつつも拓也が言うと、愉快なくらいに湊が飛びついてきた。
「嘘ホントっ？　ドコドコっ？」

「……嘘でしょ？」

拓也は唖然とした。

「……」

「本気でここに飾るの？」

「だってここしか見えないもん。教えてくれたの、自分じゃん」

「言ったけど……バカだろ？」

そこは、拓也の部屋についている、トイレ。

拓也側は角部屋である為、ユニットバスの二か所に、窓がついていた。そのうちの一か所、貯水タンクの上。

男は立って用を足すから、必然的に目につく窓だった。夏の時期は、開ける事が多い。

だからって、ここに置くか？

しかも皿がでかいからって、便器のふたの上？？

「いいから黙って。ほらお祈り」

「え？　お月見ってお祈りするの？」

「祭りにお祈りはつきものでしょ？」

「あなた、何かと勘違いしてない？」

「うっるさいなー、さっきから。七夕だってお祈りしてんだからいいでしょっ」

「ハイハイハイ」

言いだしたら聞かない。だから諦めて、お祈りにまで付き合ってやる事にした。
そしたら悲しいかな、つい本気で願掛けをしている自分がいる。
拓也が目を開けると、湊はまだ、隣で祈ってた。思わずそれを、マジマジと観察する。

「やっぱすっげービジュアル。トイレの中で団子に向かって手を合わせているって、一体何？」
「……」
「ほら、もう行くよ」
「……」

眉根を寄せて、難しい顔の彼女。
不思議に思い、更にしばらく眺めた。

「熱心だね」
「……人生の、転機に立ってるの」
「え？」
「あたしの人生、何が大切だろうって」

再びの、間。
こっそりトイレを出ようとした拓也の腕を、湊がガシっと掴んだ。

「……どこへ行く？」
「いや、さすがにいつまでもここにいるのはどうかと……」
「嘘だね！　絶対今、逃げようとした！」
「えっと、なんか嫌な予感がして、ね。ほら、俺って危機察知能力が高いから」
「あたしの人生の岐路が、なんであんたの危機なのよっ。そんでもって逃げるか、このヘタレっ」
「勘弁してくれよーっ。これ以上俺をハマらせないでくれよーっ」
「……どういう事？」
「独り言っ」

拓也のプチ切れっぷりに、湊が訝しげな視線を送る。
拓也は彼女の手を振り払った。

「とにかく俺、腹が減ってんだよっ。キッチンに戻って、何か食べたいのっ」
「じゃ、これ食べれば？　ほれ」
「喰えるかっ」

彼が手早く料理をしている間、湊はなんとなく、食器を用意した。
拓也はそれにさっさと盛り付けていく。うまそー、とか満更でもない様子。
湊がそれをテーブルに運んでいると、後ろから彼が缶チューハイ

を二つ持ってやってきた。

「はい。どうぞ」

ことん、とテーブルに置く。腰を降ろし、プルタブを引いて彼女に渡す。

「あー……、あたし、実はさっき、ちょっと飲んだし」

すると彼は、丸い瞳でじーっと彼女を見つめた。何かを探る様な、見透かされそうな、目。

「俺に深刻な話、聞かせたいんでしょ？　じゃあ、付き合ってよ」

「……はい」

……ドキドキ、する。こんな風に言われたら、付き合うしかないじゃない。

湊は顔が赤くなりそうなのを抑えながら、缶を受け取った。

口を付け、照れ隠しに言う。

「なんか、悪酔いしそう……」

「じゃあちょっと、口、開けてご覧？」

二度目は、最初の様な抵抗感は無かった。

普通に開けた口に、ポンと入れられる。豆腐とたらことシラスを

和えたもの。

「悪酔いしない、おまじない」
「フツーに食べ物だし」
「だな」

拓也とは食事の嗜好が合う。おいしいな、と思って飲み込んだ。
満足そうに微笑んだ彼は、その後黙々と食べ始める。
湊も時々、横から摘んで口に運ぶ。後はやっぱり、黙ってチューハイを飲んでいた。

こんなのも、悪くない。

「で？　湊の転機って、何？」

あっという間に食べ終わり、さっさと後片付けまで。どこまで器用なの、この男は。
その割には、部屋が散らかっているんだけどね。

「……会社辞めて、生活も、住まいも、変えるかもしれない」

そう言って、湊は黙った。無言でアルコールに口を付ける。
少し、酔いが回ってきた気がする。
隣に座った彼は、テーブルの上の煙草に手を伸ばし、口に咥えると、黙って火をつけた。

「……どーして、そーなるの？」

煙を吐き出しながら、かったるそうに聞き返す。

湊は、視線を泳がせた。

「……課長の新事務所に転職して、……彼氏に同居を申し出られたから」

それを聞いた拓也の瞳が、キュッと細められた。

あいつ、もう行動を起こしやがったか。意外に手が早いな。

「それは、同居じゃなくて、同棲」

そう言って煙草片手に、自分のチューハイをグイっと飲み干した。

そうだよねー、と小さく呟く彼女。

「湊はどうしたいの？」

「……まだよく分からない。二つが一度に降って湧いたから」

「……でもあなたが、自分で決めるしかないでしょ？」

「……そうね」

湊は手元の缶を、ジーッと見つめた。

「いつもあたしって、どちらかって言うと、流れに逆らわずに生きてきたんだ。その場その場を上手く収める方が大事で……」

「……」

それは俺も、と拓也は内心同調する。

「……二人とも……課長も彼氏も、あたしを求めてくれている。こんな有り難い事、もう今後の人生では起きないかも」

「……大抵、分かれ道では、誰もが同じ事を考えると思うよ？」

煙草を吸いながら、彼は静かに言う。

湊はポロっと、本音を零した。

「……この流れに、乗っちゃっていいのかな？」

なんでこんな事を、ヨシに言っているんだろう？　よりにもよって、彼に。

そう思っても、止める事は出来ない。

「それが、あたしの意思なのかな？　そう言うものなのかな、あたしって」

そこまで言って、湊は口を閉じた。空になった缶に答えでもあるかのように、手にしたまま見つめ続ける。
拓也は天井に向かって、煙草の煙を吐き出した。

しばらくの、沈黙。

「……じゃあさ。試しに、逆らってみる？」

そう言って彼は、煙草を灰皿に押し付けた。
湊の視線が、自然と彼に向けられる。
拓也は顔を上げると、射る様な瞳で彼女を見た。

「人生に。逆らって、みる？　……俺と」

ドキン、と心臓が大きく跳ね上がった。彼を凝視する。
目が、反らせない。
拓也は床に片手をつき、彼女との距離を縮めてきた。

今までの、ふざけたじゃれあいとは訳が違う。
湊は瞬時に悟った。
逃げるなら、今しかない。
なのに。

拓也の唇が近づく。抜け出す事を許さない、強い瞳。
湊は、体の自由が奪われていくのを感じた。

唇が、重なる。
何かの一線を越えたと、互いに気付く。
お互い、その柔らかい感触に、身動きが取れない。

湊が固まっていると、拓也は彼女の顎に指をあて、そっと上を向かせた。
自然と唇が薄く開くと、そこに彼の舌が滑り込んできた。口の中を熱っぽく這いまわられ、舌の裏を舐め上げられ、彼女に電流が走る。

「……んっ……」

切ない彼女の喘ぎに、拓也は頭が靄(もや)で覆われていくのを感じた。
彼女の後頭部に手をまわす。
もう、止められない。

「……ヨシ……」

思わず呟く。呟いた瞬間、後戻りできないと思った。

これは、二人の合意の、キスだ。

拓也が、掠れた声で、囁いた。
それとは聞き取れないほど、小さな声で。

みなと。

それが堪らない程、彼女をぞくりとさせる。

……ぁっ……

何度も何度も角度を変え、互いに互いの唇をむさぼった。舌を絡め、なぞり、舐め上げ、溶けあった唾液が、彼女の首筋を薄く滴っていく。

それを絡め取るように、拓也の指が這い上がっていき、彼女の耳をなぞった。
湊の体に震えが走る。
毒に侵されたように、体内に熱が籠もる。肌が敏感になる。下が溶ける。思考が痺れる。

自分が自分でなくなっていく。こんな事、いけないのに。

蕩けた脳に、何を囁かれたのか、分からない。
熱に浮かされた頭で、何を口走ったのか、分からない。

好きだ。

好き。

自分の耳にさえ、届かないくらいの、掠れた言葉。

長い長い、気を失いそうな程なのにやめられない、キスが続く。
やがて湊は、止まらない欲を、やっとの思いで押しのけた。
すると拓也の、強い、真っ直ぐな、自分を欲している目と出会った。

溢れ出る熱。想い。それに翻弄され、だから決して満たされる事の無い、渇き切った瞳。

拓也の本気を感じ取った瞬間、色々な事が頭をよぎった。
越えた一線。後戻りできない、覚悟。

怖い。ダメだよ。

「遊びじゃないなら、キスしないで」

濡れた唇で、潤んだ瞳で、必死に拓也を見つめ返す。火照った体を、手で押さえて。
拓也は一瞬、カッとなった。

こんな時だけ、俺の事を、真っ直ぐ見るなよ。
それって、本気になるなって事？

途端に彼は初めて、目の前の霧が消えた様な気がした。
物事がスッキリと見える。今までの自分が、哀れな程滑稽に見える。

どうやったって、無理じゃん。

「諦めた」

湊を見つめたまま、低い声で言った。

「……え？」

分からず、彼女は聞き返す。
拓也はすっと立ち上がり、彼女を見下ろした。

「だからあんたも、諦めて」

何の事か分からない。
逃げたくなるくらい、強い視線。

なのに、魅入られて、抜け出せない。

「俺、これからあんたを傷つける」

彼は鋭い目つきで言い放った。
男の、顔をしている。

つまり、あたしは女として見られている訳で。

「覚悟しろよ」

冷たいのに、熱と欲を孕んだ目。
湊はドキッとした。

この瞳にあらがえず、堕ちていく自分が頭をよぎる。

……あたし、何の宣戦布告をされたの？

8

夜、舞彩（まあや）は自室で、従妹と携帯電話で話していた。

「彼氏にも、友達にも振られちゃったー」

「いいじゃん、まーちゃん一人でくれば。久し振りに楽しいよ！おばあちゃんも楽しみにしてるし！」

「……そうだよねー」

「そぉだよぉ。それでさ、彼氏の事、聞かせてよぉ。かっこいい？」

従妹は今年、短大に入学したばかり。舞彩を姉の様に慕っていて、一人っ子の彼女はそれが嬉しかった。自分が年上顔を出来るのも、かなり嬉しい。

「うん。実はね、……超かっこいい！」

「きゃーっ」

昔から可愛くて男の子に人気の舞彩は、従妹の憧れの的だった。だからこそ、羨望と尊敬の叫びが黄色く上がる。

そして何より、一番気になる事は。

「ね、ね。……えっちは、もうシたの？」

「そう言う事は、会ってから話してあげる」

恥ずかしさを一割程込めて、舞彩は大人の女性らしい口調で返した。

それが更に、従妹の興奮を煽る。

「えーっ。じゃ、もうシたんだーっ」

「ふふっ」

こうやって他人に手放しで喜ばれると、自分が本当は最高に幸せの女の子に思えてきた。拓也に対して、言葉では上手く言えない不安を抱えていた事が、とてつもなく杞憂に感じる。

なんだか満たされた気分になって、舞彩は言葉を続けた。

「でもさ、おばあちゃんもおばさんも、忙しいんじゃない？　何かの貸し切りなんでしょ？」

「うん。パーティーの二次会が、大部屋であるみたい。政治家の資金集めだって」

「ふーん。老舗旅館だもんね、ウチ」

「まあね。それに今は、紅葉が見ごろだし」

舞彩の母は、老舗旅館の次女だった。今は叔母が継いでいるそこは、高級温泉旅館として有名で、旅行パンフレットではいつもトップに乗っている。祖母と叔母はそこの名物女将だ。

普段なら滅多に泊れないのに、団体客の貸し切りで中途半端に一室余った。政治家と言う特性上、下手に一般客を募るよりは、舞彩が友達でも連れて遊びにおいで、と祖母に声をかけられたのだ。

だけどしょうがない。拓也くんも、みなちゃんも、急には都合がつかなかったんだもん。

おばあちゃんも、もう少し早く声をかけてくれたらよかったのに。

たまには従妹と二人で、夜通しガールズトークに花を咲かせるのもいいかもしれない。

「お母さん、土曜日、ちょっと帰りが遅くなるかも」

実家のダイニングで奏（かなで）が言うと、食卓の上で美肌作りにいそしんでいた母（５０代後半）は顔を上げた。

「あら？　お友達と泊るって言ってなかった？」

「それやめた。やっぱりお互い忙しいし」

「あらそう。優奈はウチで寝かせていいのかしら？」

「うん、お願い。私、次の日に迎えに行くので、いい？」

弱冠のヒソヒソ声。ダイニングからリビングへと部屋は繋がり、そこから左右に和室が二部屋ある。そのうちの一部屋に、２歳の娘が寝ていた。

奏（かなで）は夫が長期出張の時、子連れで実家に帰る。つまりしょっちゅう帰っている。

母は卓上鏡に視線を戻しながら、少し眉根をひそめて言った。

「洋一さんの出張が多いからって、あまり羽を伸ばし過ぎるのはやめなさいよ」

「大丈夫。もう、これでお終い。あの子、遠くに引っ越すんだって。もう遊ばないよ」

あの子、という学生時代の友達の名は、誰にしたのかもう忘れた。

あの子と出かけるから、と頻繁に娘を預けるうちに、母も相手の名前を聞く事をやめたから。

そのあの子、との先日の、電話での会話を思い出す。

『旅行、やっぱ日帰りにしても、いい？』
『いいわよ、別に。どうしたの？』
『……俺、奏さんに、感謝している』
電話の向こうで、拓也が僅かに微笑んでいる表情が、目に浮かんだ。
『だから、あなたと二人で過ごす週末が、すごく楽しみ』
『……だけど？』
奏が聞き返す。
拓也はほんの僅か、間を置いた。
『だけど、キスは出来ない。手は繋げても、セックスは出来ない。……それでも、いい？』
先日の別れ話と言い今の台詞と言い、拓也がこれほど自己主張するのは、奏にとって珍しかった。
こうやって男になっていくものなのかしら？
『いいわよ。そのつもりだったじゃない。それよりあなたこそ、私に無理して付き合ってない？』
『全然。言っただろ、楽しみだって』

電話だと童顔が見えないから、声だけは低くて心地良く、大人の色気まで感じる。
当り前よね、大人の男だもん、２６って。
すると拓也の、あっけらかんとした台詞が飛び込んできた。
『ああ、そうだ。ところで奏さんさ、何か企んでる？』
『えっ？』
「……ねぇ、お母さん。私、再就職がついに決まりそうなの」
「本当に？　この間言ってた所？」
美容クリーム（拭きとり式）を乗っけた顔で、こっちを見ないで欲しい。優奈なら金切り声で号泣よ。
奏は大事な台詞を、母から目を反らして言わねばならなかった。
不気味すぎる。
「うん。……そうしたら優奈、面倒見て貰っても、いい？」
「いいわよ、もちろん」
あっさりと言われる。
少し拍子抜けした。
「結構、真面目にフルで働く事になると思う」
「お母さんは、いいわよ。洋一さんは、どうなの？」

そう聞き返す母は、今度はこちらに視線を寄越さない。
娘の夫婦仲も、彼女の葛藤も、そして決心も、全て分かりきっている様に。
「うん。いいって」
だから奏も、普通らしく返事をした。
すると母は、鏡の中の自分に微笑みながら、柔らかく言った。
「……頑張ってね。無理をしないように」
無理をしない様に。
私は今、人生の波を泳いでいる。無理をしないでは、人は前には進めない。
それでも母は、無理をしない様に、と言う。自分も母親だから、その気持ちは分かる。
ありがとう、お母さん。でも、決心したから。これが私なの。
事務所のリビングの隅におかれたパソコン。そこに泰成は座って、作業をしていた。

後ろからユミが覗きこむ。
そういえば、と気になる事を口にした。

「ねぇ、泰ちゃん。なんで沢畑様、あたしにまわすの？　彼って確か、今は湊ちゃんのお客じゃ無かった？」

あんなにクセのある客を上手く扱えるのは湊だけだ、と感心しつつも、自分に彼がまわって来ない事を内心ホッとしていたのに。
仕事ならしょうがない。ちーよりは、あたしが相手した方がマシよね。だって彼女じゃかわいそうすぎる、と姉御肌のユミは思っていた。

泰成は画面を見つめたまま、少し嫌そうな顔をした。

「……あいつはもう、この仕事を辞めるんだよ」
「え、そうなの？」

驚いて、間近にある泰成の後頭部を眺める。
微動だにしない彼。
ユミお得意の、女の第六感が働いた。

「……もしかして、クビ？」

ギクッとなる泰成。いや実際にはどこも動いていないが、彼の背中が『ギクッ』と言っている。
このオヤジ、わかりやすい。
だから可愛いんだよねー。

「……何でだよ？」
「図星だ。しかもさ、それって泰ちゃんの都合で、じゃない？」
「……っ」
「あ、これまた図星だ。あはー……」

笑いかけて、なんとも乾いた笑いになってしまった。泰ちゃん、不器用すぎて可哀想……。
ユミは、湊をクビにした理由は、泰成が彼女に惚れているからだ、と思っていた。
でもそれだけで、自分の私情だけで周囲をどうこうする男じゃない。
だから多分、のっぴきならない事情が介在しているのね、と難しいしたり顔で彼女はウンウン、と頷いた。

「人生って難しいねぇ。頑張れ社長。応援してるわ」
「……ちっ」
「あれぇ？　でも湊ちゃんって、今仕事に行ってない？　確か政治家さんと一泊出張」

ソファに寛いで録画をみていたちーが、のんびりとした口調で喋る。厚ぼったい唇に、せんべいのカスがついている。
それを聞いた由美が、更に身を乗り出してパソコンの画面を覗いた。
泰成の頭越しにあるそれは、女の子達のスケジュール表。

「あ、ホントだ。いいのぉ、行かせちゃって？　でもあの仕事、アレ、湊ちゃんじゃないと無理よね。じゃ、しょうがないか。ね、社

長？」
「黙れユミ。いいから千清（ちせ）、お前も行って来い」
そう言った泰成は、年甲斐もなく少し膨れながら、キッチンに飲み物を取りに行く。
パソコンの画面はそのまま。従業員のスケジュールは、基本的にオープンにしている。クラブの様な出来高制とは違う。お互いが補完し合うから、過激な競争は必要無い。ここは、大人の秘密の癒しをうる所だから。

「ちーも泊りだっけ？　関様と」
「そうだよ。名古屋。うなぎパイ買ってくるね」
「あの人、ちーがお気に入りだねぇ」
「ちーもお気に入りぃ」

千清はそう言いながら荷物を持ち、ユミと並んでパソコンをチラッと覗いた。
細い指で、画面の一か所を指す。

「いいなぁ、湊ちゃんの旅館、ここ？　高級なんでしょぉ？　老舗温泉旅館ー」
「いいから、行け！」
「こないだ拓ちゃんが来た時に、ここのパンフ持ってたー。紅葉が綺麗なんでしょ？　そっか、湊ちゃん、そこに行ったのかー。お金ある人はいいなー」

ちーもそんなお金持ちのお客さんと行きたいなー、じゃあねー行ってきまーす、と言って、緊張感無く彼女は出ていった。プライベートで、自力でそこを訪れようという発想は無いらしい。
ちーらしくって少し肩をすくめたユミは、そのままソファに座り、千清が途中だったドラマの続きを見始めた。

数十秒後、泰成の低い声が聞こえた。

「……おいちょっと待て」
「もう行ったよ？」
「拓也が、あの旅館を見ていた？！」

血相を変えて、彼がキッチンから飛び出してくる。
手にしたコップからお茶が跳ねて零れている。
ユミはビックリした。

「知らない。あたし、名前なんて覚えてないもん。ちーって案外、すごい記憶力よね……って、どうしたの？」

泰成は猛ダッシュでパソコンの前を陣取ると、凄い形相で操作し始めた。

「ここかっ？」

ユミに見せた画面は、紅葉鮮やかな、趣きある純和風家屋の写真。

古いが、高級感が漂う。
すぐに彼女は、あー、と声を上げた。
「そうそう、これこれ。この写真だった、拓也が持ってたパンフ。彼女と行くのかしら？　奮発するわねぇ」
言いながら再びパソコンに近づく。マウスに手を伸ばし、そのホームページを勝手に触り始めた。「そっかぁ。日帰り温泉もあるのかぁ。こんなに高級そうなのにぃ」とか呟いている。
泰成は、呆然としてその画面を眺めた。

『今週末に、けじめ旅行』

拓也の言葉が、頭の中でくわんくわん、と鳴り響く……。

「なんて顔してるの。……あ、ひょっとして拓也が、湊ちゃんの仕事を邪魔しに行くとか思ってる？　え、じゃあやっぱあの二人ってデキてたの？　やだっお似合いっ」

中途半端に文脈を読むのが得意なユミは、泰成の顔を見て騒ぎ始めた。やっぱりー、とか、いいかもー、とか、似たものカップルー、と言って喜んでいる。数分前まで、泰成が湊に惚れている、と信じていた割には容赦が無い。
椅子に座り、なおも顔色真っ青で固まっている泰成を見ると、やれやれと言う様に苦笑して言った。

「だーいじょうぶよぉ。いくらデキてたって、あの拓也が嫉妬に駆られて追っかけたりする訳、無いじゃん。そういうのからもっとも縁遠い、かったるーい男なんだからぁ。変に現実主義だし。それにさ、この仕事を湊ちゃんに紹介したのって、彼でしょ？」

……拓也（あいつ）、あいつが奏（かなで）ちゃんと一緒に、藤堂がいる旅館で鉢合わせたら……

どっ、どーなるんだ一体っ！！

泰成は目の前が真っ黒だか真っ白だか真っ黄色になって、つまりは現実空間から完全に退場していた。いいからお前はベンチに引っ込め、と神様に放り投げられた気分、って何言ってんだよ俺はっ。

人んちの家庭の事情、他人の色事、ってそんなレベルじゃねぇだろっヤバいぞこれはっ。

だって奏（かのじょ）は俺の妹で、強いては藤堂（あいつ）も妹で、そんでつまり俺は兄貴で、

しかも相手の男は俺の弟分で、

そんでこの悪夢の危機、確実に半分は俺のせいっっ！！

そんな彼の前でユミは首を傾げ、「あれ？　でもだとしたら、なんで自分の彼女にこんな仕事させてんだろ……うわー、歪んでるぅっ。何プレイ？！」とか言っている、それが彼にトドメを刺して、

ああああもう、死ぬほどヤバいっ！！

この場合、一番傷つくのは、確実に藤堂（あいつ）。守ってやるって彼女に言ったのに。

何が何でも止めなきゃっ、って止められんのか、俺っ？！

深夜に及ぶドラマの撮影に、虎太郎は肩をまわした。甘いものが飲みたくなって、自販機に向かう。

頭が少し痛い。目の奥が凝る。喉もヒリついてきた気がした。でもこの疲れは、過密スケジュールな仕事のせいばかりじゃ、ない。

湊（かのじょ）との関係。今が正念場だ。

鮮やかな彼女。涼やかで、のびやかな彼女。どうしても、手に入れたい。その事ばかりが頭を支配する。感性で動くタイプの自分には、仕事に支障が出るんじゃないかと焦っていた。

いや、彼女を捉えたくて焦っているのか。

飲み物に口を付けていると、少し離れた場所にいるスタッフの声が耳に入った。

「今度のロケ地、日帰り温泉が近くにあるらしいよ。かなり感じイイらしい」

「マジッすか？　うわ行きてー、でも行けっかな？」

行けるかな？

甘い缶コーヒーを飲みながら、傍で聞いていた虎太郎も思った。

気持ちいいだろうなぁ。……温泉か。

いつか湊（かのじょ）と行きたいな。

8（後書き）

あれ？　主人公たちが出てこない？
それにしても、大変な事になっております。これで第４部は終了です。
少し間を空けて、第５部突入です。

どうなるのか？　ロクな事にはならない、と言う事は皆さまのお気付きの筈（苦笑）ホント、どうなる事やら。
はたして湊は、拓也が自分の姉と不倫をしていた事に気付くのでしょうか？
その前に泰成は、それを止める事が出来るのでしょうか？
そして舞彩は……虎太郎は……
それを（傍で）見た祐介は……

ああ、ややこしい。

いつも目を通していただき、ありがとうございます。
このお話が、皆さまのお暇潰しとなりますように……。

戸理　葵

1

『遊びじゃないなら、キスしないで』

「あー、それはひどいね。彼がキレるのももっともだ」

客もまばらな新幹線のグリーン車、ゆったりと座っている祐介は、腕を組んで何のためらいも無く言い放った。スーツ以外の服まで実に仕立てが良い。センスまで、良い。涼やかなハンサムが引き立ちますわね、はい。

隣で湊が小さくなる。ちなみに服は、泰成が何処から調達してきたブランド物。クロエの妹レーベル一式。ワンピースが可愛いのよね、と現実逃避。

「……ですかね」

「フルにしたって、もっとまともな言い方があるだろう？」

「……はあ」

湊の冴えない表情から、素早く（面白そうな）事態を察知した祐介により、言葉巧みに全てを吐かせられて、今に至る。

……そんでこの言われ様って、何？

「そもそもそれって、あたしには本気にならないで、ってコトなんでしょう？　あなた、完璧に振られてるわよ」

拓也の運転する車の助手席で、奏(かなで)が相手を見据えてキッパリと言う。

あまり人に見られるのも都合が良くないだろうと、彼はレンタカーを借りていた。久々のロングドライブ。

天気が良く、景色が良く、気持ちが良い。隣の彼女の、質の良い絹の様なプラチナのピアスが、形の良い耳元でさらっと揺れる。ああ、なのに。

拓也はハンドルを握りながら、げんなりとしてきた。

「……俺に無理やり口割らせておいて、そーゆー事言います？」

「同僚と付き合ってる状態で、よくまあ、私の妹に手を出せたわね」

「……（あんたがそれを言うか）」

「君は彼が好きなんだろう？　相手も君が好きらしい。晴れて両想い、めでたしめでたしじゃないか。わからないな、何故そこで君は、何を今更な台詞を言ったんだい？」

「……だって……あたしには彼氏がいますし……相手にも彼女がいますし……」

あんたを解らせようなんて思っちゃいないわよ、ってか何でこんな説明までしなくちゃなんないのよっ。

と、祐介(あいて)を睨みたいのに睨めない。故に涙目。

「でもその彼氏より彼が好き。そんな事とっくに相手にも伝わってるじゃないか？　益々、何を今更だろ？　それよりも、自分の彼氏や向こうの彼女を傷つけるのが、恐いんじゃないのか？」

ぐさっと胸に刺さる事を言われた。
あまりにも、図星過ぎる。

「お互いのカレカノを言い訳にしている、『大人なカノジョ』に頭に来たんでしょ？　そーゆーのを逆ギレって言うのよ。散々自分から湊を遠ざけといて、今更何よ」

奏（かなで）のキツイ物言いに、拓也は思わず口が開いた。うっわ、スゲー容赦無い。何、このキレ味鋭い言葉の数々。この人、心臓冷たくない？　そんでめっちゃ尖がってない？

「自分勝手だな」

「自分勝手よねぇ」

「しかもバカバカしい」

「それに意外とバカよね」

「……」

「……」

良薬口に苦し、諫言（かんげん）耳に痛し、って言うけどさ（諫言って、自分は王様ではないけれど）。なんか心折れそう……目の前のこの人に

言われるのって、すっごい理不尽な気がする。だけど何も言い返せないから、とりあえず穴の中に潜りたい気がする。でも顔を出したらまた殴られる様な気がする、ってモグラ叩きのモグラか俺はあたしは。

心の中でブツブツ言っている彼らは、もちろん負け犬です。
こんな事を考えている間に、反省して、対策を練るべきです。

「……藤田さん、楽しそうですね？」

湊は諦めて、溜息をつきながら言った。
祐介は涼しい目で彼女を一瞥する。

「むしろ興味深いよ。何で君らが、何の得にもならなければ事態の進展にも繋がらない様な行動を、グダグダと続けているのか分からない。関係者全員マゾなのかと疑いたくなるね。心理学のケーススタディを見ている様で、本当に勉強になる」
「……（殴りたい……）」
「ん？」
「いえ。政治家って、人間観察も大切ですよね。大衆心理を掴まなくてはいけませんものね。いつも策略と駆け引きと恐怖政治だけじゃ、民の心は離れていってしまいますものね」
「……」
「だから笑顔で、無言でこっちを見ないで下さい……」

新幹線が、気持ちいいくらいのスピードで走って行くわー……。

「携帯が水没？」

奏が素っ頓狂な声を上げた。こちらは、話題転換に成功したらしい。そこが拓也と湊の差である。

「そう。あんな事ってあるんだね。俺も驚いた」

仕事中に外で、拓也が携帯で話しながら歩きいている時、人とぶつかり、うっかり噴水の中に落とした。

「でも大丈夫。もう一台持ってるし。仕事用」

そう言って彼は、運転をしながらスマホを取り出す。

「こっちの電話番号はあんまり人には教えてないけど。当面、これだけでいいや」

「ふぅん。……仕事中に、プライベートの電話を落とすなんてねぇ」

「不思議だねぇ」

「サボってたのね」

「まさか全然とんでもない。こんな仕事熱心な俺がさぼるなんて、ええ」

拓也はわざとらしく、目を見開いて肩をすくめてみせた。

それを奏が、苦笑しながら眺める。

「仕事、面白いの？」

「仕事？　そうだねぇ。思ってたよりも性に合うかな。楽しいよ」

「私にはさっぱりわかんない。数字をいじってばかりなんでしょ？あんなのどこが楽しいの？」
「あんなの、言うなよ。自分の妹もしてるだろ」
「うん、真面目でね、あの子。昔っからコツコツタイプだった」

ふっと笑う彼女の笑顔は、姉の顔をしていた。この人は、本来は多分普通に、家族思いの人なんだ、と拓也は思う。
視線を前に戻し、彼も小さく微笑んだ。
昔から、コツコツとやる女の子。らしすぎる。今よりずっと、不器用な彼女。

「へぇー、そこは俺と違うや」

祐介は、落ち込んだ湊を見てクスッと笑った。隙の無さそうな彼女だけど、見てると結構、こっちのSっ気が刺激されるみたいだ、と思う。彼のこんな心の呟きを聞いたら、湊は卒倒するだろう。

「ま、君も非生産的な事にエネルギーを費やして疲れたろ。少し寝なさい」
「え、あの……」
「ほら」

そう言って祐介は、おもむろに手の平を彼女の両目の上に、軽く被せた。そうやって、彼女の目蓋を閉じる。
突然の事に湊は慌てて、無意識に両手をふわふわさせた。

「……ふ、藤田さん……」

「祐介、って呼んで。この2日は」
「え？　あ、はい」
「僕も、桃（もも）って呼ぶから」

わかりました。それはわかりました。
そしてそれとこの手は、何の関係があるのでしょう？

「お休み、桃ちゃん」

気のせいか、腰にクる艶やかな声で囁かれた、気がする。
ど、どうしよう。実はあたし……

よだれを、垂らすんですよね……ああ無理、寝れない……。

……でも、これも、ああ、無理だわ……心地よくって……抗えない……。

湊はあっという間に、睡眠不足を解消しに別世界へと行ってしまった。

「……」

本当に寝るんだ。
祐介は目を見開いて、マジマジと彼女を観察した。秒殺だ……。
この子って、よっぽど疲れていたかよっぽど大物かの、どちらかだな。いずれにしても、見事だ。

だってよだれが、垂れている。

「くっそー、なんであいつは電話が繋がんねーんだよっ」

泰成が吠えた。

ソファに座っていたユミはビクっとなる。

泰ちゃんってテンパッた時、ギリギリまで黙っていきなり噴火するから心臓に悪いのよっ耐えらんない、ちーがいないこの状況なんてもっと耐えらんない、ここはひとまず退散をしよう、それに限るわっ。

男のヒステリーって、最悪よね。

そうっと立ち上がりこっそり事務所を出ようとする。まさにその時、後ろから泰成に声で捕まった。

「おいっユミっ！　お前も来いっ！！」

ビクッとなって振り返ると、彼は携帯を片手に今にも外出しようとしている。

唖然とした彼女は次の瞬間、悟った。

し、信じらんない。何でか知らないけど、この人、拓也を追っかけるつもりだわ。何処まで？　まさかあの旅館、長野までっ？？

「ええっ??　なんであたしがっ?!　よくわかんないけど全く関係無いでしょっ！」
「しっかりわかってんじゃねぇかっ。いいからお前、俺のストッパーになれっ！」
「何ですって?!　絶対イヤだっ!!　死んでもイヤだっ！　誰が好んで他人の揉め事に巻き込まれんのよっ！」

双方、互角の睨みあい。お互い一歩も引きません。

こういう場合、折れるのは大抵、男性です。そうあるべきです。

「……5万出す」
「旅費食事諸経費別でなら」

再びの沈黙。
こういうのはね、目を反らした方が負けなのよ。森でクマにばったり会った時なんて特にそうだと聞いた事があるわ。

「……このやろ……」

やがて泰成は苦虫を噛み潰したような顔をした。商談成立。ユミはゆっくりと頷く。こんな事なら慰謝料も別に請求しとけば良かった、絶対、うんざりする事態になるに決まってるもの。

1（後書き）

はい。この章では、いよいよごちゃごちゃとさせてまいります。各々のキャラが、それぞれ行動を起こす予定です。既に作者の手に負えません。どうしよう？

どうかお付き合いの程を、宜しくお願い致します。

2

「……すっごい」

「いらっしゃいませ、藤田様。お待ちしておりました」

趣のある日本旅館に、ガラス張りの立派なフロントロビー。足元は石畳で、外の和風庭園との一体感を出している。

……たっかそ。

「こちらでございます」

部屋に通された湊は、再び感嘆の声を漏らした。

「……うわあ」

十畳はある和室。おまけの、用途不明の小部屋かいくつか。そして何より極めつけは……

部屋付き露天風呂っ！　何この豪華さっ！　い、今すぐ入りたいっ。

「会は夕方の5時からだ。それまで随分時間がある。君は好きにしていていいよ。僕はちょっと、片付けなくてはならない仕事があるから」

「あ、はい」

ああ、仕事じゃ無かったら。仕事じゃ無ければ今すぐ温泉に飛び込むのに。でもプライベートで来るなんて無理よね、一泊いくらするんだろ？

「綺麗」
「だね」

奏（かなで）が展望台の木の柵に手を付き、柔らかに微笑む。拓也はその隣に並んで立ち、外の景色を眺めていた。

これが湊だったらどういう反応を見せるのかな、なんて考えてしまう。車で気軽に登れるドライブウェイの頂上。周囲の山々は皆低く、３６０度見回せれる。雲がそれらの山に布団の様にかぶっていて、まさに雲海。

あいつなら、うわあ、とか言って、雲が、山が、空が、空気が、とかって騒ぐんだろうな。だって分かる。俺もそうだもん。そうやって口や態度には出せないだけで（恥ずかしいじゃん）、同じ事を思っているから。

ごめん、舞彩ちゃん。
ここに来ても、君の事を、考えれてない。
言われた通り、誰もが認める、俺って自分勝手だ。

多分、一番傷つけたいのはあいつで。
一番、傷つけたくないのは君だった。
でもごめんね。俺、やっぱどうしてもダメみたい。

一番傷つけたいくせに、誰か他のヤツが、湊（かのじょ）を傷つけるのは耐えらんない。
結局、一番守りたいのは、多分あいつなんだ。

だから君の事をフルよ。どうか俺の事を恨んで、そんで呪って。そんで綺麗さっぱり俺を記憶から消してくれるなら、何だってする。視界から消えるよ、転職したって構わない。

俺が転職するって言ったら、湊（かのじょ）、職場に残んのかな？

拓也は軽く笑って、奏（かなで）に行った。

「降りてった所に、旨い蕎麦屋があるみたい。そこでお昼食べない？」

到着から約一時間後、部屋から一メートル以内の庭を探索した湊が戻ってくると、祐介が驚いた様に顔を上げた。

銀フレームの眼鏡をかけていて、それが嫌味な程よく似合う。

「あれ？　ずっとここにいたの？」

「あ、はい、何となく。……一人であんまり遠くをウロウロするのも変かな、と思って……」

「何で？」

「だって……政治家の妻って……ご主人の影となる、といいますか……内助の功、といいますか……勝手な行動は、ちょっと……」

「それで僕を待ってたの？　今時そんな殊勝な女性はいないよ」

「それに、あの、下手に藤田さんのご関係者とお会いするのも危険かと思いまして」

「……ああ、成程」

感心した様に湊を見つめた彼は、クスッと笑った。

「流石。賢いね、君は」
「……そんな」
「それなら、一人でそこのお風呂に入っていればよかったのに」
「……それもさすがに……」
「僕が覗くとでも思ったかい？」
「いえ、そんな」
「する訳無いだろう」

畳に胡坐をかいたまま、湊に体ごと向き直る。

「そこまでの料金を払っていない」
「……」
「冗談だよ。君が金で買えるとは思っていないよ。……それとも、ビジネスで割り切った、」

祐介は机に肘をつくと、頭を預け、艶めいた瞳と共に、薄い唇の片端を上げた。

「大人の遊びを、僕と、する？」
「……」

「本気で悩むんだ」

一転、彼の呆れた声。湊はなおも、眉間に皺を寄せて考え込んだ。だって、藤田さんなら沢山払ってくれそうだし、ベッドでもすごくスマートに対応してくれそうだし、ああでも実はとってもSの性癖があったりして、まあそれもある程度なら問題ないかだって彼相手だもんお釣りが来るわとか……

「もっと自分を大切にしなよ。君を留めるには、本命君が本気ださないとダメか」

「え？　どういう意味です？」

「いや」

祐介は軽く受け流すと、視線を反らした。湊のアンバランスさを、改めて認識した気分になる。

彼女は男と付き合う事に、あまりこだわりが無い。場合によってはセックスまで。

これは、極度の孤独感の裏返しじゃなかろうか。

それを埋める為に、身代わりで済まそうとしている。せっかく本命がいるのに。

やれやれってヤツだ。本人も気付いていない所が厄介だ。

女って、寂しさを感じると男を欲するって言うもんな。

「じゃあ、一緒に大浴場に行くかい？　もちろん、男女別々だよ。中々素晴らしいらしい」

「あ……もうお仕事、終わったんですか？」

立ち上がった祐介を見て、湊はそれに従った。だって彼に従うのが、この二日間の自分の役目だから。

彼は涼しい顔で、さらっと言った。

「ああ。僕の仕事には、誰も文句が言えないからね。実はどこでやめてもいいんだよ」

……なんか、なんとなーく、この人がとっても黒く見えるのは、多分気のせいじゃないわよね……。

質のいいインテリアと趣ある庭を眺めながらの廊下を浴場まで歩いていくと、前方から女性の賑やかな声が聞こえてきた。

「あー、気持ち良かったぁ」

「ホントだねぇ。まーちゃん、疲れ取れたぁ？」

「もう、ばっちり！　あー、病みつきになりそう。度々来ちゃいそう」

「いいけど次からは、まーちゃんもお手伝いさせられるよぉ？　床拭きとか雑草取りとか、仲居さんトレーニングとかもさせられちゃうかも！」

「あ、でもそれ面白そう！　やってみたい！」

楽しそうだなぁ、女の子同士。こんな高級旅館に友達同士で来る

なんて、随分と趣味がいいのね。
そう思って彼女たちの顔を見た湊は、唖然とした。
思わず、立ち止まる。
そんな彼女の動きに気付いた二人組のうちの一人が、同じく湊を見て、そして固まった。

「……え？」

もう一人が、不思議そうに相手を見る。

「どうしたの？」

彼女は、驚愕の表情を見せた。

「……みなちゃん？！」

「……ま、舞彩（まあや）……っ！？」

湊も負けず劣らず、驚愕の表情。どどど、どう言う事っ？　え、どうしようっ！
あたし、あたし、
この仕事、見られたっ！！

いち早くフリーズから回復した舞彩は、嬉々として湊達の方に駆け寄ってきた。

「えーっ！　なんでここにいるの？！　うわ、すっごい偶然っ。…

…えと、彼氏……？」

恐る恐る、遠慮がちに、でもしっかりと、隣に立っている長身のハンサムな男を見上げて、舞彩は観察をする。

凄い。みなちゃん、大人だわ。だって婚約者と別れてから、そんなに経って無い。なのにこんなに素敵な彼氏と、こんなに高級大人旅館に来るなんて。凄いみなちゃん、とっても凄い……。

でも信じられない。いつの間に？

「ま、舞彩こそ、なんでここにいるの？」

慌てた湊が、舞彩の視線の先、祐介の前に立ってあたふたと言う。その様子を見て、祐介は勘を働かせた。ふーん。

舞彩は無邪気に、顔を輝かせて言う。

「ふふっ。あのね、ここ、舞彩のお祖母ちゃんちなのっ」

「何っ！？」

何ですとっ？！　お祖母ちゃんちっ？！

お祖母ちゃんちって、こんなに広くて立派なのかっ？　お祖母ちゃんちって言ったら、今時マンション暮らしだったり築３５年の２階建て一軒家だったり田舎の農家だったり、ってそうではなくてっ！

あ、あ、あたし、結局どうすればいいのっ。

「こんにちは、初めまして」

背後から祐介の声が聞こえ、湊はビクぅっとなった。

「藤田と言います。宜しくお願いします」
「は、初めましてっ。……あの、みなちゃんとは……」
「何に見えます？」

ニコッと洗練された、優雅な微笑み。ああ、これに有権者は騙されるのね、と湊は目が白くなった。

「え？　えっと……あの……」
「君達、秘密は守れるかい？」

そう言って彼は少し前屈みになり、舞彩と従妹の目線に高さを合わせる。
それだけで、二人はドキッとした様に顔を赤くした。

「彼女はね、僕が頼んで、1日……婚約者になってもらっているんだ」
「……え、ええっ？」
「誰にも内緒だよ？」

笑いながら人差し指を唇に当て、しーっとしてみせる。ああもうなんか、黒い黒い黒いっ。

後ずさる湊。そんな事を知らない彼女たちは、祐介の雰囲気もさることながら、その何となくスキャンダラスな内容に浮足立っていた。

「……なんで……っ」

興味爆発、妄想炸裂、この人達はどんな世界で、どんな関係で、どんな事を繰り広げちゃってるのっ？

「実は僕は、報われない恋に悩んでいるんだ」

「はい？」

予定外の突っ込み、ならぬ大声。思わず湊は聞き返した。この人今、何てった?!

「その人以外の人と一緒になる事など、僕には考えられないし耐えられない。ところが、僕の結婚を急かす輩がいてね。彼らをけん制して時間稼ぎをする為に、今日は代わりに彼女を連れて来たんだ。信頼出来る友人を、婚約者として」

そう言って微笑みながら、湊に視線を投げる。ちょ、え、……は??!

「……な……げ、あ……」

言葉にならない。マジで、日本語が喋れない。酸欠状態の金魚みたいに、口がパクパクする……。

「……が……っ」

舞彩も、言葉を詰まらせた。

あまりの内容に彼女も絶句しているのだろう、と湊が思ったら、

「頑張って下さいっ」

胸の前で自分の両手を握りしめ、彼女は感極まった様子で言った。

「応援してますっ。その道ならぬ恋を、必ず成就させて下さいっ」

「ありがとう。そうするよ」

「絶対絶対、諦めちゃダメですよっ」

「……」

うっそでしょ？

……恐ろしい。その笑顔が、恐ろしい。まとまりました。

「みなちゃんとは、どういうご関係なんですか？」

「学生時代の知り合いでね。友達の友達だったかな。当時から、彼女の聡明さと美しさは際立っていた。この人を連れていけば、誰にも反対なんてされないだろうと思って、拝み倒したんだ」

つるつるつるー。流しそうめんの様に滑らかな口調ー。もう、どうとでも好きに言って。

「厄介な頼み事を引き受けてくれて、ありがとう」
「……どういたしまして……」

にこっと完璧に微笑まれ、湊も精一杯、お得意の笑顔（筋金入り）で返した。
ここにも一人、策士がいたわ。立て板に水のごとし、口から出まかせを滔々と語る輩が。いえいえこっちの方が本家本元、あの童顔男の方が可愛いものかもしれない。

みなちゃんまた後でねー、頑張ってねー、と手を振る彼女たちを見送りながら、祐介が笑顔を崩さず湊に言った。

「田村桃、封印だな」
「え？」
「知り合いがいるんだろ？　ボロが出る。しかもあっちの若い方は、絶対口を閉じる事が出来ない。人の口には戸を立てられぬ、ってヤツだよ」

あっちの若い方、とは舞彩の連れの方。確かに１０代特有の、好奇心と戸惑いが同居していた。
祐介はくるっと振り向くと、湊を見下ろし、

今度は同じ笑顔でも全然違う輝きで（だから黒いっ）、彼女に言った。

「と言う事で。宜しく、藤堂湊ちゃん」

……って、知ってるじゃん、あたしの本名っ！　しっかり調べてるじゃないのっ！

この、得体の知れない危機感って、何っ？

虎太郎が洗い場の鏡の前でボーっとしていると、後ろから俳優仲間に頭を小突かれた。

「おーい。温泉入ってる時ぐらい、演技忘れろよ。何のための温泉だよ。リラックスしろよ」

「……ああ。だな」

「ったく、真面目なヤツだよなー」

頭の切り替えがうまくいかないタイプである事は、自覚している。一つの役にのめり込むと、私生活までそのキャラクターに支配されてしまう事もしばしば。

だからこそ、プライベートでは余計に直感で動くのだろう。

湯船に入ると、先程の友人が寄ってきた。

「なあ。あんな共演者、いたっけ？」

「は？　何の事？」
「ほら、あそこ。スッゲーいい男がいる」
「……お前、そっちの気があるのか？」
「ちげーよ、そんなんじゃねーよ。じゃなくて、ほら」

確かに、風呂の中なので体つきまでは見えないが、バランスの取れた肩と精悍な顔つきの、３０前後の男がいる。
あれ？　と虎太郎は思った。

「な？　すごくいい男だろ。あんなヤツ、素人じゃそうそういないって。俺らん中にいたかな？」
「……彼、どっかで見た事ある……」
「やっぱ共演者？　スタッフ？」
「そんなんじゃなくって、えっと……あ。あの人、政治家だよ。議員」
「え、そうなの？」

友人は目を丸くして、虎太郎を見た。

「そうだよ。すこしはニュースも見ろよ。イケメン代議士、って割と有名だぜ？　それを自分の仕事仲間と間違えるなよ、バカ丸出しだろ？　少しは身内の顔を覚えろよ、せめて仕事中は」
「あ、そっかそっか」

あいつきっと、いつかテレビに出るぜ。バラエティかなんかで顔を売るに決まってる、と友人が囁く。
虎太郎は付き合い適度に、苦笑した。

3

店を出て青空の下、奏（かなで）がうーん、と伸びをする。

「お蕎麦も美味しかったー。拓也くんって案外、プランニング能力あるじゃなーい。その気になれば、結構イケるのね」

「何それ。案外ってどう言う事よ？　俺、今までイケてなかった？」

「ううん、イケてたわよ。特にアノ時」

「やだなお姉さん、エロクイーン」

言いながら拓也はポケットに両手をつっこみ、先を歩いた。駐車場までは少し距離がある。

奏は後ろから、余裕の体（てい）でついてきた。

「ふふ、そっちこそ。でも普段は、ただニコニコと、なんでも好きにして下さい、お付き合いします今だけね、って感じよね。人と合わせるのが得意でも、自分がイニシアチブを取るのはごめんですって、笑顔で言ってたわよ」

拓也は苦笑いをして、自分の隣に並んだ彼女を見下ろした。

「姉妹で、ホントヤダ。人の事を分析しちゃってさ」

「そんだけ興味持たれているのよ。感謝しなさい」

「お陰で俺の幸せが遠のいたってカンジだよ」

「バカね、男が何言ってるのよ。欲しいものは自分の手で掴み取り

なさい」

相変わらずの上から目線で、小気味よく奏は言う。すっと彼の先を歩いた。

そんな彼女の後姿を、拓也は一瞬目を細め、探る様に見つめた。

「……で、奏さんの欲しいものって？　俺とこんな事までして、何を求めているの？」

奏は前を向いたまま歩き続け、振り向かない。

「旦那さんの事が好きで、だからこんな事してるんでしょ？」

そのまま駐車場に着いた。

車に乗り込み、拓也はエンジンをかける。

発車後しばらくして、奏は口を開いた。

「あなた前に、私が何を企んでいるの、って聞いたわよね？」

「ん？　そうだっけ？」

「あれ、半分当たってるわ」

「……」

今度は拓也が黙って、前方を見続け運転をする。奏は言った。

「三田泰成さんの今の仕事。知ってるの」

しーん。無言の車内。

「だって私の旦那が、そこの顧客だもの」

その瞬間、拓也は大きく目を見開いた。意味も無くむせそうになり、勢い余ってハンドルを切りそこないそうになる。

「なっ……！」

「きゃっ！　ちょっと！　ちゃんと運転してよ！」

「ご、ごめん、あの……えぇ？！」

体勢を立て直し、前方を見つつも、何度も助手席の彼女を見ている。激しい慌て振りが、見事な程顔に出ている。まるでゾンビにでも出会ったかの様な表情。

奏（かなで）はジロッと拓也を睨んだ。

「そのビビり様。さてはあなたも、あの仕事に一枚噛んでるわね？」

「いや、あの、そのっ……はぁぁ？」

焦ってパニクって、ゴクっと生唾を飲み込みながら、拓也はハンドルを握った。

だってだってそれって、……まさか、

湊と義理の兄貴が、ニアミスしてたって事?!

ヤッベー、泰兄っ！　それ知ってたのかよっ！　いーや絶対、あいつが知ってるワケがねぇ！　知ってたらもんのすごい大騒ぎだよ、パニクるよあの人っ！

「別に訴えようとか思っちゃいないわよ。そんなみっともない事、まっぴらごめん」

ふん、という音でも聞こえてきそうな雰囲気で、奏は助手席のシートに深く身を埋めた。腕を組み、しかめっ面をしてフロントガラスを睨みつける。

分かっていた。あの人は、一旦手に入れた物には興味が無くなる事を。だから自分も、彼にとってなるべく、手に入りづらい存在でいたかった。本当は仕事だって続ける筈だった。産前産後の体調さえ、悪くなければ。専業主婦なんて、彼が最も興味を無くす職業だって知っていたから。

結婚前、洋一は本当に、自分に夢中だった。

「ただね。黙って見ているだけっていうのも、なんか癪だったから。でも私がそこのお客になる訳にもいかないでしょう？　女なんですもの」

でも自分だって、洋一に夢中だった。多分、今でも。

だから、計算してまで子供を作り、それを口実に結婚した。
だから、浮気の彼を深追いしない様に、自分を保つ様に、拓也と何度も寝た。

「え？　それで俺と……その、セフレになった、って事？　泰兄の知り合いで？　昔の顔なじみだから？」

まるで奏の心が聞こえたかのように、戸惑いながら拓也が言う。
その怯え様がおかしくて、彼女は笑ってしまった。

「んー、どうかな？　何とも言えない。ご想像にお任せします」

妹の知り合いに手を出す。そこまで常識知らずでは無い筈だった。
妹と拓也がお互い思い合っている、そう気付いても関係を断ち切らない。そこまで人でなしでは無い筈だった。

そこはやはり、夫の心変りがそれなりに堪えていたのだろう。
クールに立ち振る舞っているつもりで、私もまだまだだって言う事よね。
彼女は今度は自嘲した。

その様子を、拓也は眉をひそめながら、横目で観察する。

「……それで、どうすんの、これから？」
「今、私の事怖い、とか思ったでしょ？」
「当り前でしょ？　めっちゃ怖いよ、開き直った女性ってマジ怖い。こう言っちゃなんだけど、旦那さんがほのかに気の毒」

「明日は我が身よ、気をつけなさい」
「……」
ヤベ、マジで背中が寒い。俺今、なんか凄く恐いものを想像しかかった気がする……。
それから数時間後。旅館内の、大広間にて。
宴もたけなわ、殆んどの人が出来上がっていて、本来の趣旨を忘れている。そう、確か何かの義援金を募るパーティーじゃなかった？　これじゃただの飲み会よ。
「あなたはいい奥様になれますよ。ご主人を支えると言うのは本当に大変で、企業の腰かけＯＬなんかの非にはならないからね。そもそも家中のトイレを一つ一つ掃除してまわるのを毎日続けるだけでもそれは大変な重労働で、」
赤ら顔を脂で照からせ喋りつづける親父を前に、湊は笑顔を崩さず酌を続けた。
話題が飛びすぎる。何故ここでトイレの話？　しかも家中のトイレを一つ一つ、って一体いくつトイレがある家の話をしてるのよ？
句読点を打て、句読点を。
しかも必要以上のボディタッチ、この人あたしの立場を分かっているのかしら？　一応人妻（予定）よ、人妻。
「湊」

後ろから耳元に、低く囁かれた。染みわたるバリトン。不意打ちに、ゾクぅぅっとなる。

「……ふ、あ、ゆ、祐介さん」

顔を赤くして振り向く彼女に、祐介は満足気な笑顔を向けた。な、なになになに。

不必要なボディタッチをしていた親父の手が、自然にすーっと下げられた。それでも先程の脂ギッシュな笑顔は崩さない。面の皮が厚いタヌキを、彼女は想像した。

「いやいやこのお嬢さんは本当に素晴らしい。美人で上品で、その上非常に聡明ではないか。先程まで、世界の円高に付いて語り合っておったのだよ。大変有意義だった。家事手伝いにしとくのが勿体無いな、祐介くん」

「やめて下さい。せっかく花嫁修業をしてもらっているのに、僕との結婚を潰すおつもりですか？」

「ははは。しかしこれが君の妻となると、これまた実に頼もしい。申し分無い政治家の女房になるよ。ワシが保証する！」

湊が微笑む。

「ありがとうございます」

プロの笑顔を浮かべながら、

なーにが保証だ。タヌキの保証ぐらいアテにならないものがあるか。しかもお酒の席での話なんて、保証が聞いて呆れるわ、ハンコ押さすぞコラ。

なんてね。

「すいません、彼女をちょっと、返してもらいませんか？」

同じくプロの笑顔を崩さず、祐介が言った。

「おお、これはこれは。色男の登場だ、なんださっそくヤキモチかい？　ははははは」

「失礼」

湊をさり気なく、部屋の外に連れ出した。庭が臨める廊下。そこから、見事な紅葉が見える。

「大丈夫かい？　お疲れ様。そろそろお開きだけど、なかにはここに泊って行く連中もいるから。そうなるとキリが無い。一旦抜けていいよ」

「いえ、大丈夫です」

間髪置かずに告げた彼女に、祐介は少し眼を丸くした。

「根性あるね。見直したよ」

「これくらい、当り前です。あたしってそんなに評価低かったですか？」

仕事モード、戦闘態勢に入っている湊はやる気満々、強い眼差しで彼を見上げる。

「ははは。いい自信だね」
「やるからには、必ずやります。指示を下さい。どうすればいいですか？　最後までお客様のお相手も出来ますし、あまり出しゃばって藤田さんがお困りの様でしたら、もちろん抜けます」

クールな顔のつくりと、熱い瞳。
それを見た祐介は、目を細めた。

「そんな顔、出来るじゃないか」
「はい？」
「悩んでいる顔や澄ましている表情もいいけれど、目標を見据えている君の目、魅力的だよ」

湊の目が、点になる。
……この人、またまた、何言ってるの？

「……あの」

なんて恥ずかしい台詞を……。君の目は魅力的だよ、なんて面と向かって言える男はイタリア人だけかと思っていた……。
照れればいいのか、呆れればいいのか、分かんないわ。

「そんな君に、迷いが吹っ飛ぶような事を教えてあげよう」

祐介が面白そうに、口角を上げる。

湊はつい無防備に、首を傾げて聞いてしまった。

「何ですか？」

「あのね」

そういって彼は、彼女の耳元に唇を寄せる。

ドキッとしていると、意味深な雰囲気の中、とんでもない事を言われた。

「君がいくら本命の彼を好きでも、その彼は、今付き合ってる彼女を選ぶかも知れないんだぜ？　彼女を傷つけるかもしれない、って君、そんなに自信があるのかい？　自分が選ばれるって」

頭が真っ白、ショートした。

「……」

「それにもう充分他人を傷つけてるよ、臆病なお嬢さん。君の彼氏を、決定的に、バカにしているじゃないか」

湊は目を口を、だらしなく開けてしまった。

仕事モードの頭の中に、全くの不意打ちだった。

何で今、こんな事を言われるのかわからない。

ポカン、と彼を見上げた。

「……つまり、あの……」

「逃げずに真剣にぶつかれ。全ての責任を負う覚悟で。それが傷つけた相手への、せめてもの罪滅ぼしだろう」

驚いて空っぽになった頭の中に、彼の言葉だけが入ってくる。

そんなに自信があるのかい？

決定的に、バカにしているじゃないか。

全ての責任を負う覚悟で、逃げずにぶつかれ。

そっか。

つまりはそう言う事で。

あたし一人で考えていたって、答えも出なければ、相手にも失礼なだけなんだ。

舞彩にも、虎太郎にも。

湊は急に、答えが降って来たように感じた。

拓也。

彼の皮肉めいた、それでいてどこか甘えた瞳の笑顔を思い出す。

ズキン。

堪らない。

胸が、甘く痛んだ。

欲しいよ。

「おおよそ俺らしくない台詞だがな」

祐介が真面目くさって言う、その胸倉を、湊は縋りつくように掴み上げた。

「祐介さんっ」

「何？」

彼にしては珍しく押された様に、間近に迫った彼女の顔を真顔で見下ろす。

湊は更に顔を近づけた。

「今、すごくわかりました。あたし頑張ります。ありがとうございますっ」

「……」

祐介はマジマジと彼女を見つめた。

彼女も、彼から目を反らさない。

しばしの、無言。

やがて彼が、ニヤッと笑った。

「それは見物だな。僕としては、自虐的な君も結構好みなんだけど」

湊も、ニヤッと笑う。だってもう、そんな憎まれ口を叩く彼の暖かさを知っている（多分。気のせいかもしれないけれど）。

そんな寄り添う（？）二人の側を、広間にいた客の一人が通り過ぎた。どう見ても酔っぱらっていて、トイレに行く途中ならしい。

「おおう、お熱いねぇ、お二人さん。廊下で抱き合っちゃってー。いいねぇ、若い人は。そのまま部屋に行っちまえば？　わはははは」

どうもー、と祐介の湊の二人は、営業スマイルで微笑んだ。

もうこうなったらね、いくらでも笑えちゃうからあたし！

それを、廊下の向こうの庭のまた奥から、見た人間がいた。

「いやー、綺麗だな、紅葉のライトアップって言うのも」

一緒に来た仲間達は、紅葉に目を奪われている。

たまたま旅館の方に目が行った虎太郎は、あれ？　と思った。

今の女性、湊ちゃんに、似てないか？

すぐに見えなくなる。どこかに行ってしまったらしい。

虎太郎は眉根を寄せた。

なんか凄く似てたな。シャンパンゴールドのワンピース姿が、目に焼きつく。男と、抱き合っていた？

一瞬考えを巡らせようとして、すぐにやめた。

ま、そんな偶然、ある訳無いか。

それに俺、何をやってても彼女の事が好きだし。だってしょうがねぇし。自覚済みだし。

ガシガシっと頭をかくと、彼は小走りに、仲間の方へ走って行った。

その頃。

旅館の玄関前で、感嘆の声を上げる奏（かなで）。

「えっ？　これが日帰り露天風呂っ？　すごいじゃないっ。見直したわっ」

「はい、見直されましたー。って、どんだけ低評価だったの、俺？」

豪華で重厚で煌めいている家屋は、その黄色い光が、まるで灯を連想させる。

飛んで火にいる夏の虫。

拓也は縁起でもない事が頭を掠めて、思わず眉間に皺を寄せた。そのまま首を傾げる。あれ？

俺何か、ビミョーに嫌な予感がするかも……。

4　ご対面っ

泰成とユミは、新幹線で目的の駅に着いた。

「ちょっとトイレ」

そう言って彼女は、そそくさと泰成から離れる。それを彼が、無言で威圧感たっぷりに睨む。女子のお手洗いよ、勘弁してってば。

ユミは冷や汗まみれで駅の女子トイレに入った。即座に携帯を手に取る。

電話をした相手は、千清（ちせ）だった。彼女の呑気な声は、今の自分にまったく釣り合わない様にユミは感じる。誰もあたしの状況なんて理解してくれやしないっ。

『どうしたのユミちゃん？　珍しくない？　仕事中に電話して来るなんて』

「あんた、社長の事情を何か知ってるんでしょっ？」

ユミは一気に、出来るだけ掻い摘んで、千清が事務所を出ていってからの出来事を話して聞かせた。

『そっかぁ。ちーには全然分かんないや。でもユミちゃんの助けになるかもしれないから、教えるね。絶対内緒にしてね』

「うん、早く早くっ」

『あのね。泰（たい）ちゃんは湊（みなと）ちゃんが大好きなの』

「……」

ユミは、呆れてしばらく絶句する。

やがてかなり、イラっときた。

「……あんたに電話したのが間違いだった。もっと役立つ情報を持ってるかと思ってたわ」

『うん、ごめんね』

「あたしだって知ってるわよ、社長が彼女に入れ上げている事ぐらい。というか横恋慕してるんでしょ？　拓也と湊ちゃんがデキてるから」

『うん。だって妹だもの』

「そう、……え？」

行き過ぎた車を、バックさせる感覚。

「何？　妹？　誰が誰の？」

『泰ちゃんのオジさんが他所の女の人と作っちゃった子供が、カナデさんっていって、湊ちゃんのお姉さんなの。今それで、ウチのお母さんは伯父さんにすごく怒っているんだけどね。泰ちゃんはああ見えて、一時期すっごい落ち込んでいたのよ。だって湊ちゃんとエッチしちゃってたでしょ？』

「……え？　子供？　姉？　エッチ？……エッチィィ？」

トイレに入ってきた子連れの若い母親が、あからさまに非難の目をユミに向けた。

『あれ？　知らないの？　ナナちゃんは知ってるよ？　ユミちゃん、案外情報不足だねぇ。あ、ごめん、もう切るね、バイバイ』

電話は一方的に切られた。千清の今日のお客に、彼女がかなり惚れ込んでいるせいかもしれない。

一方のユミは真っ青になった。……泰(たい)ちゃんと湊(みなと)ちゃんがエッチをしてた？　それで泰ちゃんのオジさんが子供を作っていて、それが湊ちゃんの……お姉さんで……。

……ヤバい、あたし、とんでもない事に巻き込まれかかってるかも……。

駅のトイレに立ちつくす。

……いずれにしても、5万は安かった……もっと足元見とくんだったわ。

「いいんじゃない、家族風呂」

フロントで、拓也が奏(かなで)に言った。

今日は入浴のお客が多くて大浴場が込み合っている事、そして二つあるうちの家族風呂の一つが空いている事を、受付に告げられたからだった。

奏は少し、困ってしまう。

そりゃ、風流な貸し切り家族風呂にゆっくりと浸かる事には、とても魅かれる。でも、拓也はもう、自分とそういう関係は終わらせたかった筈だ。だからこっちもすっかりそのつもりだったのに、今更同じお風呂に入ろうと言われても……。

彼女の声が聞こえたかのように、拓也が言った。

「奏さん、一人で入っておいでよ」
「えっ？　でも拓也くん……」
「俺はいいよ。せっかくここまで来たんだし、空いてるって言うならいいじゃない。ゆっくりしておいでよ」
「でも……」
「大丈夫。適当に時間潰してるから。ひょっとしたら男湯、ちょっと覗いてみるかもしれないし。気にしないで」

にこっと微笑む。彼の十八番。本当に気にしていなさそうだ。

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

言いながら奏はつい、嬉しさで顔がほころんだ。

舞彩は結局、旅館の手伝いをしていた。例の貸し切りパーティー（まさかそれに湊が参加しているとは）に加えて、今日は入浴のみのお客も多い。近くでテレビの撮影があったらしい。
仲居専用の浴衣を着て、家族風呂の脱衣所にタオルを整えていると、早速次のお客が来た。

「あ、いらっしゃいませ」

女性が一人で入ってくる。彼女に気付いて、笑顔で会釈をして来た。

「どうも、お世話になります」

とても、感じがいい。

舞彩も笑顔で、手早く作業を済ませながら言った。

「新しいタオル、こちらに置いておきますね」

「はい、ありがとうございます」

頭を下げて、舞彩は外に出ていく。綺麗な女性（ひと）だな、と思った。

家族風呂に来るって事は、家族で入るのよね？　でも多分カップルだろうなあ。なんかそんな感じがする。だって色気があるもん。

男の人は、後から来るんだろうな。

いいなー、カップルでこんな家族風呂ー。

私もいつか、そう言う事をしてみたいなー。

その時、一緒に来るのは、拓也くんなのかしら……？

ふと、立ち止まった。

もし違う人だとしたら……。想像できない。

だってそれは、彼と別れて、新たな出会いがあり、恋愛をして、付き合い、そう言う事に至る筈。それは、とてつもなく長くてエネルギーのいる、大変な道のりの気がする。

その時の自分は、一体いくつになっているのだろう？　どんな生活をして、何を思って、何が楽しみで生きているのだろう。

拓也（かれ）がいない生活なんて。

「まーちゃーん、ちょっとこっち手伝ってー」
慌てたように従妹が顔を出した。厨房だ。熱気が伝わってくる。
舞彩は一気に我に返った。
「はーい」

タクシーの中で、それまで難しい顔をして、腕組をしながら座っていた泰成が口を開いた。
「実はな……」
「みざるきかざるいわざるっ」
ユミは両手で両耳を塞ぎ、目をしっかりと閉じて叫ぶ。
それを見た泰成が、ポカン、とした。

「……はあ？」
「あたしは何も見てないし聞いてない。だから何も言いませんっ」
「……お前、それを道中、ずっと押し通すつもりか？」
「身を守る為ですから」
「それで5万も取るのかよ。なんつーぼったくりだ」
「ぼったくり事務所の所長がよく言いますわ。大丈夫、ちゃんと仕事は致します。ストッパーになればいいんでしょ？」

姿勢を正し、ひざ丈スカート中にある綺麗な脚を組み、長めの髪を手で払いながらツンと言う。
泰成はそんな彼女をじっと見ると、視線を窓の外にやり、言った。

「……いつまで、この仕事を続けるつもりだ？」
「だから最後まで付き合うって、」
「じゃなくて。この、仕事」

ユミは泰成を見た。台詞の意味は分かっても、その意図するところが分からない。
すると彼は再び彼女を見て、そして少し微笑んだ。
男らしい、頼れる笑顔。

「お前はもう充分、世の中でやっていけるよ。心配すんな。俺が太鼓判、押してやる。……だからそろそろ、自分の人生を見つけろよ。好きな物、捜してみろ。きっと楽しいぜ」
「……」
「不安になったら、また戻ってくればいい。いつでもいい。大丈夫だ。それでもお前は、また出発できるから。そういう女だ。自信を持て」

いつものぶっきらぼうな表情からは想像もつかない、その笑顔に、まるで陽だまりの様な暖かさを感じた。相手は自分より、一回りも年上の男性なのに。

知っている。彼は捨て猫を拾ってきてしまうタイプで、どんな相手でも見捨てる事が出来ないんだ。

ユミは少し俯く。何故、今自分がここにいるのか、分かる気がした。

湊は大部屋を出ると、慌ただしく歩いて、アルコールの追加を厨房まで取りに行こうとした。

途中の廊下で、手伝いをしていた舞彩とばったり会う。

「あ、舞彩」
「あ、みなちゃん」
「よかった、ビール」
「まだまだ後から持ってくるよ。あと日本酒でしょ？　ウーロン茶も足りる？　大丈夫？　すごい大変そう。みなちゃんすごいね、すごいよ」
「ありがとう」
「頑張ってね！」
「頑張る！　もうコンパニオン状態よ。仕事ってどれもみんな楽じゃないね……え？」

誰かが横から湊の手首を掴む。

驚いて振り返った。

「やっぱり」
「……虎太郎?!」
「湊ちゃんだった」

形の良い唇が、悪戯っぽく上がった。
虎太郎の甘やかな瞳。それが湊をじっと見つめ、誘う様に揺れている。長身で、カジュアルな服に包まれた、均整の取れた体つき。
まるで王子様の登場。

でもなんでいきなりここに登場……? この人が? どうして?
どうやって?
……けどやっぱカッコよすぎる……。

湊は見とれて、呆然となった。長年ファンをやっていたので、未だにイマイチ実感が湧かない。
お互い時が止まったかの様に、視線を絡め合い、動かなくなった。

やがて虎太郎が、先に我に返った。

「あ、ごめん」

それまで握り続けていた、彼女の手首を慌てて離す。
湊もハッとした。そしてふと、舞彩の事を思い出した。振り返ると案の定、ビール瓶を三本乗せたお盆を手に、唖然としている。
その手から、ゆらっと、ビール瓶が倒れた。危ないっ!

咄嗟に湊が、抱きかかえるように瓶を受け止めた。

「うわっっと」

虎太郎が目を丸くする。

「ナイスー」

それらを全く頓着する事無く、舞彩は叫んだ。

「……コっ、コタローっ？！！」

おいっ。

うわっととと。あーあ、瓶の水滴がワンピに付いちゃった。うわ、みっともな。それよりこれ三本も、どうすればいいの？　舞彩、お盆を貸して……

「な、なんでっ？　なんでなんでなんでっ。　知り合いっ？　みなちゃん、知り合いなのっ？」

大興奮の様相で、舞彩がみなとに飛びついてきた。胸倉を掴みかからんばかりの勢いに、湊は本能的に後ずさる。

なんか今、舞彩がちょっとだけ、肉食獣に見えた……。

「え、ああ、うん、まあ」

すると虎太郎が、少し首を傾げて、湊を覗き込んだ。

「……知り合い？」

彼の瞳の中に意図するモノを感じ取り、湊は言葉にグッと詰まる。

無邪気な表情な中に、悲しげな色が僅かに見える。

でもだって、彼氏って言うのは簡単だけれど、

それは……それは……

「……そんな顔、しないでよ」

しょうがないな、とでも言う様に、虎太郎は笑った。湊の頭を、軽くクシャっと撫でる。

彼女はホッとして、彼を見上げた。

「何でここにいるの？」

「ロケだよ。一日だけ。今取ってるドラマのね……言わなかったけ？」

「……そ、か」

「ひでっ。忘れられてるっ」

明るく言った虎太郎は、笑みを浮かべたまま湊に尋ねた。

「そういう湊ちゃんは？」

ギクっ。ついに聞かれたっ。

その様子を見た舞彩が、心配そうな顔をした。二人の雰囲気から、何かを察したらしい。湊が祐介（たにん）の婚約者としてここにいる事を、彼が知ってはイケナイのではないか。

彼女の予想通り、湊は気まずそうな顔をした。

「……えと……仕事……？」

「……ああ、そう言う事か」

虎太郎は自分の口元を軽く指でなぞりながら、真顔で頷いた。

それに反応するかのように、湊はビール瓶を振り回しながら全身で慌てる。

「でもっ、その、そーゆー事ではなくてっ、あの、一緒にいるだけ、というか、フリをするだけ、というか……」

な、何を焦っているのよ、あたしは。もう虎太郎ともキチンと向きあうって決めたじゃないっ。ああでも目の前で、傷ついた目を見せられるかもと思うとつい怯(ひる)んじゃうのっ、彼があたしの仕事(バイト)を了承済みって分かっていてもっ！

こんな事であたし、彼とのお付き合い、お断りする事が出来るの？

湊の様子に、虎太郎は再び苦笑した。

「大丈夫だよ。俺、どんなでも……」

湊ちゃんが好き。そう言おうとした時だった。

「凄く良かったわよー。なんか私一人で、申し訳なかったわ」
「いいよ。俺の方も良かったもん。中々立派だったよ、あっちも」

T字に交差している廊下を横切る形で、一組のカップルが歩いてくる。
その話し声に、何となく3人の目が奪われた。

そのまま、舞彩の目が見開かれる。

「……たくや、くん……？」

拓也が振り向いた。

拓也がいる廊下は縁側スタイルになっていて、庭へと繋がっている。
そこで紅葉を照らすライトの下、先に気付いたのはユミだった。

手前の拓也と、（何故か）連れの女性。
そこから真っ直ぐ伸びた廊下の先に立っているのは、恐らくでも確実に、湊。

「……あー、泰(たい)ちゃーん……」

ユミの呼びかけに、周囲を見回していた泰成が振り向く。
ユミは顔をひきつらせ、前方を指さした。

「……間に、合わなかったかも……」

湊は、信じられなかった。
目の前に、拓也が立っている。顔面を、蒼白にしている。らしくない、何で？

その隣で、彼の腕に絡みついたまま凍りついている女性は、まぎれもなく、自分の姉。

まったく、りかいできない。

「……なに……？」

まるで湊の言葉を代弁するかのように、舞彩が、隣で小さく呟いた。

なに？

5　暴露大会？

「……どういう事？　全然、わかんない。……だって拓也くん、週末用事があるって。だから私と一緒に、出かけられないって」

舞彩は呆然としながら、放心した様に言う。誰に話すでもなく、まるで、自分が喋っている事にも気付いていない様に。

「……」

拓也は口を固く結び、一瞬舞彩から目を反らしたが、すぐに戻した。真っ直ぐに見る。

彼女の後ろにいる湊とも、視線が絡んだ。

湊はカッとなり、自分の顔が熱を持ってくるのを感じた。

その時、祐介が部屋から出て来た。湊と虎太郎のすぐ後ろで、彼らが一堂に会している現場に出くわし、立ち止まる。

舞彩は呆然と、拓也に向かって言葉を続けた。

「……なんで、ここにいるの……？」

「……」

「……その女（ひと）……」

さっき、家族風呂にいた……。

つまりその女（ひと）はカップルで。

その女（ひと）と腕を組んで歩いてきた拓也くんは……

一緒に、家族風呂に入った男（あいて）で。

舞彩は、頭に血が上り、混乱し、動揺し、訳が分からなくなった。

「……っ」

彼女はお盆を抱えたまま、彼らとは反対方向に走り去っていく。

湊の横を通り抜ける。

虎太郎が戸惑った様に、彼女を視線で追った。

そして湊を振り返る。

湊ちゃん。

彼女は先ほどからビール瓶を抱えたまま、微動だにしない。ワンピースの胸から下が、水滴でびっしょりと濡れている。

「それ、大丈夫？　俺持つよ」

虎太郎は、なんとも空気が読めていない、場違いな手の差し伸べ方をしてしまった。彼女の腕から瓶を取る。それでも湊は、前方を見据えたままだ。

その時、拓也たちの背後の、障子をかたどったガラス製の引き戸が開いた。庭からやってきた男女に、虎太郎は目を凝らす。あれ？男の方って……三田さんじゃないか？

その時、すっと、湊が前に歩いた。

「湊ちゃん？」

皆がかたずをのんで見守る。拓也と奏（かなで）は、金縛りにあった様に彼女を見つめて動かない。

湊は真っ直ぐに進み、拓也の真正面で、止まった。

「……」

彼女の、強い瞳。様々な感情が渦巻いている。拓也はそれを見つめたまま、奥歯を噛み締めた。

湊。

スパァンッ！

湊の大きな平手打ちが、辺りに響き渡った。

ヒュウ、と祐介が、虎太郎の後ろで尻上がりの口笛を吹く。アレはキクね。数年前を思いだすぜ。

拓也は打たれたまま、床を見つめ、動かなかった。

湊は彼の隣の、奏（かなで）を見る。

彼女も目を見開きながら、湊から視線を反らさない。

まさか、こんな形でバレるなんて。

自業自得も、いいとこだわ。

「お姉ちゃん……」

そう呟いた湊は、初めて表情を見せた。辛くて、苦しくて、それを堪える様な歪んだ顔。

それを聞いたユミと虎太郎は驚愕し、祐介は「ほう」と感心した。

「……っ！」

絶句したユミは、冷や汗タラタラ。

な、何ですって、この修羅場に重大事実がもう一つっ！

アレは湊ちゃんの姉?!　拓也の相手は湊ちゃんじゃなくって、姉のカナデだったぁ？

あれ、でも湊ちゃんのお姉さんってたしか結婚してる……だって湊ちゃん、お姉さんの子供の面倒を時々見るって……

……拓也っ、不倫かっ！

「好き勝手にも、程があるんじゃない？」

今にも泣き出しそうな顔で湊が姉に言ったその時、泰成が動き、湊に手を伸ばした。

「藤堂」

彼女の上腕を掴む。湊はハッとした様に彼を見た。

途端に、自分が仕事中だった事を思い出す。そう、彼女は我を失うと言う事が、人生に置いてないのだ。常に冷静で、自分を見失わない。

それが彼女の、売りで弱点だから。

「……社長……？」

「落ち着け。な？」

そう言われて、急に色々な事を思い出した。自分は今、祐介の婚約者として会場に戻らなくてはならない。こんな所で油を売っている訳にはいかない。何故ここに泰成がいるのかは分からないけれど。

「……ごめんなさい、仕事中に。……でも舞彩を追いかけないと」

仕事に戻らなきゃ。でもあの子を捜さないと。ほっとけない、ほっとく訳にはいかない。

「おい、しっかりしろよ」

ふらっと動きだそうとする湊の肩を、泰成が更に力を込めて、掴み続けた。

それでも湊は、彼を見ないで歩きだそうとする。

「はい、あの、すいません。舞彩を追いかけないと」

追いかけないと、追いかけないと。まずはあの子を追いかけないと。

冷静なつもりで激しく動揺している湊を見て、拓也は目を丸くす

る。奏は眉間に皺が寄った。マズイ、この子は日頃しっかりしている分、一旦切れると、とても弱い。あの時みたいに。

「ごめんなさい、祐介さん。あたしちょっと、彼女を」
「いいから藤堂！　落ち着けよ」
「落ち着いてるわよっ！」

急に叫ぶと彼女は振り向き、泰成の手を力任せに振り払った。
怒りをあらわにした彼女の激しい様子に、拓也も泰成も、虎太郎も、驚く。

「するわよ、仕事もちゃんと！　やるわよ！　でも友達追いかける時間ぐらいあるわよ、それくらいあるのっ！　ずっとそこにいたのはあたしだから分かるのよ！　急にやってきて指示しないでよ！偉そうに、そんなに信用してないの？！」
「してるよ、そこはちゃんと！　だから落ち着くんだ」

そう言って泰成は再び彼女の、今度は両肩を掴んだ。
しかし彼女は暴れて、泰成の動きに逆らった。

「何なのよ一体っ！　離してよ、何が言いたいのよっ！」

他の客が、何事だろうと振り返りながら彼らを見る。
その視線に気付いた湊が、ハッとして動きを止めた。マズイ、こ

のままじゃ祐介さんの顔に泥を塗るわ。

その自己統制された彼女の様子に、見ていたユミは気の毒になってきた。もう、いいじゃん。

「泰(たい)ちゃんが、湊(みなと)ちゃんのお兄さんだから心配なんじゃない？」

「わっお前っ！」

飛び上がった泰成が、思わず湊から手を離す。

「……え？」

湊は彼女を見た。

泰成は今度は、ユミを引っ掴む。

「バカっ、ユミっ、やめろっ」

「いーじゃない。ここで言わなくていつ言うのよ？　役者が揃ってんのに、当事者が何も知らされていないなんて可哀想でしょ？」

見るからに大慌てをしている泰成と、負けじと大声を張り上げてその相手をしているユミ。

一番最後に登場したこの二人が、今は一番盛り上がって何やらゴチャゴチャやっている。

その様子に湊と拓也がポカン……とし、その脇で、奏(かなで)が小声で呟いた。

「……あっちゃー……」
「何の事？」
湊がユミに尋ねる。
ユミは奏を見ながら言った。
「そこにいるあなたのお姉さん。カナデ、さん？」
「……」
わーやめろーっとか泰成が騒いでいるが、傍から見ても無駄な努力。
「あの人、泰（たい）ちゃんの腹違いの妹なんだって」
「……」
湊と、そして拓也は、しばらく時が止まった。
「「はあぁぁぁっ？？！」」
二人、とても綺麗なユニゾン。
どっ、どっ、どう言う事っ？　どう言う事、今なんて言った？！
湊と拓也はまるで双子の様に、揃ってビックリ眼（まなこ）の大口を開けた。
虎太郎も目を見開き、祐介は再び「ほう」と言って腕を組んだ。
あああああ、と泰成がこの世の終わりの様に固まり、奏（かなで）が苦虫を噛み潰した様な顔をしている。ここで言わなくていつ言うのよ、っ

て、何よそれ。ココで言うか、この女は。

「嘘っ！」
「みたいだけど、本当らしいわよ。本人に聞いてみれば？」

同情的な目を向けて、湊に応えるユミ。
……何を言ってるの……？
なおも呆然とした湊は、やがてカクカクと、不自然に奏（かなで）の方を振り向いた。

「……それ、本当……？」
「残念ながら、本当」

彼女は真顔で頷く。
湊は世界が真っ白になるのを感じた。

……う、嘘でしょ？　嘘でしょ？　……絶対、嘘だ！！

「……そんな……お姉ちゃん、いつから知ってたの？」
「……大学生かな？　お父さんが死んだ時」

本当っぽい……。

湊は唖然として、事態を受け入れる事が出来なかった。
ハッキリ言って、拓也と姉の不倫なんてぶっとんでいる。だって家族の一大事。世界がひっくり返った。この際、誰と誰がデキているかなんて話、どーでもいい気がする。

拓也も目を見開き、カクカクと首を動かすと、泰成を見た。

「……マジで……？」

最早諦めた泰成ははぁ、と溜息をつくと、腕を組んで拓也を見下ろした。

「……と言う事で、俺はお前を死刑にする権利を持つ。さもなくば、俺の事はお兄様と呼べ」

「……殺して」

思わず拓也は両手で顔を覆う。

その隣で、奏（かなで）は話を続けた。

「以来、私は捜したの。本当の父親を。そしたら割と呆気なく見つかってね。ついでに息子まで見つけた。興味本位で彼に近づいたのが……7，8年前、かな。人気ホストでびっくり」

「……マジかよ」

「嘘だろ……」

その告白に、泰成と拓也（ホスト当事者）の二人は思いっきり引く。まさかそんなに以前から、彼女の計画（？）が進行していたとは。女って怖ぇ、女って怖ぇ、女って怖ぇ！

「その後の展開については、色々と想定外だったのだけれど」

僅かに自嘲して俯く奏。それを見た拓也は思いだした。

「……ああ、それ」

彼女を小さく指さし、泰成を見る。

「この人の旦那さん、あんたのお客」

再び、彼らの周りで時が止まった。

「……なにぃぃぃっ？！」

「「えーっ！！」」

泰成と、ユミと湊が同時に叫ぶ。

「こいつら、賑やかだな」

「……」

祐介がそう言い、虎太郎は笑顔が引きつった。……確かに。舞台見てるみたい……。

「誰だっ！！」

泰成が噛みつかんばかりの勢いで言って、

「関、さんっての」

拓也が答える。

一瞬口を閉じて目を丸くしたユミが、再び大声を上げた。

「……あーっ！　ちーのお客っ！！」

「わっバカっ」

泰成が慌てて彼女の口を押さえようとする。

その様子を、奏（かなで）が冷めた目で眺めた。

「そうよ。今頃二人仲良く名古屋」

途端に気まずそうになる二人。千清は確かに、今名古屋にいる。

商売上の付き合いだけれど、とても彼の事を気に入っていた。

そんな彼らに構わず、奏（かなで）は湊に向き直った。

そして彼女の目を見据え、真顔で言った。

「ごめん、湊。あなたの友達に手を出したのは私。本当に反省している。あなたやお友達まで傷つけて、ごめんなさい。こんなにややこしくなるとは思わなくて……出来る限りの償いするわ。……でもまさかあなた」

そこで、言葉を溜める様に、口をつぐむ。

そして、物言いたげな瞳で、彼女の事をじっと見る。湊はゴクっと、息を飲んだ。

……な、何……？

姉が、探る様に言った。

「彼の、仕事を、していたりは、しないわよね……？」

そう言って、胸元で小さく、泰成を指さす。

ギックぅぅ。湊は固まった。

その背後で、泰成（社長、兼、兄）もギックぅぅ。

その隣で、拓也（斡旋者）もギックぅぅ。

ユミはハラハラし、虎太郎はオロオロし、祐介（客）は涼しい顔。

湊はお得意の営業スマイルを試みた。あれ？　あたし、何か、立場悪い？　お姉ちゃん、自分の不倫は棚に上げるの？　あ、でも、洋一（だんな）さんの不倫を斡旋したのは事務所（ウチ）か、そりゃマズイわイケナイって……あぅぅぅぅ。

「……ねえ、あたし、とりあえず……」

笑顔で廊下の向こうを指さす。あ、ほっぺが引きつる。

「舞彩を、追いかけに行っても……いいかな？」

あの子をなだめるって言うのが、今は一番単純な気がする……いやもちろん、簡単じゃないだろうけど。

……というか……

もーう、何が何だかわかんない。一体何から考えたらいいのか、誰か教えてよーっ。

6　それでも、あなたが

目で許可を求める湊に、祐介は軽く肩をすくめ「いいよ。ごゆっくり」と言った。
それではお言葉に甘えて、頭整理してきますっ、じゃなくて舞彩（かのじょ）捜して来ますっ、と一目散に退場。

そして、取り残された6人。
シーンとなり、なんとも気まずい。

その時、それまで壁にもたれて腕組みをし、事態を見物していた祐介が、ゆらっと体を起こした。

「やあ、吉川。久し振りだな。碧（みどり）の結婚式以来か？」

えっ？　こいつら知り合いか？　泰成が目を丸くする。
騒ぎの最初から祐介の存在を認めていた拓也は、驚くでもなく、ブスっとした表情で、僅かに口を尖らせた。
少し上目遣いで、祐介を見る。

「……ども」
「しかし見物（みもの）だったな。教えてくれないか？　どんな悪事を働いたら、そんな天罰が下るんだ？」
「……見りゃわかるでしょーよ……」
「だな。楽しそうでいい事じゃないか」

微笑まれる。
先日の結婚式で、拓也がボロッボロだった事を言っているらしい。
だから全てがみっともなくって、拓也は何も言い返せない。くっそぉ、コイツっ！　今頃俺に仕返ししやがるっ。

「……」
「ここに来たのは、あの時、僕がこの旅館を薦めたからか？」

ギクっ。

「……」

祐介が感心したように言った。

「お前、案外素直なんだな」
「ねぇ奏（かなで）さん、俺も彼女たち追いかける、ごめんっ」

藤田（コイツ）の笑顔とか耐えらんねぇっ。拓也は奏に明るく笑いかけるや否や、素早く逃亡を図った。唖然とする４人と、ニコニコする祐介。

ところが虎太郎の横を通り過ぎる時に、彼の視線に気付いてしまった。

そうだった。

「ごめん、やっぱ弟じゃない。腹違いはあっち」
「……」

自分を見つめる虎太郎に、拓也は泰成を指さす。もう弟ネタ、湊が虎太郎に仕込んでるかもしれないし。

……あれ？　でもさっきの話、つまり泰成と湊って、……血は繋がって無い……？

拓也は一瞬眉根を寄せて考え、そしてすぐに諦めた。どっちでもいいか。後で考えよ。

軽く両手を上げて虎太郎に言う。

「でも安心して。手出してないから」

「……そ」

「近親相姦も……いっそそれで燃えれりゃね」

微かに自嘲し、呟く。そんな拓也を見て、虎太郎は無表情に言った。

「君、節操無いんだな」

チラ、と彼を見上げた拓也は、軽く肩を竦めるだけ。

虎太郎は低い声で、ハッキリと言った。

「彼女は連れて帰るから。もう近付かないでくれ」

拓也はジッと床を見続けた。湊に殴られた頬が赤い。

やがて黙って、小走りにその場を去った。

再びの、妙な沈黙。

気まずそうに自分を見下ろす泰成に、奏（かなで）がジロッと睨み上げた。

「……今更兄妹（きょうだい）の親交を深めましょう、とか言わないわよね？」

「……言わねーよ」

「別にあなたのお父さんのせいで辛い目に合った訳でもないし、あなたの仕事のせいで主人が浮気に走った訳でもないだろうし、そのせいで私が人生ヤケになって、彼とこういう関係になっていた訳でもないから安心して。全く全然、あなたのせいじゃないから」

「……」

めっちゃ言ってるじゃねぇか、俺と親父（主に俺）のせいだって。

「母は父を愛していたわ。とても深くね。父も私達家族を、とても愛していた。だからあなたのお父さんに伝えてくれる？　もう二度と、私の前に姿を現さないで、って」

「……」

何も言えずに、泰成はただ黙って俯いた。

奏はそんな彼を一瞥してから、言った。

「会いたくなったら、こちらから会いに行きますから」

え？

ワンテンポ遅れて、泰成が顔を上げて奏を見る。

彼女は大人の微笑みを見せた。

「お兄さん。いつでも活き活きとしてて、私、結構好きよ？」

一体彼女は、どんな想いを抱えてこの８年間を生きてきたのか。

泰成に知る術はない。

けれども彼女の微笑みは綺麗で穏やかで、彼は見入ってしまった。

舞彩、どこに行ったんだろう……。

いくら捜してもいない彼女に、湊は焦りを感じ始めた。まさか外とか？

あり得ないと思いつつも、玄関を出て暗い駐車場を見る。居ない。

道路に足を伸ばした。そこにもいなかったら、後は庭だわ……。

まさかで、居た。暗くて曲がりくねった山道を、何故かとぼとぼ歩いている。はあ？　歩いて駅まで行く気？　仲居姿で？！

その時、上からスピードを出した車がやってきた。彼女は気付かない。いや、気付いている？

「舞彩、危ないっ！」

叫びながら走り、湊は舞彩を掴んだ。

派手な音を立てて車はハンドルを切り、そのまま走り去っていく。

何あの車っ、感じ悪いっ！

「……みなちゃん」

「大丈夫？　しっかりして！　ほら、立って！！」

足から力が抜けて呆然する舞彩を、湊は支える様に立たせた。

「あんな奴のせいで人生台無しにして、どうするの？！」

「あんな奴言わないでっ！」

いきなり叫ばれる。湊は面喰った。

「拓也くんは舞彩の大事な人なのっ！　悪口言わないでっ！」

「……舞彩……」

「……ふぇ～ん……！」

今度はいきなり抱きつかれる。

湊は面喰って、両手が宙に浮いた。しばらく固まり、やがて恐る恐る、彼女を抱きしめる。

そんなにショックだったの。そりゃそうだよね。

罪悪感につまされる。あたし、キスしちゃったし。しかもヤツの浮気相手、あたしの姉だし。こりゃ共犯者だわ。

「私、心のどっかで、舞彩は拓也くんの一番じゃないかもって思ってた……！　でも、それでも、私が拓也君の彼女なら、それでもいいかなって。いつかは一番になれるよう頑張るぞ、って……！」

「……うん。そうだね」

「だけど、それでも、拓也くんがどうしても他の人がいいって言うなら、それも仕方ないかもって思ってた……っ。……でもね、でもね……っ」

舞彩は湊の肩にしがみつき、震えながら、顔も上げずに言った。

「みなちゃんだけは、ダメ……っ」

「……え……？」

湊の心臓が、跳ね上がる。

「みなちゃんだけは、ダメだよ？　拓也くんの、一番になっちゃ、ダメだよ？」

「……舞彩……」

「だって応援してくれるって言ったじゃない。二人は友達だって言ったじゃない。みなちゃんは舞彩の、一番仲のいい友達じゃないっ」

泣き叫ぶ舞彩の言葉が、刃（やいば）の様に、湊の胸に突き刺さる。

「私、彼氏と友達の両方を、いっぺんに無くしたくないっ」

ギュッと自分にしがみつきながら、紡ぎだされた彼女の本音。

いや、本音なのか。本当に未だに、自分の事を友人だと思ってくれてるのか。でもそれはもう関係無い。

彼女に激しい想いを突き付けられ、湊は自分が、身動きが取れなくなるのを感じた。

「……うん。わかった。……わかったから……」

そのまま、彼女を抱きしめ立ちつくす。

泣き続ける、舞彩。

その時後ろから、湊の肩に手が乗った。

「俺が、代わる」

振り向くと、拓也だった。

「……たっ……くや……くん」

舞彩がビクッとなって顔を上げる。

拓也は、無機質な瞳で湊を見て、一言言った。

「消えて」

なっ……ん……。

雷で打たれた様な、衝撃。

湊は目を見開き、固まる。舞彩も息を飲んでいる。

拓也は、舞彩を見つめている。

……あたし……そうか、邪魔者なんだ……。

やっとの思いで拓也から視線を反らすと、黙って、その場から立ち去った。

「……」

今は、湊（かのじょ）に居て貰っては困るから。

拓也は舞彩を見つめ続けた。

堪えていた涙が、ついに出てきた。歩き続ける彼女の頬を、涙が伝う。

迷いが晴れた矢先だったのに。決心したばっかりだったのに。拓也の胸に飛び込んでみようって、決めたばかりだったのに。

なのに彼は、あたしの姉の浮気相手だった。

それを隠して、舞彩と付き合ってまでいた。

そしてあたしと、キスをした。

ひどいよひどい、ひどすぎる。こんなのってない、あんまりだわ。

あの男、酷過ぎる。

……でも、あたしだって、似たようなものじゃない。

だってあたしのお客は、基本的に既婚者。

……あたし、奥さんにこんな思いをさせてたんだ……。

レンタルワイフみたいな仕事をして。

それを承知の虎太郎に甘えて、付き合っていた。

そしてヨシと、キスをした。

……ああ、あたしって最悪だ……。

しかもそれを、商売にしている。お金を貰っていないだけ、ヨシの方がまともだわ。

あたし、まともじゃない。

「湊ちゃんっ」

そこへバッタリ、虎太郎と出くわした。彼は少し息を切らしている。

湊は驚き、慌てて涙を拭った。だって泣いている所を見られるなんて、プライドが許さない。

「……っ」

恥ずかしくって顔を背ける彼女を、虎太郎は切なく見つめた。

湊は顔が赤くなる。居心地が悪い。やめて欲しい、そういう風に見つめるのは……。

やがて彼は手を伸ばし、湊の頭をそっと撫でた。

「……泣くなよ」

その言葉と手に、グッとくる。不意打ちだ。

すると彼は優しく、包み込むように、彼女を自分の腕の中に閉じ込めた。

彼の匂いがする。男らしい、固い胸が頬にあたる。

優しさと切なさが、真っ直ぐに伝わってくる。

自分の足元が、グラっと揺れる気がする。

耳元で彼が、低く囁いた。

「もう、あの部屋には戻るな。……俺と、暮らそう？　今すぐ。……な？」

……そっか。

「……うん」

頷いてしまった。

虎太郎はキュッと目を細める。それでも腕は緩めない。

そのまましばらく、二人は動かなかった。

一番強く思っている事を、お互い口に出来ないまま。

やがて湊が顔を上げ、虎太郎は彼女を見つめた。

「……ごめんね。あの、まずは仕事に戻らなきゃ……」

「そっか」

「……そのあと」

ふっ、と彼女が微笑んだ。

「荷物まとめて、……行くから。虎太郎んちに」

これがどんな種類の微笑みなのか。
僕は知らなくていいんだ。
だってこれが、彼女の選択なんだから。
僕は彼女を、手に入れた。

「うん。おいで。待ってる」

虎太郎は柔らかく笑った。

「ごめんね、一緒には帰れないや」

真っ暗な庭の中で、拓也が言った。奏（かなで）も苦笑する。

「当然よ。こんな状態ではあたしも無理。ここで別れましょ」
「……そうだね」

奏を見つめ、拓也が微笑む。
その人懐っこい瞳に、彼女も微笑んだ。

「あの人、政治家ですって？　何の知り合い？」
「話すと長いんですよ」
「あら、秘密主義」

目を見合わせ、二人で声を上げて笑う。
最後に散々な事になったのに、どこかスッキリしていた。

「私のせいで、あんな目に合わせてごめんね？　あと少しでバレずに終わったのにね」
「ふふ。悪い事は出来ないね」
「お詫びに、湊のトラウマを教えてあげる」
「トラウマ？」

拓也がキョトンとする。
奏はふっと、真面目な顔になった。

「あの子が高校の時。父親と電車に乗っていたの。朝の通勤通学の電車よ。そこでね、父親が倒れたのよ」
「倒れた？」
「そう。死んだの。突然死」
「……え？」

拓也は眼を見開いた。
奏は視線を、暗闇に漂わせた。

「吊革につかまっていたの。そしてね、湊（みなと）の目の前で、ゆっくりと、ふらぁと前後に揺れたんですって。後ろに倒れた父親を湊が咄嗟に抱きかかえたらしいのだけれど、そのまま倒れ込み、二度と目を開

けなかったって話。電車の中は、蜂の巣をつついたような大騒ぎになったらしいわよ」

「……」

「私達姉妹は、強烈なるファザコンだった。特に妹はね。目の前で最愛の人に死なれる、というのは、あの年の子には相当なトラウマだと思う」

「……」

「あの子はね、人を愛するのが怖いのよ。丁度今のあなたの様に」

彼女は拓也に向き直り、じっとその瞳を見つめる。

「加えて私達姉妹にはもう一つトラウマがあってね。母親が……これまた旦那命の女だったもので、しばらくの間、精神を病んじゃって大変だったの」

初めて聞かされる事実の連続に、拓也は瞳を見開いたまま、じっと聞いている。

「その時、私達は思ったのよ。一人の男に依存し過ぎるのは、色んな意味で怖い、って」

拓也を見つめる奏は、彼を通して、自分の過去を見つめていた。

あの頃の、どこか不安定な湊。自分の出生の真実を知った、奏。

「そして二つに分かれた。私は今でこそ主婦だけど、多分男がいなくても生きていける。娘もいる事だし。これでも、自分一人の稼ぎでどうにかする自信はあるのよ、いざとなればね。一方の妹は……」

そこで彼女は僅かに目を伏せ、切なげに微笑んだ。

「経済的には私より自立しているけど、あの子は男がいないと生きていけないでしょうね。本人も気付いていない所が厄介だけど。あの子は自分の心の安全地帯を、いつも捜している」

そして顔を上げると、拓也を強く見据えた。

「自分を最愛の人として迎えてくれる、そんな心の安全地帯を捜しているの。父親を目の前で無くして以来。そして仮に見つけても、その安全地帯に踏みいる勇気が無い。あの時の様に、いつかその安全地帯を失う事が怖くて」

拓也は奏を見つめたまま、僅かに眉根を寄せる。

彼女は拓也を見つめ続ける。

「母親の様に、気が狂う寸前にまで陥るのが怖くて」

彼女の危うさは、そこにあったのか。

拓也は今、初めて気付いた。

初めは、自立している女だな、と思った。顔は美人だけど性格がきつそうで、正直あまりタイプではなかった。

けれど目が、離せない。

美人で評判もいい。なのにどこかすましちゃってるの、俺には分かっちゃうんだけど。

いつもどこかつっぱってる。なのに時折見せる笑顔が、ハンパないよね。

誰とでもフラットに話せるクセして、絶対自分の事は話さないよな。似たもの過ぎて、笑っちゃう。

怖いんだろ、人が。

なら最後まで、ボロだすなよ。あんたのあの笑顔と泣きそうな顔、反則技なんだよ。

油断している間に、彼女は俺の心の中に、こっそりと忍び入ってきた。

そしてゆっくりと、そうとは気付かぬうちに、俺の中に根を這わしていった。それはいつの間にか、緑豊かな大樹（たいじゅ）になって、俺は今、それに絡め取られている。

どうしようもない危機感と共に。息苦しさと共に。

誘惑にも似た、陶酔感と共に。

「こんな事、私が聞けた立場じゃないけど……どうするの？　これから」

本気で人を愛する事が怖い彼女と、愛されない事が怖い俺。こんな俺達は、一緒になってもお互いを傷つけあって、不幸になるだけだと思っていた。堕ちてく一方だ、そう思っていたのに。

愛してくれなくても、いいよ。
俺が、愛してやるから。あんたが溶けて、無くなる程。

だから安心して。
俺の隣で、笑っていて。あの笑顔で、俺を包んで。

「……舞彩（かのじょ）と、別れる。あなたみたいに、どんな償いでもする。……それで」

暗闇を見つめていた拓也は、奏に視線を戻した。
そして少し首を傾げ、可愛く微笑んだ。

「ねえ、奏（かなで）さん。……あなたの妹、俺に頂戴」

許してくれなくても、いい。

だって湊（かのじょ）が好きだから。

どうしようもなく、彼女が好きだから。

6　それでも、あなたが（後書き）

……長いですね。これでこの章は終わりです。
少しお休みを頂いて、次章でほぼ、カタを付けます。後少しっ。
ちょっぴり暴走した拓也くんが見れるかも（笑）

取り乱す舞彩。結局、易（やす）きに流れる湊。二人の関係に目を反らす虎太郎。湊にロックオンした拓也。どこで絡むかお兄ちゃん。

毎回長いにも関わらず、お付き合い下さる読者様に、大変感謝しております。
このお話が、皆さまのお暇つぶしになりますように……。

戸理　葵

1

あの日以来、湊は部屋に帰らない。
いつぞやの社内旅行後とは訳が違う。そんな事くらい、バカでも分かる。
正念場（おたのしみ）はこれからだ。
暗い部屋の中、拓也は溜息と共に自分に言い聞かせた。

「あー……これからどうすっかなぁ……」

いつから自分はこんなに強い女になってしまったのだろう？
妹が生まれた時？
父親が死んだ時？
母が取り乱した時？
自分の出生の真実を知った時？
結婚した時？
娘を産んだ時？

「まあ、人生の転機がいっぱい」

ダイニングチェアに座り、テーブルに肘をつきながら奏（かなで）は独り言を言った。指折り数えていた手を下げる。午後１１時。もうすぐ夫

が帰ってくる時間。

今から迎える人生の更なる転機は、後で振り返った時、どれほど大きいものなのだろう？

きっと彼は、奏が彼の浮気を知っている事を知っている。泰成が伝えた筈だ。お店は、トラブルには一切関与しない。プライベートに関する事は一切断りします、がモットーだもの。

ところが。

「ただいま」

洋一は、普段通りに帰ってきた。

「おかえりなさい……」

「あー、疲れた。はい、これおみやげ」

ういろうだ。

「……」

「着替えてくるね」

全く、うろたえる気配が無い。奏は驚いた。え？　泰成（あのひと）、何も言ってないの？

「……ね、何か聞いた？」

「え？　何？」

洋一は着替えながら、少し驚いた様に振り向いた。その顔は演技

では無さそうだ。
奏は呆気に取られ、それからああ、と思った。
わかったわ。あの人、私にチャンスをくれたんだわ。

不意打ちの、チャンスを。
それがあの人からの、僅かな償い。
洋一(かれ)が変に根回しをしたり、逃げ出したりしない様に。

……ダメねぇ、私情を挟むなんて。経営者として失格じゃない。

「どうしたんだ、奏？」

少し俯いて苦笑する奏を見て、洋一が怪訝そうに言う。
奏は「なんでもない」と呟くと顔を上げ、穏やかな笑顔で言った。

「ねぇ洋一。私達、離婚しましょう」
「……え？」

キツネに摘まれた様に、呆然とする洋一。
奏はますますおかしくなってしまった。この人は、あれだけの事をしておきながら、それでもまだ私の台詞が「寝耳に水」だと言うのかしら。なんてバカな人。

彼女は悠然と言い放った。

「私の人生に、もうあなたなんていらない」

それから一か月後。

「それでハンコは押してもらえたの？」

湊が聞くと、奏（かなで）は澄まして小首を傾げた。

「さあ。連絡が無いから知らないけれど、まだなんじゃない？　どっちでも私はいいもの。離婚しても、しなくても」

「浮気を止めてくれれば、って事？」

「やめないわよ。だってあの人根っからの狩人で恋愛病だもの。あの時だって浮気相手は一人じゃ無かったし。千清（ちせ）ちゃん、ですっけ？」

お茶を入れていた部屋の主、泰成がギクッと固まる。

奏（かなで）はその背中に笑いかけた。

「泰成さんの従妹なら、私の遠縁にもあたるのかしら？」

「……女って本当にヤダ」

泰成は小声で呟いた。

千清にも「奥さんにばれちゃったの？　じゃあちーもおしまーい。もう連絡して来ないでね」とあっさり言われた洋一は、しばらく動けなかったらしい。あんなに自分にぞっこんだった筈なのに。

「でもお姉ちゃん、洋一さんの事好きだったじゃない」
「今でも好きよ、とても」

奏（かなで）はソファの上で、湊に向き直った。

「恋愛ってね、付き合って3年が賞味期限って言うじゃない？　私、彼の恋愛対象外にはなりたくないのよ。だから結婚はやっぱり間違いだったわ。でもそれって、ずーっと手に入りにくい存在であればいいんでしょ？」
「……えぇ？」
「いい？　ここがポイントよ。手に入らない存在、ではなくて、手に入りにくい存在。掴めそうで掴めない、この距離感が男を惹きつけるのよ。だから別れるの。今でも大好き、愛してるわ、でも私の人生にあなたはいらないの、って言って」
「……よく分かんない」
「もう、やめようよ、な？　怖すぎるよ、奏ちゃん。網張り過ぎだろそれ」

言いながら泰成は、運んできた紅茶をローテーブルの上に乗せる。
奏は泰成を睨んだ。

「張って無いわよー、自由にしてあげるんだから。私も仕事が順調だし、養育費も貰えるし！　身軽になった分、自由恋愛市場に再度参入してもっと女を磨くわよー！」

「……（もうヤダ）」

うんざりする泰成。
その横で、湊が呆れて言った。

「別れる前から自由恋愛、満喫していたくせにー……」
「してないわよ、恋愛は。言ったでしょ、カラダだけの「あーっ、オイっ！！」」

泰成は抜群の瞬発力で、勢いよく奏の口を塞ぐ。
そしてそのまま凄味たっぷりに、上から彼女を睨み下ろした。ドスの利いた小声。

「も、いい加減にしろよ？」
「……ふーん。身内に対しては潔癖症ねぇ。……湊にあんな仕事させてたくせに」
「（ギクっ）」
「それとも本当に身内ってコトだけぇ？　湊を辞めさせた理由。まさか妹に手を出したりはしてないわよね？」

双方、しばらくの睨みあい。一体こいつは、何をどこまでお見通しなんだ……っ。
泰成はクルッと向きを変え、今度は湊に迫ってきた。怯えの入った小声。

「おい、藤堂。俺らのアレはまさか、姉貴には言ってねーよな？」
「（……本当にこの人達、兄妹（きょうだい）だ……）言う訳無いじゃんっ。あたし、お姉ちゃん程露骨じゃないよっ」
「あー、これ見て見て」

奏（かなで）が呑気な声をあげた。
その声に二人はついつられて振り返る。奏はテレビを指さしていた。

「「「……」」」

そこに写っているのは、最近発覚した芸能人の熱愛報道。どうやら彼は、お相手の一般人女性と一緒に住んでいるらしい。

「最近のワイドショー、これぱっかりねぇ」
「……」
「まさか妹がこんなに時の人になるとは」
「……」
「いいの？　これで」
「……」

まあ一応、まだ顔にモザイク入ってるし？　というかあれって入れられてみるとまるで、あたしの顔が汚物みたいな気分……。

「いくらあなたでも、自分を愛してくれるなら誰でもいい、って訳じゃないんでしょう？　全く別世界の人じゃない。昔からの顔なじみなんかでもないし、分かりあえるの、それで」
「……」
「あなたは私と違って、一人じゃ生きていけないんだから。そうそう器用に代えを見つけれるタイプでもないし。パートナー選びには慎重になりなさいよ？」

お姉ちゃんって相変わらず、マシンガンの様な口だなぁ……。
湊はぼんやり感心しつつも、曖昧な苦笑いを浮かべた。
偉そうな子供。そんな言葉が昔からピッタリの姉に対してはむしろ諦めの方が強く、あの時だって結局、姉妹喧嘩にも発展しなかった。しょうがないか、お姉ちゃんだもん。ひょっとしたらヨシの方も多少は被害者かも……等と思ったりさえ、した。

それでも、姉と関係があった、という事実は強烈で、以来彼から逃げているのは確か。

「……でも、浮気する人は嫌だなー……」

湊がぼーっと呟くと、

「それは誰でも嫌よ。でも彼なら、大丈夫」
「はっ？」
「するなら浮気じゃなくて、本気よ、拓也は」
「……」

姉に断言され、湊は絶句した。そして次には、眉間に皺を寄せる。
その隣で泰成が、はあー、と深い溜息をついた。

「またそうやって相手を悩ますー……」
「えぇ？　私なんか変な事言った？」
「藤堂の一番の不幸は、こんな姉を持った事だな……」

その時、自分をネタにした騒ぎがテレビから聞こえた。うっ追い打ちだわ……。湊はガクッと沈み込む。
それを泰成が、憐みの籠もった目で見つめていた。

日曜の昼下がり、拓也は外に立っていた。少し疲れた笑顔を見せる。

「やっと会ってくれた」
「……だって拓也くん、毎日なんだもの。知らなかった、こんなにしつこい人だなんて」

舞彩は不自然に目を反らしながら、少し唇を突き出していった。
拓也が苦笑いをする。

「うん……俺も驚き。ちょっと生まれ変わり中だから。頑張った」
「うちの両親、拓也くんの事ストーカーだと思ってるよ？　これ以

上続くようだと警察に通報するって言うから、それで私出てきたんだよ」

「……そか」

拓也は肩をすくめた。その様子を舞彩は、横目でチラ、と観察する。今日もやっぱり、頭に来るほどカッコいい。

あの日以来、彼女は会社を休み続けた。同僚は病欠の彼女を心配したが、デリケートな何かを感じ取りあまり深入りはしない。

けれども拓也は、毎日通い続けた。

正直、舞彩は驚いた。

けれどもいつしかそれが、彼女の休む目的になっていった。こうすれば、口をきく事無く、彼を縛りつづける事が出来る。

それは彼女の両親が痺れを切らすまで、一カ月も続いた。

「で、何？」

「……俺の話を、聞いて貰いたい」

あの日の舞彩は、拓也に話すチャンスも与えずに走っていったから。

だって当り前よ。私そこまでお人よしじゃないわよ。

「ねぇ、これって自己満足だと思わないの？　私に迷惑だって思わない？」

拓也の殊勝な態度に勢いづいた舞彩は、キツイ口調と共に彼を睨

む。

すると彼の、丸くて茶色い瞳とモロに視線がぶつかってしまった。

彼女の大好きな瞳。

「思うけど、俺、一度も舞彩ちゃんに本気ぶつけれてなかったから。君は全力で俺に来てくれたのに。だから伝えなきゃダメだと思った」

「……」

思いの外に強くて真っ直ぐな瞳に、舞彩は胸が跳ね上がる。

それを知ってか知らずか、拓也は僅かに微笑んだ。

「いいよ、警察に突き出しても。後はもう君の思う様にして」

拓也くんって、本当にズルイ。

こんな時まで私を追い詰める。

ずっと逃げてて欲しかったのに。そしたら私、いつまでも拓也君を責め続けて、繋がっていられたのに。

あの優しかった笑顔と手を、彼の唇を手放さなくてはならないかと思うと、見えない力で胸をねじ上げられるようだ。心が泣いている。

「……私、天使になんかなってあげない」

「……」

「もう拓也くんの顔なんか見たくないの。だから仕事も辞める予定」

目を真っ赤にして、唇を震わせながら顔を反らして言う。
それを拓也が、切なげに見つめた。

しばらく沈黙が続く。

やがて彼の低い声が聞こえた。

「それ、俺が会社辞めるって言ったら、考え直す？」

え？

舞彩は驚いた様に彼を見つめた。
そして徐々に、頭に血が上っていった。

そんな事じゃ、ないのに。

バッカじゃないの？

私って何？

「それよりも、私の言う事を聞いてくれたら考え直す。出来る？」

射る様に睨みながら言うと、拓也はキュッと眉根を寄せた。

1（後書き）

はい。この章で一気に決着をつけます（予定）。テーマは「こんがらがった糸はほどかずに、焼いてしまいましょう」。かなりの力技です。そして中々動こうとしなかった二人を動かすのは、結構大変です（笑）。大人って面倒臭い……。

ところで前話で、祐介と拓也が知り合いだったことが明るみに出ました。話すと長い、と拓也が言う彼らの関係は『リコレクションズ』での事です。

祐介が『碧（みどり）の結婚式以来か？』と言いますが、察するに碧は相当焦った様ですね。まあ結婚願望の強い男でしたので、綾香は絡め取られてしまったのでしょう。めでたしめでたし。

それではもう少し、お付き合い下さいませ。

いつも目を通していただき、ありがとうございます。

戸理　葵

2（R）

虎太郎が外から帰ると、広いリビングで、湊はテレビにかじりついていた。午後9時をまわっている。

「……ねぇ、湊ちゃん」
「しー。うわ、ひどい」
「……面白い？」
「しっ。……うわー……ケイジ、可哀想ー……」
「あのぉ。本物、ここにいるんですけど」
「もうちょっと待って」
「……」

全く顔を上げてくれない。もしもーし。「あ、おかえりー」と明るい笑顔を見せてくれた時、画面は来週の予告を流し終えた後だった。何か違くね？

それでも彼女のご飯は今日も美味しい。二人で遅めの夕飯を取る。

「そんなに楽しかった？」
「うん、来週も楽しみー。ね、あれどうなるの？」
「言えませんよ。企業秘密だからなぁ」
「ちぇ、ケチ」
「来週も宜しくぅ」
「いやぁ、ケイジって可哀想だけどなんか笑えるね。いい味出してるよ」

その演技にこの間まで俺が悩んでいた事、君は分かってる？

彼女の言葉や眼差しに随分助けられてあのドラマを撮ったんだけど、それに気付いているのだろうか？

食卓を挟んで、こうして何気ない話をする。とても楽しい。明るい彼女の笑顔は、以前と変わらない様に見える。とても幸せ。

そして、一緒に住んで気付いた事。彼女は僕以上に、演技が上手すぎる。

「明日で会社、最後だね」
「うん。明日は送別会で遅くなるから」
「そう。俺、迎えに行こうか？」

湊は驚きのあまり、箸をポロっと落とした。虎太郎が凝視する。これは天然？　それとも演技？　だとしたらベタだ……。

「えぇっ？　そんな嘘でしょ？！　大パニックになっちゃうよっ、みんなビックリしちゃうよっ」
「どうせみんな知ってるし最後だし、関係無くない？　俺暇だしさ、夜は危ないし、迎えに行くよ。電話して。近くにいるから」

何でも無い事の様に言って、虎太郎は箸を運ぶ。湊はその顔をまじまじと観察してしまった。

一緒に暮らしてみると、彼は想像以上に普通の人間だった。普通に食べ、笑い、驚き、時々拗ねる。寝顔は残念ながら、イケメンのままだけど。

……そうよね、この人だって普通の暮らしをしたいわよね……。
職業と顔がそれを阻んでいるだけで、本当は普通に道を歩いて、人と触れあいたい筈……。それをあたしが止めるなんて悪いわ。

湊は想いを巡らせた。それを今度は虎太郎がそっと観察する。そう、彼女はどこまでも俺に気を使うから、断れない事もお見通しだよ。

「……遅いよ……？」
「だから迎えに行くんだろう？」

恐る恐る言う湊に、虎太郎は綺麗な笑顔を見せた。あ、すごい。ファンの子が見たら喜ぶだろうなぁ……。

……でもヨシ（かれ）の笑顔も、あたしには相当可愛いのよね……。
湊は胸が痛んだ。
あれ以来、拓也は湊と目を合わそうとしない。荷物はどうするんだ、とか、どこに住んでいるんだ、とか何も聞かない。彼女の退職が決まっても、声すらかけて来ない。同じ職場とは思えないほど距離が遠い。その職場すら、もうすぐ失うのに。

あの瞳と、手と、唇が、恋しい。

「僕を、見て」

夜、ベッドの上で、湊を抱きながら虎太郎は囁いた。
彼女はハッとする。あたし今、誰を想像していた？
虎太郎はそれを見透かしている様に、湊を見つめて彼女の前髪をかき上げた。
「君を抱いているのは、僕。ほら、僕を見て」
言いながら同時にナカに入ってくる。
「……あっ……」
「目を閉じないで。ほら開けて」
囁くと虎太郎は、じらす様にゆっくりと動き出した。

「お世話になりました」
「よっ、有名人。お幸せになー」
「寿じゃないですってば……」
「似た様なもんだろう」

ダメだみんな、あたしが虎太郎ともうすぐ結婚するから会社を辞めると決め込んでいる。違うのよ、後藤課長の引き抜きに応じて、新しい職場で働くのよっ。みんな知ってるでしょ、何で無視すんのよっ。
居酒屋で一人一人に酌をしながら、湊は得意の営業スマイルを顔

に貼りつけた。今や会社の有名人物の彼女に、彼らは思い思いの疑問をここぞとばかりにぶつけてくる。そんな水商売みたいな男と一緒になって、将来どうするつもりだと聞く先輩までいる。

でもここには、舞彩がいない。湊の心は重くなった。彼女は電話にすら出てくれない。もう、あたし達がした事なんてバレている。ヨシが言ったのだろうか、今となっては問題はそこじゃないけど。

後藤課長の席に来た。

「課長、じゃ、お先に」

「ゆっくりして下さい。一か月後から、またバリバリ働いてもらわないといけないからね」

彼だけは虎太郎の事を何も言わず、いつもの穏やかな笑顔で自分を見てくれた。ホッとする。これからは仕事でこの人について行くんだわ。

その時、拓也と目が合った。一カ月以上振りに。

ドキッとした。

彼の冷たい眼。その瞳が、何か意味ありげに光った気がしたので。すぐに向こうを向かれる。

昨夜、拓也を想像しながら虎太郎に抱かれた事を見透かされたのだろうか？　動悸が止まらなくなった。

そんなバカな。

湊はすぐに隣に酌を注ぎ始めた。だけどやたらと拓也の声が耳に付く。順番が近づき、段々彼の席が近くなる。
拓也は楽しそうに周囲の人達とバカ笑いをしている。自分の鼓動ばかりが早くなっていく気がする。

落ち着け落ち着け。
どうしよう、もうすぐ。

「俺、藤堂ちゃんが好きだったんだよなー」
「上地さんは誰でも好きでしょう?」
「んな事無いよ。可愛い女の子が好きなだけー。なのに山田ちゃんまで会社に出てこないし。あーあ、もうつまんねぇ。働き甲斐がなくなったなぁ、この職場はぁ」
「酔ってますねぇ」
「おいおい吉川、女に電話かー?」

会話の最中で上地が、湊とは逆隣りの拓也に突然絡んだ。拓也は胡坐をかいて携帯を操作している。

「ちょっと、なんすか上地さん」
「やらしーな、コソコソと電話かよー? このスケベ、ん? どんな子?」
「離して下さいって。もう、既婚者がヤラしく絡まないでよ」
「おう、ヤラしいぜ、俺は。いい女なのか? 藤堂ちゃんみたいに美人か?」

突然自分の名前を出され、湊はギクッとなる。
けれども拓也は涼しい顔でそれを受け流した。

「はい？　なんつった？」
「藤堂ちゃんみたいに美人かつってんの」
「え？　奥さんとまた喧嘩中？」
「違うよ、シカトされてんだよ一方的に、ってそうじゃなくて。どんな子なんだよっ一体！」
「うっわ、しつこいねー。ウザイウザイウザイ」
「だって俺のウリだもん。うりゃうりゃうりゃ」
「やめて下さいってば。もう、何でそんなに俺にこだわるの？　ほっといてよ」

この二人は普段から仲がいい。だからいつもの光景で、湊はただ眺めていた。これをチャンスにここは通り過ぎて、ヨシの事を抜かそうかな？

するとまるで湊の声が聞こえた様に、上地に腕をまわされていた拓也が再び湊を見た。
ドキッとする。

だって……目が……あたしを離さない。

「だってお前、臆病っぽいもん。どうでもいい奴には馴れ馴れしいくせに、本命にはビビって本心を見せなさそうでさ。付き合う女は苦労するよなー、こんな屈折したヤツ。ね、そう思わねぇ、藤堂ちゃん」

上地の言葉が湊の頭をただ素通りする。
先程とは違い、拓也の瞳が、誘う様に笑った。そして小さく口を

開く。

お・い・で

驚いて彼を見ると、彼は僅かに唇の片端を上げ、そのままスルッと上地の腕から抜け出た。

湊は慌てて我に返り、上地に微笑む。

「どうなんでしょうねぇ」

「ねぇ、あの男前の彼氏ってどうよ？　どんな男？」

今度は湊に絡む上地を尻目に拓也は立ち上がると、ビールを片手に席を移動した。別の輪に入り、何の違和感も無く楽しそうに笑っている。

今の、何？

湊は彼に視線を移せないまま、胸だけをドキドキさせながら会話が上の空だった。

一次会がお開きになり、皆が道路に溢れだした。

少し上機嫌の後藤課長が、湊に近づく。

「お疲れ様。二次会に行くのかい？」

「……私は……」

「あーっ、コタロウだっ」

誰かが大声を上げた。見ると虎太郎がキャップを深く被り、肩をすくめながらこちらにやってくる。

顔が少し赤くなっていた。

「なんかスゲー恥ずかしい」

「ありがとう。あの……」

その時、車道の方から声が聞こえる。

「じゃ、吉川頼んだ。これで足りるだろ。残りはとっとけ」

「ありがとうございます。ほら上地さん、タクシー乗りますよ？しっかりして下さい」

虎太郎と湊は、自然とそちらを見た。拓也とその他数人が、酔いつぶれた上地を抱える様にして立っている。そうか上地さん、家の方向が彼と同じだものね。

虎太郎が少し不愉快そうに息をつき、顔を背けた。

その時、湊は拓也と再度目が合った。ほんの僅かな瞬間、視線が絡み合う。

相手の熱が伝わる。自分の欲まで伝わってしまう。まるで唇の上を掠められたキスの様に。

息が、止まる。

拓也はタクシーに乗り込んで、去っていった。

「……あたし、二次会に行っても、いい？　最後だし……」

言葉が勝手に口をついて出る。

虎太郎を見上げると、彼はタクシーに乗り込む課長を眺めながら微笑んでいた。

「……いいんじゃない？　なんか盛り上がってるみたいだもんな」

「ごめんね、遅くなると思う。タクシーで帰るから、先、寝ててくれる？　ね？」

「うん、わかった」

キャーっ。

虎太郎が身をかがめて湊の頬にキスをすると、固まっている女性たちから小さな歓声が湧いた。

彼は甘く微笑む。

「気をつけてな……ってやっぱコレ、相当恥ずかしいわ」

夜、湊はかつての自分の部屋で荷物を片づけていた。床に座り込み、段ボールに詰めていく。

「……何やってるの？」

後ろから声をかけられた。
戸口に彼が立っている。
彼女は振り返らずに言った。

「……荷造り」
「何で今？」

拓也の冷たい声。湊の血が逆流する。今日のあの瞳を思い出し、胸の鼓動が早くなった。まわったアルコールが、理屈と怯えで固まった頭を崩している。体が確実に、何かを欲して熱くなっている。

湊は下唇を噛んで俯いたまま、手が止まった。
拓也は戸口に持たれたまま、両手をポケットに突っ込み、ジーッとその後ろ姿を見下ろす。
二人はしばらく無言になった。

やがて拓也の冷たい声が、再び響いた。

「やっぱ来たんだ。いいの？　俺、過去3回のキスで我慢使い果たしたよ？」
「……」

彼女は動かない。動けない。
彼はゆっくり身を起こすと、湊の前にまわった。彼女の前にあった段ボール箱を足で押しのけ、しゃがんで、彼女の顔を覗き込む。
湊は慌てて眼を反らした。

「その眼。逃げんなよ」

グイっと顎を掴まれ、上を向かされる。
拓也の丸くて茶色い瞳が、冷えた光と熱い色を孕(はら)んでいた。

「舞彩ちゃんだって湊に本気で来たろ。俺もだよ。なのにあんたはまだ逃げる気？　それってかなりズルくて、卑怯だよね」

強い瞳に捕らわれた。抜け出せない。
ううん、ずっとこれを望んでいた。ずっとこれが欲しかった。こうやって、見つめて欲しかった。

「じゃあ、ヨシの本気を見せてよ。……あたしを止めてみせたら？」

湊は精一杯反発してみせた。今日一日の、せめてもの反撃。こんな事を言ったって、自分の熱がバレバレなのは分かっている。

喉が、渇く。

「……いいよ。ここで試す？」

ゆっくりと、彼の薄い唇が近づいてきた。鼓動で胸が破けそうに感じる。
ペロっと唇を舐められ、それだけで湊の体が震えた。
「……っ」
「それで湊の気が済むなら」
スルッと舌が入ってきた。全身が痺れる。咄嗟に声を我慢する。だって早すぎる。
ソレに自分の舌の根元を舐められなぞられ、彼女は呆気なく陥落した。
「……ん……っ」
アルコールだけじゃない。ずっと彼が欲しかった。体が彼を求めていた。
だから今、たった少しの舌の動きで、体全体が感じてしまっている。
痺れる頭は何の役にも立たず、ただひたすら、彼の舌の動きを必死で追っていた。
長い長いキスの合間に、拓也が唇を掠めながら囁く。
「とことん付き合ってやるよ」
「……ひねくれ者っ」

僅かに残った理性の欠片で、湊は返す。いつの間にか彼に押される様に、彼女は壁に押し付けられていた。

その彼女の足を押さえつける様に、拓也の足が上から圧し掛かる。キスを続けながら、彼の手が湊の胸に伸びた。揉まれて、咄嗟に彼を押し返そうとする。

するとその手がするりとカットソーの襟ぐりから入り込み、彼女の突先を捜し当てた。

「あっ……」

抵抗している腕とは裏腹に、期待している様な甘い声が出る自分が嫌だ。

そう思う間もなくそこを強く摘まれ、甘い痛みが全身を貫いた。明らかな嬌声が出る。

「そのひねくれ者が、好きなんだろ？」

言いながら拓也は唇を彼女の首筋に這わせ、片手は彼女の手首を掴み、片手は胸への刺激を続ける。

「あっ、あっ……ん、やっ」

彼が与える快感に溺れそうになる。頭が白く霞む。湊はやっとの思いでその手を押しのけた。

勢いがあり過ぎる、展開が早すぎる。彼に迷いが無さ過ぎる。

ありったけの力を振り絞って、彼を睨みつけた。熱で瞳が潤んでいるのが、自分でもわかる。

膝が震えて、何より下がひどく濡れてしまっている事が、どうしようもなく恥ずかしい。
拓也は冷たく言った。

「何、そのエロい目」
「……」
「そんなに続きがしたいなら、俺の部屋に来る？　それともまだココでやる？」
「……っ」

違う、あたしはあんたを押しのけたのよ、バカにしないでよ。そんな言葉が出てこない。それ程体が、言う事をきかない。

でも怖い。これを経験したら、もう後には戻れない。誰にも何の言い訳もきかなくなる。
それどころか、自分が正常で居られなくなる気がする。彼を失うのが怖すぎて。

今なら、まだ。手に届く前なら、まだ。

「抵抗すんなよ、今更」

拓也が湊の両手を壁に押し付けた。間近に迫る茶色い瞳には、自分を求める熱い欲望と苛立ち、そして少しの切なさが見てとれる。
それを感じた湊は、今度こそ自分が彼の中に堕ちていくのを知った。

もう、ダメ。
泣きたく、なってくる。

「あたしの事傷つけるって、まさかああいう事だったとは。ホントお見事よね」

半泣きを隠す様に必死で言ったのに、拓也は彼女の言葉を聞くでもなく、再び首筋にキスを落とし始めた。

「まだまだだよ。まだ足んない。もっとボロボロになって逃げてご覧よ。ズルくて卑怯なまんまで、どこまでもさ。思いっきりもがいて、何回でも試してごらんよ。必ず掴まえるから」

彼の吐息と、舌の動きと、そして毒の様な言葉が、甘い液体の様に全身に浸みわたる。
彼の低い声は心地よく、湊から何かを取り除く。

「そしたら、安心するんだろ？　俺を信用できるんでしょ？　じゃあ、そうしなよ。どんなに傷つけても、あんたの事は逃がさないから」

その声色は誘惑に満ちていて、湊は何も考えなくていいんだよ、と洗脳していく。

心が徐々に軽くなり、ふわふわと浮く様で、だけど体はどうしようもなく次の快感を求めている。

だから集中しなよ。コレに。

拓也の手にそう語りかけられたように、湊は彼との行為に没頭していった。

3（R）

彼の固い手が肌の上を這う。それだけで酸素が吸えなくなる。彼の濡れた吐息が耳に押し付けられる。それだけで甘い声が出る。彼の首筋からの香りが鼻腔を犯す。それだけで脳が麻痺する。彼の湿った唇が全身をなぞる。それだけでナカが乱れていく。彼の男らしい肌が自分に密着する。それだけで気が狂っていく。彼の熱い舌が、武骨で器用な指が、頂きを、嘴を、濡らし攻め続け腫れ上がらせる。それだけで人格が壊れていく。

自分の上に被さる拓也の苦しげで耐える様な表情が、湊の頭の中でまるで壊れたフィルムの様に、何度も再生され焼きつけられていく。

過去に好きになった人は何人かいた。けれどもそう言えば、自分から好きになった人とこういう行為に至った経験は、無い。

好きな人と犯す秘め事が、これほど淫らで自分を狂わす物だとは知らなかった。

明け方、二人で寝るには少し狭い、拓也のセミダブルベッドから抜け出した時。

「こんな時間にどこ行くの？」

急に声をかけられ湊は飛び上がり、抱えていた服で前を隠しながら言った。

「あ……えっと、やはりひとまず帰ろうかと思って」

は、恥ずかしいから見ないでよ。

すると布団にくるまった拓也が、腕だけ出してクイクイと手招きをする。目が真剣。

つい近づくと、ガバッと布団を広げ同時に腕を掴まれて、湊は中に引き込まれた。

「きゃっ」

「あなたの居場所はここでしょ？　余計な所に行かないの」

そう言って横たわったまま、抑え込むように抱きしめられる。顔が見えない。

湊はやっと思いで顔を上げ、そして思わず噴き出した。

拓也の、不満そうな表情。

「……何で笑うの？」

「だって何だか、子供がしがみついてるみたい」

「お互い様だろ」

「イタイイタイイタイっ」

拓也はわざと力を込めて湊を抱きしめると、茶色い瞳を近付けじっと見つめてきた。うわっ。

「帰る必要無いだろ？　それともやっぱ俺は信じられない？」

……わ、わざとやっているわね……？　カッコ可愛すぎるじゃないやめてっ。さっきまでのSキャラは何処に行ったの？　ああでもいくら似た者同士でもベッドの中までキャラが被らなくて良かったわ、SSとかMMとか重なったら最悪だもんね、じゃなくって！

でもその瞳にドキマギしながらも、「そんな事無いわよ、あなたが大好き！」とあっけらかんと宣言できない自分がいる。

「……違うよ。でも……お世話になった人に、このまま顔を合わさずって訳には……」

「とかいってあいつの所に戻ったら、やっぱ悪いとか申し訳ないとか思って、出て来れなくなるんじゃねぇの？」

「……」

図星かも。

「湊がさ、今まで本気で人を好きになれなかったのは……」

「……」

「多分、そういう人に出会っていなかったからなんだよ」

湊はしばし固まり、それからサーっと青ざめていった。

「……だけど今は僕に出会ったでしょ？　なんてまさか、そんなお約束を……」

「あれ？　おっかしーなぁ、これでオチると思ったのに」

ちょっと何それ！　滅茶苦茶寒いんだけど！　というかその態度やっぱあたしの事バカにしている?!
拓也はクスッと笑うと、仰向けになって天井を見上げた。

「俺さ、今まで……本気で好きな女には、甘えてばっかだった。相手がどれだけ自分を見てくれているか、愛してくれているか我儘を受け入れてくれるか、それを測って、いつもそればっかりだった」
「（今でも十分、そんな感じが漂っているけど?）」
「でも……あなたが側にいるなら、それでいい。それで充分」

ふっと横を向き、見つめられる。甘い瞳と、柔らかな笑顔。
湊は目を反らせなくなった。

「……」
「俺の側に、いてよ」
「甘えてんじゃんっ結局っ！」
「いてっ」

もー、シャワーを浴びて来てやる。
そう思って彼女が再度体を起こすと、後ろから彼の手が伸びてきた。
湊の腹部に、柔らかく回される。
キュッと抱きしめられた。

「好きだよ」

……何っ？
驚いて振り返る。今この男、爆弾落としたっ！　想定外だっ！
「嘘っ！　ヨシがそんな事言うのっ？」
「何だよ、人が誠意込めたのに！」
「信じらんないっからかってんの、キャラ替えなの？！」
「うるせぇな、茶化すなよ、キャラ替えって何だよ、つかヨシって呼ぶなっ」
先程までの甘い雰囲気はどこへやら、お互い裸にシーツ一枚でいつも以上に喧々囂々（ケンケンゴウゴウ）とした。拓也も湊も顔が赤い。だってあり得ないでしょ考えられないでしょ、そんなこっぱずかしい台詞を面と向かって言うなんて（後ろからだけど）、どんだけネジを飛ばしてるのよって、
……あれ？
「……は？」
「拓也」
「え？」
「俺の名前。ちゃんと呼んでよ。前から言いたかったんだけど、ヨシ、って言われ方苦手」
好きだよなんて恥ずかしすぎる台詞、あまりの照れ隠しに拓也は必死で話題を誤魔化す。
「……ええーっ、今頃ーっ？　何で苦手なの？　専門の友達、結構みんなそう呼んでんじゃん」
「まあ、そうなんだけど……ある人を彷彿とさせる、というか……コンプレックスを刺激されるっていうか……」

くっそ、余計な事を思い出しちまった。

「え？」

「まあいいじゃない。ほら呼んでよ、名前」

「……なっ……」

「ほらほら」

拓也は急に水を得た魚の様に、瞳に意地悪な光を浮かべニヤリとした。お、いいんじゃないの？

「……た、たく……」

「どうしたの？　シテる時は平気で連呼してたのに」

「あれはあんたが言わせたからでしょっ」

「だって可愛いかったから」

「……（死亡）」

「湊？」

湊は低く呻いた。……甘い……甘い甘い甘いっ甘すぎるっさっきからっ。お互い柄じゃないんだからやめて欲しいっ。

耳まで真っ赤な湊を見て、拓也は満足そうにクスッと笑った。

「後ちょっと、しょうがないか」

「？」

「あいつんち行って話着けたら、誰にも会わずにすぐに戻って来いよ？」

「……え、誰にも……？」

「今は色々マズイでしょーよ、立場的に。騒がれてるでしょ、湊」

「……ああ。そっか」

「なんだったら実家に帰ってたら？　男ん所ハシゴしてるって思わ

れるのも、あんま心象良くねぇもんな」
「……」
何だソレ。湊は頭を突然殴られたみたいに、衝撃を受けた。
でも否定出来ない。だけど好きな人に言われるとやっぱり凹む。
キツすぎる。
「……ごめん。言葉が悪かった」
湊の変化を感じ取った拓也が、ああ、と顔を反らして額を片手で覆いながら言った。ああもう何言ってんだよ、俺。しっかりしろよ。
それから彼女に向き直ると、男の色気を感じさせる茶色い瞳で湊を覗き込んだ。
「迎えに行くから、必ず。どこへでも、必ず」
湊は胸がキュン、とした。欲しかった瞳（もの）が、まっすぐに自分を見ている。逆らえる、訳が無い。
僅かに頷く。
「……ん……」
彼に見つめられると、脳が麻痺して、色んな面倒事や心配事を気にかける事が煩わしくなってくる。例え今だけでも……。
すると拓也がつぶらな丸い瞳でニコッと笑った。
「……ね、その前にもっかい……」
「今日はお終いっ」
前言撤回、理性は麻痺しておりませんっ、そう何度もヤれるかっ

人を嵌めるなっこの小悪魔めっ！
それを聞いた拓也は、嬉しそうに極上スマイルを見せた。

「じゃ、戻ったら毎日ね」

なっ……あたし墓穴掘った？
湊はゴクっと息を飲んだ。
こ、こーゆー笑顔を見た後には、大概良くない事或いは面倒事或いは厄介事が待っているのよ……。

俺の必殺技、結構色々駆使したんだけどなぁ。
日が上り明るくなった室内で、Tシャツ一枚のラフな姿で、拓也は壁際に座りこんだ。彼女はそそくさと出て行ってしまった。
手ごわいですねぇ、まだまだ修行が足りないって事ですか。考えてみれば俺、本気の恋愛って数える程もしてねぇもんな。もうすぐ27だけどさ。

「はー……やっぱ一回寝ただけじゃダメか」

長年凝り固まった彼女のトラウマと、お互いのお友達ポジション。そして自分が彼女にして来た数々の仕打ち。そりゃそうだよなぁ、当り前だよ。彼女の姉と付き合っていた理由とか、ちゃんと説明したかったんだけど今更って気もするし。普通許せないでしょ、何言われても。

「……あぁぁー……」

拓也は両手で顔を覆った。

……しかしあのセリフやっぱ恥ずかしいなーっ。まともな恋愛ってマジ照れるよ……。

どの面下げて帰れるんだ……。

湊は一人、頭を抱えた。世の中は平日、今日も動き出している。つかの間の一カ月休暇のスタートが、こんな情けない状況での朝マックだなんて……。

幸い着替えはあの部屋にまだ数着あった。昨日の服を着続けるなんて、いかにも朝帰りでみっともない。

私、あなたを裏切りました。だから一緒には住めません、さようなら。

……なんて言えるかっ。そこまで分厚くないよ、あたしのお顔の皮膚はっ。ああでも全く言葉の通りの事をしでかしてしまっている訳だし、今更常識人ぶってどうすんの、最悪の女だわ。優しく手を差し伸べてくれて優しく抱きしめてくれた、虎太郎(あんなにいいひと)を傷つけるなんて……。

湊は益々、頭を抱えた。

じゃあヨシ……拓に言えるの？　ごめんねやっぱり彼を傷つけられなかった、だからあなたの元には行けないわ……。

拓也の笑顔が、ちらつく。

……ダメだー……あたしのバカー……。

その時ふと外を見て、次の瞬間、湊は心臓が凍りついた。

あれ……あれ。舞彩？　舞彩だ！

自分が決定的に犯した彼女への裏切り行為を思い出し、血の気が引く。彼女は通りの向こう側を、湊に気付く事無く歩いていた。どうしたの、舞彩？　会社に行く事にしたの？　あたしが辞めたから？

「……舞彩……と、あの人は……？」

え？　湊は眉根を寄せた。一緒にいる男性、見た事がある……あの人、取引先だ。高松精機だ。

途端に頭の中が一気に仕事モードになり、湊は嫌な感覚に捕らわれた。

舞彩、何でその人と難しそうな顔をして歩いているの？

湊が知る限り、総務担当の舞彩が一取引先の経理担当者と街中を歩く理由が無い。しかもあの人、転勤で九州に行ってなかったっけ？

湊に思いを寄せている中年独身男性で、別れ間際に口紅を贈られた。そして彼女はお礼に、彼の頬に形だけのキスをした。そこを拓也に見られて呆れられ、例のバイトを紹介されて……て、そこはいい。

何か変だ。ほっとけない何かを、舞彩に感じる。

……まさか拓に振られて自暴自棄に？！

湊は彼女に対する後ろめたさを一瞬忘れて、店を飛び出した。

「舞彩！」

振り向いた舞彩が、湊を見て明らかに狼狽する。
「……み、みなちゃん……っ」
「藤堂さん?!」

取引先の担当者も彼女の隣で目を丸くした。

「舞彩、その人とどこ行くの？　仕事？」
「……み、みなちゃんには関係ないでしょっ」
「高階さん、九州から戻ってらしたんですか？」
「ええ、まあ、はい……」
「彼女に何の用なんですか？」
「やめてよ、みなちゃんっ」

あの温泉地以来の会話。再び舞彩に怒鳴られた。
けれども今度は怒りの矛先が、確実に自分に向いている。

「いっつもいっつも、横から私に割り込まないで！　親切そうに言うのに本音を見せてくれない人なんて信用できないっ。あっち行って！」
「舞彩……」
「私、結局みなちゃんから本当の事を聞かされていないもの、何にも、一個も」
「話す、話すから」
「ちょっと掴まないでよっあっちに行ってよ！」

道行く人達がギョッとした様にこちらを見る。あぁこんなシチュエーション、前にもあった。
でも今日は、ここで怯んではいけない！

湊は騒ぐ舞彩に構わず、取引先の顔を強く見据えた。

「彼女と何処に行くんですか？　教えて下さい」

「いえあの……プライベートでして……」

「ありえません。分かりますから」

「……」

眼鏡の奥の彼の目が、薄く光った様な気がした。湊は確信する。

これは良くない事だ。

久し振りの感覚が蘇ってきた。この子は庇護する対象。舞彩は私が守らなきゃ。

「彼女を離して下さい。話ならここで覗います」

「……それじゃあ吉川くんが困りますよ？」

一瞬湊は頭が白くなった。

思いもかけない人物の名前を言われたからだ。

「……拓が？」

その呼び方に、舞彩がギョッとした様に湊を見つめる。けれども湊はそれには気付かない。

嫌な感覚。その理由が分かった。高松精機って、粉飾決算で騒いでいたんだわ。

その騒ぎの元が、あたしと拓だった。

「……まぁ、いいか。話が進むなら、どちらでも」

目の前の彼が気味悪く呟く。こんな人だったかしら。

つまり彼は、拓で舞彩を釣ろうとしたって事？　何の為に？　や

っぱイタズラをする為?!

「それに僕は、あなたに会いたかった」

ねっとりとした彼の微笑み。ゾックゥゥっ。イタズラ決定!　変態認定!

だ、だけどだけど、拓の名前を出された以上、仕事の話かもしれない、そしてそれは拓には不都合となる話なのかも知れないっ。

今ここで、この変態の手を離す訳にはいかないのかも知れないっ(掴んでないけど)。

「みなちゃん……」

「イタっ」

ひやぁぁっ、掴んでないのに掴まれたっ!

「車に乗りましょう。話を聞きたいのでしょう?　そもそもあなたにも責任の一端はある」

「やめてくださいっ」

「藤堂さんと行くよ。彼にはそう伝えて」

目の前で、舞彩と取引先高階が言い争う。

その間に湊は急いで腹を据えた。お陰さまで、変態さんの取扱いには、あの仕事で慣れました。ええい、その経験値をここで使わずしてどこで使う!

「舞彩、大丈夫だから。心配しないで」

「でも……っ」

「今までごめんね。後で話そう?　ね?」

「……」

舞彩は、たった今湊に叫んだとは思えない様な、頼りなげな表情で彼女を見ている。
それを見た湊は彼女がとても愛しくなり、とても申し訳無くなり、とても素直な気持ちになった。

「もう舞彩には嘘をつかないから」

……今なら言える。やっぱり拓也(かれ)だけは譲れないの。今頃、本当にごめんね。
自然と出た、切なくて柔らかな微笑み。舞彩がハッとした様に湊を見る。
直後、高階に引っ張られる様にして湊は連れて行かれた。白昼堂々、道の真ん中で。

一人残された舞彩は、青ざめた顔で呟いた。

「……どうしよう。拓也くんに知らせなきゃ」

車内では緊張感漂う無言が続く。

「……吉川と、何があるんですか?」

思い切って湊が尋ねると、前方から目を反らさずに高階は言った。

「うちの会社の粉飾決算の事、あなた知ってるんでしょう?」

「……ハッキリとは……」

つか、その発見者第二号ですけど。第一号は吉川拓也って事で。でもしらばっくれさせて下さい、何しろあなたの情報が少なすぎるんです。

けれどもやっぱり、仕事関係の話だったのね。

良かった。あたしはてっきり、やけを起こした舞彩が顔しか知らない独身中年おじさんと、平日昼間から一回きりの大人遊びでも興じるのかと思っちゃった。一瞬だけだけど。ごめん、舞彩。

「……高階さんが……やったんですか？」

恐る恐る、けれでもなるべく毅然とした態度で湊は尋ねた。傍から見ればクールビューティ、けれども内心は冷や汗モノだ。

「……僕は会社に、人生を狂わされました」

運転をしながら、高階は遠い眼をして言った。

「だから復讐するんです。彼には、後始末をつけて貰う」

……何ですって？

湊は血の気が引いた。

復讐？　後始末？

……え、どこの世界の話？

3（R）（後書き）

ヨシ……ヨッシー……そりゃあ嫌だろう。

4

車から降りたら、強面（こわもて）の男が二人立っていた。スーツを着て、いたってまともな髪型をしているが、雰囲気がまともじゃ無い。湊は顔が青ざめた。一人が湊の鞄を取り上げる。携帯も何もかも取られてしまった。彼らと共に、とあるビジネスホテルの一室に連れ込まれる。

初めて、後悔をした。あたし失敗したかも知れない……。

こんな非日常な状況がいきなり自分に降って来るなんて、普通予想しないでしょ！　あたし、あたし一体何をされるの怖いっ。　こんなのドラマでしか見た事無い２４なら殺されてるちょっと綺麗で可哀想な被害者その１よっ、レオンなら殺されてトイレに流されているっ、あれはニキータか。

思わず見知った顔の高階を、縋りつく様な瞳で見上げる。唯一かろうじて、もしかしたら味方かもしれないと思える、いや思いたい人物だった。

あたしに何をするの？

高階は軽く溜息をついた。

「とりあえず、ここで彼を待ちましょう」

……まずい。非常にまずい。ダメだあたし現実に対応できていない、だってなんかおかしいもの。

高松精機。そこそこ大きいけど上場もしていない会社。そこの粉飾決算で……

なぜここまでの目に合うっ！！
良くわからんが国税にさっさとごめんなさいって追徴金払ってそれでお終いでしょっ？！
しかも一介の経理担当者にどーしてこんな強面のおじさんが二人もついてるの、やっぱおかしいでしょってば！

誰か説明しろーっ！　いや説明はいいからあたしを逃がせーっ！

動きは小一時間後にあった。でも湊にはひどく長く感じた。血圧が上がるって多分こういう事なんだと思う、胸がドキドキしすぎて呼吸が苦しい、とても疲れる。
ドアがノックされ、男の一人が外を確認し慎重に扉を開けると、飛び込んできたのは拓也だった。
「みなっ」

会社から来たらしくスーツを着ているけど、長めの前髪が乱れている。険しい顔つきで湊を見つけると、彼女の肩を勢いよく掴んだ。
湊はホッとするのと同時に余計に不安になった。彼が来てしまった、これは状況が好転したのか悪化したのか。

「拓」
「大丈夫だった？　平気？　大丈夫？」

焦りと心配の色が強い。こんなに余裕を無くした拓也を見たのは

初めて。

「何がどうなってるの？　この人達、何？……虎太郎？　なんで……」

驚いた。拓也の背後に、どう言う訳か虎太郎がいる。

虎太郎は心配そうに部屋の中を見渡しながら、湊に行った。

「君が帰って来ないから、彼に聞いたんだ。その時、この人達が……」

「……っ」

何と彼の背後には、更に三人もの男がいた。先の二人と違って、この三人は服装も目つきも見るからに柄が悪い。拓也と虎太郎は彼らに連れて来られたんだ、と理解する。これで合計、５人。

ただ事じゃ、無い。

拓也が湊の肩を抱いたまま、険しい顔つきで高階に言った。

「彼女に、何を？」

「何も。まだ全然」

湊は緊張が更に高まった。どうなるんだろう、何が始まるんだろう。

虎太郎はその様子を、眉をひそめて眺めている。

拓也は小さな溜息を一つつくと、湊を見た。

「ごめん、湊。俺、ちょっと行ってくる。……迎えに行くのさ、少

し遅くなるかも。そん時は」

目を見開く湊の前で、拓也は視線を虎太郎に移した。

「この人の側から、離れるんじゃないよ？」

……それはつまり……虎太郎の、側にいろって事？

そしてそれって、これから拓は一人でこの人達と一緒にいるって事？　何の為に？　だってこの人達マトモじゃない！

「どう言う事っ？　拓っ！」

咄嗟に掴んだ彼の腕を、拓也がそっと外した。「ごめん」と困った様に笑って、彼女を虎太郎に押す。虎太郎が後ろから湊の両肩を掴み、拓也の指が微かに彼女の頬に触れた。彼独特の丸い瞳が、少し潤んだように見えた。

え？　と思った時にはもう、湊は男に押され虎太郎に引っ張られ、部屋の外に追い出された。あっという間の出来事。何が何だか益々分からない。

唖然とした。分かる事はただ一つ。拓也が、よからぬ事に引きずられている。

「だめだよ湊ちゃん、もう行こう。巻き込まれる前に」

「でもっ、でも、彼が！」

「彼には彼の考えがあるんだろうから大丈夫。君がそれに巻き込ま

れる必要は無い」
「でもやだっ……だってやだっ！」

暴れる湊を抱きかかえる様にして、虎太郎は外に出た。比較的大きな通りに面していて人通りもあるが、ビジネス街のせいか皆忙しそうにしていて、こちらにあまり気を止めている様子は無い。
虎太郎は彼女をビルのすぐ近くの路地に連れて行った。
震えている湊を黙って見下ろす。

「どうしよう。何でこんな事になったんだろう？　拓、これからリンチでも受けるのかしら？　どうしよう、どうしよう」
「……」

虎太郎の瞳は無機質で、表情が読めない。ただじっと彼女を観察している。
昨晩帰らなかった彼女。変な事に足を突っ込んでいる男に、引っかかった女。それにとばっちりを受けかかった俺。
そう思っているのだろう、だって仕方が無い、その通り。

それでも。

「助けて虎太郎」

プライドの高い彼女に、今は恥も外聞も無かった。

「……」

「助けて。何でもするから。何でもするから！　彼を助けて。お願い！　あたしどうすればいい？」

虎太郎の胸倉に両手で掴みかかる。それを彼は無表情に見下ろした。

色々な彼女を知りたかった。でも、取り乱している彼女なんて想像出来なかった。いつも颯爽としていたし、そこが彼の好きな所でもあったから。

でも、こんな顔もするんだな。彼女もやっぱり、普通の女性だったんだな。

もっと後から知りたかったな。もっとじっくり付き合って、二人の思い出を沢山作った後で。

そうしたらこんなに悲しくなる事も無かったのに。こんなに強烈に、振られた傷がつく事も無かっただろうに。

「……好きなんだね、彼が」

「……」

「いつもの君らしくないもの。こんな時君なら、勢いよく真っ先に警察に飛び込みそうなのに」

「……ごっ……めんなさっ……」

湊は嗚咽を堪えすぎて、声が出ない。そうか、この人は日頃しっかりしている分、一度興奮すると自分のコントロールが効かないんだ。

それをあいつなら、上手く制御できるって言うのか？

とてもそうは思えないよ。彼が、そんなに包容力があるとは思え

ないんだけど。

「ほら、顔を上げて。俺を見てよ。ね、こっちを見て」
「……」
「僕は、君が好きだ」

虎太郎は湊の頬を両手で包み込み、瞳を捉え、覗きこむようにして言った。
淵が赤くなった目で、潤みながら彼を見上げる湊も、視線を反らさない。
そして迷う事無く、ハッキリと言った。

「あたしは、吉川拓也が好き」

すると虎太郎は、彼女の両頬を包みながら、綺麗な瞳を細めて蕩ける様に笑った。

「よく言えました」

二人は見つめ合う。視線を絡め、無言。そうすると、全ての気持ちが伝わる。
ごめんね、大好き、でもごめんね今まで臆病で。あなたに嘘はもうつけない、大好きよ。
うん知ってるよ、君の気持は知ってるよ、大丈夫だから、安心し

て。安心して。

虎太郎は彼女の肩に両手を置いた。そして彼女を見下ろし、少し挑戦的な笑みを浮かべて言った。

「じゃあ教えてあげる。これから君が、どういう行動を取ればいいのかね」

前日に会社を辞めた湊が翌日の昼間に顔を出したので、皆はおや？　とは思ったが、さして気にも留めなかった。きっと多少やり残したことがあるのだろう、くらいにしか思わない。湊は後藤課長を外に連れ出していた。

彼女のかつての上司。そして一か月後から、彼女の新しい職場の新しい上司として二人で頑張っていく予定だ。もちろん他にも社員はいるが、同じ職場から同時期に来た二人は今後も二人三脚で進むに違いない。

そして何より、高松精機の決算について、拓也が相談した相手でもあった。

彼なら、この話に乗ってくれる筈。

湊が事情を話すと、課長は顔色を変えた。

「会社に復讐したいって高松精機の高階さんが言ったんです。おま

けに吉川くんを逆恨みしているみたいで、彼、高階さんと変な男の人達に連れ込まれるみたいに、一緒に部屋に入っちゃって……っ」
「彼はどこに？　危ないじゃないですか、そこから出さなくては」
「そうですよね、そうですよね？　私達が最後に別れたのは、〇〇ホテルでした」
「そうか……ちょっと行ってきます」
「私も行きます」

すると課長は険しい表情を見せる。

「君は危ないでしょう。一度監禁されたんだし女性なのだし、ここに残って……」
「じゃ、警察を！　私、警察呼びます。呼んでもいいんですよね？」
「それはまかせなさい。どこまで事を大きくしていいのか、まずは冷静に判断をしないとかえって取り返しのつかない事になるかもしれない」
「今連絡をしない事で、吉川くんの身に取り返しのつかない事にはなりませんか？　私が閉じ込められていた時は全く尋常ではありませんでしたよ？　私、ここでじっと待ってなんかいられませんっ」

湊が切羽詰まった様に、そして少し相手を責める様な口調で言う。
課長は一瞬考える様に彼女を見つめた後、小さく息を吐いた。

「わかりました、私が連絡をします。……仕方ない。一緒に来なさい」

課長は湊を促し、手近な植え込みの横に座らせた。ちょっと待って、今から連絡するから。藤堂さんはそこにいて少し自分を落ち着

かせなさい。そう言って少し離れた所で携帯を開く。

湊はそれを、まだ赤さの残る目で、苛立ちを不安と焦りと共に見つめていた。

早く、早く。早くあそこに戻りたい。

5

二人は慌ただしく現場の部屋の前に戻った。課長がドア越しに中の様子を覗う。人の動いている気配が、無い。湊は今にも泣きだしそうだ。

課長が慎重に声をかけた。

「吉川くん」

「吉川くん……ヨシ！　……拓也っ……！」

「本当にここかい？」

「確かにここでした。場所を変えていなければ……」

その時、ガチャ……と部屋の扉が開いた。

「吉川くん？」

「……後藤課長……」

唖然とした拓也の声が聞こえる。

「ヨシっ！」

「みなっ……」

課長の後ろから姿を現した湊を見て、拓也が絶句した。それに構わず、湊が拓也に抱きつく。課長が少し眼を丸くした。

「大丈夫？！」

「おまっ、何でここに戻って来たんだよっ！」

抱きつかれたままの状態で固まる拓也。予定外、信じられない、

という顔つきだ。
若い二人の抱擁（正確には、湊が一方的に抱きついている状態）を見ながら、課長が説明口調で言った。
「藤堂さんから話を聞いて、慌てて来たんだよ。会えてよかった、大丈夫かい？　変な連中が一緒だったって聞いて……」
「その顔……どうしたのっ？」
顔を上げた湊が、間近で拓也の頬に触れた。左頬が僅かに赤い。触られた拓也は、ギョッとした様に眼を見開いて湊を見た。そして慌てて課長の様子を覗うと、更に顔を赤くしながら彼に言った。明らかに照れている。
「みな……いや、僕は大丈夫です。でも高階さんが……」
「何があったの？！」
遮る様に湊が聞く。拓也と課長の間に割り込む様な形になり、心配で心配で仕方が無かった、という様子をありありと出している。
そんな彼女に視線を戻すと、拓也は軽く溜息をついた。そして、しょうがない、と言う様に軽く首を振りながら話し出した。
「わからない。連れて行かれたのは向こうなんだよ。奴らに高階さんが連れて行かれて、いつまでたっても戻って来ないからさ。何なの？　って感じじゃない？　最初に舞彩ちゃんから連絡を貰って、湊が連れて行かれた、俺を呼んでいる、どうやら高階さんは俺を恨んでいるらしいって聞かされて、はあ、何の話だよそれ？　ってなるだろ？　よく分かんねぇ内に変な連中のお迎えも来てさ、何かすげぇヤベぇぞって覚悟を決めてここに来てみれば、俺とロクに話も

せずに、はいさようなら、よ？　唖然としたよ、ポカーンだよ」

話を聞いている間に、湊の口が徐々に開いていった。彼女の瞳から、怯えや焦燥と言った物が消えていく。

やがて白い眼で拓也を見つめた。

「……いえ、唖然としてポカーンとするのはこっちだから。何なのその説明？　もうちょっとマシな話は出来ないの？」

「しょうがねぇだろ、こっちだって大変だったんだよ！」

「あらまあ、日頃のスカした態度はどちらへ？」

「あっ、このやろっ、自分が安全だと思ったら開き直りやがって」

「まあまあまあまあ」

今度は課長が二人の間に割って入る。この人達はこんなに仲が良かったのかと、内心驚く。まだ睨み合っている二人だったが、先に切り替えたのは拓也だった。

眉間に皺を寄せて空中を見つめ出す。口の端を親指で擦るのは、考え込む時に見せる癖だ。

そして湊は、そんな拓也の表情に、実は前から惚れていたりする。ううう、かっこいい。

「でもあいつら、ひょっとして最初から狙いは高階さんだったのかも……」

「なんでそう思うの？」

一瞬じっと考えた後、拓也は視線を湊と課長に戻した。

「高階さん、粉飾の責任を自分に押し付けられたって言ってた。だ

から社長に復讐したくて、それと、それに気付いた俺にも仕返しをしてやりたかったって」

「そんな、滅茶苦茶な……」

「だから俺、最初にあの部屋に連れて行かれた時、変な連中がいるのを見てさ、高階さんに金で雇われた奴らかと思っていたんだ。今から俺、ボコられんのかなぁって」

湊も眉をひそめる。

「……違ったの？　大丈夫だったの？」

「うん。彼、社長が関与しているっていう何かの証拠を持って行方をくらますつもりだったらしい。そしたらそれを聞いた奴らが、彼を部屋から連れ出したんだ」

拓也の話を聞いて、湊の顔色が変わった。

「……じゃ、何？　彼を連れ去ったのって……」

「……社長、じゃないかって事になるよな……」

「……と言う事はあの人達って……本当は社長が雇った人達だったって事……？　二重スパイ？　あ、この場合二重ヤクザ？」

「二重ヤクザって何だよ、つまりカタギなの？　それって」

「……」

そーゆー揚げ足取りみたいな突っ込みはいいからさ……。湊は思わずジロッと拓也を睨むが、彼は眉をひそめて小馬鹿にしたように彼女を見下ろすだけ。こいつ……。

そんなのどうでもいい、と言う様に彼は小さな溜息をつくと（どうでもいい事突っ込んだのはあんたでしょっ）、ポケットから携帯を取り出して二人に見せた。

「……実は、ここに来る直前に、多分彼からメールを貰ってたんだ」

メッセージはただ、とある駅名と数字の羅列。ここから徒歩数分の駅だ。

「受信した時は意味が分からず差出人も分からず、それどころじゃ無かったから無視したんだけど。それからさっき気付いたんだけど、ポケットにこれも」

拓也の手の平には、小さな鍵が乗っていた。

「いつの間にか、入れられてた」

湊がポツン、と言う。

「……何これ？」

「鍵だろ、どう見ても」

「んなの見りゃ分かるわよっ。どこの鍵って聞いてんの！」

「ってーな、殴るなよっ、俺が知るかよっ」

だからいちいち突っ込まないでよ、こーゆー状況でっ！　あんたのその口、どーにかしろっ！

と湊は拓也を更に睨み上げた。

「でもさ、なんとなく駅のコインロッカーじゃない？」

迷惑そうな顔をした拓也が、肩をさすりさすり言う。言われてみればメールと同じ番号の鍵だ。

湊と課長は顔を見合わせた。

拓也は鍵を見つめ、低い声で言う。

「……あの人、俺にきっと何かを渡したかったんだ。そんで連中が捜していたのも、多分これだ」

一瞬三人に沈黙が走った。湊は拓也を見つめながら、恐る恐る聞いた。

「……中に何が？」

「さあ、それが分かりゃね。だから確かめに行こうとしていた所」

「ねぇ……警察を呼んだの？」

「いや……だってこれといった確証が無いんだ。彼も特段抵抗している様に見えなかったし、そうすると警察を呼ぶ理由が、無いだろ？」

「そうか……でも大丈夫。あたし達も呼んだの。拓が連れて行かれてすぐ、課長が」

「あ、すいません」

咄嗟に拓也が頭を下げ、課長も「いえ」と小さく言った。そして皆で再び、難しい表情で鍵を見つめる。

拓也がボソッと言った。

「でもそっか。出来れば警察とかが来る前に、コレが何なのか確認したかったな。そしたら俺らが、一体何に巻き込まれていたのかも分かったのに」

すると今まで殆んど口を開かなかった課長が、決心した様に口を開いた。

「じゃあ、行こう。我々で」

その言葉に、拓也と湊の二人は同時に、驚いた様に彼を見た。

推測通り、それは駅のコインロッカーの鍵だった。開くと比較的厚いＢ４判の茶封筒があり、拓也が中を開けた。

「なんか書類っぽいぜ」

「ここで確認するの、ヤバくない？」

「だよな。連中が俺らをつけているのかも知れないし、どこで見ているのかも分からない」

「私が預かろう」

皆が中身を詳しく見たくて堪らない。

拓也がやんわりと課長の手を制した。

「いやでも、俺も確認したいです。いい店知ってます。ゆったりとして、あんまり人の目が気にならない所。そこに行きましょう」

タクシーを拾って十分、着いた所は地下のカフェバーだった。まだ午前中のせいか客がいない。奥の比較的大きなテーブルに通された。

そして数分後、三人はテーブルの上の書類を凝視して、腕を組み、黙り込んでいた。

「やっぱり帳簿だよな、これって」

拓也が唸る様に言う。

それらはとにかく細かい科目と数字の羅列で、整理されておらず、なかには関係の無い紙も混じっていたり手書きの領収書があったり

と、とても一日二日で精査出来るものとは思えない。
湊も難しい顔をして言った。
「決算書とは別って事？　そうなると……裏帳簿？」
「例の決算書に関わるものですか？」
課長も書類を見つめながら言う。
「多分……そうだと思います。……彼、藁にもすがる思いだったんだろうな。俺に頼むくらいだから……」
拓也の最後の方の台詞は、まるで独り言の様な呟きに変わっていた。
それを湊と課長がジッと聞く。そして沈黙が流れる。
やがて課長が、再び決心した様に言った。
「やっぱり私が預かるよ。家に持ち帰って、じっくりと調べてみる。君達には危険すぎます。上司として、そんな目に合わす訳にはいかない」
「……でも……課長だって」
課長が書類に伸ばした手を、湊が不安げに止める。課長は穏やかに言った。
「私と吉川くんがここで会った事は、誰にも見られていないでしょう。知られていないなら大丈夫です」
「それより警察に出しましょうよ。充分事件性があるじゃないですか。人が連れ去られたんですよ、やっぱり何かあったのでは遅すぎますっ」

再び募り始めた不安に煽られる様に、湊が声を上げる。止めていた課長の腕をギュッと掴む。

それを拓也が、無表情でジッと見つめている。

課長は彼女を見て、小さく溜息をついた。

「……でも吉川くんが言った通り、あまりに証拠が薄い現段階では、まともに取り合ってはくれないと思いますよ。この書類を取られるのが関の山、それでしたらまず、私が調べた方が……」

そこで沈黙が流れる。湊は落ち着かなく視線を浮かし、しぶしぶ手を離した。拓也は黙って胸ポケットから煙草を取り出し、課長に「吸います？」と差し出す。彼が短く断る。馴れた様子で火をつける拓也を見て、ああここは禁煙じゃないんだなぁ、なんて関係ない事を、湊はぼんやりと思った。

拓也が黙って煙草をふかす。課長が険しい顔をして書類を見つめる。湊が悲痛な表情をして考え込む。

やがて拓也が、煙を吐いて言った。

「そしてそのまま、握りつぶすんですか？」

「……え？」

「これを今僕の手から取り上げて、課長が握りつぶすつもりですか？　俺らが見つけた粉飾を握りつぶした時みたいに」

その瞬間、課長が目を見開いた。

そして湊が口をポカン、と開ける。拓也がそれをチラ、と見た。

あ、マヌケ面。すげぇ可愛い。このギャップがいいんだよね。

「何を言ってるの、拓？」
「そして彼女を手元に置いて、ずっと監視し続けるつもりですか？」

トン、と灰皿に灰を落とし、拓也は課長を見る。
課長は息を飲んで拓也を見返した。

「……何だね、一体。何の事だい？」

拓也はキュッと目を細める。その鋭い瞳に、湊はドキッとした。

「警察は、来ない。だって呼んでないんだから。あなたが電話した先は警察では無く、高松精機の社長だったんでしょう？　そしてあなたは社長から、この書類が僕の手に入るのを阻止するように、との指示を受けた」

拓也は再び煙草を口にやり、ゆっくりと息を吸う。どこか投げやりで、けれども尖った危うい雰囲気。彼のその暗くて危険な空気に、湊はゾクっと来た。
ホスト時代の彼は、こんな感じだったのかも知れない。荒れていた頃の拓也。あたしの殆んど知らない、彼。
……怖いのに、目が離せない。

「何の話をしているのよ？」

上ずった声で尋ねると、拓也が湊を見た。
そして僅かに微笑んだ。

「あのね、みな。今日俺達がこんな目にあったのは……裏で課長が、糸を引いているんだよ」

三人の間で、時が止まった。

「はあ？」
「なっ……それは違うっ！」
「違わない」

三人同時に口を開く。しかし最も威圧感を持ってその場を制したのは、拓也だった。
彼は目を細めて課長を見やり、そして言い放った。
まるで宣告をするように。

「あなたは裏で、俺達を欺いていた。今までずーっと、ね」

6（前書き）

一瞬だけ、非常に凄惨な場面が出てきます。どうかご注意下さい。

6

長く感じる沈黙。
口が開いたままの彼女。
やがて湊は、ゴクンと唾を飲み込んだ。

「……日本語喋ってる？」
「何言ってんの？」
「いやそれこっちの台詞でしょう？　分かる様に説明してよ」
「んだよ、もう。じゃ、ハッキリ言うよ？　課長は、高松精機の、粉飾を、手伝ってんの！」

再び、絶句。

「……何で！」
「知るかよ。それを今から聞くんだろ？」
「嘘でしょ？！」
「……じゃ聞いてみろよ、課長に」

砕けた口調で低く強く、拓也は言った。
湊は信じられない、と言う様に課長を見つめた。

「……課長……？」

あなたが、職務のコンプライアンスを侵す様な事をしていたんですか？　あり得ませんよね？
目が、そう言っている。
課長は深呼吸を一つすると、今までに見た事の無い様なキツイ顔つきで拓也に言った。

「そんな訳ないでしょう？　何を根拠にそんな事を言うんです？　第一、君達を監禁した手引きを私がするなんて、私に何のメリットがあるんです？」

うわお。何だかとってもお約束の台詞。湊の心の中でつっこみが入る。

拓也は満足そうに笑ったが、瞳が意地悪く光っていた。

「根拠は……そうだな」

パラパラパラ……と書類をめくる。先ほどとは違い、とても馴れた手つき。まるで今まで何度もこれに触って来たかのようだ。

「例えば、これ。会社からの貸付金明細。ここに何で……課長の住所が載ってるんですか？」

「……」

「これは根拠と言うより、証拠ですよね？」

口角を上げ、眼は全く笑っておらず、拓也は課長を見据えた。ズイ、とページを彼に見せる。

課長の顔色が変わった。

「……いつからこれを……」

「それは問題じゃないでしょう？」

拓也はニコッと可愛く笑う。それが異様に迫力があり、湊は小さく息を飲んだ。

「問題はあなたが、取引先から金を借りていた。代わりに社長の粉

飾決算を手伝っていた。……それだけなら、良かったのに」
「……え？」
「帳簿を操作して費用を水増しし、本来なら社長の懐に入る筈だったその金の一部を、着服していたんでしょ？」
「なっ何だって？　それは違うっ！」
「また言った。違いませんよ。社長が気付いていないとでもお思いですか？」

有無を言わさぬ拓也の口調。
粉飾を手伝ったのみならず、会社の金を盗んでいた。そう言われた課長は声を荒げた。

「私は裏金なんか着服していないし、君達を危険な目に合わせたりしていないっ！」
「じゃあ粉飾に手を貸していた事は、認めるんですね？」

課長はグッと言葉に詰まる。
やがて顔を赤らめながら、険しい形相で拓也を睨みつけた。

「……君は今、社長が気付いていないとでも、と言ったね？　君こそあの会社と、何の繋がりがあると言うんだ？」

拓也はニヤッと笑った。
そしてそれには答えず、柔らかく冷たく言った。

「着服した金を返せば、まだ課長も、助かる確率がありますよ」

それらの様子を、湊が呆然と見ている。落ち着かない表情で、拓

也と後藤課長を交互に何度も見る。
「……何を言ってるの、拓……？」
すると拓也は彼女を見て、にっこりと笑った。
「湊は、俺を信じるんでしょう？」
否定を許さない、強引な微笑み。湊はギクッとした。
「……」
「じゃあ、黙っててね」
「……っ」
彼女は唇を噛み、気押された様に黙り込む。
それを見た拓也は満足気に笑い、その笑顔そのままに課長に向き直った。楽しそうに口を開く。
「ねぇ課長。返して下さいよ、盗っちゃった分」
「だから何を言っているんだ。私はそんな事はしていない」
「嘘嘘。だって俺が色々と調べてみたら消えてるもん、一億くらい軽ーく」
「私は知らない、関係無いっ」
「ねぇ、何に使っちゃったんです？　女？　それともギャンブル？　あ、それとも株とか？」
「違うと言ってるだろ！」
「ねぇ拓、やめようよ。なんか怖いよ」

「黙ってて、っつったろ？」

柔らかく軽い口調は変わらない。けれども今度は、顔が全く笑ってなかった。鋭く湊を見る。

湊は絶句して、次に泣きそうになった。

「……なんか怖い。拓じゃないみたい」

そんな彼女の顔を見ても、拓也の目つきは変わらない。無表情に言った。

「そう？　いつもの俺だと思うけど」

そして課長に視線を移す。いつもの茶色い瞳が暗く冴えた。

「俺はね、課長の味方なんすよ。今なら、課長が着服した金を全額返せば、社長も見逃してやるって言ってます。でもこれを拒否すると、マジでヤバいですよ？　命無いかも」

普段の口調でさらっと言うが、言っている内容が尋常ではない。湊は信じられない物を見る目つきで、拓也を見つめた。

課長は更に顔を赤らめて、語気を強めて言った。

「……私は信じないぞ？　第一、高松社長はそんな事を言っては無かった」

「あー、やっぱり社長と通じてた事は認めちゃうんだ？」
「……」
「でもダメです。課長の仕事、俺が引き継ぐ事になりましたから」
「えっ……拓？！」

楽しそうに言う拓也に、思わず湊が声を上げる。
拓也はそんな彼女を無視して話を続けた。

「全てのからくりを見抜いた事で、社長に見込まれたんですよ。これでも俺、数字と人を見抜く力はあるんで。だから課長は諦めて、全てを白状して下さい。社長から盗った金はどこにあるのか。いつまでにそれを返せるのか」
「だから私は、そんな事はしていないと言っているだろう！」
「タイムリミットはすぐそこですよ？　現実を教えて差し上げます、よく考えて下さいね。粉飾を行ったのは、高階さんと後藤課長の二人だけです。二人は私腹を肥やす為に犯罪に手を染めた。やがて社長にバレて、一人は罪の意識にさいなまれ、姿を消した」

淀みなく繰り出される彼の台詞。
その中に聞き流せない言葉を見つけ、湊は息を飲んだ。

「……姿を消した……？」

その言葉には、不穏な響きがする。
なのに拓也は楽しそうに話を続ける。
「もう一人は……」

その時、人の気配がした。
ギョッとした様に湊と課長が顔を上げる。男が４人、立っていた。柄があまり良くない。ガタイの大きい男もいる。湊が「きゃっ」と小さく声を上げた。
一方の拓也は、まるで驚く事無く彼らを見上げる。

「お疲れ様。もう終わった？」
「……この人達……」
「どしたの、湊？　心配そうな顔して」
「……だってこの人達……拓也を連れてきた人達じゃない……あたしやあなたを監禁した人達……」
「そうだっけ？　顔忘れちゃったよ」

拓也が肩をすくめた時、そのうちの一人、ガタイの良い男が何かを机の上に置いた。
コロン、と転がるもの。

一瞬の間の後、湊はついに悲鳴を上げた。

「きゃあっ！！」
「すげー。何これ。気色悪ぃ……」

拓也も顔色を変えて、口元に手をやりのけ反る。
課長はガタン、と椅子から腰を浮かす。

テーブルの上には、血まみれになった第二関節より上の人差し指が置かれていた。

湊は両手で口を押さえ、パニックになった様にガタガタと震えだした。フラッと体が揺れる。

それを置いた男は、ただ無言で彼女を見た。そして気を失いかねない雰囲気の彼女に手を伸ばし、その両肩を、強く椅子に押し付けた。

それを見た拓也は一瞬で険しい表情になった。思わず彼女に手を伸ばそうと立ち上がりかけたが、思い直した様に椅子に座る。

震える彼女を、少し唇を噛んで見た後、鋭い目つきを課長に戻した。

「課長も、こうなっちゃいますよ？」

「拓也？！」

我が耳を疑うように、悲鳴を上げる湊。

拓也は歯を食いしばって、それを無視した。

「金を返せば、やったのは全て高階さんだけで、済むんですよ？」

「やめて！　ちょっとやめてよ拓！」

「湊。声がデカイ」

拓也は低い声で湊を制した。

そして険しい表情で、姿勢を変えずに、視線だけを動かして、後

ろに立っている男たちを覗いながら言った。

「しょうがないだろ。俺達が自分達の身を守る為には、こうするしかないんだ。だってこの課長、俺とあんたを引き離そうとしたんだぜ？　粉飾を誤魔化す為だけに。どっちみちこれに気付いた時点で、俺らは巻き込まれてしまってんだよ。今更後には引き返せねぇよ」

「でもだからって、これは違う！　間違ってるでしょ！！　おかしいよ！」

湊は泣きながら拓也を掴んで揺さぶった。
それを拓也が、静かに抑える。彼女を見つめ、そっと手を握り締めた。

「間違ってるとか、おかしいとか、俺にはどうでもいいんだ」

拓也の瞳は暗く沈み、奥底が危うく光っている。

「湊を、守る。湊の、側にいる。それが出来るなら……俺は、どうだっていい。何だって、やるよ」

湊は拓也を凝視し、その手を振り払った。再び両手で口を押さえる。何かを堪える様に。
首をゆるゆると横に振り、引きつる様な声が出る。

「……拓が……」

狂っちゃった。

彼女は声にならない声で、小さく呟いた。

7

湊は呆然自失とした表情で拓也を見つめる。呼吸が浅く、小さく速く繰り返される。このまま過呼吸にでもなるんじゃないか。そんな雰囲気だ。

拓也は痛くなりそうな胸を無理やり抑え込んだ。過呼吸ならその時は、唇を塞げばいいんだろ？　あ、口か。

「……違う、違う！　私は着服なんてしていない！　吉川くんは騙されている、社長はちゃんと、自分の金を手にしている！」

「……もう無理ですよ、課長」

「やめようよ、拓！」

「本当だ！　だって私はちゃんとやった！　高松社長の指示通りに動いた！」

後藤課長は既に平静を失っている。テーブルの上にある切り取られた指が、非日常な次元を周りに浸食させていき、皆がそれに飲み込まれて行く。

「指示ぃ？　それは粉飾を手引きした、って事でしょ？　だから知ってますよ、そこは」

「そうじゃない。私が金を振り込んだんだ！　指示された口座に、キチンと！」

「振り込んだ？　何を言ってるんですか？」

「社長に頼まれて、マネーロンダリングをしたんだ、証拠だってある！」

「……マネロン？　証拠？　どんな証拠があるんですか？」

気だるげに物憂げに、拓也が言う。言いながらも、何かを諦めた様な雰囲気で湊を見ているが、その瞳には狂妄の熱がある。それに捕らわれた彼女は彼から目が反らせない。怯えた表情には、冷静さが感じられない。

彼らの様子を見た後藤は更に危機感が募った。

「振り込み依頼票の控えがある。それで口座番号が分かる筈だ、調べてみてくれ！」

そこでやっと、拓也が課長を見た。疲れた表情の中に、僅かな驚きが見てとれる。

「……本当ですか、それ」

「本当だ。社長の愛人の口座に入れて、そして現金で引き出したのも私だ。その後はいくつかのダミー会社を転々とさせている。その振り込みの何件かは、控えを取っているんだ」

「……そう言って上手く逃げる気じゃないですか？　口座の名前とか銀行名、振り込み時期とか、今すぐここで言えます？」

「正確な口座名までは覚えていないが、時期と振り込み先の銀行名なら言えるっ」

後藤はそう言って、ほとんど叫び声に近い声を上げた。銀行名や口座名とおぼしきものを。

その後、室内は水を打ったように静まる。

誰も口を開かない。

いつの間にか、拓也が携帯電話をテーブルの上に置いていた。

「……だって、藤田さん。聞こえました？」
『ああ、聞こえた。早速調べる』
「……はい皆さん、お疲れさまでしたー！」

拓也の明るい声。パン、と手を叩き、それを合図の様に皆が姿勢をグダッと崩した。

「良かったー、終わった……」

湊が机に突っ伏す。緊張から一転、溶けた様に体を預けピクリともしない。
拓也が椅子の背もたれに反りかえり、後ろにいる男に声をかけた。

「よかったね、高階さん。これで社長の関与、証拠があがるかもよ？」

すると柱の陰から、高松精機の元経理担当高階が、大変申し訳なさそうな顔をして登場した。
もちろん、指もちゃんと付いている。
隣では、湊の後ろに立っていたガタイの良い男が忌々しげに言った。

「あー、くそっ、つまんねぇ事をしたっ。マジ気持ち悪ぃ、これ」

そう言って指の切れ端を、人差し指と親指で摘み上げる。感触はそうでもないけどよ、なんだよこのリアルさは。
チンピラに扮した、いかにも駆け出し俳優風情の若い男が嬉しそうに彼に言った。

「すごいでしょう？　良く出来てるでしょう」
「ありがとうございます、先輩。流石はヤクザの雰囲気に年季が入ってますね」
拓也にわざとらしく礼を言われ、泰成（役名：チンピラ親分）は作り物の指を摘んだまま顔をしかめる。
「うるせぇよ」
言うなりそれを拓也に投げた。「うわぁっ」と言って避けた拓也の足元で、「わ、危ないっ。壊れますよっ」と俳優の卵がそれをキャッチする。どうやらそれは、努力と芸術の結晶らしい。泰成の目が生ぬるくなった。色々な分野の専門家がいるもんだ。
後藤は先ほどから、中途半端に口を開けたまま目を見開き、動く事が出来ない。
「いきなりこの、あり得ないクライムサスペンスの世界を演じろなんて……疲れた、馴染めない、鳥肌立つ、感情移入できない。……役者の人達って本当に尊敬するわ……」
テーブルの上に顔をうずめたまま、湊は熱に浮かされた様にブツブツと文句を言い続ける。
それを聞いた別の俳優男（チンピラその2）が、彼女に笑みを投げかけた。
「いえそちらも、マジで上手かったですよ？」
湊の耳には入らない。いや、入っていても聞いちゃいない。それ

ぐらい力いっぱい、別世界を演じ切った。出来る事なら二度とやりたくない。バイトのアレのほうがまだマシだわ。

湊の疲労困狽を無視して、拓也は面白そうに近くの男と話をしている。どうやら泰成をネタにしているらしい。

「この人、妹が出てくるかもって言ったら血相変えちゃって」

「当り前だろ、こんなワケわかんねぇ事。タダでさえ計画聞かされた時はぶっ飛んだってのに。しかしなんつう胸糞悪いシナリオだよ。俺なんてどうもお前にいい様に使われただけ、つぅ気がするんだよな」

「俺じゃないもん。全部、あの腹ん中真っ黒な人が考えた演出だもの。ひっどいよね」

もちろんそれは、祐介の事だ。

「それを地でやってるお前も相当だけどな」

「地じゃないよ。それを言うならこの人でしょ？　相当ひどいよ、この人」

そう言って拓也は湊を指さす。その瞬間、湊はガバッと顔を上げた。勢いよく拓也を睨みつける。

「あんたの性格の悪さには負けるっ」

「だってこの人、俺の顔ひっぱたいておきながら課長の前で『どうしたのその顔っ？　誰にやられたのっ？』って、コレだよ？　俺にどうしろっつーのよ？」

「それくらいのお仕置き当り前でしょ？　むしろ足りないくらいよっ」

「言われて、ええーっ？　だよ、頭真っ白だよ、打ち合わせにねー

だろ、失敗したらどーすんだよ」
「拓がそんなにデリケートな訳ないでしょっ？　後2，3発は引っ叩きたい」
「ああもううるせぇなぁ、こいつらは」

うんざりした様に泰成は言って、その場を離れて行った。
呆然としている後藤の前には居心地悪そうに立っている高階と、そしてまだ何やらごちゃごちゃとやり合っている拓也と湊が残る。
ふと、拓也が後藤に視線を移した。
そして申し訳なさそうに、眉を下げて笑った。

「ごめんなさい、後藤課長。ちょっとカマをかけちゃいました。ホントは俺、前から知ってたんです。課長が高松精機と繋がってるの」
「え……」
「俺が粉飾の報告しても、握りつぶしましたよね？　だけどその後、みな……藤堂さんを引き抜いた」

そう言いながら、拓也は湊の肩をそっと抱く。
湊も複雑そうな、申し訳なさそうな表情をしながら後藤を見つめる。そして僅かに拓也にもたれかかった。

「そして俺にも、別の事務所の引き抜き話をしましたよね。で、俺が断ったら課長は顔色を変えた。なんかおかしいぞ、って引っかかったんです。色んな事が、重なり過ぎてやしないかって。俺、勘は結構いいんです」

後藤は呆然と聞いている。拓也はいつもの、人懐っこい笑みを浮かべている。

きっかけは、湊が後藤に引き抜かれた事だった。本当にただ純粋に、彼女の仕事振りに惚れこんだ故だったのかもしれない。けれどもそれが後藤の運の尽きだった。あの時拓也は自問していた。何故、彼女？　一体彼女に、どんな興味を持ってるって言うんだ？

嫉妬にも近い感情。だけど何かが引っかかる。

しかも俺まで別事務所に移れだって？　仕事が出来るから？　違うだろ。

俺と彼女とあの上司を繋ぐもの。それは、あの取引先しか、ない。

「調べてみたら、高松精機は銀行でも不良債権が出て、粉飾のせいだって裁判沙汰になりかかっている。しかもどうやら、社長が首にした経理担当者の着服だとなっているらしい。で、ダメもとで彼に連絡をしてみたんです。話はそこから始まりました」

それからの一カ月、拓也はこの件にかかりっきりなり奔走した。家に帰っても忙しすぎて、部屋を出て行った湊を構う余裕が無かった。もちろん、身辺整理にも時間がかかったのだが。

後藤が黒だという証拠は無い。出来る事なら、湊の新たな仕事のチャンスを潰したくも無い。

けれどももし、後藤が自分の身を守る為に、下心を持って彼女を手元に置いておこうとするのであれば？　それは危険ではないか？

そう考えたらもう、じっとしていられない。

高階に連絡を取った時、拓也はあえて湊の名を口にした。彼女の身を案じていると。

彼女の名を聞いた高階は迷った末、重い腰を上げる事にしたのだ。

そんな彼は後藤の前で俯き、自嘲気味に笑った。

「裁判にはしないし、法外な退職金を渡すから、と言う事で私は社長に口止めをされていました。けれども彼からの電話を聞いたら、なんかこう、キレてしまいましてね。もう嫌になってしまったんです」

高階も、後藤が関わっているかは分からなかった。社長は賢いらしく、粉飾に関わった人間同士の横の繋がりを持たせていない。証拠も無い。八方塞がりだ。

拓也は焦った。

「で、僕達は今回の計画を立てた。僕はあなたの関与を、彼は社長の関与を立証する為に。用心深いあなたは証拠を残さない。だからちょっぴり手荒になりました、すいません」

「……じゃ、君が社長と通じていたって言うのは……」

「勿論、嘘です」

ニッコリ笑ってキッパリと言う。

それを湊が引いた目でチラ見した。そうなんですよ後藤さん、彼、笑って嘘がつけるタイプなんです。

……こんな事言ったら、拓に「あなたもでしょ」って言われそう。

その時湊はふと気配を感じ、辺りを見回した。

遠くに、彼がいる。

惹かれる様にふら……と歩き出す彼女に気付き、拓也は怪訝そうにその姿を目で追った。

一方の後藤はまだ、頭の整理がつきかねる様子だった。

「でもさっき、君は私と社長の電話での会話内容を、知っていたじゃないか？」

「ああ、それは筒抜けなんです。そう言う事を得意な知り合いがいまして。彼は強力なコネも持っているもんですから、色々と手伝ってもらいました。いやあ、人の繋がりってどういう所で役立つか分かりませんね」

まさかあの人に頼み事をする日が来るなんて、と拓也が苦笑いをする。湊の後姿を見ながら。

「……君は何故、そこまで……」

後藤は拓也を凝視し、呟くように言った。

すると拓也が彼を振り返った。

丸い、茶色い瞳がじっと彼を見つめる。強い感情が渦巻く、大きな瞳。そこには柔らかさはまるで無く、今までで一番、攻撃的な緊張感を放っていた。

「だって課長、藤堂さんを巻き込んだでしょう？」

拓也は後藤を見据えたまま、言った。

「それ、アウトです」

その眼にねじ伏せられるように、後藤は何も言えない。ただ顔を少し歪ませた。

いつの間にか拓也の後ろに泰成が立っている。彼の肩にポンと手を置いて、目の前の後藤に言った。

「課長さん。こいつは中々本気にならないけど、一度その気にさせたらしつこいぜ？　本気で怒らせたとしたら、諦めるしかないよ」

拓也は強い眼差しを後藤から反らさない。普段彼が演出している可愛さや、物憂げな気だるさは完璧に消えている。代わりに、一人の成熟した男が放つ、生気と殺気に満ちていた。

後ろで泰成は腕を組み、ニヤッと笑う。

「俺もね。もし可愛い妹を変な目に合わすヤツがいたら、容赦はしない」

「泰兄、それが言いたかっただけなんじゃない？」

拓也が白い眼で彼を見る。

泰成は片眉を上げるとプイっとそっぽを向き、「だからどうした。妹だから戦線離脱してやったんだろ。いちいち妬くな」と言った。

「な、焼いてないし。つかあんた、やらしいし」

「なんでここでヤラシイが出てくんだよ、おかしいだろ」

「あんたが『妹』って言葉を連呼する時点で、やらしい」

「お前っ、滅茶苦茶言うなよっ。あーわかった、妹やめる、兄貴や

める、好きなようにさせて貰う」
「絶対、返り討ちに合う」
「けっ、姉妹ドンブリやって二度も引っ叩かれた奴が、偉そうな口きいてるぜ」
「一番パニクッていたのは実は自分のくせに」

祐介の部下がやってくるまで、後藤の前で、二人のやり取りは延々と続いた。

7（後書き）

前々話あたりから、「あれ？恋愛小説では無かったの？」と突然の路線変更に目を丸くされた方が多かった事でしょう。作者も、丸くなりましたから。

この章でのテーマは、「拓也がいかに湊を溺愛しているか」です。溺愛ゆえに、大きくしなくてもいい騒ぎを、皆を巻き込み、こんなに大きくしてしまったんですね。ちなみに巻き込まれた連中は、泰成、祐介、虎太郎、舞彩、そして湊です。彼らがいかにして巻き込まれて行ったのかは、これから明かしていくつもりですが……上手くいくのかしら……？

次回からは多分、拓也がベタベタしてくると思います。彼は人前では照れ屋ですが、基本、恋愛に没頭してしまうタイプだと思われますので。

残り後少しです。どうかお付き合いくださいませ。

いつもありがとうございます。

8

湊は嬉しそうに、戸口の階段に立っている彼に近づいて行った。

「虎太郎」

「湊ちゃん」

彼は優しく微笑む。湊の笑顔を見てホッとした様子だ。

「よく頑張ったね」

「……色々と、ありがとう。ご迷惑をおかけ致しました」

虎太郎の笑顔にどこか後ろめたさを感じ、湊は自然と頭が下がってしまった。するとすかさず虎太郎に言われる。

「そういう言い方はやめてよ」

振られたんだ、って再確認をさせられてるみたいじゃん。そう呟かれているみたいで（実際そう呟いたのかもしれない）湊は俯いたまま、一瞬固まってしまった。

そうだ、あたし、あの時勢いに任せて……ハッキリキッパリ言っちゃった。

すると彼の、少し明るい声が聞こえた。

「でも無事で良かった。君に何事も起こらなくって」

ホッとしてつい、湊は顔を上げる。

「うん。お陰で拓の……吉川くんの、目論見通りに進みそうよ」

「別に彼の目論見なんてどうでもいいんだけど」

ひぇっ、間髪置かずに言われた、しかも目がグレてる、ひゅん。

湊は再び、視線を床に這わせた。

「……ごめんなさい」

その姿を見て、虎太郎は自分が情けなくなった。俺って女々しいなぁ、何やってんだよ、もう。

笑いたいのに、苦笑い止まりだ。せめて声だけでも柔らかくしないと、自分がみっともなさ過ぎる。

「……そうじゃなくって、ありがとう、でしょ？」

「……ありがとう」

申し訳なさそうに自分を見上げる湊を見て、虎太郎は再び苦笑するしかなかった。

気付けば彼女は、いつでも俺の顔色を覗っていた。そうとはバレない様に、覗っていた。俺の理想とする彼女像を壊さないようにと、いつも演技をしていた。

それに気付いたのは、あの旅館での出来事。

そしてそれを再確認したのは、あのホテルでの出来事。

あの日、虎太郎に事情を聞かされた湊は、包まれた彼の両手の中で、その顔を徐々に驚愕の色に染めていった。

目を見開いたまま、しばらく動けない。信頼していた課長が悪事に手を染めていた（どの程度の悪事なのか、虎太郎には理解出来なかった。お客の金を横領したらしい、ぐらいの認識だった）と聞か

されても、しばらくは頭が、その情報を処理出来なかったのだろう。
彼は君を巻き込みたくなかったらしいよ。それは僕も同じで。
だからなるべく、僕は君の側に居たかったんだ。
そんな虎太郎の言葉も聞こえたかどうか。

『吉川拓也っ！！』

気付けば彼女は、すごい形相で部屋の前に舞い戻っていた。
先ほどとは打って変わった彼女の様子に、部屋の連中はギョッとし、後ろに付いている虎太郎も手が出せずに見守るだけ。

『……聞いたわよ、全部！！』
『……げ』
『無駄に雰囲気作ったりして！』

ズカズカと入ってくる彼女を誰も止められない。でも誰もが、この後彼女がどういう行動を取るのかハッキリと分かる。

スパァン！！

鋭く綺麗に決まった平手打ちは、気持ちいいくらいに部屋に響いた。
男の一人が思わず自分の頬を片手で押さえる。自分も殴られた気持ちになったらしい。怯えている。

当の本人、拓也は目を見開いた。まさかここでの平手打ちは、予想だにしなかったからだ。え？　俺、そこまでの事した？　ただちょっと待っててくれって言っただけで……。

するといきなり、抱きつかれた。

益々、呆然とする。

後ろにまわった湊の手が、しがみつくように拓也のシャツを握りしめた。

……震えている？

『……いや、俺、後から……』

迎えに行こうと……思っていたんだけど……。

言葉が段々、小さくなっていく。

『……本当に……っ、……どうしようかと、思ったんだからっ！！』

しゃくりあげながら、湊はしがみつく腕に更に力を込めた。拓也は柄にも無く、胸がドキドキしてきた。すげーこれ、究極のツンデレだ。下げて、上げるってヤツだ。湊、人を誑かす天才だ……。

顔が赤くなる、ってこれは殴られたからか。そういや、さっきからジンジンする。

でもなんか、違う所までジンジンしてる、気がする。何なんだよ。

いっそのこと、そーゆープレイにでもしてくれよ。身が持たねぇよ。

組み伏せたくなる。

言ったの？　と恨みがましく虎太郎を睨みつけた。ところが虎太郎は不機嫌そうに目が座り、子供みたいに口を尖らせ、腕を組んで睨み返すだけ。そんなね、俺がいつまでもお人よしに君の言う事を聞く訳ないでしょ？　つか嫌がらせのつもりで全部話したのに、どうしてそこで愛を確かめあっちまうんだよ。あーあ、言って損した。と言っている。

でもな、湊ちゃんのあんな顔見たら、知らないフリはもう出来ないよ。

それがやり通せるとしたら、やっぱり君って相当性格悪いよね。

とも言っている。それが全部、目で語られる。拓也はクラっときた。あいつの睫毛バサバサの、男から見ても可愛いい大きな瞳（め）、一体どんだけ雄弁なんだよ……すげぇ特技。役者って恐ろしいなぁ……。

『うぇーい』

『熱いねぇ』

見物人が騒ぎだした。高階は眉を下げて、おどおどと困った様に、かろうじて笑っている。

するとそのうちの一人が、解せないと言う様に眉根を寄せて隣の男に耳打ちをした。

『ねぇ。あの人って、コタローさんの彼女じゃなかったの？』

『……あっ、ホントだっ……』

顔色を変えて飛び上がり、慌てて虎太郎の様子を覗う。

チンピラ役は実は劇団員で、虎太郎の後輩分。今回の件にあたり、彼が手配した人員だった。

そんな彼らを、虎太郎は腕を組んだままジロッと睨んだ。

『振られたんだよ。人の傷を抉る様な事言うなっ』

『ひぇっ、うわ、すいませんっ』

あたふたとする彼らと、ワザと騒いで彼らを抑え込む虎太郎を、スーツ姿の男達は苦笑いをして見ていた。ちなみにその内の二人は、祐介の部下だ。

一方の拓也は、先程から抱きついたままの湊の背中を、優しくポンポン、と叩いた。

『いつまでしがみついてんの、湊さん』

『……あたしも行く』

『……はい？』

『後藤課長のとこ』

拓也の胸に顔をうずめたまま、湊が言う。

彼は一瞬目を細め、それから彼女の肩をそっと抱いて引き離した。

『それはダメ。あの人が何を考えているのか、イマイチまだ分かってないんだから。どれだけ危険か分からない。だからこんなふざけた芝居を打って、課長を引っかけてみようとしてるんだぜ？』

『だってそれなら拓だって危険じゃない。高松精機って元はあたしの担当だよ？　きっと上手くやれる。あたし芝居上手いもん』

『もん、って。あなたの芝居が上手い事は百も承知だよ。でもそうじゃないでしょ』

『だって舞彩は最初からこの計画を知っていたんでしょう？　それで何であたしはダメなの？　あたしだって使えるってば』

言葉とは裏腹に、何かに怯える様に必死に食い下がる彼女。
拓也は内心どこか引っかかりながらも、彼女をジッと見つめた。
そして軽く、溜息をついた。

『……あのねぇ。俺がどれだけ根回しして、あんたを守ってきたと思ってんの』
『……え？』
『そう簡単には引き下がれねぇよ。ここは大人しく、待ってなさい』

すると湊の顔が、歪んだ。
『やだ』

拓也は驚いた。

こういう駄々のこね方をする湊を、見た事が無かったからだ。いつも颯爽として、基本プライドが高いのに。

『やだって湊……』

子供じゃないんだから。そう言おうとした時。

『あんな思いは、二度とやだ』

顔を歪ませたまま、湊が言った。

『置いてかれるのは、二度とやだ』

それが、つい先ほどの拓也とのやり取りを指しているのだとわかっていても。

１０年以上前に死んでしまった、父親の事を言っているようで。

ああ、と拓也は溜息をついた。湊の目尻が、再び赤く染まる。

『……ごめん。……わかった』

『え？』

『置いてかないよ』

俺、一番やっちゃいけない事を、やっちまったのかも。

目の前で父親を無くした事が、潜在的なトラウマになっている彼女。大事な人が目の前から消えていく事に、ずっと怯え続けていた彼女。

それを俺は、再現しちまったんじゃないのか？　さっき、湊（このひと）の前で。

どうしてあの時、彼女の怯えた瞳の意味に、気付いてやれなかったんだろう。

悔やまれる。

挽回、出来るんだろうか？　いや、しなくては。

『どうにかする。手を打つ。……ヤな思いさせて、ごめん』

『……』

苦しそうに空中に視線を漂わせる拓也を見て、湊はギクッとした。

初めて言った我儘。

あたし、困らせてる。引かれたんだろうか？

どうしよう。やっぱ我儘なんて言わなきゃ良かった。

その時、拓也が視線を彼女に戻した。

湊の大好きな瞳。茶色く大きな瞳が、優しく、包み込むように笑う。

『おいで。一緒にやろう』

一瞬で胸がきゅんとした。不安が全部、彼にすくい取られてしまった。

拓也がにこっと笑う。

おいで。

計画を聞かされた湊が唖然として口を開け、『はい、今更顔色変えない、後ずさらない、聞いたからには最後まで責任持つー』と拓也に首根っこを掴まれるのは、その数分後の話。

「あいつらも楽しんだみたい。不謹慎だなぁ」

店の中の様子をチラッと覗って、虎太郎は笑った。一件落着、と言った感じで皆が寛いでいる。祐介の部下であろう男たちが後藤の周りを固め、拓也は忙しそうに携帯で話をしている。

「……あはは」

「ねぇ、湊ちゃん。これからどうするの？」

「……」

グッと詰まる。あたしに言わせたいんだろうか？　あなたの元には戻りませんって……

「前の職場に、戻れたりはしないのかい？」

あ、そっちか。

「……さあ。そう都合よく、行くかどうか……」

「おい、確認取れたらしいぜ」

後ろから泰成がぬっと顔を出してきた。ビクッとする湊。この人ってホント、神出鬼没よね。

「今まで分からなかった現金の動きが、課長さんの吐いた銀行口座の動きで分かったらしい……と拓也が言ってた。何のこっちゃ」

それでその銀行口座の動きを調べたのが藤田さんなの。それこそ何のこっちゃ、よ。銀行って普通、対外厳秘よ？　どれだけコネがあるのよ、あの人は？

湊は仕事モード（表の仕事。会計士です）で答えた。

「現金で引き出されると基本的にアトが残らないから、お金の流れを追うのが難しいんですよ。だから今回、それに携わった後藤課長の証言が必要だったんです」

「……ふーん？」

「……言う事、それだけ？」

「え？　……うーん……じゃ、マネロンって何だ？」

「……マネーロンダリングの略で、不正なお金の出所（でどころ）を分からなくする為に、あっちこっちに複雑に資金を移動する事です」

「……へぇー」

「……今適当に、相槌打ったでしょ？」

「……じゃ聞くなよ」

「いや聞いたのそっちでしょ！」

「お前が俺に何か聞けっつったから」

「何か聞け、じゃなくて何か言え、よ。加えて言うなら何か言え、じゃなくて言う事無いか、よ！」
「んだよ、その禅問答みたいなのは」
「そっちがいきなり来るから！」
「だから何だって。頭いいヤツは訳分からねぇなぁ」
「二人とも、落ち着いて下さい」

虎太郎が間に割って入った。兄妹、だっけ？　兄貴で雇い主？　なんか複雑な事情なんだよな。だからこんなに賑やかなのかな？
二人の過去の過ち（？）までは彼は知らない。
虎太郎に「湊ちゃん、三田さんに聞きたい事があるんでしょう？」と言われ、湊は悔しそうに口を閉じた。
膨れて泰成を睨み上げる。彼の目が白くなった。おーい、その目やめろー。

「……いきなり登場するから、ビックリした」

泰成はシレっと湊を見下ろす。そして事も無げに言った。

「ああ。岡谷さんから連絡を貰ったんだ。俺としてはお前のいきなりの登場に、びっくりしたけどな」

……すいません。あたしが出しゃばった、って言いたいんでしょ？

今回の騒動には舞彩も一枚かんでいた。拓也が高階と接触した事を後藤課長に知らせるのは、本来、舞彩の役目だったのだ。彼女はあの時、高階と打ち合わせをしようとしていた。そこに湊が割って入った形になった事は、彼女（みなと）も今では十分承知していたが。

虎太郎が、泰成に知らせた？　一体、何故？

湊が虎太郎を見上げると、彼は少し笑った。

「彼には聞く権利があると思ってね。僕達は二人とも、ここ一カ月、君を守って目を離さない事を、命題としてきたから」

え？

「……守る？　……目を、離さない？」

何の事を言っているのだろう？

驚く湊を見て、泰成は少し意地悪な笑みを浮かべて面白そうに言った。

「あいつの土下座、見物だったぜ？　ま、正確には土下座もどきだが。ああいう所、プライド無いのなあいつ。妙にあっさりしてるというか」

「人と価値観がちょっとズレているんでしょうね」

泰成と虎太郎は顔を見合わせ、どちらともなく肩を竦める。

土下座する程守りたいんなら、何故今まで放っておいたのか。どうして今まで、彼女の目の前で、彼女の関係者に手を出して彼女を傷つけてきたのか。

さっぱり分からない。

「……どう言う事？」

眉根を寄せて彼女が聞くと、泰成が答えた。

「思い出してみろよ。ここんとこお前、いつも俺か岡谷さんと一緒にいたろ？　そう言う事」

「……何で？」

「拓也が泣いて頼むから」

これを拓也が聞いたら「ふざけんな、泣いてねーよっ」と大騒ぎをするだろう。

「どうして？」

「あの課長さんが、お前に悪さすると警戒してたから。言わばまあ、根拠の無い不安だな、あれは」

呆れた様にバカにした様に小さく笑い、泰成は一か月前の拓也を思い出していた。

『お願いします』

彼はそう言って、二人に頭を下げた。三人しかいない、泰成の事務所の居間で。

湊を、守ってくれ。自分は今、彼女に近づく事は出来ないから。

拓也は頭を下げたまま、動かない。泰成と虎太郎は無言になった。

それまでに投下された拓也の爆弾発言によって、部屋の中はこれ以上ないくらい、ピリピリと張り詰めている。泰成はハラハラしながら、虎太郎の様子を覗った。

そもそも拓也が、人との面倒事を一番に避ける拓也が、こんな事をしでかすなんて珍しいんだ。というよりあり得ないんだ。

泰成は信じられない気持で口を開く。どうしちまったんだよ、お前は。

『……それを何で、俺らに頼むんだ？　俺はともかく、……岡谷さんにまで』

虎太郎は射る様な目つきで拓也を睨みつけたまま、一言も離さない。優しげで柔らかな雰囲気がどこにもない。

彼は実は感情の激しい男だったんじゃないか、と泰成はその時初めて思った。

ところが、顔を上げた拓也も、一向に怯む気配が無い。

それどころか、彼らを見据えたまま、キッパリと言いきった。

『だって二人なら、確実にやってくれるだろ？　二人は絶対、彼女を守る』

どこか達観したような、それでいて攻撃的な瞳。

『俺、手段とか選ばないから』

それを見て、泰成は悟ったのだ。

あーあ、スイッチ入ってら。こりゃダメだ。

勝敗なんて、明白だわな。

9　甘いキス

人間は、金が絡むと人が変わるんだ。
周りが見えなくなるのに異常に冷静になって、残酷な程計算高くなり、どんな悪事を働くか分からない。昔から言うだろ？　金と色は人を狂わせるって。だから俺は、例えやり過ぎに見えたって、あらゆる手を打っておきたいんだ。万が一に備えて、その万が一に当たっても、防御できるように。

もっとも恋愛（いろ）の場合は、大抵の人間は冷静になれずに、狂っていくんだろうけどな。

そんな台詞をあいつが三田さんに言った時、俺は思った。
じゃあ俺だって、狂う要素は充分にあるだろうが。しかも冷静になれない分、厄介じゃねぇか。
そんな俺から彼女を取り返す事無く、俺の手元に預け続けたまま、しかも彼女から目を離さないでくれって、一体どういうつもりだよ、ふざけんな。

彼女は今、あいつから目を背けている。あまりに処理出来ない事が、一度に起こったからしい。
友人と姉、二人の大切な人間をあいつに傷つけられ、それでも渦巻くあいつに対する気持ちに、自分でも狼狽している。
彼女と一緒に暮らしていると、それが分かってしまう。綺麗な笑顔と瞳に隠されていても、そこから無理にでも真実を掘り出してしまう事を、俺はやめられない。

いらつく。誰に？

手段を選ばないだって？　こっちだって選ばねぇよ。

やれるもんならやってみな。拓也（あいつ）の目が、そう言っている。

昼間のあの大立ち振る舞いの後の夜、湊は疲労困憊していた。

考えてみれば、夕べもロクに寝ていなかったし。何故ってもちろん、昨夜は寝不足になる様な事に夢中になっていたからであって（しかも彼は中々離してくれなかった）、おまけに日中はジェットコースターの様なアップダウンの激しい展開に体を張っていて、後藤が祐介の部下に連れて行かれた後、つい気になりこっそり会社を覗いたら（拓也はそれを止めていたのに）、部長を筆頭その他元同僚にこれ幸いと後藤の穴埋め的な厄介な仕事（雑務）を押しつけられ（彼の右腕は彼女だった）、息つく暇も無く会社の中を駆けずり回り（昨日退職したのに）、

日常業務が一段落して残業組が書庫に調べ物に行っている間、ふと拓也の席に腰を降ろした湊は（相変わらず職場じゃあたしを無視するし、チラともこっちを見ないし、それにしても今日もスーツ姿が様（さま）になっていてムカつくし、あれってやっぱり絶対バーニーズだ間違い無いし）

気付けば寝てしまっていた。

人様の机の上で。

夢すら見た記憶が無い。
知らないうちに寝て、前触れも無く起きたので、多分それ程長くは寝ていなかったのだと思う。

隣には拓也が座っていた。当り前の顔をして、目の前のパソコンをいじっている。頬杖をつき、いつも通りどこかかったるそう。
寝ぼけた頭でそれを眺めて、自分がどんな状況にいるかを思い出す前に、

拓也がいじっている画面を見た。
そして、ぶっ飛んだ。
「！」
思わず体が飛び跳ね、キャスター付きの椅子から落ちそうになる。

「……な、何それっ」
「あ、起きた？」

飄々と彼は言うが、湊の目は画面に釘付けになった。湊と舞彩が浴衣姿で、楽しくカラオケを歌っている。けれどもカメラアングルが尋常じゃ無い。だって首筋とか胸元とか、浴衣の合わせ目とか腰から下の後姿とか……
画像が徐々に、よせて、アップで、舐める様に降りていって……

「これっ……これっ……社員旅行……いつっ……」
「上地さんすごいよねー。これだけハイクオリティな隠し撮り、普通できないよ？　あの人の本業って何だろう？」
「動画？　動画なのっ？　動いているよっこれっ」
「まあ画像が動いていたら動画よね。普通、ビデオって言うけどね」

口から泡を吹きかねない勢いで動揺する湊をよそに、拓也は画面を眺めたままいつも通りに言った。

「はい、消去、っと」

拓也がいじっているのは、確かに上地のパソコン。湊は一気に覚醒した。

あ、あ、あのエロ親父っ、写真のみならずビデオまで盗ってたのねーっ！　何あのエロいカメラワークはっ！　しかも何でそれを会社のパソコンに入れてんのよっ！　抹殺してやる、次会ったら宣言通り、絶対抹殺してやるっ！！

「そんでお仕置き、っと」

怒り狂っている湊の前で、拓也はパソコンを軽くパタパタと操作する。

そういやこの子、前からパソコン得意だったかも。

湊が思っていると拓也が操作を終え、クルッと椅子ごと振り向き、そしてにこっと笑った。

「帰ろ？」

本日、職場にて湊に向けられる初めての笑顔。可愛い。

ああっ、あたしがその笑顔に弱いのを知っててっ。

「……う……ん……あの……」

「……」

すると拓也が、真顔で湊の頬に手を伸ばしてきた。
途端に湊は心臓が、二倍くらい高く跳び上がった。

「な、何っ？」
「よだれの跡」
「……なっ」

真顔で言うなっ！

「あの部屋には帰らないっ」

怒りにまかせて勢いよく言うと、それを聞いた拓也の目が、白く座った。

「……何でよ？」

こわっ。
湊は本能的に後ずさりしたくなるのを、グッと堪える。

「……実家に、戻ろうと思って」
「……」
「拓に言われたからじゃないよ。でも確かに最近色々あり過ぎて、このあたりで一度、自分の足元を確かめてみようと思うの」
「……こっちに帰らないの？」

拓也の真剣な目。噂のつぶらな瞳が揺れて、うるうると……ヤバいヤバいヤバいっ。
このままじゃマズイ、巻き込まれる（惹きこまれる、ではナイ）、と湊が思わず逃げ場を捜そうとした時、拓也がクスッと笑った。

「嘘だよ。分かってる。俺と住むにはいきなり過ぎるってんでしょ？　今までとは訳が違う、だから段階をきちんと踏みたい、ってそーゆー事だよね？」

淀みなく要点を突かれ、言葉に詰まる。そんな湊を見て、拓也はもう一度苦笑した。

実は真面目なんだから、うちのお姫様は。

自分の強引さを責める事無く、むしろ申し訳なさそうにこっちを見上げる彼女の顔。笑える。

要は信頼を勝ち取って、安心を与えればいいんでしょ？

やるしかないじゃん。あなたが望むなら。

拓也はもう一度、湊の頬に手を伸ばした。
彼女が身構える間もなく、スッと唇が寄せられる。

しっとりとした口づけは、今までのどんなキスより甘く、穏やかで蕩ける様な味わいだった。
昼間は人が大勢いる職場のオフィス、という状況も、何故だか背筋をゾクゾクとさせる。

「拓……」
「……みな、ムダに、演技上手すぎ」

口元で、低い声で囁くように呟かれる。
近すぎて相手の表情が見えない中、湊は小首を傾げた。

「……え？　……あの芝居？」
「俺、マジでどうしようかと思った」

そのまま拓也は顔を上げずに、コツン、と額を湊の左肩に落とす。

「あんたの怯えた顔とか、辛そうな目を見てたら……理性が、ぶっ飛びそうだった。そのまんまかっさらって……」

ゆるゆると彼の腕が上がる。そして彼女の背中に、そっと回された。

「守って、閉じ込めて、抱きしめて……滅茶苦茶に、してやりたくなった」

草食系を地で行く様な、冷めて斜めな皮肉屋の甘えったれ。そんな彼が、実はこんなに獣じみた激情を内に飼っていたなんて。
本当は色々な局面で、そのポーカーフェイスの下で、彼もいっぱいいっぱいだったのかもしれないな。
そう思った途端、湊は少し切なくなった。大変だったね。頑張ったね。そう言って抱きしめてやりたい。優しく包み込んであげたい。

そんなあたしはやっぱり年上で、彼はそれを嫌がるかしら？

「だって拓也、本当に怖かったんだもん」

だから湊は敢えて、もう一つの想いを打ち明けた。

それを聞いた拓也は顔を上げ、湊を見つめて甘く笑った。

「だもん。可愛いね」

「目が怖くて、笑顔が怖くて、悲しくって、泣きたくなって来たんだもん。あたしの演技が上手かったんだとしたら、それは拓のせいだよ」

「……」

拓也の瞳がキュッと細くなる。

それが俺の本性だとしたら？　なんて言えない。

「拓がどこまで本気か分からなくなって、すごく不安になったよ」

その時の気持ちを再び思い出し、湊は涙ぐみそうな自分を感じた。

先程まで平常に仕事が出来ていたのに、今急に涙が出そうになるなんて、自分の知らない所でやっぱりずーっと、テンパッていたのかな？

そんな湊をじっと見つめた拓也は、視線を天井に移すと、軽く息を吐きながら言った。

「……そっか。みなって案外、その場の空気に呑み込まれる所が、

あるんだな」

空気を読むのが上手い、とは、相手の要求を瞬時に読み取るのが上手いと言う事。そこで俺はそれを逆手に取るのが得意だが、俺よりよっぽど心根の優しい彼女は、相手を傷つけたくなくて、しばしばそれに絡み取られるんだろうな。

そして急にムッとする。

そういや泰兄と一夜を共にしたのだって、あのクソエロ親父の空気に押し切られたに違いない、くっそ。

「あなた、あのバイトはもうやめたんでしょ？」

「……どうしたの、突然。とっくに首になったよ」

「ならいいや」

自分で斡旋しといて何だけど、こんな調子じゃいつ、手ごわい相手に流されるとも限らない。あの魔王藤田まで客として付いちまった事だし。うわ、すっげぇこえぇ。

「あたしはやっぱり、拓也の笑顔が好きだな。と言っても腹黒そうなのはごめんだけど」

「とか言って。あんな俺も良かったんじゃない？　ん？　益々惚れちゃった？」

「……」

「……」

「……」

「嘘だよ。困らせてごめん。もうしねぇよ、あんな事。つか、起こらねぇよこんな事」

あまりにも物言いたげに間を溜めるから、つい待ってしまった。
拓也が苦笑いして言うと、湊が小さな声でボソッと言う。

「……ちょっと、カッコ良かった」
「え？」
「……いや。……すごく……？」
「……」
「……ゾクっと……？」
「……何で疑問形？」

キョトンと湊を見下ろす拓也。色々と予想外だったらしい。やめてぇぇ、見ないでぇぇ、ひぃー、言わなきゃ良かった、これは羞恥プレイだっ。

湊が真っ赤になって動揺していると、拓也がすっと側を離れた。
あれ？　と思う間もなく立ち上がって、書類を片手にコピー機へと歩いて行く。
直後に人の足音が聞こえ、書庫に居た残業組がガヤガヤと戻ってきた。湊はびっくり。素知らぬ顔でコピーを取っている拓也を唖然と見ながら、感心する。気配察するの、早っ。動物か、って感じ。日頃どれだけ神経張り巡らせているの？　疲れないのかなぁ？

あぁ、あれだ。基本的に、人に対して臆病なんだ、この子も。

「藤堂ちゃん。お疲れー。タダ働き？」

拓也の隣の席の上地を始め、彼の所属する二課の連中数名、そしてその上司の谷口課長がやってきた。終業時間を大きくまわってい

る事もあり、みんなどこかリラックスした雰囲気になっている。
でも、それは見かけだけかもしれない。
皆、昼間の騒ぎは大なり小なり知っているし、湊がここに居る事に今まで誰も何も言わなかったのだから。

「もう、あり得ないですよ」
「バイト代、出るんじゃね？　請求しろよ部長に」
「もちろんです。私、サービス精神無いですからー」
「無きゃここまでしないだろ。本当、偉いよ。君だって被害者なのにさ。今日は大変だったろう？」

谷口課長に言われて、湊は曖昧に微笑んだ。そう、湊の新しい就職は消えてしまったも同然。虎太郎にも言われたけど、これからどうしよう？
そうだ、舞彩とちゃんと話さなきゃ。突然関係無い事が頭をよぎる。

皆がそれぞれの持ち場について作業を始めた時、上地が湊の側に寄ってきて、こそっと彼女に耳打ちしてきた。

「でもさ、課長、横領していた訳じゃないんだろ？　高松精機から金を借りていただけで、それだって毎年真面目に返していた」
「……はい」
「……じゃあ身内が、そこまで騒ぎ立てる話だったんかねぇ」

あんなにいい人だったのに。上地の顔が、そう言っている。
後藤課長はいい人の典型の様なタイプで、職場の癒し系、皆に好かれていた。

「ま、銀行が実損だ裁判だ、ってなれば、いずれにしてもタダじゃ済まなかったんだろうけどな。……それにしても吉川が、そんなに正義感の強いヤツだとは思わなかった」

上地の言葉に、湊は突然一つの事が引っかかった。

職場の人間関係。そうだ、コレに関しちゃあ日和見主義の拓也（かれ）が、考えてみれば何て事を。

「……あのう……彼、これからこの事務所に……居づらく、なりますかね……？」

恐る恐る、そうっと上地に問いかけると、何故か彼は一瞬、驚いた様に彼女を見た。

しばらくして、難しそうに顔をしかめる。

「……まあ、上司受けは、悪くなるだろうな」

やっぱり……。湊は思わず、下唇を噛んだ。

上司に立てついた部下。仲間をかばわなかった同僚。そんなレッテルを張られているのか……。

「俺だって、正直言って怖いもん。吉川にいつ、後ろから刺されるかと思うとさ」

「……後ろから刺されるって、そんな言い方……」

つまりそれは、卑怯に裏切られる、という揶揄だ。まさかそれを、彼と仲の良い上地が言うなんて。

「分かってるよ、酷い言いがかりだって事は。でも周りがそう思うのは、しょうがないんだ。それが現実なんだよ」

「……」
「なまじ後藤課長に人望があったのが、余計にあいつには不利なんだろうなぁ」
「刺すぞ、マジで」
「うわぁっ吉川っ！」

いつの間にか、二人の後ろに拓也がいた。上地と湊は二人揃って飛び上がる。
拓也は湊の方をチラとも見ずに、上地の首に腕をまわし後ろから締め始めた。

「変な事を彼女に吹き込むと、俺もバラしますよ？　上地さんの弱み」
「嘘嘘嘘嘘、吉川くんはみんな大好き、とっても優秀！　人望があるのは君！」
「わかってる？　わかってるよね？　ね？」
「はいはいはいはい、わかってますっ」

先輩を力づくで脅す拓也と、異常に慌てふためく上地。
湊はポカン、とした。

「……どゆ事？」
「いや、俺がちょっと藤堂ちゃんをからかっただけ。だってあんまり心配そうにしてるから。ごめんねぇ」
「……？」

何だろう、あたしをからかう？　どういう意味？
それを拓也が必死で止める？　何故？
そして彼が握っている上地さんの弱み？　何だろう、実はそれが一番気になる……。

「ぬかりないですよ、吉川さんは。知らないの？」
「ほら、ペラペラ喋らない。もういいから仕事戻りますよ、ほら。戻るの」

拓也は上地の首根っこを掴むと、まるでマンガみたいにズルズルと引きずり始めた。
まるでマンガみたいにズルズルと引きずられる上地……何なの、この人達？

唖然として眺めていると、上地は引きずられながら湊に声を張り上げて言った。

「ねぇでもさ、二人って付き合ってるの？　そんなに心配しちゃって、さっきだって二人一緒に居たじゃん？　君達そんなに仲良かったっけ？　あれ、ひょっとして今日をきっかけに？　藤堂ちゃんの彼氏ってあの俳優じゃなかった？」

シーンとなる、職場。
皆が唖然として、上地と拓也、そして湊を見ている。

「……っ」

かっ、かっ、勘弁してよっ、何このＫＹ最前線みたいな、無礼極まりないフォローも弁解も不可能にする、予告無しの下品な暴力的発言はっ！！

湊が珍しくフリーズしていると、拓也は上地から手を離し、呆れた様に溜息をついた。

「……あんたって本当、デリカシーねぇなぁ」
「先輩に向かってあんたって言うなや」
「俺達が今更付き合う訳ないじゃん」

付き合う訳無い？　湊は一瞬顔から血の気が引く。
けれども拓也はつかつかと湊に近寄る。
彼女がはっと覚醒し、咄嗟に逃げようとしたが時既に遅し。
ぎゅっと彼に抱き寄せられた。

「だって元から俺のだもん」

……真っ白。

「だから手を出しても無駄だよ？」

ちゅっ。

そのままほっぺにキスされた。

……再起不能……。

「あ、藤堂ちゃんが死んだ」
「回収しまーす」

……嘘でしょぉ……。

「彼女、目の焦点が合ってないぞ？」
「……なんか可哀想」
「ふふ」

う、嘘でしょ、嘘でしょ、あり得ない、何であたしがこんな目に、何拓也（あんた）笑ってんのよ、みんなの前では知らんぷりをするんじゃなかったの？　あたしはてっきりそうだとばっかり……

婚約者に振られて、有名人と噂になったけど実は同僚ともデキていて……なんて、あたしの隠したい事が、こうやって一枚一枚、まるで玉ねぎの皮をむく様に剥がされて行く……。
拓也に引きずられながら、湊は更に気が遠くなる気がした。

「玉ねぎの皮って、全部剥いたら何にも残らないんじゃないの？」

いいからその、丁寧で無用な突っ込みをする、その口を、閉じて！

9　甘いキス（後書き）

少し間が空いてしまい、ごめんなさい。これにてこの章は終了です。
次章が最終章、色々と後片付けです。
拓也がこんなに甘くなるなんて、作者もちょっと驚きです（苦笑）。

いつもありがとうございます。
このお話が、皆さまのお暇つぶしになりますように……。

1

晴れた休日の昼下がり。
柔らかな日差しが降り注ぐカフェの窓辺で、舞彩はフレーバーティーを飲んでいた。
すると誰かが近づき、小さなテーブルに影を落とした。

「お嬢さん、お一人ですか？」

よく通る低い声。長い睫毛を上げて彼女が見ると、細長いサングラスをかけた男が、茶目っ気たっぷりに微笑んでいる。
「よかったら、僕とお茶しません？」

舞彩は思わず、クスッと笑った。最近あてたショートウェーブが頬にあたり、とても可愛い。
少し気取って答えてみた。

「一杯だけなら、いいわ」
「光栄だな。……元気？」
「うん。元気」
「それはよかった」

そう言って彼は、自然に彼女の前に座った。舞彩にはよくわからない種類のコーヒーを注文し、彼女にデザートを勧めてくる。だから遠慮なく、ミルフィーユを頼んだ。
久し振りの東京だもん。楽しまなくっちゃ。
なんて理由が無くったって、ケーキは美味しいけどね。

「なんか嘘みたい。テレビの人とお茶してるなんて」
「僕達だって普通の人だよ。それに呼び出したのは君でしょう？」
「そうですね。すみません、どうしても一度会って、お話をしたかったので。でもまさか本当に来ていただけるとは思いませんでした」
「今日は、あの旅館から来たの？」
「はい」

舞彩の眩しい笑顔に、コタローは目を細めた。あの時見た彼女（おんなのこ）とは、全然違って見える。たまにメールでしかやり取りをしていなかったけど、本当に元気そうだ。やっぱり若いって、それだけで違うよな。持ってるエネルギーとか、単純さとか。おまけに可愛いし。

そんな彼を、舞彩は真っ直ぐに見て、もう一度微笑んだ。
今の私に、怖いものは、ナイ。

「私、ちゃんと頑張ってます。毎日が楽しくって、すごく充実しています。……なんというか、やっと自分の目標を見つけたって感じで、とても嬉しいです」

こんな台詞をこんなに笑って言えるなんて、ついこの間までの自分は想像も出来なかった。人間って本当に、変われば変わるものなのね。
舞彩は、その変わる第一歩を踏み出した瞬間を思い出していた。

『もう拓也くんの顔なんか見たくないの。だから仕事も辞める予定』

あの時、自分の家の前でそれを告げた時、拓也は自分から目を反らさなかった。

『聞いたよ。それって、俺があの会社を辞めれば、考え直してくれる？』

その台詞に、舞彩は頬が痺れるほどの憤りを感じた事を、覚えている。

『……どこまで思いあがった人なの？』

舞彩が初めて、拓也に怒りをぶつけた瞬間だった。

『私が、あなたなんかのせいで、人生を台無しにすると思う？　そんな事しないで、って友達にも言われたわ！』

『……』

怒鳴りつけても、拓也の顔色は変わらない。それを見ていたら今度は急に、舞彩は何だかバカらしくなってきた。特に自分の芝居じみた台詞。全てを覚悟しています、みたいな彼の顔。

『……本当はね』

息を吐きだして、舞彩は視線を泳がせる。

そして再び拓也を見て、ニコッと笑った。

『母の実家に帰って、旅館に就職する予定なの。あの仕事が、やってみたら凄く楽しくて。もっとしっかり勉強したくなって、祖母と叔母の元に見習いで入る予定。そのうち未来の女将になるの！』

『……へ？』

舞彩の大好きな彼のつぶらな瞳が、思いっきり見開かれる。

舞彩はニヤッと笑った。最後にこんな顔をさせれたなんて、一矢報いた気分だわ。

『本当はあの会社の事務なんてつまらなくて、辞めたかったんだ。でも他にやりたい事も無いし、それより好きな人と結婚してお嫁さんになる事が私の夢だったんだけど、今は違うの。初めて、自分でやりたい事を見つけられたの！　だから凄く嬉しくて！』

『……そ、そうなんだ……』

気押された様に唖然とする拓也。相当度肝を抜かれている。

それを見た一瞬だけでも、舞彩は晴れ晴れとした気分だった。

女の子を、舐めんなよ！

しかしその後に拓也から例の計画を聞かされ、舞彩は何とも複雑な気分になる。

つまり私って、拓也くんにとってどんな立ち位置なんだろう、と。

みなちゃんより上？　みなちゃんより信頼出来る？

多分そうじゃない。

私は彼の大事な友達で、

彼はみなちゃんを一番に守りたいだけなんだ。

「よかったね」

「コタローさんのお陰です」

テーブルを挟んで、お互いに微笑み合う。

「僕は何もしてないよ。舞彩ちゃんが自分で頑張っているんじゃない」

「でも、やっぱりコタローさんのお陰です。コタローさんがわざわざ会いに来てくれて、励ましてくれたから。あの言葉、すごく胸に染みました。それが言いたくって」

すると彼は、サングラスの向こうで柔らかく目を細めた。

「それはよかった。役者はね、胸に染みる言葉、とか印象に残る強烈な言葉を、沢山知っているんだ。それが商売で、毎日練習しているからね。だから僕のアレだって、前にどこかで聞いたか言ったかした台詞なんだよ。受け売り受け売り」

確かに彼女に会いに行った。けれどもそれは、単なる気まぐれだったと思う。自分と同じ様な立場だけど、自分が出来ない様な駄々のこねかたをしている彼女。そんな彼女を、見てみたかったから。

見てみて、それがどんなに惨めなものか、確認したかったから。

「そうですか」

屈折した彼の内心を知らない舞彩は、素直に笑う。

「素敵ですね。羨ましい」

「そう？　でもすぐに忘れちゃうよ？　最近は覚えるのも大変だし。頭が、ね」

「素敵な言葉をいっぱい耳にして、口にして、囲まれているんですものね。なんかあったときはその言葉で励まされるし、誰かを励ましてあげる事も出来るし。ほら、コタローさんみたいに。すごくいいじゃないですか」

あまりにも単純過ぎて、素直すぎて、虎太郎は言葉に詰まってしまった。

無邪気な浅はかさも、ここまで来ると強さなんだろうか。

「うーん、そう？」

「そう。それに言い方も良かった。さすが役者さん」

「あはは。仕事を褒められた」

虎太郎は肩をすくめた。

何だろう？　もう自分が何を言ったかなんて、殆んど忘れている。

……ああ、そうだ。思い出した。

『……人生でさ、一番大事なのは自分じゃないかな？　なのにずっと引きこもっていたら、自分が可哀想だよ』

まさか虎太郎が自分の家を訪ねてくるとは、思ってもみなかったのだろう。舞彩は唖然として彼を見上げていた。

でもそれだけじゃない。焦燥した瞳。答えを探しているような、縋りつく様な眼。

『君の手も、指も、頬も、脚も、みんな元気で、こんなに綺麗なのに。ずっと暗い気分でいたら、君の体が可哀想だろう？　だから自分の為に、元気だしなよ』

虎太郎の口から、自然に言葉がついて出る。
あの時は、本当に、あまり考えていなかった。

『外に出て、君を待っている人達に、答えを突き付けてやりなよ。……人生、先にはもっといい事が待っているよ、なんてさ。とても落ち込んで辛い君に、そんな無責任な言葉はかけてあげれないけど……。俺も、まだ大した人生経験積んでないし。……でも』

泣き腫らしたであろう、目蓋。この子、前に会った時はもっと可愛かった気がする。
虎太郎は彼女の手をそっと取って、彼女の胸に、あてがった。

『ほら。君の心臓は、まだこんなに、元気に胸を打ってる。だから大丈夫だよ』

そう。心臓は、どんな事があっても動いている。

「……コタローさんは、みなちゃんの事を吹っ切れましたか？」

急に話を振られ、虎太郎は思わず黙り込んだ。

「……」
「私……彼の事は吹っ切ろうと努力して、頑張れても……相手が、みなちゃんだと……友達だと思うと、今でももうダメ。頭と心がぐちゃぐちゃになるんです」
「……」
「この間みなちゃんが来た時は、なんとか笑って上手く話せたんで

すけど……」
「殺しちゃえば？」

普通の口調で言う。

「……え？」
「殺しちゃえばいいじゃん。スッキリするらしいよ？」
「……コタローさん？！　ええっ？」
「俺じゃないけど。知り合いの女の子が言ってた。嫌なヤツは殺しちゃうんだって」

舞彩が彼の正面で、全身を強張らせた。
虎太郎は淡々と続ける。

「ただし、頭の中で」

一瞬の無言の後、彼女はガクッと力を抜いた。

「……あ、なんだ、そう言う事……」
「そうは言っても、頭の中でも人を殺すなんて相当ヤバいと俺は思うけど。だって気持ち悪くなっちゃうもの。それでスッキリ出来るどころか、余計ハマっちゃう奴もいる様な気がしない？」
「じゃ、なんで私に薦めたんですか？」

舞彩は文句を言いたげに唇を尖らし、虎太郎を睨みつける。
虎太郎は片肘をついて外を眺めていたが、舞彩に視線だけ移し、そして小さく笑った。

「偽善でいいんじゃない？　って言いたかったんだ」
「……偽善……？」
「そう。偽善って、大人の大切なスキルだと思うよ？　偽善は社会の潤滑油。それで物事が上手く進んだり、お互い気持よく過ごせるなら……少なくとも自分が心穏やかに過ごせるなら、それでいいんだよ、たまには」
「……」
彼の優しげな表情は、包み込む様でいて、どこか投げやりな部分がある。それを舞彩は複雑な気分で眺めていた。
「彼女を頭の中でメッタ刺しにして、恨み事を言って、それでどうする？　犯人は分からずじまいで、君はあの男の不幸をゆっくりと堪能する、とか？」
「やめて下さい」
「そしたらスカッとするかな？」
少し意地悪な質問。そして意地悪な笑顔。
舞彩は困った様に、視線を空中に泳がせた。
「……ちょっと、したかも」
すると虎太郎の目が見開かれる。
「……女の子って、怖い。そこまで人に執着出来るんだ」
「だから薦めたのはそっちなのにぃ」
舞彩は再び唇を尖らせた。虎太郎が愉快そうに笑う。
けれども彼女は、そのまま真顔で続けた。

「でも、それじゃ私は幸せになれない」

偽善じゃ私は、幸せにはなれない。

「……」

「だってみなちゃんは……きっと私になら、殺されてもしょうがない、って思っちゃうと思うし……拓也くんは……一生みなちゃんを忘れられなくなる」

「……」

だから殺す妄想は、妄想だけでもむなしくて。

「あの人達、本当に似た者同士で」

舞彩も何となく、窓の外を眺めた。様々な人が行きかう通り。でもどうしても、若いカップルに目が行ってしまう。

「傷のつき方もおんなじで。きっと息詰まるタイミングも同じなんじゃないかなぁ……。そしたらどうするのかな？　誰がひっぱりあげるのかな？」

幼い幼いと思っていた彼女が放った、鋭い一言。洞察力に満ちた、大人な発言。

虎太郎は息を飲む程、驚いた。

それと同時に、彼女の言葉で、思い出したくも無いものを思い出してしまう。

あの時、泰成の事務所で、拓也が始めに言った台詞。

『彼女が好きなのは、俺です。俺が好きなのも、彼女です』
『……』
『……俺達……多分、これからも、傷つけ合いながら生きて行くと思います。お互いぶつかり合いながら、時々苦しみながら、前に進んでいくんだと思う。それでもお互いが必要なんです。そうするのが、俺らには必要なんです』
『……』

こちらを見据えて言う男の気迫に、虎太郎と泰成は口を開けなかった。

『今から二人には頼みたい事がありますが……その前に』

そう言って彼は、虎太郎をじっと見続ける。

『お願いです。彼女を俺に、返して下さい』

虎太郎は大きく息を吸い込むと、ゆっくりと吐き出しながら、椅子に深く座りなおした。
「優しいね、君は」

舞彩も大人びた笑顔を見せる。
「コタローさんも」

そして二人は、どちらともなく声を揃えて言った。

「「あの二人、勿体無い事したね」」

声を上げて、愉快そうに笑う舞彩。
虎太郎はそんな彼女を、少し眩しい想いで眺めた。

無邪気なまでの浅はかさも、それを貫けば武器となって、真実（ほんもの）を作り上げるのかも知れない。

ひょっとしたら彼女は、僕が思っているよりずっと大人で、全てが計算ずくなのかも知れない。

……どっちでもすごいな、それって。

1（後書き）

最終章です。
やっとここまでたどり着けた……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0291v/

ラヴィング・プア　Loving poor

2011年10月26日12時03分発行